大学院比較文化研究科
博士論文

黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動
―オクラホマ黒人のアイデンティティを賭けた闘争―

主指導教員　　石川 捷治
副指導教員　　荒井 功

学籍番号　212GD01
氏　　名　金城 智子

目　　次

序章　問題の提起
　１　研究の目的と方法 3
　２　先行研究と本研究の意義
　　（１）　オクラホマ黒人史と黒人自治体に関する先行研究 5
　　（２）　タルサ人種暴動に関する先行研究 8
　　（３）　本研究の意義 10
　３　視座と全体構成 12

第１部 タルサ人種暴動の歴史的・社会的背景
まえがき 15
第１章　「約束の地」オクラホマへの移住と黒人コミュニティ形成
　第１節　オクラホマへの移住
　　１　先住民の奴隷としての移住 18
　　２　黒人の西漸と黒人州建設運動 21
　第２節　黒人自治体の建設
　　１　黒人自治体の社会的・思想的背景 27
　　２　自主的分離と自治体の繁栄と衰退
　　（１）　ボーリー 31
　　（２）　ラングストン 37
第２章　ジムクロウ北上と出オクラホマ
　第１節　人種問題解決策としての出アメリカ 41
　第２節　チーフ・サムのアフリカ帰還運動 44
　第３節　カナダ西部への移住と黒人移民への対応 49
第３章　石油新興都市タルサの黒人コミュニティ
　第１節　タルサの始まりと黒人の移住 55
　第２節　町の中の町、グリーンウッド 60
　第３節　オクラホマの州昇格（１９０７年）とタルサの治安 67
むすび 70

第２部　タルサ人種暴動の具体的様相
まえがき 73
第４章　暴動の経緯
　第１節　衝突、銃撃戦、略奪、放火 75
　第２節　飛行機からの攻撃 94
　第３節　州兵軍オクラホマシティ部隊の出動と戒厳令 98
第５章　暴動後のタルサ
　第１節　黒人の強制収容と屈辱 103
　第２節　甚大な被害 112
　第３節　アメリカの反応とタルサの恥 121
　第４節　責任追及の枠組み 125
むすび 137

第３部　タルサ人種暴動の要因
まえがき 142
第６章　暴動の近因と遠因
　第１節　直接の引き金 144
　第２節　地域的要因
　　１　人口増加と人口構成の特徴 148
　　２　タルサの法執行機関と住民の法と秩序の軽視 150
　第３節　歴史的要因
　　１　第１次世界大戦と新しい黒人（ニューニグロ）の誕生 161
　　２　赤狩り（The Big Red Scare）とレッドサマー（The Red Summer） 169
　　３　リンチと自警団精神
　　（１）　法を超越したリンチ 179
　　（２）　黒人封じ込めの手段としてのリンチ 188
　　４　戦後不況と白人の嫉妬 195
　第４節　社会的要因
　　１　メディアの報道と人種間の無知、無関心 196
　　２　ゆがめられた黒人のイメージと人種間混交の恐怖 199

終章　半世紀の沈黙とタルサ人種暴動の遺産
　　１　黒人住民の団結と復興 202
　　２　遅すぎた暴動の再検証―暴動のタブー化とコミュニティの沈黙― 209
　　３　コミュニティの和解に向けて
　　（１）　苦難の記憶を紡ぐ記念碑 214
　　（２）　コミュニティを分断する賠償問題 218
　　４　そそがれた汚名 228
むすびと今後の課題 232
参考文献 237

序章　問題の提起

１　研究の目的と方法

本研究の目的は、１９世紀半ばから１９２０年代のオクラホマ（Oklahoma）で、構造的・組織的な差別、排斥、暴力に直面した黒人[1]たちが、どのように自衛し、闘ったかという黒人の戦闘性[2]を地理的、歴史的、社会的、文化的側面から検証することである。本研究の中軸を形成する２つのテーマは、①黒人のオクラホマへの移住の過程で起きた黒人自治体建設運動（Black Town Movement）と②１９２１年にオクラホマ州タルサ市（Tulsa）で勃発したタルサ人種暴動（Tulsa Race Riot of 1921）である。

南北戦争後、解放された南部の黒人たちは貧困と日常的暴力に苦しんでいた。「約束の地」(Promised Land) オクラホマや更に西を目指した黒人の西漸により、１９世紀後半、オクラホマには全米で最多数の黒人自治体が誕生することになる。黒人自治体建設運動の社会的・思想的背景を分析し、黒人たちが白人を排した黒人だけの自治体に何を求め、何を達成しようとしたかについて考察することで、彼らの自治と自立を勝ち取るための闘争の実態に迫る。更に、タルサの黒人コミュニティに甚だしい被害をもたらし、死者数３００以上ともいわれ、アメリカ史上最悪と称されるタルサ人種暴動へと連なる近因・遠因を地域的、歴史的、社会的に分類して分析し、時系列で暴動の経緯を辿った。団結して築き上げたコミュニティを破壊される危機に瀕し、黒人住民たちは決死の覚悟で抵抗・反撃する。共同体を死守するために闘ったオクラホマの黒人たちの底流には、闘争的精神が脈々と流れていた。

次に、どのような方法で黒人の戦闘性を考察するのかについて述べる。本研究では文献調査と現地調査の２つの研究方法を用いている。国内では、著作や学術論文といった

---

1 人種関係や多文化主義の専門家シェルビー・スティール（Shelby Steele）は、Black American(アメリカ黒人)と African-American（アフリカ系アメリカ人）という呼称について、「黒人という呼称とは異なり、『アフリカ系アメリカ人』という名称には、自己を見据えた上で、人種的脆さと対峙しようとする要素はない。ところが、１９６０年代に黒人という名称が好まれたのは、劣等感の否認ではなく、劣等感と正面対決しようとしたからだった。つまり、もともと黒人という名称には、自己を誠実に受け入れるという意味があった。・・・・『黒人』という呼称は、我々の最強の名称だったことを忘れてはならないだろう。」と述べている（シェルビー・スティール「黒い憂鬱―９０年代アメリカの新しい人種関係―」李隆訳、五月書房、１９９４年、１０１-１０２頁参照)。また、黒人の多くは、本人もその両親もアフリカ出身者でなく、長い間アメリカで暮らしてきた先祖を持つ。こうしたことから、本論文では「黒人」の呼称で統一した。

2 「黒人の戦闘性」とは、実際の暴力行為ではなく、黒人がアメリカ人になり、アメリカ人としてのアイデンティティを守り抜くための精神、抵抗運動、また、破壊されたコミュニティを復興させた団結力などのことである。

文献を入手し、現地では、新聞・雑誌記事、写真、インタビュー、暴動鎮圧に当たった州兵（The National Guard）の報告書などを収集することができた。黒人自治体に関する記録や資料は少ないが、土地を得て黒人だけの町で自治を行い、富を蓄積しようと呼びかける新聞記事や、黒人自治体が如何に活気ある西部の町であるかを強調する黒人雑誌の記事、黒人自治体の歴史を概観し、地方自治の面から分析した著作などを参照した。現地では、オクラホマ歴史協会（Oklahoma Historical Society）の協力を得て、現存する３つの黒人自治体を訪れた。実際の黒人自治体住民に案内を依頼し、博物館、コミュニティセンター、飲食店、民家などを訪れて住民への聞き取りを行い、黒人自治体建設の背景に迫った。

タルサ人種暴動の重要な情報源となったのが、タルサの白人新聞『タルサ・トリビューン』（*Tulsa Tribune* 1919－1992）と『タルサ・ワールド』（*Tulsa World* 1905－）の報道である。特に『トリビューン』は、事実よりも話題性を重視したイエロージャーナリズム（扇情的報道） によって暴動を招いた責任を指摘されており、黒人住民やコミュニティに対して偏った報道を常々行っていた。この二紙は、白人側から見た暴動の要因や経緯、暴動後の責任論までを克明に語っており、タルサの黒人コミュニティに対する市の姿勢や方針の重要な記録でもある。タルサの白人メディアや白人リーダーたちがどのように暴動をみなし、どのように報道の枠組みを形成したかを理解する上で重要な資料となった。暴動で焼失した黒人新聞『タルサ・スター』（*Tulsa Star* 1912-1921）は、オクラホマのリンチ事件や社会の不正義を告発し続け、黒人の自衛を強く促し、黒人コミュニティの戦闘性の発露に貢献した。

暴動被害者は全員亡くなっているため、実際の生存者に聞き取り調査することはできなかったが、タルサ大学（University of Tulsa）の Tulsa Race Riot of 1921 Archive には、１９８８年から収集された暴動に関する文献（新聞・雑誌の記事や論説、地図、暴動の研究者スコット・エルズワース（Scott Ellsworth）による生存者インタビューの録音テープなど）が保管されており、暴動鎮圧に出動した州兵の報告書や、オクラホマ州知事が発令した戒厳令文書のコピーなどを入手した。また、オクラホマ州立大学タルサ校（Oklahoma State University Tulsa）の Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection には、タルサ人種暴動の記録本を執筆していた（出版はされていない）白人女性ルース・シグラー・エイヴェリー（Ruth Sigler Avery）による生存者インタビュー、写真、通信、新聞記事などが収められている。エイヴェリーは、少女時代に暴動を経験し、目の当たりにした暴力、死、燃え上がる火柱といった光景に取りつかれたか

のように、真実を伝えることをその使命とし、文献収集・調査を１０年以上に亘って行っていた。エイヴェリーによるインタビューは、暴動からかなりの時間が経過した１９６０年代から１９８０年代にかけて行われているが、黒人・白人両方に行われている点で多角的な視点を提供していると考えられる。

ニューヨーク市（New York City）のハーレム地区（Harlem）にあるションバーグ黒人文化センター（Schomburg Center for Research in Black Culture）では、黒人の戦闘性の醸造に寄与したとされる黒人雑誌の記事を分析した。２０世紀前半にニューヨーク市を拠点にしていたこれらの出版物は、黒人の権利獲得、人種平等、リンチ撲滅を目標に掲げていたが、急進的とみなされ、多くが監視の対象となっていた。

主に以上の文献・資料、現地でのインタビューから、オクラホマの黒人が闘ってきた差別、不正義、暴力、そしてそれらを看過し、黒人たちが被った不当な被害を放置し続けた祖国に対する戦闘性の集大成が、どのようにタルサ人種暴動で発揮されたかを明らかにしていく。

２ 先行研究と本研究の意義

（１）オクラホマ黒人史と黒人自治体に関する先行研究

オクラホマの土地は誰のものであっただろうか。１８３０年代にオクラホマへ強制移動させられた先住民たちに加えて、解放後は黒人も多くが地主となり、１８８９年のオクラホマへの入植解禁により、多くの白人が白人優越主義と共に流入する。オクラホマは先住民のホームランド（Indian Homeland）、黒人の約束の地（Black Promised Land）、白人の中心地域（White Heartland）であり、「富の基盤、権力の源であり、常に獲得競争の対象[3]」であった。１９１５年に亡くなるまで黒人社会に絶大な影響力を誇ったブッカー・T・ワシントン[4]（Booker T. Washington 1856－1915）は、黒人が地主となって、富を蓄積することこそが自立への王道だと説いた。アメリカ社会の最下層を生きた黒人にとって、オクラホマで土地を得て自作農となることは、社会的・政治的平等獲得と自立への確かな一歩だったのである。

---

[3] David A. Chang, *The Color of the Land*: *Race, Nation, and the Politics of Landownership in Oklahoma, 1832-1929*,The University of North Carolina Press, 2010,1-2.

[4] １８８８年にアラバマ州タスキーギ(Tuskegee, Alabama)に職業訓練校タスキーギ学院(Tuskegee Institute)を設立し、黒人の職業訓練に力を注いだ。政治的な改革よりも黒人の経済的な発展を通した地位向上に重点を置いた。

黒人にとってオクラホマが何を象徴し、どのような存在であったかについて最も端的に説明しているのが、フィリス・Ｅ・バーナード（Phyllis E. Bernard）である。バーナードは、オクラホマのフロンティアは広大で開かれた土地であり、富と機会を得る可能性を体現していたと論じた。デーヴィッド・Ａ・チャン（David A. Chang）は、その著書、*The Color of the Land*：*Race, Nation, and the Politics of Landownership in Oklahoma, 1832-1929*（２０１０）で、南部での経済的自立と政治的権利の獲得の道を閉ざされた黒人たちが、土地と土地に付随する可能性を求めてこぞってオクラホマへやって来た背景にある移住主義（Emigrationism）を指摘する。自立と繁栄のための新たな土地への集団移住は、アメリカの黒人の歴史に顕著である。オクラホマへ移住した後も、彼らは北部、カナダ、アフリカなどへ経済的・政治的自立、自由を求めて旅立っている。チャンは土地の重要性と土地を巡る移住主義を中心に研究しているため、黒人が形成したボーリー（Boley）をはじめとする自治体については詳しく触れていない。そのため、オクラホマの黒人の定住社会に対する視点は欠けている。オクラホマの黒人自治体に関する研究の成果自体が乏しいが、オクラホマ州タルサ市在住のハンニバル・Ｂ・ジョンソン（Hannibal B. Johnson）は、著書 *Acres of Aspiration-The All-Black Towns in Oklahoma-*（２００７）で、ボーリー、ラングストン（Langston）を含むオクラホマの主要黒人自治体６つを中心に、町の始まりから衰退までを概観している。タルサ人種暴動で壊滅したタルサ市の中の黒人コミュニティ、グリーンウッド（Greenwood）も黒人自治体の亜種として紹介され、グリーンウッドがどのような経緯を辿って黒人の町になり、黒人の希望とプライドの凝縮地となったかに焦点が当てられている。オクラホマの黒人自治体の成り立ちや歴史に重点を置いているため、背景にあった政治、経済、社会状況や思想についての分析は不十分である。黒人自治体建設運動の推進力の源について考察したのが、*Integration or Separation-A Stage for Racial Equality-*（２０００）を著した法学者、ロイ・Ｌ・ブルックス（Roy L. Brooks）である。ブルックスは、１９世紀末から２０世紀初頭にかけてアメリカの黒人に浸透していた人種全体の向上につながるアプローチ（人種分離による経済的向上に基づく政治的・社会的平等の獲得）が、黒人自治体建設運動の原動力であるという観点から出発している。ロシェル・ステフニー・ローバーソン（Rochelle Stephney-Roberson）は、１８３０年代から始まる黒人のオクラホマ移住からの歴史を辿り、黒人自治体が「自由・平等・正義の実現を

求めた黒人たちの闘争を反映[5]」しており、彼らにとってのアメリカン・ドリーム実現の手段であったと論じている。ブルックスは人種分離の急進的形態であるアフリカ帰還運動については、黒人がアメリカを去ることについての白人側・黒人側の異なる動機を明らかにし、なぜ父祖の地アフリカが決定的求心力を発揮できなかったかについて考察した。その上で、国内での人種分離、自助・自立の精神に基づく黒人自治体の理想と現実、限界について調査し、アメリカが農業から工業中心社会に変貌を遂げる中で衰退し、職業機会を求めて北部へと住民が流出し、その多くが消滅してしまった過程を分析している。日本で唯一の黒人自治体に関する文献「フロンティアと黒人自治体の建設―分離主義と地方自治を中心として―」（１９８９）の著者、渡辺真治は地方自治の観点から黒人自治体を研究し、オクラホマだけでなく全米の黒人自治体・準自治体について調査している。渡辺は、オクラホマに黒人自治体が多く建設された要因として、先住民の奴隷であった黒人たちへの土地の分配を挙げている。ボーリーをはじめ、自由民となった黒人たちの土地を基盤に出発した黒人自治体は多い。１９世紀後半から２０世紀初頭にかけて、オクラホマ全体に約３０の黒人自治体が存在し、その内２５カ所がインディアン準州（Indian Territory）に建設された[6]。渡辺は、黒人自治体に「人種の団結、分離主義、経済上の向上[7]」を実現させるツールとしての側面があったことも明らかにしている。渡辺は、黒人自治体の底流にある分離主義についても取り上げ、黒人が団結することで弾圧に効果的に対抗しようとしたのだと述べる。過激な分離主義を掲げる者は白人を排した黒人国家や黒人州の設立を目指したが、黒人自治体はやや穏健な分離主義に基づいていたという。渡辺は、分離主義は図らずも白人を反黒人で団結させることになり、黒人をアメリカで孤立させることにつながったと指摘する。

バーナードは、フロンティアの自警団精神が白人同様黒人にも自衛の精神を植え付け、この闘う精神がオクラホマで自立を求める黒人州建設運動、黒人自治体運動へとつながったのではないかと推測する。家族やコミュニティを守るための自立・自衛の精神は、タルサ人種暴動における抵抗・反撃で存分に生かされることになった。バーナードは、オクラホマが黒人にとっての「新しいアフリカ[8]」（The New Africa）となり、海外移住

---

[5] Rochelle Stephney-Roberson, *Impact*: *Blacks in Oklahoma History*, Forty-Sixth Star Press, 2011, 5.

[6] 渡辺真治「フロンティアと黒人自治体の建設ー分離主義と地方自治を中心としてー」近藤出版社、1989年、99頁。

[7] 渡辺、254頁。

[8] Phyllis E. Bernard, “Oklahoma, the New Africa,” *Oklahoma City Law Review*, Vol. 26, January 2001, 910.

の代替物として機能したと指摘する。黒人のオクラホマ移住は、アフリカ帰還運動の国内版だったのである。オクラホマはアフリカの輝きには及ばなかったにしても、黒人に新たな門出の現実的希望を与え、白人を排して黒人が治めるコミュニティを建設する道筋をつけたのである。

これまでの研究で明らかになっていることは、黒人自治体の多くが自由民の土地を基盤としてインディアン準州で建設され、黒人の西漸による人口増加に伴い増加したという事実と、建設の背景に存在した白人と白人社会からの独立願望である。経済的自立を通しての平等、権利獲得に向け、まず黒人自治体で富を蓄積し、白人に認められようとするワシントンの漸進主義思想が広く黒人社会に影響を及ぼしていた。土地を獲得して自作農となることは経済的自立への堅実な道であり、解放された黒人たちは、自立の道が閉ざされた南部から土地と機会とを求めてオクラホマへ移住したのである。しかし、黒人自治体は農業中心社会であったため、農業の不振と工業化の波から取り残され、人口流出に歯止めがかからなくなり弱体化した。

（２）タルサ人種暴動に関する先行研究

我が国にはタルサ人種暴動の先行研究は存在せず、アメリカ国内でもタルサ人種暴動への関心・研究は共にオクラホマ州内に限定される傾向がある。本論文執筆の上で最も臨場感を持って迫って来たのは、暴動後最も早い時点で黒人女性メアリー・Ｅ・ジョーンズ・パリッシュ（Mary E. Jones Parrish）がまとめた暴動の体験記、*Events of the Tulsa Disaster*（１９２３）である。暴動から１カ月以内の黒人住民の目撃証言が数多く収められており、傷つけられ、略奪され、放火されたコミュニティの悲痛な叫びが綴られている。著者自身も暴動で命が危険に晒される経験をしており、彼女をはじめとする黒人住民が感じた戸惑い、憤り、屈辱、理不尽さがまざまざと描かれている。文献収集で訪れたタルサのオクラホマ州立大学タルサ校の図書館長ベス・フリードマン（Beth Freedman）も、この本を“I believe this is the best book.”と推薦した。この図書館所蔵の Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection には、エイヴェリーが暴動記録出版に向けて行ったインタビューが数多く収められている。パリッシュによるインタビューと違い、エイヴェリーは暴動以前のタルサの人種関係にも迫っており、白人メディアが報道しなかった証言を得ている。加えて、暴動当時の自らの恐怖体験や白人生存者の証言も含まれている。生存者たちは鮮明な記憶を語っているとはいえ、暴動から

半世紀以上を経ているため、正確さの点でいえばパリッシュのインタビューには及ばないかもしれない。しかし、半世紀を経なければ語ることのできなかった真実があるとも考えられる。

２００１年に発行されたタルサ人種暴動検証委員会（the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921）による最終報告書（*Tulsa Race Riot*, a *Report*）は、医師、歴史家、大学教授などで構成された１１人の検証委員によってまとめられ、暴動の社会的・歴史的背景、経緯、損害や被害の実態、犠牲者数、責任の所在などについて報告している。複数の著者のレポートで、暴動の経緯については重複が多い。結びでは、当時のオクラホマ州上院議員マキシーン・ホーナー（State Senator Maxine Horner）が、タルサ人種暴動を「民族浄化」（Ethnic Cleansing）であったと断罪している[9]。

オクラホマ州立大学に提出されたクリス・メッサー（Chris Messer）の博士論文 *Tulsa Race Riot of 1921: Determining Its Causes and Framing*（２００８）は、タルサ暴動の事例研究であり、暴動の要因や前兆を分析し、暴動がどのように解釈、報道され、再構成されたかを検証している。アメリカ国内でも海外でも、黒人住民だけに暴動の責めを負わせた報道は見当たらないが、タルサではメディア、市、白人住民たちが一斉に「一部の戦闘的黒人」に的を絞って攻撃し、壊滅したコミュニティに更なる打撃を加えたのである。また、暴動の事実から半世紀に亘って目を背け続けたタルサの沈黙の背景に迫り、暴動の枠組みが「戦闘的黒人による反乱」から「人種差別による不正義[10]」へと変化し、黒人住民が暴動の原因ではなく被害者であると再構成された経緯を辿っている。この論文はタルサ人種暴動だけに焦点を当てているため、当時集中して起こっていた人種暴動との比較や、グリーンウッドが黒人住民にとってどのような意味を持っていたかという点には言及がない。

人種暴動から遡ってタルサの発展とグリーンウッドの歴史を辿ったのが、スコット・エルズワースの *Death in a Promised Land: The Tulsa Race Riot of 1921*（１９８２）とジェームズ・ハーシュ（James S. Hirsch）の *Riot and Remembrance: America's Worst Race Riot and Its Legacy*（２００２）である。エルズワースは１９世紀にクリーク族（The Creek）の入植地として始まった田舎町が、石油の発見により、一夜にして変貌を遂げたタルサの歴史を振り返るところから出発している。１９世紀後半から２０世紀

---

[9] Maxine Horner, "Epilogue," *Tulsa Race Riot*, a *Report, by the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921*, February 28, 2001,177.

[10] Chris Messer, *The Tulsa Race Riot of 1921*: *Determining Its Causes and Framing*, Doctoral Dissertation, Oklahoma State University, 2008, 4.

初頭のタルサの黒人たちにとって、リンチは現実的な脅威であった。エルズワースは、暴動の前に起きていた２件のリンチ事件を例に挙げ、法執行機関が黒人住民への暴力を野放しにした結果強まった黒人の危機意識と自衛の精神の表出を克明に描き出した。ノンフィクションライターとして著名なハーシュも、エルズワース同様、臨場感溢れる１つの物語として暴動を活写している。ハーシュは暴動を「人種戦争」（Race War）と定義し、繁栄を謳歌しながらも、タルサがその内部にマグマのように沸々と人種間の敵対心と嫌悪をたぎらせていた事実を指摘する。また、半世紀以上に亘り暴動の歴史的事実をひた隠しにしたタルサが、どのように過去と向き合い、溜まった膿を出す過程で何が起きてきたかについて明らかにした。

タルサ人種暴動は、人種の分離が徹底された町で起こった。白人・黒人は物理的にも精神的にも別世界で生きていたが、黒人男性が白人女性と関係を持つことは御法度であり、リンチの対象になることは両人種間の承知の事実、且つ掟でもあった。これまでの研究から判明していることは、黒人少年が白人少女をエレベーターの中で暴行したかもしれないという、推量に基づいた扇情的報道がなされた結果、復讐心と野次馬精神を融合させた極めて暴力的な白人暴徒の結集を招いたという事実である。法執行機関は甚だしく抑止力を欠き、黒人は身を守るため自衛を余儀なくされた。当時、銃の所持は珍しくもなかったが、黒人復員軍人たちが集団で武装した姿は、白人たちの背筋を凍らせ、暴動が白人暴徒による銃撃・破壊ではなく「黒人の反乱」という枠組みで語られる端緒となったのである。

（３）本研究の意義

２０１３年９月、オクラホマ州の現存する黒人自治体と、１９２１年５月３１日から６月１日の暴動で根こそぎにされたグリーンウッド地区を訪れる機会を得た。黒人自治体には、１世紀前の繁栄の名残はどこにも見られず、すっかりさびれた姿を晒していた。実際に自分の足で歩くことで、ぼやけた輪郭でしかなかったかつての町が圧倒的臨場感で迫ってきた。現在、オクラホマ歴史協会を中心に、オクラホマ黒人自治体プロジェクト（The Black Towns Project）が発足し、知名度の低い黒人自治体を全国的に知らしめる活動が行われている。

３５ブロック（文献によっては４２ブロック[11]）にまたがってブラックウォールストリート（Black Wall Street[12]）と呼ばれ、住民の誇りであったグリーンウッドは、今ではほんの１ブロックを残すのみとなり、こちらにもかつての面影はない。通りに人影はなく、暴動を二度と起こさない誓いを込めて建設されたジョン・ホープ・フランクリン人種融和記念公園（John Hope Franklin Reconciliation Park）にも、訪れている者は１人もいなかった。グリーンウッド地区再生の目玉として１９９５年に建設されたグリーンウッド文化センター（Greenwood Cultural Center）も、やはり閑散としていた。グリーンウッドは、「忘れ去られたタルサの一区画」の様相を呈していた。

人種暴動と言えば、１９９２年のロス暴動（The 1992 Los Angeles Riots）のように、日頃からまかり通る不公正や不正義、経済格差に対する不満を鬱積させた少数グループが、何かのきっかけでその鬱憤を爆発させて暴力行為や略奪を行うものとして認識されている。しかし、第１次世界大戦従軍を１つのきっかけとして黒人たちが自衛の意識に目覚めて団結し、白人暴徒の攻撃に抵抗・反撃するまでの間、アメリカの人種暴動とは、白人が一方的に黒人や黒人コミュニティを攻撃し、黒人住居を略奪、放火するという経緯を辿っていたのである。タルサ人種暴動は、アメリカの人種暴動の転換点となった第１次世界大戦中から戦後にかけて集中的に起こった人種暴動の波の一波である。

オクラホマ黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動は、オクラホマ州内で研究されるに留まっており、個別の研究対象になっていることが多い。黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動は、オクラホマの黒人の歴史として重なり合う部分もあり、お互いに触れられることはある。本研究同様タルサ市の中に存在した黒人コミュニティ、グリーンウッド地区を黒人自治体の１つとみなした研究（*Acres of Aspiration*）もある。本研究は、強制的にオクラホマに移住させられた黒人と、オクラホマに「約束の地」を見出し、自発的に南部から移り住んできた黒人の辿った道程と背景を追いながら、二級市民に貶められた彼らが、法を守り、経済的自立を遂げることで正式なアメリカ人になるという、黒人の揺るぎない信念、情熱、プライド、そして闘う精神を明らかにすることを試みた。

---

[11] “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,” Hearing before the Subcommittee on the Constitution, Civil Rights, and Civil Liberties of the Committee on the Judiciary, House of Representatives, One Hundred Tenth Congress, First Session on H.R. 1995, April 24, 2007, 3.

[12] *Ibid*., 3; James S. Hirsch, *Riot and Remembrance: America's Worst Race Riot and Its Legacy*, Houghton Mifflin Company, 2002, 20, 38. 命名者ははっきりしないが、ブッカー・T・ワシントンが、街の賑わいぶりからこの呼び名を考案したと伝える説もある(*Acres of Aspiration*, 169; “Greenwood-The Black Wall Street of America,”2013.)。

また、黒人自治体建設運動とタルサ人種暴動における黒人の抵抗・反撃に共通する共同体の集団的戦闘性をつまびらかにした。

これまでの研究で見落とされているのは、黒人自治体建設が一種の社会運動だったという点である。黒人たちが積極的に集団で人種の向上を目指した、「アメリカ社会の一員になる」ための運動であった。黒人自治体が白人と分離していたことを鑑みれば、社会の一員になることと正反対のようでもある。しかし、彼らはまず黒人の集団の経済レベルを底上げすることで、白人社会の承認を得ようとした。アメリカ人になるためには、多数派である白人に認められることが必要だったのである。タルサ人種暴動の研究でも同様に、タルサで見せた黒人の闘う精神が、自身、家族、コミュニティを守るためだけでなく「アメリカ人であることを賭けた、アメリカ人であることを死守する」闘いであったことが見過ごされているのである。経済的繁栄を成し遂げ、活発なコミュニティを作り上げた彼らは、立派なアメリカ人であった。この事実を脅かす者とは徹底的に闘わなければならなかったのである。本研究は、こうした視点によって先行研究との差異化をはかることを試みた点で意義がある。

３　視座と全体構成

本論文は、オクラホマで人種の境界が精神的にも物理的にも厳しく定められる中、黒人が人種のプライドに目覚め、安定や自立を目指して移住という形の社会運動を起こし、コミュニティや自由、権利を死守するため、真のアメリカ人として武器を取って闘った戦闘的精神について明らかにしようとするもので、次のような構成となっている。

まず第１章では１８３０年代からの黒人のオクラホマへの強制移住から、南部の黒人の自主的移住について概観し、西漸により黒人人口が増加したオクラホマで黒人州が議論され、黒人自治体が建設された過程とその背景を論述する。オクラホマに現存する黒人自治体ボーリーとラングストンの２つの事例を取り上げ、これらの自治体の始まりから衰退までを考察し、その背景・要因を分析した。

第２章では、「約束の地」であったはずのオクラホマに南部の人種主義が迫り、オクラホマを脱出する黒人が現れる過程と、オクラホマを後にした彼らが直面した困難について探求した。更に、自由黒人の増加を前に、黒人との共存を非現実的で不可能だと考えた白人が、黒人を海外、主にアフリカに入植させることを人種問題解決策とし

て利用したことについて言及した。また、１９１０年代のオクラホマで盛り上がったアフリカ帰還運動について論じ、なぜオクラホマでこの時期に海外移住が注目され、一定の支持を得たかを考察する。加えて、「最後のフロンティア」と謳われたカナダ西部を新たな「約束の地」とするオクラホマ黒人の更なる移住について概観し、カナダがどのような黒人観の下で黒人たちの移住を阻止しようと画策したかを明らかにする。

第３章は、近郊の石油の発見によって、一夜にして輝ける新興都市に変身したタルサの始まりから論じる。タルサ市内には、町の中のもう１つの町、黒人コミュニティ、グリーンウッドが形成され、黒人の新たな「約束の地」となった。グリーンウッドの黒人たちは、ビジネスや教育を発展させ、黒人のプライドを凝縮させた全米黒人憧れの町を作り上げた。しかし、タルサ市はグリーンウッドの整備や治安維持を怠り、タルサは別名「犯罪天国」と呼ばれる悪名高い町でもあった。当時のタルサの治安状態について述べ、銃と暴力がはびこる社会で、警察をあてにできなかった黒人たちが武装し始める経緯を考察した。

第４章では、タルサ人種暴動の経緯を具体的な時系列で辿る。暴動のきっかけ、始まりから、終焉までの約１８時間を住民の証言を交えながらドキュメントした。特別な審査もなしに保安官代理（Deputy Sherriff）に任命された白人たちの多くが暴徒化し、率先して略奪・放火を行って被害を拡大させた。暴動を収拾できなかった無力なタルサが、最後にはオクラホマシティの州兵部隊に出動を要請し、ようやく暴動が鎮圧された過程を明らかにした。

第５章では暴動後のタルサのあらましを述べる。黒人住民の強制収容について論述し、人的・物的被害の甚大さについて明らかにする。また、タルサ人種暴動に対するアメリカ中のメディアの反応を紹介し、タルサ人種暴動がどのように報道されたかを検証する。尚、白人社会が暴動を「黒人の反乱」という枠組みで捉え、コミュニティを滅ぼされた黒人住民とリーダーたちに向けられた非難の矛先について論じる。

第６章では、タルサ人種暴動の要因を近因と遠因に大別した上で、地域的、歴史的、社会的要因に分類した。分類する上で参考にしたのが、人種問題に基づく暴力問題の専門家で、全国有色人種地位向上同盟[13]（National Association for the Advancement

[13] 1909年に、白人社会主義者、自由主義者、知識人らによって設立された。本部はニューヨーク市にあり、アメリカで最古かつ最大の公民権運動団体。設立の目的は、黒人に諸々の権利、特に公正な裁判を保障し、また経済的、社会的、政治的機会を確保して地位の向上を図ることで、リンチに対する取り組みは特に大きな成果を上げた。（*The NAACP: A Century in the Fight For Freedom*,

of Colored People 略称 NAACP）の幹部だったウォルター・ホワイト（Walter F. White 1893-1955）が挙げた、人種暴動を誘発する８つの要因である。彼は、１９１９年７月に勃発し、甚大な被害をもたらしたシカゴの人種暴動を受け、同年１０月号の『クライシス』（*The Crisis*）誌に「シカゴと８つの要因」（“Chicago and Its Eight Reasons”）という記事を発表した。ホワイトはこれらの要因について、「アメリカである程度まとまった黒人人口を抱える都市であればほぼ存在する」と述べ、沸々と煮えたぎる人種間の敵対心と憎悪は、ほんのわずかな刺激を加えるだけで容易に沸点に達し、暴力の爆発はどこででも起こりうるであろうと指摘した。以下は、ホワイトによる暴動を誘引する８つの要因・背景である。

①人種偏見　②人種間の経済競争　③政治の腐敗と黒人有権者の搾取
④警察の怠慢　⑤黒人の犯罪に関する新聞の虚偽・扇情報道
⑥黒人に対する犯罪の放置　⑦住宅事情の悪化　⑧第１次世界大戦の影響[14]

上記の要因・背景は、それぞれが地域的、歴史的、社会的要因のいずれかに、あるいは重複して当てはまる。タルサも一定の黒人人口を抱える、人種間の無知や敵対関係が典型的なアメリカの都市だったといえる。メディアは黒人の犯罪は殊更大きく報道し、リンチは罰せられることがなかった。第１次世界大戦は、銃器を蔓延させ、従軍は黒人の戦闘性を助長した一因であった。

グリーンウッドは、オクラホマ州やタルサ市からの公的援助がほとんど得られない中、長い年月をかけて再興されたが、２００１年に暴動の最終報告書がまとめられるまで、住民は長きに亘って沈黙を強いられたのである。終章では、暴動が次第にタブー視され、白人・黒人双方が異なる理由から声を上げなかった背景に迫った。半世紀が過ぎてからの再検証により、当初「黒人の反乱」と定義されたタルサ人種暴動の被害者は、実は黒人住民であったことが多くの記録・証言から明らかとなった。この報告書は暴動被害者への賠償金支払いを勧告した。その結果生じた損害賠償請求とこれを巡って賠償賛成派と反対派によって活発に行われた議論について考察した。

Teacher’s Guide Primary Source Set, Library of Congress,1-2.）。1918年末には、4万人を超えるメンバーを擁していた（Nina Gifford, “Lynching Statistics from *the Crisis*（1920）,”*The Harlem Renaissance*, National Center for History in Schools, University of California, 1999,4.）

[14] Walter F. White, “Chicago and Its Eight Reasons,” *The Crisis*, Vol.18, No.6, October 1919, 293.

第１部　タルサ人種暴動の歴史的・社会的背景

まえがき

１８３０年代に先住民の奴隷としてオクラホマにやって来た黒人は、南北戦争後多くが解放され自由民（Freedmen）となった。少ないながらも部族の土地を分配され、彼らはこの時期に土地を所有することのできた唯一の元奴隷たちである。１９世紀後半になると、恒常的差別、暴力、貧困から逃れて、南部黒人も安息の地オクラホマへと移り住んで来た。そこには、白人の迫害から徒歩で着の身着のまま逃れて来るほどの切迫した危機感、強烈な自由への飢餓、そして子孫たちが１人のアメリカ市民として精一杯生きることができる土地と環境を必死に探し求めた闘いとがあった。

アメリカの黒人の歴史は移住と共にある。安住の地を求めては追われ、移住を繰り返してきた黒人たちは、南部への激しい抵抗の精神と人生の再起の誓いを背負って「約束の地」オクラホマへと旅立ったのである。

> 黒人たちは人種差別、暴力、そして死から逃れるためにオクラホマを目指しました。私の祖父は命からがらテネシー州を脱出することに成功したのです。彼がメンフィスを発つ前夜、白人暴徒たちが祖父を探して押し寄せました。祖父は噂を聞きつけて近所の家に避難し、安全だと確信が持てるまで身を隠し、それからテネシーを去ったのです。もし祖父をかくまってくれる勇敢な隣人たちがいなければ、彼はリンチされ、私という人間も存在しなかったことでしょう。私たちは祖先を誇りに思わずにはいられません。子孫たちが良い教育を受け、経済的成功を治めることのできる安全なコミュニティを探し求め、決死の覚悟で闘ってきたのですから[15]。

最高で３万人にも上る自由民たちは、白人からの分離と独立を望んでいた[16]。白人から離れて集団で暮らすようになった自由民とその家族に一律に分け与えられた４０エーカーから１００エーカーの先住民の土地が、１９世紀後半から２０世紀初頭にかけて建設が相次いだオクラホマの黒人自治体の土台を形成することとなった[17]。黒人州の実現こそ叶わなかったものの、オクラホマでは自由民も南部出身の黒人たちも選挙権を得て、比較的自由な環境の下で生活していた。彼らは、黒人が１人の市民としてその能力

---

[15] Hannibal B. Johnson, *Black Wall Street*: *From Riot to Renaissance in Tulsa's Historic Greenwood District*, Eakin Press, 2007, 4.

[16] 渡辺、１３８頁。

[17] Hannibal B. Johnson, *Acres of Aspiration-The All-Black Towns in Oklahoma-*, Eakin Press, 2007,14;*1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey*, National Park Service, 2005,15.

を余すことなく発揮できる社会を目指して自治体を作り上げたのである。彼らは、時に漸進主義で妥協的だと批判されるブッカー・Ｔ・ワシントンが掲げた経済的自立と自助・共助の精神で、教会や学校、様々なビジネスを発達させた。ところが、１９０７年の州昇格前後から、南部の人種主義が南部白人移民増加と共にオクラホマに拡散し始める。１９１０年には選挙権をはじめ、彼らが謳歌した自由や権利が次々と剥奪される事態となったのである。

ブッカー・T・ワシントン
The Niagara Movement Pamphlet, the Monroe Fordham Regional History Center, 13.

安息の地であったはずのオクラホマが彼らを見捨てた時、オクラホマを諦める黒人が増加し始める。彼らは工業化により労働者を求めた北部、燦然と輝く父祖の地アフリカ、更にはカナダ西部のフロンティアへと目を向け、自由を手にするための移住という終わりなき闘いの幕が上がった。自由と平等を求めた黒人の国内・海外移住は、１９世紀後半から２０世紀前半にかけてのアメリカ黒人史の特徴を形成している。

第１部ではタルサ人種暴動へとつながる歴史的・社会的背景を論じる。オクラホマの黒人の多くは、南部の差別、貧困、圧制から逃れ、人生の再出発と自由を求めて自らの意思で移住した者たちであった。彼らは刻々と悪化する人種関係と人種分離政策の下、経済的基盤を構築し、自立、自衛、自助の精神でコミュニティを作り上げた。オクラホマが黒人にとって持ちえた意義・特異性と人種関係を踏まえ、タルサ人種暴動へと連なる歴史的・社会的背景を明らかにする。更に、タルサの町の中の町、グリーンウッドを黒人自治体の１つと位置づけ、南北戦争以前から始まる黒人のオクラホマ移住から、自由民となった黒人と南部から移住した黒人が白人を排した自治体を建設するに至った、社会的・思想的背景を論じ、迫害され続けた黒人が分離した自治体で経済的・政治的自立を達成することにどのような意義があったのかを考察する。また、国内での状況が過酷さを増す度に流行したアフリカ帰還運動について、黒人がアフリカの地に何を求め、何を実現しようとしたかについて論述する。最後に、カナダ西部に土地と自由を求めた黒人が遭遇した移住阻止運動について考究し、彼らを待ち受けた、一見そうとは気づきにくい当時のカナダの反黒人移住キャンペーンや、黒人との実際の接触経験の乏しかっ

たカナダ人が持っていた黒人に関する限定的知識と偏った黒人観について論じる。

第１章　「約束の地」オクラホマへの移住と黒人コミュニティの形成

第１節 オクラホマへの移住

１ 先住民の奴隷としての移住

アメリカ南西部に位置するオクラホマは、１９０７年に自治的領域インディアン準州とオクラホマ準州（Oklahoma Territory）が合併して、合衆国第４６番目の州に昇格した。準州時代のオクラホマは、南部の構造的な差別やリンチをはじめとする暴力、圧政の存在しない黒人の希望の土地であった。オクラホマへの黒人の移住や、それに続く黒人自治体の建設はアメリカ国内でも特殊である。現在の州東部に当たるインディアン準州は、かつて文明化五部族（Five Civilized Tribes）と呼ばれたチェロキー族（The Cherokee）、チカソー族（The Chickasaw）、チョクトー族（The Choctaw）、クリーク族、セミノール族（The Seminole）の居住地であった。アメリカの５００にも上る先住民部族の中で、奴隷を所有していたのはこの五部族のみである[18]。彼らは１８３０年のインディアン移住法（Indian Removal Act）により連邦政府に土地を奪われ西へ追いやられた部族であり、約４，５００人の黒人がその奴隷としてオクラホマに入植した。涙の道（The Trail of Tears）と呼ばれた約３，５００キロにも及ぶ過酷な道程で、先住民も黒人も、衣服や食糧が不十分な状態で、南東部から家畜のように真冬に徒歩で移動させられた。コレラ、水ぼうそう、はしかの流行に苦しめられ、それぞれの部族の４分の１に相当する数万人が、オクラホマへ辿りつくことなく命を落としている。チェロキー族だけでも２万人以上が移住させられ、部族の２２％に相当する約４，０００人が亡くなっている。しかし、もっとも死亡率が高かったのは黒人であった。奴隷だった彼らは、行程で荷積みなどの肉体労働を担い、先住民たちよりも劣悪な状態で移動したと考えられる。オクラホマに到達してからも、先住民たちはアメリカ南東部と異なる気候、土地、農機具の不足、マラリアをはじ

A Look at Oklahoma, Oklahoma Tourism and Recreation Department, 2005, 24.

[18] Catherine Lynn Adams, *Africanizing the Territory*: *The History, Memory and Contemporary Imagination of Black Frontier Settlements in the Oklahoma Territory*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts Amherst, September 2010, 5-6.

めとする疾病に苦しめられた。更に追い打ちをかけたのが、祖先の土地から引き離されたことによる不安や絶望感の蔓延であった。例えば、クリーク族の人口はオクラホマ移住後２５年間で２４，０００人から１３，５００人へとほぼ半減している。ところが、同じ時期に黒人の人口は４倍に増加しているのである。黒人奴隷の人口は、１８３２年には五部族の人口の４％程度であったのが、１８６０年頃には１０―１８％を占めるまでになり、インディアン準州の人口５８，５９４人の内、黒人は８，３７６人で、全体の１４．２％となった[19]。

１８９０年から１９０７年までのオクラホマ準州
（西部）とインディアン準州（東部）
Stephney-Roberson, 1.

以下は、典型的な黒人奴隷の労働に関する記述である。

> 男の奴隷は土地を耕し、丸太を割り、柵をこしらえ、草を刈り、綿花を栽培し、家畜や野菜、米、トウモロコシを育てた。女の奴隷は料理をし、糸を紡ぎ、掃除をし、子供の面倒を見た。奴隷たちは綿や羊毛の布地を作り、靴下や手袋、マフラーを編み、皮をなめした。先住民たちには職人は少なかったので、奴隷や自由民たちがその代わりを務めた。裕福な先住民たちは、黒人御者、黒人執事、黒人メイドを所有していた。製塩所の機械工や船荷の積み下ろし人夫として働く黒人もいた[20]。

---

19 *Ibid.*, 6; Chang, 29.
20 Adams, 6.

アメリカ南東部に比べ、構造的人種差別が存在しなかったオクラホマは、黒人に精神的安定と身体的安全とをもたらしていた。黒人奴隷への対応に関しては、例えばクリーク族とセミノール族は鷹揚で、奴隷を部族の正式なメンバーとして扱う傾向があった。幾ら穏健な扱いとはいえ、奴隷は奴隷であるのだが、あるクリーク族の奴隷は、「私はインディアンたちと同じ鍋から食事を取っていたが、テキサスでは奴隷は奴隷主のブーツを舐めさせられていた[21]」と、彼らが同等に扱われていた事実を語っている。クリークとセミノールは、黒人と頻繁に婚姻を行い、先住民と黒人との混血が進んだ[22]。

> 黒人は先住民と自由に婚姻を行っていた。お互い迫害される身であったことから、共感する関係にあったのである。黒人と先住民の間には障壁はあまりなく、彼らの婚姻を禁止するような法律もなかった[23]。

一方、チョクトー族とチカソー族は南部の白人奴隷主と大差なかったとされ、チェロキー族の中には自由民を排斥する者もあった[24]。黒人奴隷に厳しい態度で臨んだこれらの部族は、奴隷制廃止を受け入れたがらなかった。

南北戦争後、五部族は連邦政府と新たな条約を結ぶことになり、１８６５年にアーカンソー州のフォートスミス（Fort Smith, Arkansas）で始まった連邦政府との協議は、翌年首都で２項目において締結した。黒人奴隷解放とインディアン準州の西部（後のオクラホマ準州）の連邦政府への割譲である[25]。１８８９年までに連邦政府のオクラホマ準州購入のプロセスは終了し、その年のオクラホマ準州のランドラッシュ（The Great Land Rush）により、黒人の土地所有者も増加した一方、白人人口の大量の流入も招いた。１９００年には、白人人口は黒人人口の１０倍の規模にまで膨らむこととなったのである[26]。

---

[21] Scott Ellsworth, *Death in a Promised Land*: *The Tulsa Race Riot of 1921*, Louisiana State University Press, 1982, 19.
[22] *Acres of Aspiration*, 24; Adams,6; James S. Hirsch, *Riot and Remembrance*: *America's Worst Race Riot and Its Legacy*, Houghton Mifflin Company, 2002, 31-32.
[23] Alice Lovelace, "The Tulsa Riot of 1921," *In Motion Magazine*, 2000, 3.
[24] 渡辺、98頁; *Acres of Aspiration*,25.
[25] *Acres of Aspiration*, 24-25.
[26] *Black Wall Street*, 3; Hirsch, 34.

２ 黒人の西漸と黒人州建設運動

オクラホマへの黒人の西漸は、１８９０年頃から始まり１９１０年頃に最盛期を迎えた。黒人の南部集団脱出は、社会的・経済的・政治的弾圧から逃れ、自由・平等・安全を求めた社会運動であった。樋口映美の著書「アメリカ黒人と北部産業」では、第１次大戦下の黒人の北部への大移動（グレートマイグレーション）（Great Migration）が、黒人が自分たちの生活向上のために主体的に取った初めての行動であるとされている[27]。しかしながら、実際にはこれに先んじて黒人の西漸が既に起こっており、黒人たちは解放後から主体的により良い生活を求めて活動を始めていたのである。

１８９０年からの２０年間で、１９，０００人以下であったオクラホマの黒人人口は４倍以上に増加し、８万人を突破した[28]。オクラホマ移住に先駆けて起こったのがカンザス大移住である。黒人自治体建設の原点となったのがこのカンザス大移住であり、移住第一波は１８７３年―１８７８年、第二波が１８７９年―１８８０年である。第一波はより計画的で、ニカデマス（Nicodemus）とシングルトン・コロニー（Singleton Colony）はカンザスの代表的黒人居住地となった。第二波は自発的移住であり、南部黒人の「大脱出」（Great Exodus）と呼ばれる。大脱出のプッシュ要因としては、１８７７年までに合衆国軍が南部から撤退し、黒人を取り巻く環境が劣悪さを増したことや綿花価格の下落による経済的打撃が挙げられる。また、白人相場師や、彼らに便乗した南部の黒人牧師らによる派手な宣伝活動も功を奏した。彼らは主に農村部の黒人教会の信者を前にして、大平原の厳しい気候や不衛生な住宅環境、危険な野生動物の存在といった不都合な事実は伏せ、まるで肥沃な土地が有り余ったパラダイスかの如くカンザスを売り込んだのである。一方、カンザスが黒人の移住先となったプル要因には、フロンティアの鉄道敷設に従事していた黒人や調査員によるカンザスの土地の高評価や、１８６９年以降カンザスに移住した黒人が少数ながら土地を開拓していたといった事情があった[29]。しかし、１８７９年から１８８０年にかけての冬は特に厳しく、食糧や衣服の不足、住居の不備といったニュースが漏れ伝わるにつれ、カンザス移住ブームは徐々に下火となった[30]。１８８０年までに、２万人とも４万人ともいわれる黒人が南部からカンザスに移

---

27 樋口映美「アメリカ黒人と北部産業」彩流社、1997年、125頁。
28 Chang, 152.
29 渡辺、69－70頁。
30 *Acres of Aspiration*, 20; Wm. O. Scroggs, “Interstate Migration of Negro Population,” *Journal of Political Economy,* Vol.25, No.10, December 1917, 1037.

住しているが、この人数はカンザス側の収容能力をはるかに超えていた[31]。ブームに乗って無計画にやって来る者の中で十分な生活資金を持ったものは少なく、遂にはカンザス州知事のセントジョン（John St. John 任期 1879 -1883）も、黒人の移住に異を唱えるようになった[32]。

カンザスで農業従事者となり成功した者もいたが、見切りをつけて南部へ戻った者が１割に上り、大多数が近隣の州に再移住した。黒人住民の幾度にも渡る陳情にも拘わらず、１８８７年から１８８８年にかけ、黒人居住地に鉄道が通らないことが決まり、農業の不振も手伝って、次第にカンザスの黒人住民は減少した[33]。

カンザスでの自立の夢破れた黒人たちは、そのすぐ南のオクラホマへとやって来た。オクラホマはカンザスより気候も穏やかで、土地も豊富であり、先住民はより寛容であった。カンザスとオクラホマの大きな違いは、カンザスにはまとまった黒人人口は存在しておらず、南部からの黒人移民たちは白人地域に入植したのに対し、オクラホマには既に自由民たちが存在し、黒人が生活しやすい環境が整っていたということである。１８３０年に政府のインディアン問題の解決策となったオクラホマは、約半世紀後には黒人の安息の地となったのである。

南部からオクラホマへ移住した黒人が目にしたのは、農場と選挙権を有し、自由に移動する自由民たちの姿であった。南部出身の黒人たちは、自由民を土地の人、土着の人の意の「ネイティブ」（The Native）と呼んだ。自由民たちは、先住民たちの言語、衣服、食事といった慣習に適応し、先住民が持つ権利の多くを享受していた。土地の所有は白人にも魅力であったが、誰よりも南部の黒人に夢を抱かせた。黒人は、土地の所有こそが完全な市民権獲得への前提条件だと考えていたからである[34]。「１８９０年代までに、オクラホマの自由民たちはアメリカ中の他の自由民たちよりもはるかに多くの権利を手にしていた。彼らがようやく『約束の土地』に辿り着いたと信じるだけの理由があった[35]」のである。

大移動（グレートマイグレーション）の代替策として提示された西漸は、５０万から１００万の黒人が北部工業都市へ集団移住した大移動（グレートマイグレーション）ほどのインパクトも知名度もないが、州昇格までの

---

31 J. Ayo Langley, “Chief Sam’s African Movement and Race Consciousness in West Africa,” *Phylon*, Vol.32, No.2, 1971, 170-171.
32 渡辺、74頁。
33 渡辺、74頁、120頁。
34 *Acres of Aspiration*, xii; Chang, 153-154.
35 Bernard, 915-920.

間に、他州から８万から１０万の黒人がオクラホマへ移住（カンザス移住の約２倍の規模）し、オクラホマの黒人人口は１８６０年頃に比べ４倍に増えている[36]。西部の他州もこの時期人口を急増させているが、オクラホマの増加率は群を抜いている。オクラホマへ移住した黒人は、先住民の奴隷としてやって来た黒人と違い、自らの意思で入植した者たちである。

北部では、大多数が未熟練労働者であった黒人の定位置は下層プロレタリアートであり、ゲットーでの窮屈な生活を強いられていた。ところが西部には、北部では手に入れることができないものが存在した。西部には安価で広大な土地と、ビジネスチャンスが転がっていたのである[37]。ただ、北部と違って平原が広がるだけの西部では、まず住む家から造り上げる必要があった。西漸運動の底流には、西部の土地を所有することで経済的再出発を図り、自由と繁栄を謳歌するという揺るぎない決意があった。オクラホマは黒人の再出発の地、拠点、ナショナリズムの牙城となり、「黒人州」としてのオクラホマが議論され始める。州昇格までに少なくとも約３０に上る黒人住民だけの町が建設され、１９２０年までには最高で５０もの自治体が存在した時期もあった。こうした黒人自治体の多くが、先住民の大多数が居住したインディアン準州に建設され、公有地として白人にも開放されたオクラホマ準州には比較的少数しか存在しなかった[38]。

オクラホマへの黒人の移住の特殊性は、黒人による政治的・経済的・社会的機構の構築に重点を置いた、人種意識と政治意識の存在である。１８８９年の秋までには、カンザス州の州都トピカ（Topeka, Kansas）に移民協会が設置され、オクラホマ大移住奨励の号令がかけられた[39]。１８９０年２月２８日のカンザスの黒人新聞『アメリカ市民』（*American Citizen*）と『ニューヨーク・タイムズ』（*The New York Times*）は、黒人であることを必須条件とし、黒人の精神的道徳的向上、オクラホマの州昇格時の統治権獲得を目的とする秘密結社的政治団体、ファースト・グランド・インディペンデント・ブラザーフッド（The First Grand Independent Brotherhood）の躍進を伝えている。『アメリカ市民』には、「オクラホマに白人が居住することは必要悪として認めるが、白人には一切の権利を与えず、州、郡、各自治体の役所のポストには黒人だけが就き、

---

[36] Sharon Jessee, “The Contrapuntal Historiography of Toni Morrison’s *Paradise*: Unpacking the Legacies of the Kansas and Oklahoma All Black-Towns,” *American Studies*, Mid-America American Studies Association, Vol.47, No.1. Spring 2006, 83; *A Look at Oklahoma*, 5.

[37] Adams, 26.

[38] *Ibid*., 11; 渡辺、99頁。

[39] Martin Dann, “From Sodom to the Promised Land: E.P.McCabe and the Movement for Oklahoma Colonization,” *Kansas Historical Quarterly*, Vol.XL, No.3, Autumn 1974,372.

教員も全員黒人とする」というブラザーフッドの白人排斥の方針が報告されている[40]。『ニューヨーク・タイムズ』の記事、「黒人州建設へ向けて」(“To Make a Negro State”)によると、ブラザーフッドは当初黒人の注目を集めなかったが、白人への恒久的敵対姿勢をアピールすることで黒人の支持を集め始めたという。ニカデマス周辺で徐々に力を得たブラザーフッドの存在は、黒人の多くがブラザーフッドの頭文字 F.G.I.B.の文字を冠したバッジをつけていたことでも明らかであった。カンザスからオクラホマへ進出したブラザーフッドは、完全な社会平等を求める上での黒人の団結の重要性を説き、会員数を急増させる。黒人政治家ジョン・ウォーラー(John E. Waller 1850-1907)による、「我々は要求を実現させなくてはならない。完全な社会的平等を求め、黒人が同じテーブルで食べ、同じ家に住み、同じベッドで眠ることを白人たちに認めさせなくてはならない[41]!」というカンザスでの戦闘的スピーチは、黒人に力強い感銘を与えた。

エドワード・マッケーブ
Acres of Aspiration, 22.

移民協会はオクラホマに支部を作り、オクラホマ移住を訴えるエージェントを南部一帯に派遣した。加えて、黒人社会に影響力を持つ黒人牧師や教員への書簡、何万部というパンフレットが南部諸州に配られた。協会の宣伝が功を奏し、やがてオクラホマへの入植者が激増する[42]。経済的に困窮していたある南部の黒人農民は、１８９１年にアメリカ植民協会[43](The Society for the Colonization of Free People of Color of America 略称 American Colonization Society 1816-1964)に以下のような手紙を送っている。

> 働けど働けど暮らしは一向に良くならず、我々黒人にとっては本来先祖の地アフリカへ行くことが正しい選択だとは思いますが、最寄りの安全な地、オクラホマへ行くことが現実的な選択なのでしょう[44]。

---

[40] *American Citizen*, May 3, 1889 (Cited in Dann, 373.).
[41] “To Make a Negro State,” *The New York Times*, February 28, 1890.
[42] Hirsch, 31-33.
[43] 1816年にワシントンD.C.で設立された組織で、黒人のアフリカ移住を推進した。
[44] Edwin S. Redkey, *Black Exodus*: *Black Nationalist and Back-to-Africa Movements,*

『ニューヨーク・タイムズ』は、準州の知事に名乗りを上げている黒人のエドワード・マッケーブ　(Edward P. McCabe 1850-1920) が当選すれば、白人に暗殺されかねない事態になっていると報じている。強固な人種分離主義者であるマッケーブは、カンザス州で州監査役を務めた経験を持ち、オクラホマで土地を得ることが黒人の集団的・個人的利益になると考え、１８８９年にカンザスから移住して来た。１８９０年代前半には土地投機でも成功している[45]。彼はまず、オクラホマ準州の州都ガスリー (Guthrie) のあるローガン郡 (Logan County) の初代出納官となり、州昇格までその地位を維持した。彼は黒人州実現に尽力した人物であり、オクラホマをはじめ、周辺地域や南部でも指導者として尊敬されていた。自立・自治への黒人たちの欲求は、マッケーブというリーダーを得たことにより、次第にオクラホマを黒人州にするという目標を形成し始める。インディアン準州で発行されていた『インディアン族長』(*The Indian Chieftain* 1882-1902) 紙には、オクラホマを黒人州にする計画について、「アメリカ中で、オクラホマを黒人州にしようという計画が進行中である。黒人の運動員が州外の黒人をオクラホマに移住させる説得を重ねている[46]」と報じている。

> 白人が実現不可能であると軽視してきたオクラホマ黒人州の建設であるが、カンザス州の元監査役を務めたエドワード・Ｐ・マッケーブの手腕によって現実味を帯び始めている。カンザス州の政界から追放された彼は、黒人州の建設に並々ならぬ意欲を注いでおり、黒人移民団を形成した。オクラホマが入植可能となるや、１万人もの黒人が主に南部の州からやって来た[47]。

マッケーブは黒人州実現に向けて新聞を発行し、オクラホマだけでなく南部諸州にも流通させた。彼は大胆にも白人の政治権力を奪うことを主張し、この戦闘的姿勢は南部黒人を奮い立たせた。ロイ・ブルックスによれば、マッケーブは「夢想家」であった。彼はハリソン大統領 (Benjamin Harrison 任期 1889-1893) に、オクラホマを黒人が統治する黒人州にすることを願い出、オクラホマが如何に地理的に黒人州に適しているかを説き、自らが知事の職に就くことを提案している。彼はオクラホマについて、「未来の土地、エデンの園であり、黒人は暴民政治から解放され、南部のあらゆる悪意ある政

1890-1910, Yale University Press, 1969, 9.

45 *Acres of Aspiration*, 37.

46 *The Indian Chieftain*, March 6, 1890, 2.

47 “To Make a Negro State.”

策から逃れることができる[48]」と力説している。１８９０年には、全米で８５人の黒人がリンチされているが、その多くが南部で起き、南部一帯で黒人の選挙権剥奪の動きも加速し始めていた。暴力の恐怖は白人社会との共生に甚大な不安を生み、黒人が白人と分離した安全な地を探し求める確固たる動機となった。しかし、マッケーブを知事とする黒人州創設案は議会で否決され、オクラホマ黒人州実現の夢は潰えた。黒人州建設の失敗の最大の要因は、南部の小作農である黒人たちが、移住にかかる費用を工面できなかったことにある。加えて、黒人州建設にはオクラホマ内外から抵抗があった。白人は猛烈に反対し、多くの黒人が夢物語だと決めつけ、先住民は黒人州での彼らの立場を懸念した[49]。ジムクロウを身にまとい、白人として生まれたからには地主になるのは当然だと考えた白人入植者たちにとって、黒人人口増加は憂慮すべき事態であった。オクラホマ以外でもこの問題は取り上げられ、１８９０年３月１日の『ニューヨーク・タイムズ』は、

> 黒人がアメリカ各地に均等に散らばっているならば、社会的・政治的な問題は起こらないだろう。しかし、住民のほとんど、あるいは全員が黒人の居住地ができたとしたら、それは野蛮地帯になるだろう[50]。

という意見を掲載している。黒人が土地を巡るライバルになることに加え、黒人が道徳的に劣った存在であると考えていた白人は、黒人人口の増加が治安の悪化に直結するとの恐怖と不安を抱いていたのである。

オクラホマの黒人人口は１８９０年には１９，０００人、１９００年には３７，０００人に倍増し、１９１０年には１３７，０００人に急伸、１９２０年には１４９，０００人となった。黒人人口の急増は、白人だけでなく先住民にも危機感を抱かせた。黒人人口の増加が継続し、もしもオクラホマで黒人が多数派を占めるようなことでもあれば、白人同様排斥されるかもしれないと恐れたのである。先住民たちは自由民との婚姻を厳しく制限するようになり、黒人移住者をこれ以上増やさないため、南部からの黒人移住者と自由民の婚姻にも介入し始めた[51]。白人社会は、黒人の経済的・政治的前進を受け

---

48 “History of African-Americans in Oklahoma,” *Oklahoma! The Guide*, Portland Center Stage, 2011, 2.
49 渡辺、100頁;Hirsch, 33.
50 Hirsch, 33.
51 Messer, 63.

て暴力的になる傾向があった。「黒人州建設に向けて」の記事でも、「黒人人口が多い地域で黒人の積極性や意欲が目立つと、反黒人感情も急速に高まった[52]」と報告されている。

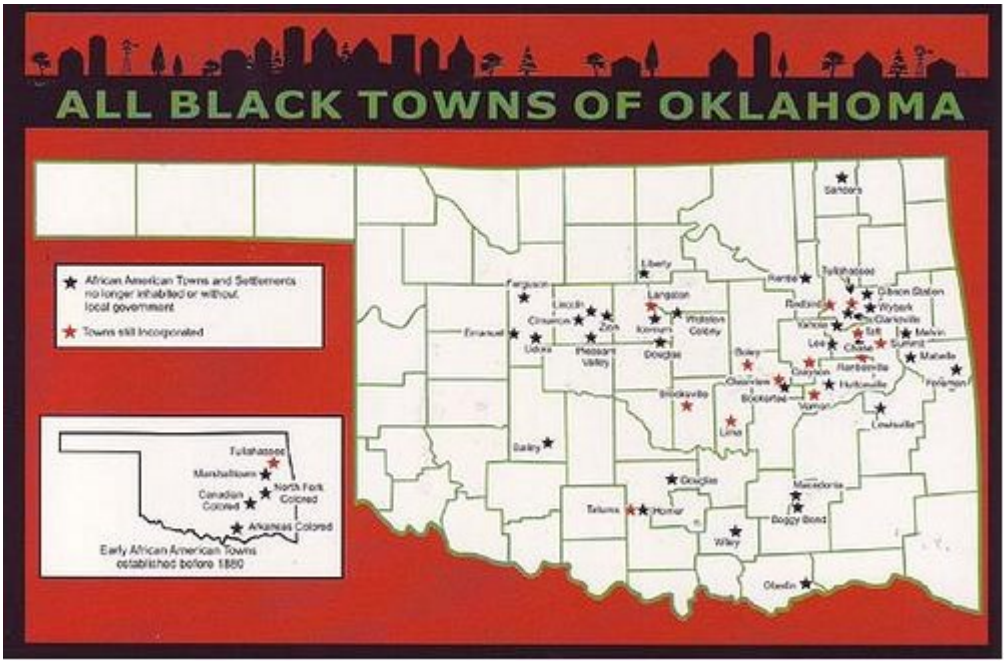
こうして、黒人州の実現が叶わなかった黒人たちは、オクラホマの両準州において白人と分離したコミュニティの更なる形成を目指すことになる。

第２節 黒人自治体の建設

１ 黒人自治体建設の社会的・思想的背景

黒人の分離主義者の多くは、海外よりも国内での分離を支持し、アメリカ国内に黒人州、自治区を建設することを目標とした。アメリカは黒人にとっても祖国であると共に、民主主義、共和主義の国であり、国内における自治・自由の獲得を志したのである。海外に移住するより、国内で分離しながら暮らす方がはるかに現実的でもあった。

黒人州の実現は成就しなかったものの、黒人自治体の建設は黒人の自治と自立の体現であった。黒人の移動・移住に象徴される流動性は、誰からも所有されることなく、自らが所有者となって、自由と安住の地を探し求める過程であり手段であった。黒人自治体建設は、激しさを増す白人の暴力から団結して身を守るという手段でもあり、「自由・



現存するオクラホマ州の黒人自治体（灰色の星がついた１３自治体）
オクラホマ歴史協会発行の地図（発行年不詳）

[52] Adams, 15, 17.

平等・正義の探究を反映[53]」し、また、土地所有、自治、完全な市民権、人種の結束、そして経済的成功への希望の象徴でもあったのである。

黒人自治体を本格的に調査する目的で「黒人自治体プロジェクト」を１９８８年に発足させたオクラホマ歴史協会は、黒人自治体は以下の３つの要件を満たすと定義している。

① 黒人によって設立された
② 統治機構を黒人が占めている
③ 国に任命された黒人郵便局長がいる[54]（国の承認の証明になるため、郵便局長の地位は重要と考えられた）

また、黒人自治体建設運動を盛り上げた主な要因は、

① 経済的自立と政治的自由への渇望
② 人種差別に基づく迫害・暴力からの逃避
③ 黒人としての人種のプライド
④ 黒人だけで暮らすことによる、身体的な安全と精神的な安心感[55]

などであった。

ボーリーのタウン治安裁判所裁判官（Town Judge）兼ボーリー博物館（The Boley Historical Museum）の管理者ヘンリエッタ・ヒックス（Henrietta Hicks）は、黒人自治体建設の最大の動機は、「自由と平等、安定した平和な環境での子育てへの切望、ジムクロウからの逃避」だったと述べる。ヒックスは、黒人自治体建設という「実験」は、住民の多くが人生で初めて選挙権を行使し、土地を所有して住宅を建設し、子供たちを南部の差別、混乱から切り離すことができた点で成功したと断言する[56]。住民全員が顔見知りの小さな町で、自助・共助の精神に溢れたコミュニティを形成したのである。ボーリーには高校があったため、周辺地域の黒人生徒たちはそれぞれの地域で中学校を卒

---

[53] Stephney-Roberson, 5.
[54] *Acres of Aspiration*, 78-79.
[55] *Ibid*., 46; Roy L. Brooks, *Integration or Separation -A Stage for Racial Equality-*, Harvard University Press, 1996, 168-169.
[56] Personal Interview with Henrietta Hicks conducted on September 9, 2013 in Boley,OK.

業した後、ボーリーの高校に通うことが通例であった。

白人から分離した黒人自治体建設の背景には、領土的・地域的ナショナリズムが脈打っている。黒人自治体の建設は、単に１９世紀後半の西漸運動の一部だと見なされることもあるが、黒人自治体の相次ぐ建設を西漸運動の一部だとみなしてしまうと、移住の背後にあった黒人の集団的動機である「人種の分離」を見逃すことになる[57]。黒人自治体とは、差別と暴力の中で目覚めた人種のプライドの結晶なのである。主流社会における社会的・経済的成功を諦めざるを得なかった黒人は、敢えて自ら主流社会との決別を選び、分離することでアメリカ人としての夢を叶えようとした。白人との共生は束縛を意味し、自由と機会を得る場所として黒人だけの自治体建設を選択したのである。黒人自治体は、黒人が夢見た自由、自立、成功、そして安全な暮らしを手に入れる場所として生まれ出たのである。

黒人自治体建設ラッシュは、黒人指導者、ブッカー・Ｔ・ワシントンの活動時期と一致する。ワシントンは、黒人の未来は経済的自立にかかっていると説き、黒人自治体が経済的・政治的自立を求めた黒人の主体的分離の帰結であるという信念を持っていた。黒人居住地では土地の所有に加え、ワシントンの唱える自己研鑽、自助、自己統治の精神とその実践が奨励された。土地所有は定住と自給自足を促進し、「自立した黒人」を印象付け、経済的被害者としての黒人のイメージを覆す役割を果たすと期待された[58]。黒人自治体は、黒人の能力をアピールするための理想的な道具として機能したのである。ただ、ワシントンは決して黒人が永続的に従属的立場に据え置かれるべきだと考えていたわけではなく、黒人が道徳的かつ勤勉に労働し富を蓄積すれば、いずれは白人の尊敬を得られると確信していた。ワシントンの最終目標は、あくまでも経済的自立を遂げた上での黒人と白人の人種統合であり、社会的・政治的平等を達成するための必要前提条件として分離を推奨していたのである。彼は自営農民になることこそ権利獲得への道であり、黒人が都市へ移住して労働者となることは自立への道ではないと信じていた。ワシントンは、教養を得たり、都市の住民になったりすることよりも、農業で身を立てることこそ黒人の地位向上に有益だと考えたのである。彼は「詩を詠むことと耕作に同様の品位を認められるまで、どの人種も繁栄することはないだろう[59]」と述べている。南部の人種差別に抵抗し闘うのではなく、自らの能力を上昇させることで平等を勝ち取れ

[57] Brooks, 169.
[58] Bernard, 915-920.
[59] Brooks, 125-126.

るのだと説いた。ワシントンの思想の根底には、黒人が経済的に自立を果たせば、白人もおのずと人種差別を緩和させ、黒人に敬意を払うようになるだろうという楽観主義があったのである。ワシントンは、黒人が努力すれば、権利や平等は社会から与えられると信じていた。一方、社会の特権を享受し、社会変革に後ろ向きな白人たちにしてみれば、黒人の主流社会からの自主的分離にしても、ワシントンの漸進主義にしても都合の良いものでしかなかった。

黒人自治体が、黒人の主体的行動の産物であったと称賛する声ばかりではない。黒人自治体は、白人の人種差別からの逃避による「排斥や疎外の象徴[60]」であると悲観的に捉えられることもある。黒人が真に分離を望んだのではなく、１００％アメリカ人でありたいにも拘わらず、白人社会に拒絶された結果の分離主義ではなかったか。白人社会で１００％アメリカ人になることができなかった黒人は、まず黒人だけの社会で成功し、統合を求めるという遠回りの道を選んだ。アメリカの黒人は、人種統合と分離の間を常

オクラホマ準州時代の理容室兼ビリヤード場（１９０６年）
Acres of Aspiration, 56.

に揺れ動いてきた。しかし、アメリカの主流社会に黒人を受け入れることを拒んだ白人たちは、人種の統合、分離のいずれも黒人の抵抗・反抗と受け止めた。白人は黒人と共生することを望まなかったにも拘わらず、黒人が白人社会から独立した黒人コミュニティを作ることにも反感を抱いたからである。白人は黒人と統合するのも嫌い、二流市民

[60] William L. Katz, *The Black West*: *A Documentary and Pictorial History*, Anchor Press, 1973, 249.

の黒人が白人の手助けなしに成功するのも好ましく思わなかった。

オクラホマでは１９世紀後半から２０世紀にかけて白人や先住民による黒人への嫌がらせや暴力が頻発し、共存が困難になることも多かった。当時の新聞には、オクラホマでの人種迫害について、「チョクトー族が黒人を地域から追い出している。黒人の使用人を雇っている者は５０ドルの罰金を科される」「黒人を追放する目的で自警団が組織され、黒人に２４時間以内に退去するよう警告した」などと報告されている[61]。黒人自治体は、黒人がアメリカで生きることの困難な現実からのやむにやまれぬ逃避先であり、避難場所でもあったのである。

黒人自治体は黒人の自立を実現したが、宗教行事は住民だけで行えても、教育・社会生活・経済の面では、資源も人員も不足するという共通の限界を抱えていた。収入の大部分を農業のみに頼る生活で、多くの面で住民が困窮していたことが窺われる。しかし、少なくとも人種分離により日常的な差別に苦しめられることはなかった。彼らの多くが人生で初めて自由と尊厳を味わい、それ以上に重要だったのは、黒人が白人の統制や援助なしで自治を行ったことであった[62]。

２ 自主的分離と自治体の繁栄と衰退

（1）ボーリー

オクラホマに現存する黒人自治体は１３あり、最も繁栄した１９０３年建設のボーリ

ボーリー町議会のメンバー（１９０７－１９１０年頃）
Acres of Aspiration, 83.

[61] *Acres of Aspiration*, 61.
[62] Norman Crockett, *The Black Towns*, Regents Press of Kansas, 1979,188.

ーと１８９０年建設のラングストンも、かつての賑わいは失ったものの現存している[63]。ボーリー（インディアン準州）もラングストン（オクラホマ準州）も、南部の圧政を逃れて、新たな生活を築こうと移住した黒人の独立独行の精神から生まれた。

ボーリーの歴史は、クリーク自由民ジェームス・バーネット（James Barnett）の娘、アビゲイル・マコーミック（Abigail Barnett McCormick）が所有した１６０エーカーの土地から始まった。１９０５年までに４００人以上の黒人がボーリーに移住し、「約束の地」を夢見た黒人たちの移住はそれ以降も後を絶たず、人口はその後３年間で２倍以上にまで膨らんだ[64]。１９１１年までにボーリーは７，０００人の人口を擁し、アメリカ最大の黒人自治体へと成長を遂げたのである。ボーリーは、自由の地、安息の場所として大規模に宣伝され、白人コミュニティと比較しても遜色のない住居が立ち並ぶ「黒人自治体の宝石」（The Jewel of Black Towns）と称された。１９１２年には、食料品店とホテルが５軒、レストラン７軒、ドラッグストア３軒、宝石店１軒、デパート４軒、保険会社２軒、写真店２軒、製氷工場１軒、貸し馬屋２軒を含む５４もの事業が展開した。加えて、２０万ガロンの給水塔、公立・私立学校、友愛クラブ、あらゆる宗派の教会、郵便局、発電所、鉄道の停車駅が存在した[65]。ボーリーは様々な点で黒人自治体の先駆けであった。１９０６年には黒人自治体初の銀行、１９１０年には電力会社、１９１２年には電話会社が設立された[66]。

ボーリーが人口増加を加速させた主な要因は、クリーク族の自由民に与えられた安価で肥沃な農地と、鉄道の停車駅の存在である。住民のほとんどは農民で、ボーリーの発展には近隣地区の農民の増加も寄与している。ボーリーは作物の取引場所となり、その経済は半径５、６キロ四方に広がる地域の黒人農民により支えられた[67]。ボーリーでは、女性も、教師、商店の売り子、宿泊所経営などの小規模ビジネスに従事した。黒人女性が南部で就けた仕事といえば白人家庭での家事労働であり、そこからの解放には大きな意味があった。白人家庭で晒される性暴力から逃れることは、大いなる自由と安全の獲得だったからである。黒人自治体における自由と選択できる職業の幅は、黒人女性にと

---

63 Adams, 18.
64 Brooks, 179-180.
65 *Acres of Aspiration*,82; Stephney-Roberson,6.
66 *Acres of Aspiration*, 82-84.
67 Edgar R. Iles, “Boley, An Exclusively Negro Town in Oklahoma,” *Opportunity, Journal of Negro Life,* August 1925(Cited in *National Humanities Center Resource Toolbox The Making of African American Identity*, Vol. III, 1917-1968, 2007,2.).

ってより一層の価値のあるものであったかもしれない[68]。

ボーリーの新聞、『ボーリー・プログレス』（*The Boley Progress* 1905-1926）は、「安い農場を購入し、黒人の町で自ら規律を定め、自己統治しようではないか[69]」と、南部の黒人にボーリーへの移住を呼びかけた。経済的発展による地位向上を訴えるワシントンを仰ぎ見た黒人たちにとって、土地の所有を基盤とした経済的自立の達成は、権利獲得への確かな道筋であった。当のワシントンはというと、オクラホマへ移住した黒人が自由と政治的自決への過度な期待を抱いていると憂慮していた。漸進主義者である彼は、経済的自立は必ずしも政治的自決に即直結するとは考えていなかったのである[70]。ワシントンは、１９０８年に黒人雑誌『アウトルック』（*The Outlook*）に「西部の黒人自治体、ボーリー」（“Boley, A Negro Town in the West”）という論評を寄稿し、ボーリ

表１　州別黒人自治体数と、最大規模自治体とその人口（１９２５年）

州	自治体数	最大規模自治体	人口
アラバマ	6	プラトー（Plateau）	１５００
アーカンソー	2	―――	――
カリフォルニア	4	―――	――
フロリダ	1	イートンビル（Eatonville）	２００
ジョージア	6	キャノンビル（Cannonville）	２００
イリノイ	2	リロイ（Leroy）	３０００
カンザス	1	ニカデマス（Nicodemus）	３００
ケンタッキー	1	―――	――
メリーランド	2	―――	――
ミシガン	2	―――	――
ミシシッピ	3	マウンドバイユー（Mound Bayou）	７００
ニュージャージー	3	グールドタウン（Gouldtown）	２５０
ニューメキシコ	1	―――	――
ノースカロライナ	3	―――	――
オクラホマ	**１４**	**ボーリー（Boley）**	**３５００**
テネシー	2	―――	――
テキサス	7	オールドハム（Oldham）	３００
ヴァージニア	5	ヘアバレー（Hare Valley）	５００
ウェストヴァージニア	1	インスティテュート（Institute ）	６００

“Boley　(An Exclusively Negro Town in Oklahoma)，”1. を参考に作成

[68] *Ibid*., 1.
[69] *The Boley Progress*, March 16, 1905,1
[70] Chang, 156.

ーの名声を一気に高めるのに一役買った。ワシントンはボーリーが、「最も新しく、革新的、多くの点でアメリカのどの黒人自治体より興味深く、激しいエネルギーに満ちた西部の町」であると紹介している。ワシントンは３０年前の黒人のカンザス移住にも触れ、当時の黒人が無力な困窮者の集まりだったのに対し、ボーリーへの移住者は「土地を所有して家庭を築き、コミュニティを建設しようと集まった果敢な集団」だと賛辞を呈している。ボーリーの黒人は、カンザス移住が期待された成果を上げなかった教訓から、コミュニティの発展のため、学校を建て、銀行を設立し、新聞も発行した。ワシントンはボーリーを「人種の尊厳を維持した秩序ある自治体」と称賛し、その犯罪率の低さについても、過去２年間で１件の逮捕事例もないと報告している。ボーリーの住民はアルコールに対し厳しい態度で臨んでおり、ボーリー周辺でのアルコールの売買は禁じられていた。ワシントンは、ボーリーの治安の良さと健全な社会は、黒人移住者が「自由な土地でのコミュニティ形成」という明確な目的を護持しているからに他ならないと説明し、ボーリーは黒人の人種意識の目覚めと、人種全体の尊厳の獲得に向けて努力を惜しまないという強固な意志の結実であると結論付けている[71]。黒人自治体とは「黒人の自治と自由の可能性の象徴的存在[72]」だったのである。

ボーリーの銀行（１９０７年―１９１０年ごろ）
Acres of Aspiration, 83.

その一方で、人種意識の不穏な高まりについて警告する記事が、１９２５年の黒人誌『オポチュニティ』（*Opportunity*）に掲載されている。記事によれば、ボーリーの黒人の人種のプライドは「行き過ぎ」ており、白人が黒人の成功を妬み、ボーリーを破壊しようとしているという恐怖と不信が広まっているという[73]。しかし、こうした暴力への警戒は決して根拠なきものではない。１９１９年には全米各地で人種暴動が発生して黒人コミュニティが攻撃を受けている

[71] Booker T. Washington, “Boley, A Negro Town in the West,” *The Outlook*, January 4, 1908, 28-31.
[72] 渡辺、257頁。
[73] Iles, 1.

し、１９２１年に発生したタルサ人種暴動では、黒人居住地が略奪や放火の末壊滅している。タルサ人種暴動の要因の１つとして、分離した黒人コミュニティの経済的成功に対する白人の妬みが挙げられている。ボーリーの黒人住民たちは、ようやく手にした自由の地や築き上げた財産を失う恐怖と日々向き合っていたのである。

ボーリーの学校（１９２２年）
“Boley（An Exclusively Negro Town in Oklahoma）,”1.

ボーリーはワシントンの死後、第１次世界大戦以降から、綿花に依存した農業の不振によって衰退し始める。ピーナッツなどの代替作物を試したものの、綿花に変わる商品作物に恵まれず、多くの住民は都市部や更に西へと移住し始めた。大恐慌を経て、１９３３年までに税金の支払い能力を有する住民は数えられるほどにまで落ち込み、１９３９年にボーリーは遂に破産した。ボーリーの資産は競売に付され、町の電話会社は白人に売却された。追い打ちをかけたのが、ボーリーに鉄道サービスを供給していたフォートスミス・アンド・ウェスタン鉄道（Fort Smith and Western Railroad）の１９３８年の倒産であった。また、黒人コミュニティではどこもその傾向があるのだが、ボーリーもその例に漏れず、町の規模に不釣り合いな数の教会があった。それぞれの教会の信徒数の少なさから、活動は限られ、若者の教会離れが加速した。銀行、鉄道の駅、働き手を喪失し、人口は１９６０年には５７４人にまで減少し、１９８０年の国勢調査では４１２人にまで落ち込んだ[74]。現在、ボーリーには博物館があるが、常駐職員はおらず予約によってのみ開館している。また、５００人程度収容でき、約１００人を雇用する中程度の矯正施設がある。経済効果より重要なのは、州の矯正施設の存在によって、ボーリーはオクラホマ州とのつながりを保っているという事実であり、このつながりは自

[74] Brooks,181; *Acres of Aspiration*,86-87; 渡辺、284頁。

治体の存続に有利に働くだろうと考えられている[75]。博物館の非常勤職員も務めるタウン治安裁判所裁判官ヘンリエッタ・ヒックスによると、現在ボーリーの人口は矯正施設収容者を除いて３７９人―４５２人程度である[76]。最高で約７，０００人が居住した２０世紀初頭と比べると、大幅な退潮である。「黒人自治体は自由を獲得すること以外に、何を世の中に示し、達成したのであろうか」という筆者の問いに対し、ヒックスは、「彼らは精一杯、充実した人生を生きたかったのです。黒人であるというだけの理由で正面

ボーリーのメインストリート（１９２２年）
“Boley（An Exclusively Negro Town in Oklahoma）,”2.

現在のボーリーのメインストリート
（筆者撮影　２０１３年９月８日）

75 *Acres of Aspiration*, 90.
76 Interview with Henrietta Hicks.

からの出入りを禁じられ、裏口を使わなければいけないといったことにはすっかり辟易していたんです。真っ当なアメリカ市民として、堂々と正面から入って買い物をしたかったのです。動物以下の存在のように扱われるのには、いい加減うんざりしていましたから。ボーリーが１９０３年に建設された当時、南部の黒人は本当に悲惨な状況に置かれていましたが、ここボーリーは黒人の町だったため、私たちは過酷な差別に晒されずに済んだのです。南部の黒人は、メイドや使用人以外の仕事を得る機会はほとんどありませんでした。しかしボーリーでは、皆が裕福だったというわけではありませんが、人種差別に遭うことだけはなかったのです。好きな時に自由に行きたい場所へ行け、見たい映画を見ることができました。誰だって一等のアメリカ市民として扱われたいでしょう？[77]」

（2）ラングストン

１８９０年にオクラホマ準州に創設されたラングストンは、オクラホマで最も古い黒人自治体で、名前の由来は、ヴァージニア州で１８９０年から１８９１年まで黒人初の下院議員を務めたジョン・マーサー・ラングストン（John Mercer Langston 1829 -1897）である。彼は首都にある黒人大学ハワード大学（Howard University）に初の法学部を設置し、副学長や学長代理も務めた。ラングストンの発展に最も寄与したのは、宅地開発業者、投機家、法律家、新聞社主、政治家、移住斡旋業者と幾つもの顔を持っていたエドワード・マッケーブである。マッケーブはまず、ラングストンの１，７００区画を１区画１０ドルから５０ドルで売却し、獲得した農業用地１６０エーカーの土地を細かく分割して売却している。売却は黒人住民を増やすために、黒人だけに限定して行われた。マッケーブは、ラングストンを黒人が支配する黄金郷にする夢を抱いており、オクラホマ黒人州実現の足掛かりと考えていた。彼はラングストンを「アメリカで唯一の黒人の町」であり、「エデンの楽園、神の庭」であると宣言し、黒人の移住推進に邁進した。１８９０年１０月より発行された新聞『ラングストンシティ・ヘラルド』（*The Langston City Herald* 1891-1902）は、ラングストン移住宣伝の媒体としてオクラホマだけでなく、南部一帯で流通した。紙面には、広い道路や高いビルなどのイラストが描かれていたが、実際のラングストンは商店が１軒だけの、民家すらまだろくに建てられていないテント暮らしの住民の町であった。多くの移住者が宣伝と現実の落差に失望し、去る者もいた。それでも、黒人だけの夢の町を目指して南部からの移住者は増え続

[77] Interview with Henrietta Hicks.

け、１８９１年には医者、教員、神父を含む人口は２００人となり、翌年には６００人にまで膨らんだ。この年には１３５人の児童を迎え、公立小学校が開校している。その後も、ホテル、ドラッグストア、食料品店、工場といったビジネスが発展し、最盛期の人口は３，０００人を超えたのである[78]。

「ラングストンでは黒人は南部の暴民政治から解放される」と説いたマッケーブは、南部にエージェントたちを派遣し、彼らは熱心に黒人のオクラホマへの移住の勧誘に努めた。マッケーブは、南部から白人人口を凌駕する数の黒人が移住すれば、白人はオクラホマを黒人に譲り渡すことに同意するのではないかという期待を抱いていた。そうなれば、マッケーブの州知事就任の野望も叶えることができる。マッケーブは、差別と暴力からの避難場所、また富を蓄積できる場所としての黒人自治体をアピールし、ラングストンへの移住と投資を熱烈に勧めたのである[79]。

> 黒人は南部に留まって一体どうするつもりなのだ？奴隷は常に死と隣り合わせで生きることを強いられ、公正な扱いを受けることなど皆無なのに？もしオクラホマに来れば、白人と同等の機会と自由を得ることができ、自立することも可能なのだ。白人はなぜ、黒人がオクラホマへ移住するのを妨害しようとするのか？なぜなら白人は黒人を南部に留め置き、黒人の労働で利益を得たいからだ[80]。

> ラングストンは黒人の町で、我々はそれを誇りに思う。役人も教師も全員黒人である。・・・中略・・・ここでは多種多様な作物を育てることができ、凶作の心配がない。土地へのほんの数ドルの投資が、将来どのくらいの額になるか予想もつかない。未来を築く意思があるなら、ラングストンの土地に投資するのが最善の方法である。不動産こそが、あらゆる富の基礎である。ラングストンへの投資と移住を勧める理由を挙げればきりがない。安価な土地、価値の安定した上昇、確実な配当、そして完全なる政治的自由と、この国の市民に約束されたあらゆる権利を履行できるのである。これ以上何を望むというのか。ラングストンに投資すれば、１０年後には経済的に独立できること必至である[81]。

オクラホマ準州では黒人は白人の大学への進学を許可されていなかったため、ラングストンの黒人住民は黒人大学創設を願い出、オクラホマ黒人農業尋常大学（Oklahoma

---

78 渡辺、138－139頁。
79 Hirsch, 32-33.
80 *Black Wall Street*, 5.
81 Stephney-Roberson, 10.

Colored Agricultural Normal University）が１８９７年に設立された。１９４１年にラングストン大学（Langston University）と改名されてからも、農業研究の分野では先導的立場を維持しており、オクラホマで唯一、且つアメリカ最西端の黒人大学である。

しかしながら、町の人口は大恐慌を経て大きく減少し、大学が２００２年に発行した調査報告書によると、住民の貧困は深刻で、事業も停滞している。この調査は、「ラングストンは、完全な人種の分離を求めた黒人の一時的な避難場所の役割は果たした。しかしながら、今日ではアメリカ社会全体の傾向にならい、ラングストンの住民たちも排他主義から離れて、統合を選びつつあるのであろう[82]」と結論づけている。就労先も限られた閉鎖的な町は、もはやアメリカ人としての黒人の居場所ではなくなりつつあったのかもしれない。２０００年の国勢調査ではラングストンの人口は１，６３８人で、最盛期の約半分にまで落ち込んでいる[83]。

黒人自治体建設エネルギーは、黒人の「約束の地」を求める希望と情熱によって生み出された。暴力と貧困を逃れ、人間らしい生活を送り、子供たちがより良い教育を受ける機会を得るために彼らは完全な人種分離を求めた。黒人州は実現できなかったものの、黒人だけの自治体の建設と自治は、黒人のプライドを回復させ人種を団結させた。彼らは、ワシントンが唱えた自立と自助の精神に即し、勤勉に労働にいそしんだ。黒人の経済状態が好転すれば、白人は黒人の努力と能力とを認めざるを得なくなり、いずれ社会的、経済的、政治的迫害を止めるだろうと楽観的な希望を抱いていたのである。

黒人自治体衰退に関しては、以下の３つの要因が挙げられる。

① 投資不足
② 自治体の予算獲得能力の欠如による、道路や学校などのインフラ整備の遅れ
③ 一部の富裕層への富の偏り[84]

主流社会からの隔離によって、黒人自治体が経済的にも社会的にも発展の恩恵を受けることのない、取り残された場所となってしまった面は否めない。黒人間だけの取引や黒人客だけを相手にするビジネスは、急激に工業化を遂げるアメリカで徐々に時代遅れ

---

[82] *Acres of Aspiration*, 110-111.
[83] *Economic and Commercial Development in the Town of Langston, Oklahoma-Final Report*, Center for Urban Progress, Howard University, 2002,7; Stephney-Roberson,11; 渡辺、138－140頁。
[84] Crocket, 155-188.

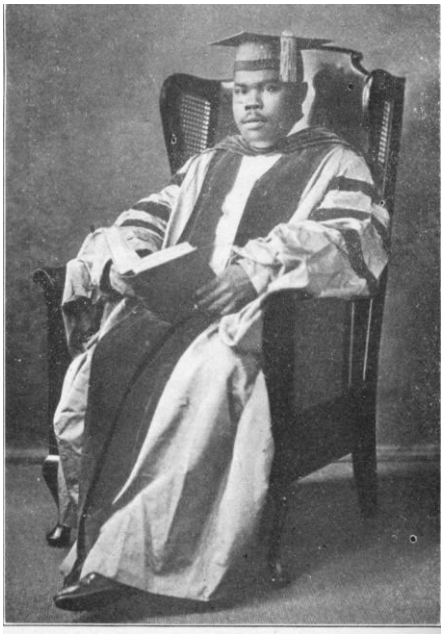
となった[85]。更に、黒人だけで構成されているため、異質なものを厳しく排除する排他的社会となり、排除され続けた黒人が排除される側に回るという皮肉な現象が起こったのである。

１９１０年から１９１３年頃のラングストン大学男子寮
Acres of Aspiration, 120.

[85] Iles, 4-6.

第２章　ジムクロウ北上と出オクラホマ

第１節　人種問題解決策としての出アメリカ



マーカス・ガーヴェイ
Amy Jacques-Garvey, ed.,*Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, The Universal Publishing House, 1923, ii (Reprint by Arno Press and the New York Times, 1968.).

１９２０年代にアフリカ帰還運動（The “Back to Africa” Movement）を押し進めたマーカス・ガーヴェイ[86]（Marcus Garvey 1887-1940）は、黒人を守る政府の不在が黒人への迫害・暴力を助長しているとして、アフリカに移住し黒人国家を建設することを訴えた。

> イギリス人、フランス人、ドイツ人、日本人はリンチ被害に遭っていない。なぜか？それは彼らが強力な政府に守られているからだ[87]。

ガーヴェイ運動を支えたのは、分離主義と結びつけられることが多いブラックナショナリズムである。ブラックナショナリズムは、統合に反対する、排外的且つ暴力的といったイメージを伴うこともある。ブラックナショナリストは人種的ナショナリストであり、政治的独立を求めて黒人だけの社会構築を目指してきた。彼らは確固たる人種のアイデンティティを有し、自決権を持つべきだと考える人々である[88]。２０世紀初頭までのブラックナショナリズムは、移住に象徴される領土的分離主義（Territorial Separatism）と、黒人としての集団的アイデンティティとから構成されている。ブラックナショナリズムは、アメリカの黒人だけでなく、奴隷としての過酷な経験を共有する西インド諸島などの黒人も運命共同体とする、インターナショナルな様相を帯びたナショナリズムでもある。白人中心の社会で抑圧されてきた黒人たちが、人種をその土台と

---

[86] 1914年に万国黒人地位改善協会（The Universal Negro Improvement Association 略称 UNIA）を設立。父祖の地アフリカに黒人の独立国家を作ろうと呼びかけ、黒人の肌の色を肯定し、人種意識に訴える運動は多くの大衆の支持を得た。

[87] Marcus Garvey, “The True Solution of the Negro Problem,” *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey or, Africa for Africans,* Universal Publishing House, 1923-1925(Reprint by The Majority Press, 1986, 52.).

[88] E.U. Essein-Udom, *Black Nationalism*: *A Search for an Identity in America*, University of Chicago Press, 1962, 20.

して白人支配に立ち向かうという共通の目標を持っているのである[89]。歴史上ブラックナショナリズムが黒人大衆の支持を集めたのは、アメリカにおける黒人の状況が殊更厳しくなった時期であった。ブラックナショナリズムは、黒人に対する差別・圧政に団結して対抗するための手段として機能し、黒人が海外に新天地を求める運動を後押しした。ガーヴェイによるアフリカ帰還運動において、肌は黒ければ黒いほど良いと謳われたように、ブラックナショナリズムは白人社会で忌み嫌われた肌の色を美徳に転換させる役割も果たした[90]。彼らが人種の誇りを取り戻し、黒人であることを肯定する社会で生きるためにはアメリカを脱出しなければならなかったのである。

> アメリカは、黒人がアフリカでアフリカ人として生きる機会を奪いながら、アメリカで白人同様の権利を得ることを許してこなかった。黒人たちが、白人の大陸と白人の文化から脱出する以外に黒人の希望はあり得ないという結論に達したとしても、何ら不思議ではない[91]。

個人ではなく人種全体が差別の対象となってきた黒人は、一括りに貶められることで集団として団結せざるを得なかった。アメリカの黒人たちは、アフリカでの「栄光の過去」とアメリカでの「苦難の過去」とからなる黒人共通の遺産を強調し、連帯を推進した。黒人が結束する上で、人種は最大かつ必要不可欠な要素であるため、父祖の地アフリカは黒人連帯のシンボルとして機能したのである。

アメリカ植民協会は、黒人の移住先として１８２２年にアフリカ西海岸にリベリア共和国（Republic of Liberia）を建設するが、１８８０年頃には６５０万人以上に増加していたアメリカの黒人の内、実際にリベリアに移住したのは約１４，０００人に留まった。白人と黒人のアメリカ社会での共存を訴えた奴隷制廃止主義者(Abolitionists)らは、黒人のアフリカ移住に反対を唱えた。多くの黒人がこの考えを共有しており、移住は、「アフリカの未開の地に自由黒人を投棄するようなものだ」という非難の声を上げた。アメリカの黒人の大部分は、植民事業は故郷アメリカから黒人を追放することであると指摘し、彼らの祖先が作り上げた祖国を離れるつもりはないという意思を表明したのである。実際、移住者のほとんどが「アメリカを去る」という条件の下に解放され

---

[89] 竹本友子「ブラックナショナリズム再考」早稲田大学大学院文学研究科紀要、第4分冊、1999年、113－118頁。

[90] Redkey, 13-15.

[91] Gerold T. Robinson, “Racial Minorities” in H.E. Stearns, ed., *Civilization in the United States, an Inquiry by Thirty Americans*, Harcourt, Brace and Company, 1922, 369.

た元奴隷たちであった[92]。黒人は自由の身になっても良いが、アメリカからは立ち退いてもらうという黒人排斥の目的が、アメリカ植民教会の一見慈善的な顔の裏に隠されていたのであった。

アフリカ移住熱は、アメリカ国内の黒人を取り巻く環境が厳しさを増す度に、彼らの不満の高まりに比例して強まった。植民協会設立の背景には、自由黒人の増加に加え、一向に改善されない彼らの経済状況と、自由黒人が奴隷制に及ぼす影響への白人の憂慮があった。自由黒人と白人の人種間混交が白人社会に与えた脅威も、移住運動に拍車をかけることとなった。ムラトー（Mulatto）と呼ばれる混血の存在は、白人の恐怖心に火をつけたのである。人種間混交をなくすには、自由黒人はアメリカにいるべきではないとの考えが広まっていたのである[93]。植民協会の事業には、黒人を父祖の地へ返還するという表の顔と、自由黒人の増加に歯止めをかけ、人種間混交や黒人の社会問題化を防ぐという、いわば、黒人をアメリカから駆逐することを目的とする裏の顔とが併存していたのである。植民協会は国家によって正式に支援され、議会はリベリアの土地の購入、住居の建設、移住者支援に対する１０万ドルの助成金の支出を承認した[94]。こうした国家ぐるみの黒人排斥運動とブラックナショナリストによるアフリカ移住計画は、動機は異なっても、皮肉なことにゴールは同じであった。

南部では、黒人の多くが綿花価格の急落により厳しい生活を強いられていた。綿花価格は下落を続け、白人農民にも深刻な影響を与え、彼らの不満のはけ口として黒人への暴力・リンチが横行し始める[95]。綿花生産で生計を立てることができなくなり、白人の暴力により深刻な身の危険に晒された黒人たちは、海外に目を向け始めた。苦境に陥った黒人には、父祖の地アフリカは可能性に満ち、燦然と輝いて見えたであろう。政治的権利も剥奪された黒人にとり、アフリカ移住と黒人国家の創設は、自由を手にするための最後の手段であった。アフリカをはじめとする海外への移住運動は、黒人が権利・平等を求めた運動の本流になることはなかったが、歴史のいたるところにその潮流を絶えず見ることができるのである。

奴隷廃止運動の代表的活動家で、自らも元奴隷のフレデリック・ダグラス（Frederick Douglass 1818-1895）は、アフリカへの夢を抱き続けることは、アメリカ国内の黒人の地位向上運動の妨げになると危惧していた。彼は１８８３年に行われた雑誌のインタビ

---

[92] Redkey, 18-19; Brooks, 159-160.
[93] Brooks, 158.
[94] *Ibid*., 156-158; Redkey, 15-20.
[95] Redkey, 1-10.

ューで、黒人は２５０年もの間アメリカに住んでおり、アフリカに対して何の忠誠の義務もなく、アメリカに残って闘うべきだと語っている[96]。しかしながら、長きに渡って暮らし、労働し、闘い、血を流した土地で平等が叶わず虐げられているという厳然たる事実は、黒人が故郷アメリカを捨て去り、海外に目を向ける尚一層の原動力となったのである。

第２節　チーフ・サムのアフリカ帰還運動

１９２０年代に大衆の熱烈な支持を得たマーカス・ガーヴェイのアフリカ帰還運動は世界中に広まり、国内・海外合わせて１，０００近いＵＮＩＡ支部を数え、「黒人人口を抱えた地域であればＵＮＩＡ支部が必ず存在した」ほどの浸透ぶりであった[97]。オクラホマには、ＵＮＩＡの西部拠点として都市部と並ぶ規模の支持者がおり、１９２１年から１９３３年にかけて３３に上るＵＮＩＡ支部があった。同じ時期、テキサスには１０の支部しかなく、黒人人口がオクラホマを大きく上回っていた南部諸州よりも多くの支部がオクラホマに存在していたのである。オクラホマの黒人たちのアフリカ帰還運動への関心の高さが窺い知れる。

オクラホマでは、１９２０年代のガーヴェイ運動に先んじてアフリカ帰還運動の高揚があった。チーフ・サムことチーフ・アルフレッド・サム（Chief Alfred Sam　ca. 1881-？）による、１９１３年から１９１６年にかけてのアフリカ帰還運動である。オクラホマでアフリカ移住運動が盛んになった背景には、一時は自由を謳歌した黒人の権利がジムクロウにより徐々に剥奪され、彼らの境遇が南部と大差なくなってきたことがあった[98]。オクラホマに希望を失った黒人たちが、新たな活路をアフリカ移住に見出そうとしたのである。移住によって自治・自立の実現を目指す黒人の精神が、再び躍動し始めたのである。

アフリカ西岸英領ゴールドコースト（The British Gold Coast）出身の貿易商チーフ・サムによるアフリカ帰還運動が最も盛況だったのが、１９０３年にインディアン準州のクリーク自由民の土地から出発した黒人自治体、クリアビュー（Clearview）である。クリアビューの人口は、翌１９０４年には２５０人となり、１９０７年には６１８人に

---

[96] *Ibid*., 32.

[97] Christian, Mark, “Marcus Garvey and the Universal Negro Improvement Association (UNIA), with Special Reference to the ‘Lost’ Parade in Columbus, Ohio, September 25, 1923,” *The Western Journal of Black Studies*, Vol.28, No.3, 2004,424-425.

[98] 渡辺、267頁。

増加した。１９１４年には黒人自治体歴訪中のブッカー・Ｔ・ワシントンが、ボーリーを訪れる前にクリアビューに立ち寄り、住民が熱狂する一大イベントとなった。ワシントンは列車の特別席から、集まった聴衆に向かってまるで王族のように威風堂々とスピーチをした。映画館、ドラッグストア、パン屋、タバコ工場、理容室などの事業も堅調で、ゴルフやプールなどの娯楽施設も登場した。

しかし、南部の人種主義に基づく黒人の選挙権剥奪やリンチは、安住の土地であったはずのオクラホマでも、黒人を窮地に追い込み始めていた。ボーリーの住人だったある男性は、「投票箱も奪い去られ、黒人に対する扱いは酷さを増すばかりです。ほんの些細なことでリンチにかけられ、ありとあらゆる場所で人種の分離が行われています[99]」と、もはや南部化してしまったオクラホマへの失望を切々と訴えた。こうした状況の中、徐々にアフリカ帰還運動が盛り上がりを見せ始めるのである。１９０８年９月４日の『インディアン・ジャーナル』（*The Indian Journal*）紙には、黒人の父祖の地へ帰ることこそ人種の救済であり、リベリア入植に向けてオクラホマ州の代表者会議を開くべきだと訴える声が掲載されている。翌１９０９年には、アフリカ移住推進を掲げる黒人教員のグループがオクラホマで組織された。この小さなグループは、アメリカ中のアフリカ帰還運動についての情報を収集しており、１９１３年にチーフ・サムの貿易会社とアフリカ移住計画について知るや否や、その年の５月に早速サムをオクラホマに招いた。サムは、アフリカ渡航やゴールドコーストの土地などに関する幾つもの説明会を開き、一躍時の人となった。１０月には、１，０００人を超える聴衆を前にアフリカの広大な土地について語り、牧歌的ストーリーでも聴衆を楽しませたサムは、綿花価格の下落に苦しむクリアビューで特に大評判となった。他の黒人自治体同様、クリアビューもその経済を綿花のみに依存していたため、１９１３年から１９１４年にかけての綿花大暴落によって大打撃を被った。この経済的苦境が、チーフ・サムのアフリカ帰還運動への熱狂を後押しすることとなったのである[100]。

サムはゴールドコーストについて、「雨後の浜にダイヤモンドが打ち上げられ、砂糖きびは煙突の高さほどに育ち、パンを実につける木の恵みを受ける」土地だと語った。サムは移住の権利と引き換えに、彼の経営するアキム貿易（Akim Trading Company）へ

[99] Chang, 170.
[100] Brooks, 178-179.

アキム貿易の一口２５ドルの株券（上）とその領収書（下）。
J.P.Owens, *Clearview: Documentary of the History of Clearview*, 1995, 25-26.

１口２５ドルの出資を募った。１口購入すれば、アフリカのパラダイスへの渡航が約束されると謳ったサムの計画に魅了され、多くの黒人がその運命とかけがえのない財産とをサムとアフリカに託したのである。１９１３年１１月にクリアビューで開かれたたった一度の集会で、サムは１，２００ドル（現在の価値で約３万ドル）を手にしたのである。とはいえ、『クリアビュー・パトリアーク』（*Clearview Patriarch*）紙を始め、黒人新聞、州知事、都市部の黒人エリート、そして実業家たちは、サムに懐疑的な視線を

送っていた[101]。彼らは、黒人農民が土地を捨て、大挙してオクラホマを去るのではないかと懸念を抱いたのである。国内での経済的自立を説いていたワシントンもサムのアフリカ帰還運動を批判し、オクラホマの黒人たちにアフリカ行きを思いとどまるよう呼びかけている。

クリアビューのクリーク・セミノール農業学校
(Creek and Seminole Agricultural College)。１９１６－１９２０年頃。
Owens, 9.

しかしながら、政治的・経済的苦境に際し、オクラホマに見切りをつけ、農場、住居、家具一式を売り払った黒人たちが、サムとのアフリカ出航を目指して集結した。１９１４年の２月までに、出航を待つ人々のテントには約６００人が集まった。しかし、食糧、衣服、薬品などが慢性的に不足する状態で、裸足の子供やぼろきれをまとった人々の姿が目撃された。彼らは、サムがゴールドコースト行きの船を調達するのを待ちながら、クリアビューから約５キロ離れた町、ウィリーカ（Weleetka）で野営を続けていた。貧困や伝染病の蔓延にも、彼らのアフリカ熱は決して冷めることがなかった。サムは様々な経済的・法的問題に見舞われる中、古くて補修が必要とはいえ船を一隻購入し、乗組員は全員黒人とした。彼らはテキサスまで鉄道で移動し、そこから「リベリア号」（The Liberia）と名付けられた船で８月に出航することになった。しかし、実際に乗船でき

[101] Chang, 169; *Acres of Aspiration*, 98-99.

たのは、当初の計画より大幅に削減された総勢約６０人（内３８人がオクラホマの黒人）のみであった。彼らはゴールドコーストを視察した後、アメリカに残った人々に状況報告をするために戻ってくる予定であった。リベリア号は１９１４年８月に出航し、翌１９１５年１月１３日にゴールドコーストに到着した。黒人たちは土地があるのは確認したが、ダイヤモンドも、パンのなる木も、煙突の高さほどある砂糖きびも見つけることはできなかった。サムが語ったパラダイスはどこにも存在しなかったのである。サムは借金を重ねた末、リベリア号をカナダの会社に売り払い、サムと共に最終的にリベリアに残ったのはほんの一握りであった。農作物と農法の違いによる不作に加え、伝染病などの疾病が移住者たちを襲い、多くが一文無しで失意の内にアメリカに戻ることとなったのである[102]。

オクラホマの黒人にとって、害虫被害が広まり綿花価格が下落するタイミングで現れたサムは、神によって遣わされ、彼らを苦境から救出してくれる黒人モーゼであった[103]。サムによるアフリカ帰還運動は、絶望の淵を漂う人々の一縷の希望の灯だったのである。

W・E・B・デュボイス
Western New York Heritage – Western New York's Illustrated History Quarterly-, Vol.13, No.4, Winter 2011.

チーフ・サムのアフリカ帰還運動を黒人の逃避主義だとする見方もあるが、アフリカへ旅立った黒人たちは必ずしも最下層の人々ではなく、土地・住宅を所有する中産階級が多かったのである。彼らはアメリカから逃げ出したというよりも、更なる自立とより良い暮らしをアフリカに積極的に求めたのである。アフリカ帰還運動への支持は、黒人たちのアメリカ社会に対する強固な不満・不服従の表れであった。単なる諦めではなく、黒人であるというだけで自由や権利を否定されて生きることへの断固たる抵抗であり、彼らを排除したアメリカを拒絶したのである。ジムクロウ以来、黒人にとってオクラホマは既に「約束の地」ではなくなっていた。

アフリカ移住は、ワシントンの唱えた経済的自立と、

---

102 Langley, J. Ayo, "Chief Sam's African Movement and Race Consciousness in West Africa," *Phylon*, Vol.32, No.2, 1971, 165-170; Chang, 171-172; Owens, 22-24.

103 W.E.Bittle and Gilbert Geis, *The Longest Way Home*: *Chief Alfred Sam's Back-to-Africa Movement,* Wayne State University Press, 1964, 2.

Ｗ・Ｅ・Ｂ・デュボイス[104]（W.E.B. Du Bois 1868-1963）が訴えた完全な政治的権利の獲得の両方を達成し、黒人をアメリカから解放する手段でもあったのである。これは、南部の黒人たちが約束の地オクラホマにかつて託した夢と何ら変わるものではなかった。アメリカでの黒人を取り巻く環境が厳しければ厳しいほど、父祖の地アフリカは燦然と光り輝いて、彼らを優しく手招きしたのである。

アフリカ移住ブームに沸いたにクリアビューの人口流出が本格的に加速し始めたのは大恐慌以降で、事業の倒産により多くの住民が移住を余儀なくされた。１９３９年の鉄道サービスの撤退は町に再起不能な打撃を与え、２００９年には人口は１３５人にまで減少している[105]。

第３節　カナダ西部への移住と黒人移民への対応

南部白人の増加と共に、州昇格前後からオクラホマにも蔓延したジムクロウによる迫害は、黒人を更なる移住へと駆り立てた。無償で払い下げられるカナダ西部の１６０エーカーの公有地は、オクラホマに不満を抱く黒人を強力に惹きつけた。安住の土地だったはずのオクラホマに裏切られた彼らの新たなる旅立ち、闘いの幕開けであった。

カナダの内務大臣クリフォード・シフトン（Clifford Sifton 任期 1896-1905）は、カナダ西部への移民を積極的に受け入れる方針を掲げていた。農業従事者の大量移入こそがカナダ繁栄の最も有効な策であるという信条から、シフトンはカナダ西部の土地の無償提供の宣伝活動を西欧諸国とアメリカへ向けて展開した。西欧諸国からの移民が期待したほどの数にならないとなるや、宣伝の対象を東欧や南欧にまで拡大した。この誘致活動に最も積極的な反応を示したのが、東欧・南欧諸国の人々とアメリカの黒人だったのである[106]。アメリカの、特にオクラホマの黒人は、農地を売ってカナダ西部のアルバータ州（Alberta）とサスカチュワン州（Saskatchewan）へと移住を開始した。正確

---

[104] 20世紀を代表する黒人指導者。黒人として初めてハーバード大学(Harvard University)より博士号取得。「20世紀の問題はカラーライン（皮膚の色、人種間の境界線）による差別である」と述べ、ワシントンの妥協政策を批判し、白人同等の権利を求めた。黒人の地位向上には、黒人の文化や教育を強化させる必要性があると強く主張し、職業訓練だけでなく、幅広い教養の有益性を唱えた。彼の主義主張のスタイルは、後の黒人指導者に多大な影響を与えた。晩年の1961年には共産党員となり、アフリカのガーナに移住し、死去（エリオット・ルドウィック「W・E・B・デュボイス:人種の誇りと不屈の抗議」〔20世紀のアメリカ黒人指導者:ジョン・ホープ・フランクリン編〕大類久恵、落合明子訳、明石書店、2005年、115－149頁）。

[105] Stephney-Roberson,8.

[106] D. Chongo Mundende, “The Undesirable Oklahomans: Black Immigration to Western Canada,” *The Chronicles of Oklahoma*, Vol. LXXVI, No.3, Fall 1988,283.

な黒人入植者数を示すデータは存在しないが、１９０８年から１９１１年の間にオクラホマからカナダ平原へ入植したのは１，０００人以上に上ると推定されている。オクラホマを脱出する黒人がカナダの自由と土地を目指して集団で移住するようになると、黒人人口増加に不安を覚えたカナダ西部の白人たちは、黒人移民に厳しい移入制限を課すことを政府に要請する。カナダの白人もアメリカの白人と同様に、黒人人口の増加は治安の悪化を招き、異人種間混交につながると危惧した[107]。フロンティアの土地を耕すのは、白人入植者でなくてはならなかったのである。

アルバータ州の人々は、カナダの首相ウィルフリッド・ローリエ（Wilfrid Laurier 任期 1896-1911）へ以下の内容の嘆願書を送り、黒人移民の増加に今すぐストップをかけなければならないと主張している。

> アメリカ合衆国が直面している最も深刻な問題が黒人問題です。これ以上の黒人のカナダへの植民を阻止する、何らかの手段を直ちに講じる必要があります[108]。

南北戦争の終結に伴い、アメリカからの逃亡奴隷は消滅し、カナダへ逃れた黒人の多くがアメリカへ戻って行った。そのため、カナダは黒人の一時的な避難場所に過ぎなかったのだという見解が一般的となる。白人移民の増加も手伝って、黒人の存在は徐々に目立たなくなり、やがて忘れ去られた存在となっていった。当時カナダでは大陸横断鉄道が完成し、西部の開拓民としてふさわしい入植者を募っていた。「ふさわしい」ことの条件とは、北欧・西欧系白人であることであり、国家の形成期に多様性は分裂の要因として忌避され、黒人は同化不能と扱われた。カナダ政府は大平原で働く農民を大量に必要としながらも、農耕経験豊富な黒人を徹底的に拒絶したのである。鉄道会社には黒人にカナダ行きの切符を販売しないよう通達がなされ、鉄道会社は白人移住者には運賃値下げを行う一方、黒人の乗車を拒否した。２０世紀初頭のカナダでは、黒人は迷信深く、快楽主義で、愚鈍、怠惰であると信じられていた。彼らの不遇は自業自得であり、人種混交は白人社会を破壊するとして恐れられた。カナダのメディアは、黒人を「黒い悪魔」と呼び、扇情的に報道した。オクラホマの黒人がカナダに新天地を求めたのは、カナダ人の黒人を見る目が非常に厳しく、歪んだ時期と重なっていたのである。

---

[107] *Ibid*., 284;　R. Bruce Shepard, “Diplomatic Racism: Canadian Government and Black Migration from Oklahoma, 1905-1912,”*Great Plains Quarterly*, 1983, 5.

[108] Residents of Edmonton and Strathcona to Sir Wilfrid Laurier, Premier of Canada, *Immigration of Negroes*, April 18, 1911(Cited in Mundende, 284-285.).

１９１１年３月、選挙権と土地を剥奪されてオクラホマを逃れてきた集団が、カナダと国境を接するミネソタ州セントポール（St. Paul, Minnesota）に到着した。彼らは更に５，０００人の黒人がカナダを目指していると話した。ブリティッシュ・コロンビア（British Columbia）に入国しようとした別の黒人集団もオクラホマでの窮状を訴え、カナダには自由があり、選挙権も行使できるために移って来たのだと、移住を希望する理由を語った。

カナダに関する黒人の情報源は新聞であった。第１次世界大戦前、カナダはアメリカの多数の新聞に農民の移住を呼びかける広告を掲載していた。カナダはアメリカの黒人新聞には広告を出していなかったが、配信サービスと契約した結果、オクラホマの黒人新聞にも広告が載ることとなったのである。それは丁度、オクラホマの黒人農民が自由の地であったはずのオクラホマに幻滅し、外に目を向け始めたタイミングと合致していた。こうした広告では、黒人に移住を思い留まらせるために第一に挙げられていたカナダの厳しい気候について、美辞麗句を用いて褒めそやされていた。１９００年のオクラホマの黒人の識字率は５０％であり[109]、多くの黒人が新聞を通してカナダについて学び、情報を得ることができたのである。

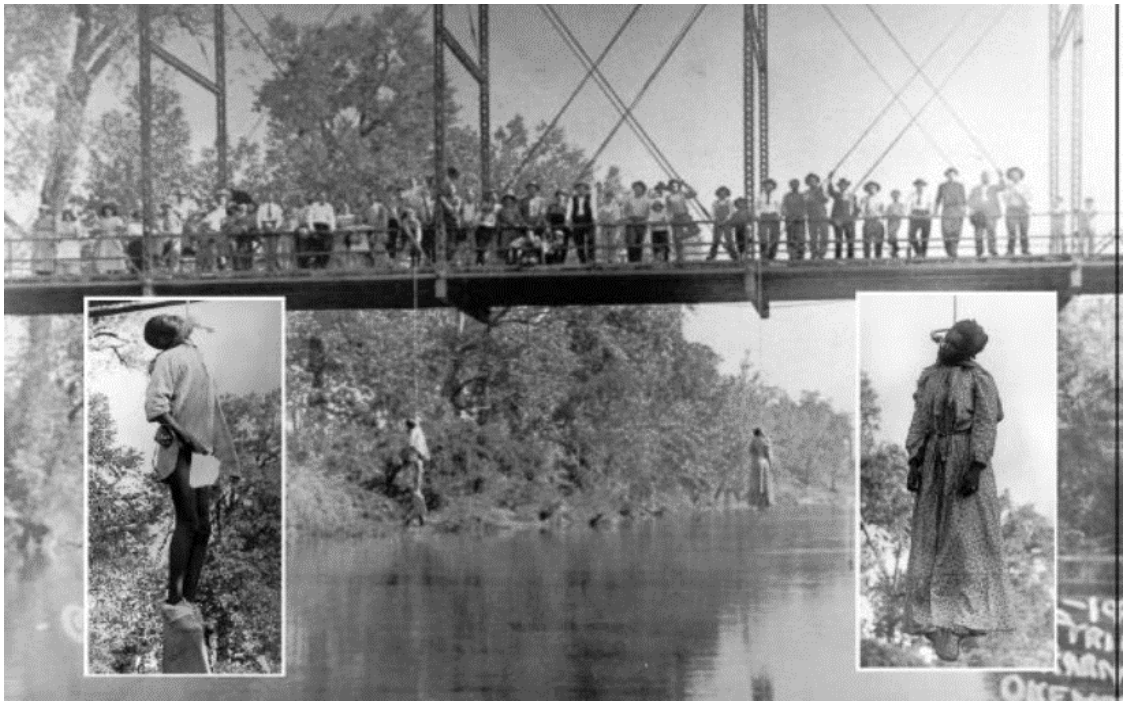
自らが出した広告の手前、カナダは公式に黒人だけに移住制限をかけるわけにはいかなかった。加えて、オクラホマ出身の黒人のほとんどに健康上の問題はなく、ある程度の資産を携えていたため、既存の移住規制では黒人にターゲットを絞った移住制限はできなかった。移民問題の責任者の地位にあったカナダの内務大臣フランク・オリバー（Frank Oliver 任期 1905-1911）は、黒人のアメリカ大脱出を懸念し、国境分岐点に対黒人移民警戒態勢を敷かせた。アルバータ州エドモントン（Edmonton）にやって来たある黒人家族は、カナダへの入国ルートを厳しく追及された。エドモントンには、移住希望者を送り返すに足るあらゆる事由を見つけ出すよう指示が出された。彼らがオクラホマからブリティッシュ・コロンビア州のバンクーバー（Vancouver）を経由してエドモントンへやって来たと判明するや、バンクーバーの入国管理局も黒人移民の入国を阻むよう指導された。また、黒人の入国希望者が後を絶たないと見るや、彼らはより厳しい健康診断を黒人に課そうとするものの、政府による医療関係者への贈賄の疑いやメディアの注目が増したため、断念せざるを得なくなった[110]。

カナダ政府は次に、シカゴ出身の黒人医師 G・W・ミラー（G.W.Miller）をオクラホ

[109] Mundende,284; Shepard,5.
[110] Mundende,292; Shepard,5.

マに派遣し、カナダの気候が如何に黒人に不向きであるかを吹聴させた。ミラーは、ボーリー、クリアビューをはじめとする自治体を回って、多くの移住希望者の説得に成功する[111]。カナダ政府のこうした黒人移住阻止への試みは、カナダ人の黒人に対する感情的葛藤の大きさを露呈することとなった。圧倒的多数のカナダ西部の白人が黒人移住に反対し、女性愛国者団体 Independent Order of the Daughters of the Empire エドモントン支部は、内務大臣に黒人移住阻止を嘆願しているし、エドモントンの商工会議所は精力的に反黒人移住民キャンペーンを張り、１９１１年５月末までに、カナダ西部中の商工会議所が黒人の移住に反対する声明を発表するに至った。黒人移住に否定的な反応を示したカナダ人の多くが、実生活では黒人と関わったことがなかった。彼らは黒人が劣った人種であり、白人女性に脅威を与える存在という一方的なイメージだけに依って、黒人移入問題に臨んでいたのである。

オクラホマでは、１９１１年５月、黒人コミュニティを戦慄させた母子リンチ殺人が起こるなど、黒人を取り巻く状況は悪化の一途を辿っていた。それでも尚、オクラホマの黒人新聞は、黒人はオクラホマに留まるべきだという論調を張るのが一般的であった。



リンチで殺害されたオクラホマの黒人母子と、橋の上に集まる白人の見物人たち。
Tulsa Race Riot, a Report, 17.

[111] Mundende,292-293.

『クリアビュー・パトリアーク』紙は、カナダ移住にかかる経済的負担を考慮すれば、オクラホマに留まって事業でも始めた方がよっぽど賢明であると述べた。頻繁に移住を繰り返していたのでは、自立と安定は望めないとの主張であった。

オクラホマのカナダ熱が高まる中、カナダが実は黒人移民に好意的ではないという事実が徐々に漏れ伝わり、カナダに辿りついたとしても、問題が山積している実情が明らかとなり始めた。そんな中、ニューヨークのとある新聞に掲載された「移住への抗議―カナダの黒人への人種差別」（“Protest against Immigration-Race Prejudice Caused by Colored People in Canada”）という記事が、オクラホマの黒人新聞『オクラホマ・ガイド』（*Oklahoma Guide*）に転載された。記事によると、これまでアメリカからの移民に好意的だったカナダが、黒人の大量流入に伴って態度を硬化させ、アメリカ人を望ましくないと考える姿勢に転換したという。この記事には、黒人がカナダの気候に適応するのが困難だというカナダ西部の商工会議所の見解について、「建前であり、黒人は歓迎されないという意が隠されている」と喝破している[112]。

黒人移入阻止への動きは加速し、１９１１年４月以降、カナダ政府は調査官を次々とオクラホマへ送り込んだ。調査官の目的は主に２つで、オクラホマの黒人の状況を報告することと、彼らの恐怖心に訴えて移住を断念させるというものであった。調査官たちはカナダの厳しい気候を殊更に強調し、黒人を待ち受ける人種差別について警告する役目を担っていた。更には、ある鉄道会社による詐欺が横行しており、黒人をカナダへ追いやることで彼らの土地を安価で手に入れようとする企みがあるなど、架空の詐欺話をでっち上げたりもした。調査官の１人、Ｃ・Ｗ・スピアーズ（C.W.Spears）は、ジムクロウや選挙権剥奪といった政策が、オクラホマの黒人の劣悪な生活環境の根本的な要因であると報告している[113]。スピアーズは黒人聖職者の存在に注目し、聖職者たちの影響力を利用すれば、カナダ移住の抑止力になり得ると踏んだ。スピアーズの狙い通り、オクラホマバプティスト会議（the Oklahoma Conference of Black Baptist）の議長Ｓ・Ｓ・ジョーンズ（S.S.Jones）博士は、カナダ政府に力を貸すことを約束し、黒人はオクラホマに留まり、オクラホマで権利獲得の為に闘うべきだと主張し始める。聖職者たちはカナダ移住を望む信者たちに対し、カナダの厳しい気候と人種差別について諭し、オクラホマに留まるよう説得を重ねた。スピアーズは、１９１１年５月２４日付の聖職者たち宛の手紙で、「黒人が気候も環境もそぐわない場所へ追い立てられる必要はあり

[112] Shepard, 5.
[113] *Ibid*., 5; Mundende, 290.

ません。彼らにとっては、アメリカに留まることこそが最善策です。あなた方のアドバイスによって、多くの黒人が救われたことでしょう」と、信者たちのカナダ移住を思い留まらせる成果を上げた聖職者をねぎらっている。スピアーズは、寒冷地カナダでの黒人の死亡例など具体例を挙げることで移住希望者たちの恐怖心を掻き立て、黒人に影響力を保持し、黒人の海外移住に反対していたブッカー・T・ワシントンの協力を要請することも視野に入れていた。こうして、死の恐怖に加え、アメリカと変わらぬ人種差別の実態を突き付けられ、１９１１年の後半にかけてオクラホマ黒人のカナダ西部への移住の波は静まっていった。カナダは何ら公的な人種差別政策を実行することなく、１９１２年には完全に黒人の移住を消滅させることに成功したのである[114]。

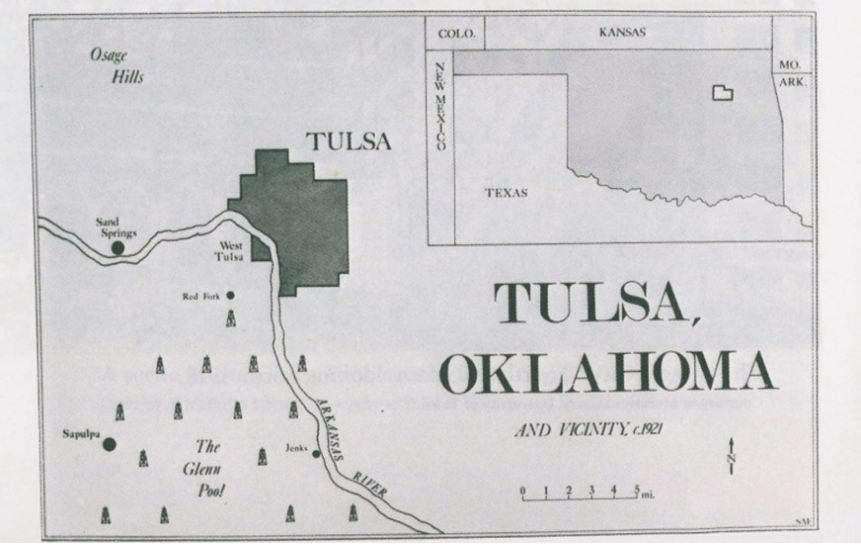
黒人移民を阻むに当たり、暴力こそ行使されなかったものの、カナダ政府の姿勢やそれを後押ししたカナダ人の黒人に対する強固な偏見は、アメリカ人と同じ位根深かったと考えられる。平和と安全と自由を求めてオクラホマを脱出しようとした黒人たちを拒み、彼らが差別と暴力に苦しむのを放置したという点で、カナダは暴力行使にも等しい、攻撃的かつ非人間的な人種主義に基づく排除を行ったと言えるのではないだろうか。

[114] Shepard, 5-13; James W. St.G.Walker, *Racial Discrimination in Canada*: *The Black Experience*, The Canadian Historical Association, Ottawa, 1985, 14-15; Vilna Bashi, “Globalized Anti-Blackness: Transnationalizing Western Immigration Law, Policy, and Practice,” *Ethnic and Racial Studies*, Vol.27, No.4, 2004,586.

第３章　石油新興都市タルサの黒人コミュニティ

第１節　タルサの始まりと黒人の移住

アーカンソー川（The Arkansas River）弯曲部に沿って、オクラホマ州北東部に位置するタルサは、現在オクラホマシティ（Oklahoma City）に次ぐ、州第２の都市（人口約４０万人）である。１８３４年に南部アラバマ州を追われたクリーク族が入植した当時、古い町という意味のタラシ（Tallasi）と呼ばれ、１９世紀後半に白人が移住して来るまでにはクリーク族と自由民の居住地となり、タルジータウン（Tulsey Town）と呼ばれるようになった[115]。１８６７年の国勢調査で、２６４人のクリーク族が居住して



１９２１年のタルサとその近郊。図の左下に見えるのがタルサに大きな恩恵をもたらしたグレンプール油田（The Glenn Pool）。
Death in a Promised Land, 12.

いたインディアン準州の見込みのなさそうなこの田舎町は、１８９８年１月１８日に自治体として認可され、タルサと改名した。恐ろしく長くて暑い夏には、住人達は家畜が徘徊する中、屋外で眠ることもしばしばであった。先住民に次いで移り住んだのが自由民たちであったが、徐々に他州からの黒人移民が増加し、準州生まれの黒人は少数派となった[116]。

---

[115] Adams, 58; *Black Wall Street*, 1.
[116] *Death in a Promised Land*, 12, 14.

１９００年、タルサは人口１，３９０の相変わらず見るべきところのないひなびた農村で、農業の機械化によって多くの働き手が不要となった。トラクターやコンバインの登場で職を失った人々が都市部へ流失し、町は益々活気を失った[117]。そんな眠れる町タルサが、翌１９０１年、華麗なる変身を遂げる。石油の発見である。中でも、１９０５年の「世界中で最も豊かな小規模油田」と謳われた近郊のグレンプールの石油の発見は、タルサに急激な都市化をもたらした。続いて１９１２年、１９１３年とタルサ市郊

２０世紀初頭のタルサの町（上）とグレンプール油田
Death in a Promised Land, 10.

外に油田が発見され、１９２１年には石油産業の中心地として４００以上の石油・ガス事業を抱え、油田開発設備業、タンク製造業、パイプライン業、製油所など数多くの産業がタルサを拠点とするに至った[118]。オクラホマは全米一の石油産出州となり、タルサは一世代で準州の農村地帯から新興都市へと生まれ変わったのである。

１９０８年にはメインストリートが、それから２年の内に市の中心部の道路がほぼ舗装され、タルサの発展に大きく寄与することになる待望の豪華ホテル、ホテル・タルサ（The Hotel Tulsa）が１９１２年に完成し、タルサの商業センターとしての地位を確

117 *Ibid.*, 8-9; Hirsch, 12-14.
118 Scott Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,” *Tulsa Race Riot*, a *Report*, 37-38; Lovelave, 3.

立した。華々しい表の顔とは裏腹に、ホテル・タルサでは油田労働者の飲酒、ギャンブル、買春も横行するようになる[119]。更に同じ年には郡裁判所、１９１５年には連邦ビル、１９１７年には市役所の新庁舎が完成した。タルサ人種暴動の際に黒人の強制収容所となった３，５００人が収容可能な催事場も１９１４年に建てられ、学校や公園といった設備も次々と新築された[120]。

アメリカ各地からの労働者を迎えた石油地帯の中心地タルサはめざましい発展を遂げ、いつしか白人の町へと変貌を遂げる。黒人は石油産業からは締め出されていたからである。タルサが迎えた多くの油田労働者たちは、まるで「カフェインの入った体へのアドレナリン注射[121]」のようなものだった。彼らは、「カーキ色のつなぎの作業着を着て、皮のブーツをはき、中折れ帽を被り、ズボンは石油と泥にまみれていた。無鉄砲で、稼ぐそばから浪費し、筋骨たくましく、気性が激しく、暴力的で飲酒とギャンブルを好んだ[122]。」石油タンクへの落雷、暴風による油性やぐらの倒壊など、油田労働者たちは常に事故と隣り合わせで生きていた。リスクの高い生活は、その多くが若年の独身男性移住者であることも考慮すれば、刹那的な生き方を助長したと考えられる。彼らは１日に８時間から１２時間労働し、一般的に高い賃金を得ていたため、多くの農民が農業を捨てて石油労働者に転身した。こうした石油労働者の急増は、タルサの町に多くの下宿屋、レストラン、ホテル、ダンスホールを登場させ、売春も横行し、町の風景を一変させることになった[123]。

１９０７年から１９１０年の間に、タルサの人口は７，２９８人から１８，１８２人へと倍以上に増え、１９１０年から１９２０年には７２，０７５人へと４倍近く跳ね上がった。１９２０年３月には、タルサは全米第９７位の都市となり、翌１９２１年にはタルサの人口は９８，８７４人となった。石油による大儲け話があちこちで語られ、カリフォルニアのゴールドラッシュ（California Gold Rush）に匹敵する規模だったとも言われる。タルサは一夜にして、誰もが財産を築くことができ、人生の再出発が可能な都市、マジックシティに変身した。タルサは世界の石油の首都[124]（Oil Capital of the World）となったのである。タルサに観光目的で来る者などいなかった。人々は、金儲

---

119 Hirsch, 21.
120 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”38; *Death in a Promised Land*, 9.
121 Hirsch, 20.
122 *Ibid*.
123 Gerald Forbes, “Southwestern Oil Boom Towns,” *The Chronicles of Oklahom*a, Vol.17, No.4, December 1939, 395-397.
124 Bonnie McDonald and Deena Fisher, *Oklahoma*: *Land of Contrast*, Clairmont Press, 2007,357.

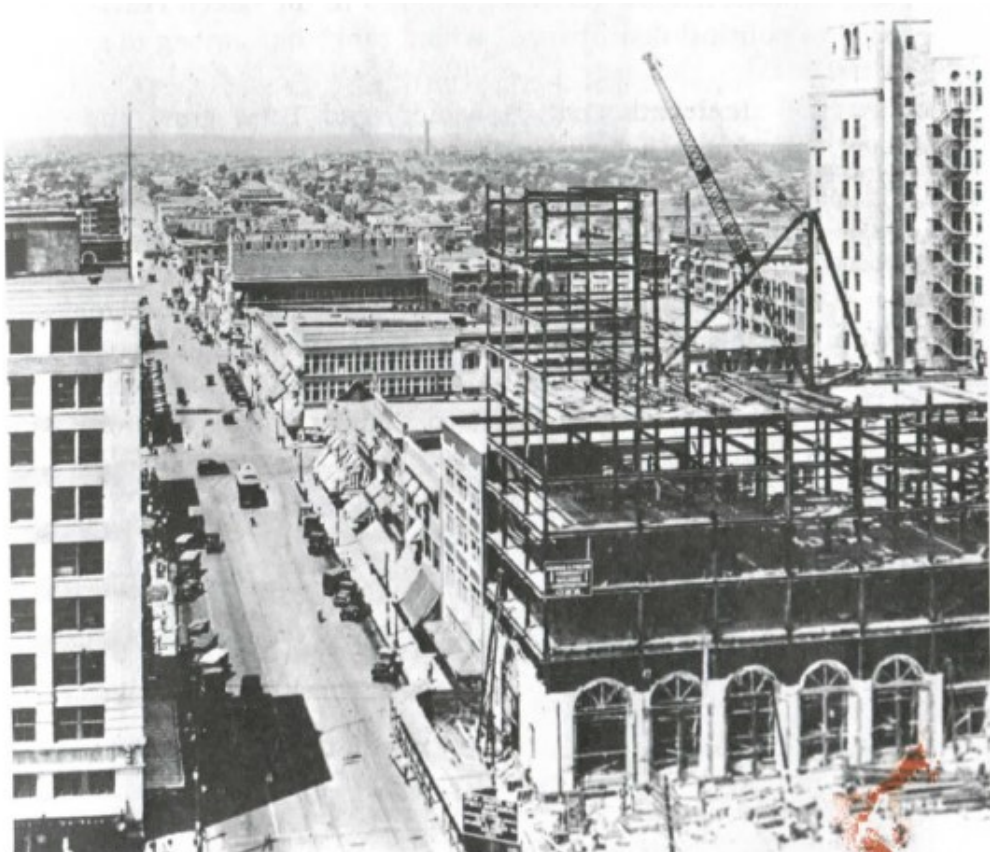
けのためだけにタルサに吸い寄せられたのである。かつて人々はオクラホマに土地を求めて大量に流入したが、今や石油の恩恵にあずかろうと、再び多くの移住者がオクラホマを目指したのである。しかし、タルサの住人は白人だけではなかった。タルサの劇的な都市化・近代化の陰で、ひっそりと膨張を続けていたのがタルサの北端の黒人コミュニティであった。タルサ中心部から排斥されたこのグループは、白人の関心が町の発展と蓄財に向けられる間に、次々と土地を購入していたのである。ある黒人女性は、「私の家族はテキサスからタルサに移住しました。タルサは黒人にチャンスを与えてくれる町だったからです。タルサは黒人が実業家になれる町として、アメリカ中で評判でした」と証言した。タルサに惹き寄せられた人々に共通していたのは、冒険心と一獲千金の夢であった。ボーリー出身の女性は、「貯金をして、ラングストン大学に進学するため」にタルサに移って来たのだと述べた[125]。黒人も、白人同様に経済的理由からタルサに移住したのである。農業が衰退し、工業化の波が押し寄せる中、オクラホマの黒人自治体は人口流出に苦しめられた。黒人の多くが職を求めて北部や西部の都市部に再移住したが、同じオクラホマ州内のタルサにも、機会とより良い暮らしを求めて移り住んだのである。

暴動の体験記録、*Events of the Tulsa Disaster* を出版したタイピング教師メアリー・Ｅ・ジョーンズ・パリッシュも、ニューヨーク州ロチェスター（Rochester, New York）から活気に満ちた町タルサに移住した１人であり、タルサが「金儲け」できる町として評判になっていたと綴っている。ロチェスターにはまとまった数の黒人はおらず、パリッシュは１９１８年にタルサを訪れた際、黒人住民の安定した生活ぶりと満ち足りた微笑みに魅せられたという。パリッシュは、１９１９年もしくは１９２０年にタルサに移住しているが、多くの黒人が経済的成功を夢見て移住したのとは異なり、彼女が移住を決めた理由は、黒人の共同体の素晴らしさと友愛精神だったと述べている[126]。彼女は

メアリー・Ｅ・ジョーンズ・パリッシュ
Parrish, 4.

[125] Ruth Sigler Avery Interview with Dr.Cecelia Nails Palmer on March 28, 1977 in Tulsa (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection at Oklahoma State University Tulsa).
[126] Mary E. Jones Parrish, *Events of the Tulsa Disaster*, 1923, 7(Reprint by John Hope Franklin Center for Reconciliation, 2009.).

暴動後、度重なる親族の呼びかけにも拘わらず、娘と共にタルサに留まった。彼女は、「この惨禍の行く末を見届けるその日まで、てこでも動かないと決心していた[127]。」パリッシュは生存者の聞き取り調査を行い、写真を保管し、暴動の記録を残した人物であり、暴動に関する最初のレポートの著者である。

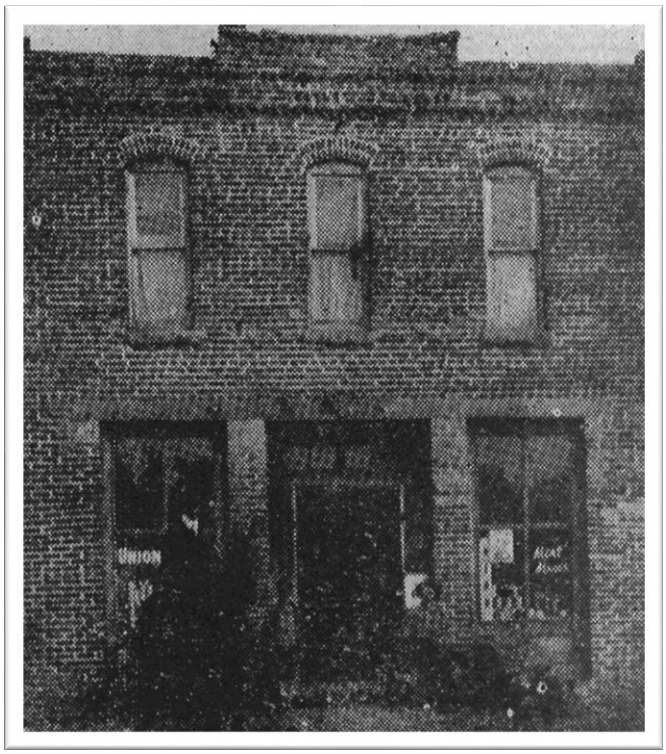


建築工事が盛んな１９１８年のタルサ
Death in a Promised Land, 11.

[127] *Ibid*., 18.

第２節　町の中の町、グリーンウッド

石油ビジネスで未曾有の発展を続けるタルサには、不都合な真実があった。公然の秘密ではあったが、タルサは１つの町というより、２つの町だったのである。１つは果てしない繁栄の道を突き進む活気に満ちた白人の町で、もう１つがタルサ北部のエリアに隔離された黒人居住地、グリーンウッドであった。農村地帯の孤立した黒人自治体とは異なり、黒人が既存の自治体の領域内にコミュニティを形成したのがグリーンウッド地区である。この黒人地区の始まりは、黒人自治体と同じく先住民の土地で、経済的自立を目指す黒人たちの新たな「約束の地」となった。南部やオクラホマの農村地帯から移住した黒人人口は増加の一途を辿り、１９１０年には１，９５９人（タルサの人口の１０．２％）だった人口は、１９２０年には８，８７３人（同１２．３％）に急伸した[128]。



グリーンウッドのビジネス第１号、
O.W.ガーレーの下宿屋兼食料品店
"Greenwood-The Black Wall Street of America,"
Historical Greenwood District- A Walking Tour-,
Greenwood Chamber of Commerce, 2013.

「２０世紀初頭、タルサは１つではなく２つの町であった。法と人種主義に囲みこまれたブラックタルサ(Black Tulsa)は、全く別の町[129]」だったのである。

グリーンウッド内部では自由に動き回れた黒人も、白人地域にいつでも自由に立ち入れたわけではない。黒人住民は夜１０時以降グリーンウッドから外に出ることを禁じられており、特に黒人男性が日没後にグリーンウッドの外で見つかれば、暴力の被害を受けることも覚悟しなくてはならなかった[130]。彼らにとって「分をわきまえる」ことは、時に生と死を分かつ見えないラインだったのである。

タルサの黒人の特徴は、ＮＡＡＣ

[128] Adams, 59.
[129] *Death in a Promised Land*, 14.
[130] Adams, 64.

Ｐが主張する市民権や選挙権の獲得よりも、経済的成功に一番の関心を寄せていることであった。黒人実業家第１号且つグリーンウッドの名付け親である、アーカンソー出身のＯ．Ｗ．ガーレー（O.W.Gurley）は、タルサの４０エーカーの土地を黒人だけに売却する目的で購入し、１９０６年にはグリーンウッド初の事業である下宿屋と食料品店を開業した。土地を黒人だけに売却することで黒人住民だけで構成されるコミュニティを構築するという手法は、黒人自治体と共通している。グリーンウッドはそもそも独立した自治体でこそなかったが、黒人自治体にそのルーツを持つ、黒人自治体の変型といえる。

グリーンウッドの知的水準は高く、ダウンタウンの図書館の使用を禁じられていた黒人たちは、小規模の黒人専用図書館をグリーンウッドに開設した[131]。グリーンウッドでは、『タルサ・スター』と『オクラホマ・サン』（*Oklahoma Sun*）の２つの黒人新聞が発行されていた。『タルサ・スター』は紙面の上部に、「全黒人の持つべきモットー:やられたらやり返せ」と印刷し、黒人を抑圧する白人コミュニティに依存せず、白人の搾取から独立するために経済的自立を果たす必要があると訴え続けた[132]。また、全国レベルの黒人問題や運動も積極的に取り上げ、ＵＮＩＡなどの団体も紹介した。その中には、後に暴動を扇動したとして後に非難を浴びることになる、ハーレムを基盤に活動していたアフリカン・ブラッド・ブラザーフッド（African Blood Brotherhood　略称 ＡＢＢ）も含まれていた。

Ｊ・Ｂ・ストラトフォード
Hirsch, 183

黒人所有のホテルの中でもアメリカ最大級であったストラトフォードホテル（Stradford Hotel）は、タルサの黒人の富とプライドの結実であり、白人所有のホテルに宿泊できなかった黒人にとって、かけがえのない存在でもあった。グリーンウッドに演奏にやって来る黒人ミュージシャンたちも、好んでストラトフォードホテルを利用した[133]。このホテルをグリーンウッドに建設したＪ・Ｂ・ストラトフォード（J.B. Stradford 1861-1935）は、１８９９年にタルサにやって来た。他

[131] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”41-42.
[132] Messer, 69; Hirsch, 42.
[133] Testimony of Charles J. Ogletree, JR., “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,” 33.

州の奴隷に生まれながら、大学へ進学し実業家となった彼の信条は、「黒人がお互いのビジネスを支え合いながら富を蓄積することこそが経済的発展の鍵」であり、ガーレー同様黒人だけに売却するための土地をタルサ北東部に購入した。ストラトフォードは、ホテルだけでなくビリヤード場、靴磨き店、公衆浴場、下宿屋などの事業を次々と展開した。彼は短気で、年を重ねてからも喧嘩っ早かったことで知られる。ある日、ストラトフォードが日傘を差して立っているのを見かけたある白人配達人が、「それ以上日焼けする心配はないだろうに」と言い放った。これに激怒したストラトフォードは、配達人と口論になった末に引きずり倒し、足で激しく踏みつけた。周囲が「こいつを殺したら白人たちにリンチされる！」と慌てて止めに入ったというエピソードが残されている[134]。

タルサ初の黒人劇場を開いたのは、南部出身で「約束の地」を目指して移住したジョン・ウィリアムス（John Williams）で、妻のローラ・ウィリアムス（Loula Williams）は菓子店を営み、多くの顧客を得た。人種分離政策により白人地域から隔離されていた住人のニーズを満たすため、グリーンウッドには様々なビジネスが次々と創出されたのである。

一方、黒人は劣った人種であるという刻印を押すジムクロウを支持する白人住民の多くは、グリーンウッドの繁栄や黒人の財産所有に反感を抱いていた。黒人は石油産業や白人ビジネスから締め出されてはいたが、白人住宅で働く黒人労働者の賃金の形で、白人の金は間接的にグリーンウッドを潤していたのである。タルサの黒人労働者に支払われる賃金の高さは、他の都市と比較すると破格であったという。メイドは週２０－２５ドル（現在の価値で３３１－４１４ドル）、運転手と庭師は１５－２０ドル、靴磨きは１日で１０ドル稼いだという[135]。１９２０年、黒人住民の１割が白人家庭の家内労働に従事し、掃除、洗濯を担い、運転手を務め、不衛生な職場で長時間労働に従事していた。

---

[134] *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey*, 15; Hirsch, 5, 28-29.
[135] Hirsch, 44; *Death in a Promised Land*, 14, 16.

表２　グリーンウッドの年別専門職者数と事業所数

	１９０７	１９１０	１９１４	１９１８	１９２１
歯科医	０	０	１	１	２
薬剤師	０	０	１	３	４
宝石商	０	０	１	３	４
法律家	１	３	５	４	３
写真家	０	０	０	０	２
医師	２	２	５	１０	１５
不動産業者	２	０	１	４	６
菓子店	０	１	３	７	４
下宿屋	３	２	４	６	１１
車修理工場	０	０	１	０	２
食料品店	３	２	９	１１	４１
ホテル	０	１	１	２	５
レストラン	１	０	１７	１７	３０
劇場	０	０	０	１	２
葬祭業	０	０	０	２	１

Death in a Promised Land ,114-115. を参考に作成

また、１，０００人ほどが下水採掘など日雇いを含む肉体労働に就いていた。黒人が携わっていた上位５つの職業は、肉体労働、料理人、洗濯婦、メイド、ポーターであった。黒人の多くが白人の忌避する仕事に就き、彼らの賃金がグリーンウッドに流入し、その経済を支えていたのである[136]。更に、多くの白人がグリーンウッドでギャンブルをはじめとする享楽にふけることで、その経済に貢献した。２つのタルサは分離してはいたものの、経済的には深く結びついていたのである。

自由民や逃亡奴隷の子孫、南部出身者、州内の黒人自治体から移住した黒人を中心に、グリーンウッドは目覚ましい発展を遂げた。最盛期にはシカゴやメンフィス　(Memphis)と並び称される黒人メトロポリスへと成長し、医者、不動産業者、法律家などの富裕層が暮らす高級住宅地が集まる地区もあった。１９０８年には、６００を超す黒人所有企業がひしめく黒人ビジネスの凝縮地となり、商業地区にはホテル、美容室、ナイトクラ

[136] Messer, 75; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”43.

ブ、１２を超える教会が立ち並び、いつしかブラックウォールストリートと呼ばれるようになったのである。

> 当時グリーンウッドのビジネスは急成長していました。ほんの２００、３００ドルあれば事業を始めることができ、２、３年もすれば大金持ちになれました。白人が黒人と関わりたがらなかったので、黒人はグリーンウッドのビジネスを独占できたんです[137]。

グリーンウッドは黒人にとり、「自立、プライド、活力」の代名詞となったが、タルサ市南部の白人居住地には石油業者ら高額納税者の近代的家屋が立ち並び、グリーンウッドでも医師や経営者、教育者に限っては近代的な住居を構えていたが、９割以上の住人は、木材の骨組みに板を張っただけの粗末な家屋に住んでいた。黒人居住地の表通りは栄えていても、一歩脇道に入れば、掘っ立て小屋、家畜小屋、物置などがむさくるしく肩を並べていた。人口増加に合わせて、タルサの白人地区は急ピッチで道路の舗装や下水道の整備、学校や病院の建設が進められたが、グリーンウッドは置き去りにされたままであった。タルサ市はグリーンウッドのインフラ整備を怠り、道路や下水道は整備されずじまいであった。屋内トイレはほとんど存在せず、１つの屋外トイレを８家族で共有しなければならない有様であった。１９２０年になっても、舗装されたのはほんの６区画だけであった[138]。グリーンウッドで電話を持っていたのはたったの

グリーンウッドで最も賑わった Greenwood Avenue と Archer Street の道路案内標識。
一番上には Black Wall Street の文字も見える。
（筆者撮影　２０１３年９月８日）

[137] Ruth Sigler Avery Interview with Robert L. Fairchild, JR., April 18,1976 at University of Tulsa,185(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[138] Amy Comstock, “Over There-Another View of the Tulsa Riots,” *The Survey*, July 2, 1921,460.

１軒だけである[139]。白人地区との違いは歴然としており、白人地域と比べるとブラックウォールストリートは著しく見劣りしていたのである[140]。貧困と薬物中毒も蔓延していたが、黒人居住地の状況を改善しようという動きはタルサ市には一切見られなかった[141]。街灯も不十分だったことから犯罪の温床になり易く、黒人住民は幾度も街灯の増設を願い出たが、実現しないままであった。夜になると、石油ランプかろうそくの明かり、あるいは真っ暗闇がグリーンウッドを覆った一方、白人地域はというと、夜でも真昼のような明るさであった。それでも尚、グリーンウッドは州内外の黒人の憧れの的であり続けた。例え行政サービスが当てにならなくとも、彼ら自身の手で作り上げたコミュニティは、黒人の闘志と勤勉さ、そして連帯を象徴したからである。グリーンウッドは、白人の差別や暴力から住民を保護する繭でもあった。

パリッシュは、グリーンウッドを初めて目にした衝撃と感動を以下のように綴っている。

> 見えるのはどこまでも黒人の店だけでした。白人の不動産屋はグリーンウッドを白人商業地区にしたいと目論んでいて、彼らにとっては、グリーンウッドは目障りな存在だったのです。タルサのこの地区は町の中の町であり、白人新聞は悪意と侮蔑を込めて「リトルアフリカ」（Little Africa）と呼んでいました。・・・中略・・・しかし、アメリカの黒人は、タルサを南西部の黒人首都（the Black Metropolis of the Southwest）と崇めるようになったのです[142]。

---

139 Interview with Robert L Fairchild, 192 (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
140 Hirsch, 43-44; Parrish, 59-60.
141 Ed Wheeler, “Profile of a Race Riot,” *Oklahoma Eagle*, November 2, 1978, E1.
142 Parrish, 7.

ジョン・ウィリアムスが開いた、グリーンウッド初の劇場（１９１４年にオープン）
Tulsa Race Riot, a Report, 151.

暴動前のグリーンウッド地区
"Greenwood-The Black Wall Street of America"

グリーンウッドの住民の誇りの１つが、１９１３年に建設されたブッカー・Ｔ・ワシントン高校（Booker T. Washington High School）である。教師２人と１４人の生徒から出発したこの高校は、人種分離により白人の高校に通えなかった黒人生徒を教育する役目を担った。当時タルサは合衆国でも最も人種分離が徹底された町の１つであったが、黒人コミュニティの経済的繁栄のためには、白人コミュニティとの分離は都合の良いものであったともいえる。黒人が黒人所有の店を利用し、商品を購入することでビジネスとコミュニティが栄えたからである[143]。とはいえ、彼らが積極的にグリーンウッドで購

[143] Don Ross, "Prologue," *Tulsa Race Riot, a Report*, vi.

入活動やビジネスを行ったというより、グリーンウッドで買い物をするより他に選択の余地がなかったというのが実情であった。ジムクロウにより、黒人は白人の店で買い物をすること自体を禁じられており、もしできたとしても不快な事態を招くことは疑いがなかったのである。

第３節　オクラホマの州昇格（１９０７年）とタルサの治安

州昇格時、オクラホマの人口は１５０万人に迫り、他のどの州よりも速いスピードで人口増を続けていた。オクラホマは既にアメリカの石油生産量の２割を産出しており、１９０７年１１月１８日のワシントン・ポスト紙（*The Washington Post*　1877-）は、オクラホマについて、

> オクラホマは南部でも北部でもない州であるが、南部のもてなしの精神と明るさ、北部のエネルギーと企業家精神を兼ね備えている[144]。

と、その未来に期待を寄せる社説を掲載している。

州昇格前後までは、オクラホマ社会の人種関係はむしろ流動的であったが、両人種の人口増加によって人種間の接触が増え、白人と黒人が職を争うライバルとなるケースも出現した。白人は「身の程知らずの」黒人との競争に反発し、オクラホマの社会が保っていた人種間の微妙なバランスが崩れ始める。白人と黒人の主従関係を明白にしたジムクロウ支配が次第に強まり、あらゆる面で分離された社会が形成されていく。黒人が後にしたはずのジムクロウが、彼らの背中に追いついて来たのである。オクラホマの高等教育機関は１９４０年代まで、公立の小中学校は１９５５年まで人種の分離が継続して行われた。人種間係の安定のためには人種の分離が有効だとして、白人はジムクロウを支持したが、実際には主従関係が固定され、貶められた黒人に対するリンチや暴力の正当化を助長した。ジムクロウは白人と黒人の上下関係を克明に刻み、黒人の生活全般に影響を与えるもので、トイレ、居住地、電話ボックス、列車の待合室、学校、病院など多岐に渡って人種の分離が行われた。オクラホマの州昇格後は白人の優位を保持するため、州議会は率先してジムクロウ強化に取り組んだ。祖父条項[145]（The Grandfather

---

[144] McDonald and Fisher, 343.

[145] 1898年以降、いくつかの南部の州の憲法に見られた黒人投票権剥奪のための条項で、投票資格を得るには、1867年1月1日に投票権を有した者とその子孫を除いて、識字テストや投票税が課せられた。そのため、条件を満たすことができず、ほとんどの黒人が投票出来なくなった。

Clause）により黒人は事実上選挙権を剥奪され、異人種間の結婚は５年以下の懲役刑が科される重罪となり、婚姻の儀式を執り行った神父も同罪とされた。黒人がオクラホマに抱いた夢と希望は完膚なきまでに打ち砕かれ、「彼らを二級市民以下に貶めることで黒人を去勢し、その尊厳を奪った[146]」のである。

暴動で焼け落ちた『タルサ・スター』の編集長だったＡ・Ｊ・スミサーマン　(A.J. Smitherman 1885-1961）は、抑圧された黒人と黒人を裏切り続ける祖国について以下のように皮肉っている。

> アメリカ黒人。彼は、その先祖が労働によって発展させた国に生まれながら、迫害に次ぐ迫害の人生を送る。ほとんどの権利を奪われながらも、戦争に行けば白人と隣り合わせで闘う。帰還してみると、様々な国籍の外国人が彼の祖国で権利と自由を享受している。一方、祖国のために闘った彼とその家族は抑圧され、あらゆる面で差別される。アメリカの黒人ほど愛国心が強い者がいるだろうか[147]？

白人は、黒人から社会的、政治的権利を奪って主流社会から隔離するだけでは足りず、黒人が「分相応」な位置に留まり続けることを求めた。人種が完全に分離したタルサ市では、人種間の往来はほとんどなかった。『アウトルック』誌に掲載された記事、「タルサの教訓」（“The Lessons of Tulsa”）は、「人種間の嫌悪や反感は、容易に差別感情に変化する。人種差別は瞬く間に人種憎悪となり、この憎悪をたぎらせた白人・黒人の暴力的な輩は、あっという間に人種暴動を引き起こすだろう[148]」と、タルサ人種暴動の背景にあった険悪な人種関係について指摘した。１９１７年に社会主義運動推進のためにニューヨーク市で刊行され、急進的で攻撃的な雑誌として注目を集めた『メッセンジャー』（*The Messenger* 1917-1928）は、人種暴動は小規模戦争であり、有害で不法・不正な行為だと強く非難した。更に、人種分離は長きに亘るアメリカの社会病であると指摘し、人種間の接触が減ることは、人種間の融和を阻むことになると抗議した[149]。人種暴動は、病めるアメリカ社会の病状の１つとして現れてきたのである。

タルサは石油の町としてだけでなく、犯罪の多さでもその名を轟かせていた。１９１７年、タルサは売春行為が最も顕著な４０都市の１つに挙げられ、粗野でいかがわしい

---

146 Hirsch, 36-37.
147 Messer, 65.
148 “The Lessons of Tulsa,” *The Outlook*, June 15, 1921,281.
149 “The Cause of and Remedy for Race Riots,” *The Messenger,* September 1919, 20.

中西部の町としてその名を馳せた。特にグリーンウッドは「悪の巣窟」のレッテルを貼られ、タルサ市では犯罪は「黒人問題」として片づけられることが多かった[150]。売春や麻薬に関連する組織が事実上タルサを支配していたという報告もあり、タルサは「犯罪天国」と呼ばれ、ギャンブル、密造酒販売、強盗などが横行していた。タルサ市の無法状態を見かねた女性キリスト教禁酒連合（Women's Christian Temperance Union）タルサ支部のメンバーは、タルサの劣悪な環境が若者に与える影響を憂慮し、犯罪の取り締まり強化を１９０６年に市に直訴している。しかし、タルサ市警察は資金・人員共に不足した状態で、アルコールの密売やギャンブルの取締りに十分な態勢を整えることができなかった[151]。黒人住民は毎晩のように銃撃戦があったと証言し、議論の決着がしばしば銃でつけられるなど、フロンティア文化を引きずっていたのである[152]。

１９２１年４月、暴動の約５週間前にタルサの治安状況の調査に派遣されていた連邦の捜査局（Bureau of Investigation　略称 ＢＩ）の捜査官は、報告書に以下のように記載している。

> 状況のまとめ：タルサの治安状況は非常に粗悪。ギャンブル、密造酒販売、売春が横行。ホテルや簡易宿泊所では、ポーターや職員が売春の斡旋や酒の販売に関わっている。こうした行為は、検挙される恐れがない中、堂々と行われている[153]。

タルサ市民の多数は、選挙にも法順守にも関心が薄く、犯罪者が逮捕されても有罪判決が出ることは稀であった。暴動の数か月前に新たに任命された裁判官たちは、裁判を待つ案件が６，０００以上も放置されていたのを発見したという。この数は、タルサの１００人に６人が何らかの件で起訴されているという実態を表していた。タルサでは車両盗難も相次ぎ、保険会社が契約を解除する事態となっていた。こうした犯罪行為を行うのに都合が良かったのが、タルサ市が顧みなかったグリーンウッドであった[154]。銃所持の規制は無く、警察を当てにできないタルサ住民たちの多くが銃を所有し、大抵の場合タルサの男性は外出の際には銃を身に着けていた。このような光景は第１次世界大戦後あたりまでよく見られた。

---

150 Messer, 91; *Black Wall Street*, 25.
151 Hirsch, 25.
152 *Ibid*., 46.
153 *Death in a Promised Land*, 100.
154 Walter F. White, "The Eruption of Tulsa," *The Nation*, June 29, 1921, 909; Comstock, 460; *Black Wall Street*, 25.

当時銃を携行している人は珍しくもありませんでした。多くの人が銃を持ち、いつでも闘える状態にあったからこそ人種暴動が起きたのです。・・・中略・・・タルサには暴動が起こる環境が整っていました。タルサの白人はいつだって強気で銃を振り回していました。私が１９１９年にタルサに来た当時、男性は全員２丁の拳銃を所持していました。暴動を始めるにはこうした男たちが数人いれば十分だったのです（白人男性医師ジョージ・ミラー[George Miller]の１９７１年８月１日タルサでの証言）[155]。

むすび

州昇格後、白人は黒人人口の増加が白人優位体制を脅かすのではないかと警戒し、オクラホマが黒人州になる可能性を憂慮した。白人の権益保護と黒人人口の増加を防ぐため、議会はジムクロウを徹底させる目的でいくつもの法律を成立させた。学校をはじめ、オクラホマ中で列車の座席や待合室の分離が行われ、オクラホマは電話ボックスまでが分離された最初の州となった[156]。黒人の権利剥奪は、黒人の人権を否定することになり、白人の暴力を正当化することにつながった。黒人は白人の不満のはけ口となり、言うならば黒人であること自体を罰せられる事態となったのである。また、州昇格前まで一般的に行われてきた人種間混交がタブーとなり、人種があらゆる事柄の決定要因として定着することとなった。２０世紀の最初の２０年間に、オクラホマの人種関係は悪化の一途を辿り、人種主義に基づく白人の暴力は日に日に激しさを増してゆく。

アメリカの黒人史に揺るぎない足跡を刻んだ黒人自治体であるが、人々の「無関心と文化的無知[157]」によって、１９９８年にオクラホマ歴史協会が「黒人自治体プロジェクト」を発足させ、その歴史を掘り起こすまで、埋もれたままであった。黒人自治体建設の背景には、南部の人種差別、貧困、暴力からの逃避に加え、次世代を担う子供たちにより良い教育を授け、将来へ備えさせるという願いが込められていた。加えて、アメリカ人として政治に参加し、自らの手で自治体を運営し、その能力を証明するという積極的な集団の意思と開拓者精神もあった。『ボーリー・プログレス』紙は、南部の黒人へのメッセージとして、「白人社会と世界中に向けて、黒人が遵法精神のある市民だと証明しようではないか[158]」と呼びかけている。黒人として一括りに差別されてきた彼らに

---

155 Ruth Sigler Avery Interview with George Miller, M.D. on August 1, 1971 in Tulsa,106-107（Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

156 *Death in a Promised Land*, 19.

157 *Acres of Aspiration*, viii.

158 Melissa N. Stuckey, “Why Oklahoma? All-Black Towns and the Struggle for Civil Rights in Indian Territory,” *Research Matters*, Center for the Study of Women in Society, University of

は、人種のプライドを回復させるという切実な欲求があり、この欲求は自主的に主流社会と白人から分離して、経済的自立と政治的自決を達成して初めて満たされるものだったのである。

黒人の分離主義は、白人社会の圧政を拒絶し、人種の団結と自治という成果を上げることにもつながった。しかしながら、黒人自治体建設のピークはアメリカが農業中心の社会から工業社会へと変貌を遂げる過渡期と重なり、主流社会から孤立して工業化の波に乗り遅れ、結果として黒人コミュニティは停滞し、凋落の道を辿ることとなったのである。

自由と自治を達成するもう１つの道がアフリカ移住であった。アメリカ国内での黒人の困窮が深まる度に繰り返し表出するこの運動は、父祖の地アフリカを自由と繁栄のシンボルとして、多くの黒人を惹きつけてきた。自立と自治を求めてオクラホマにやって来た黒人が、そのオクラホマに背かれ失望した時、チーフ・サムが絶妙のタイミングで現れたのである。チーフ・サムのアフリカ帰還運動は成功したとは言い難いが、多くの黒人に希望と、空想的だったかもしれないが、地主としての自治の夢を与えたことは確かである。けれども、黒人の故郷は見知らぬ土地アフリカではなかった。彼らの大部分は、アメリカに共和国としての希望を託すことをやめなかったのである。

土地所有と自由を求めてカナダを目指した者もいたが、彼らを待ち受けていたのは一見そうとは気付きにくい、捉えがたい手の込んだ差別であり、巧妙に張り巡らされたカナダ移入阻止網であった。カナダのフロンティアは、農業技術を備えた移住者を多数必要としていたにも拘わらず、黒人とその肌の色の象徴を拒絶したのである。暴力こそ伴わなかったものの、黒人移入阻止にかける策略は暴力にも匹敵する激しい人種主義に基づいていた。

オクラホマに失望し、アフリカやカナダなど海外に安住の地を求めた者がいた一方、同じオクラホマ内に突如出現した新興都市タルサもまた、農業が衰退する中、新たな機会を求めた黒人たちを強力に手繰り寄せた。黒人の町グリーンウッドは、タルサ市の中に作り上げられた黒人のコミュニティであり、黒人住民のニーズを満たす様々な事業が花開いた。黒人は石油産業からは締め出されていたものの、白人家庭で働くメイドらの賃金や白人がギャンブルなどの娯楽に費やす金がグリーンウッドを潤していた。タルサ市はグリーンウッドの整備を怠り、放置したため、犯罪の温床となり、毎晩銃声が聞こ

Oregon, Fall 2011, 1.

えていたという。白人タルサと比較すれば見劣りした黒人タルサであったが、自由と自立は何物にも代え難い価値があった。更に、グリーンウッドには、白人学校に比較すれば設備は劣っても、住民のプライドの結晶だった黒人高校やホテルも存在し、タルサ人種暴動で壊滅するまで全米の黒人の憧れの的であり続けたのである。

ワシントンが唱導した自助努力による人種の向上、デュボイスが展開した戦闘的政治運動は、時に対立し、時に融合し、交錯しながらオクラホマの黒人自治体の根幹をなす理念として定着した。黒人の夢実現の救世主となった黒人自治体建設の推進力となったのは、主流社会と白人支配からの決別、自治への強烈な願望であった。黒人自治体とは、アメリカ人になるために自由、平等、平和、機会を求めて移住を繰り返した黒人が出した、１つの野心的な回答であった。

第２部　タルサ人種暴動の具体的様相

まえがき

第２部では、１９２１年５月３１日から翌６月１日にかけて発生し、タルサの黒人コミュニティを壊滅させ、甚大な被害をもたらしたタルサ人種暴動に焦点を当てる。およそ１８時間に渡る暴力の末、１１，０００の黒人家屋とビジネスが焼失し、グリーンウッドの３５ブロックは全壊、９，０００人以上がホームレスとなる大惨事となった[159]。正確な犠牲者数に関しては、暴動から１世紀が経とうとする現在でも判明していない。物的損害額は１５０万から１８０万ドル（現在の価値で約１，７００万ドル[160]）で、アメリカの歴史上最悪とも称されるこのタルサ人種暴動は、第１次世界大戦中の１９１７年から戦後の１９２３年にかけて、アメリカ全土で集中的に人種暴動が発生する中で起きた。一連の暴動は、黒人が白人の暴力に初めて団結して抵抗・反撃した、アメリカの黒人の歴史の転換点である。

アメリカの人種暴動の歴史は１８２０年代まで遡り、特に高まりを見せたのが、１８２９年―１８４２年、１８６２年―１８７７年、１８９８年―１９０８年、１９１５年－１９１９年、１９４０年―１９４４年、１９６５年―１９６９年で、これらはすべて戦時中であり、被害者の大多数は黒人であった[161]。歴史学者や社会学者は、人種暴動を南部型と北部型に分類している。南部型には、白人による先住民虐殺やヨーロッパのユダヤ人殺戮のように、有効な防衛手段を持たず、抵抗できない黒人たちを白人暴徒が一斉に襲うという特徴がある。人種暴動というよりも、むしろ実態は虐殺であり、「黒人を物理的に追放し、心理的にも封じ込める意図[162]」を伴っていた。１８９８年から１０年間続いた人種暴動の波は、ジムクロウの浸透期とも重なっており、黒人の権利が次々と剥奪された時期に該当する。黒人のリンチ被害も増加し、アメリカの黒人にとってどん底の時代であった。地位がとことん貶められた黒人たちは、リンチや暴力を恐れ、白人の反感を買わないよう、護身用として妥協主義を身にまとわざるを得なかったのであ

---

159 David R. Colburn, “Rosewood and America in the Early Twentieth Century,” *The Florida Historical Quarterly*, Vol.76, No.2, Fall 1997,178; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*1; *Tulsa Race Riot*, a *Report*, 22,39.

160 Prepared Statement of Charles Ogletree JR.,“Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”39, 40; Larry O’Dell, “Riot Property Loss,” *Tulsa Race Riot*, a *Report*, 149; Hirsch, 6,119.

161 John A.Williams, “The Long Hot Summer of Yesteryears,” *The History Teacher*, Vol.1, No.3, March 1968, 10; Theresa M. Lillegard, “We Return Fighting: A Comparative Analysis of Three American Riot Cities between 1917-1921,” *Lethbridge Undergraduate Research Journal*, Vol.3, No.2, 2008, 5.

162 *Acres of Aspiration*, 172.

る[163]。

一方の北部型はより対立色が濃く、双方がほぼ互角の戦闘力を有していることで特徴づけられる。都市化が発展段階にあった１９世紀後半から２０世紀初頭までの人種暴動では、南部型が多く見られる。北部型が増加するのは、工業化が進んで黒人労働者が急増した第１次世界大戦中のことで、北部型人種暴動は１９４０年代まで続いた[164]。南部で黒人が奴隷でいる限り、人種暴動は起こり得なかったであろう。南部型人種暴動は１８２０年代、自由黒人や逃亡奴隷の増加と共に北部で始まった。当時の北部では黒人はまだ珍しく、奴隷ではない自由黒人の存在そのものが白人の暴力を誘発した。奴隷でいる限りにおいては白人の関心対象にならなかった黒人たちであるが、自由になった途端、白人社会は暴力で黒人たちを封じ込めにかかったのである。

オクラホマでは、南部から移住した白人が南部の人種主義をオクラホマに持ち込み、人種関係は悪化の一途を辿る。大戦中から徐々にリンチや暴動の不穏な空気が影を落とし始め、人種間の敵対的感情の高まりは、タルサ暴動へと連なるジリジリとくすぶる導火線であった。タルサ人種暴動を含め、アメリカの歴史上人種暴動は、白人の政治的、社会的、経済的優位が脅かされた反応として起こってきたのである。

---

163 Williams, 11-13.

164 Boluwaji Ogunyemi, “Greenwood Testament to Black Prosperity,” *The Gazette*, University of Western Ontario, February 8, 2008, 5; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”43.

第４章　暴動の経緯

第１節　衝突、銃撃戦、略奪、放火

１９２１年５月３０日月曜日、戦没者追悼記念日を迎えたタルサは、雨に見舞われていた。翌３１日には雨は上がったものの、湿度は高く気温もぐんぐん上昇し、すぐそこまで迫った夏を感じさせた。そんなねっとりとまとわりつく空気に覆われたタルサで、「厚かましい黒人、女性の過剰反応、イエロージャーナリズム[165]」が、人種問題というタルサの地雷を踏んだのである。ワンダーシティ、マジックシティと評判だった町で、決して拭い落とすことのできない汚点を後世まで残すことになる世紀の人種暴動が勃発したのである。

ＮＡＡＣＰの幹部ウォルター・ホワイトは、以下のようにタルサ人種暴動の経緯をまとめている。

> ５月３１日午後３時１５分、エレベーターで起きた出来事を報じた『トリビューン』が出回り始め、午後４時には警察はリンチの可能性について把握し、ローランドは安全のために警察署から郡庁舎の最上階にある留置場へと移された。午後９時までには３００人から４００人の白人が郡庁舎前に集まり、９時半頃、２５人の武装した黒人グループがローランドを保護するために現れた。保安官は彼らに帰るよう説得したが、１時間もしない内メンバーを７５人に増員して戻ってきた。保安官が再度帰るよう説得していたところで、誰かが銃を発砲し、取り返しのつかない騒乱状態となった。白人暴徒たちは、金物店や質屋に押し入って銃や銃弾を略奪し、翌朝の日の出近くになると、白人地区と黒人地区の分断線である線路を越えて、１０，０００人を超えるまでに膨らんだ白人群衆がグリーンウッドに攻め込んだ。黒人たちは勇敢に闘い、反撃した。しかし、白人の放火が始まり、消火に当たった消防員たちは銃撃を受け、引き下がるしかなかった[166]。

『トリビューン』の報道から４５分後の午後４時には、リンチの可能性を示唆する匿名の電話が警察署にかかっている。警察本部長のジェームス・M・アドキンソン（Police Commissioner James M. Adkinson）は、マッカロー保安官（Sherriff W.M. McCullough）にこの情報を伝え、警察局長ジョン・A・グスタフソン（Police Chief John A. Gustafson）

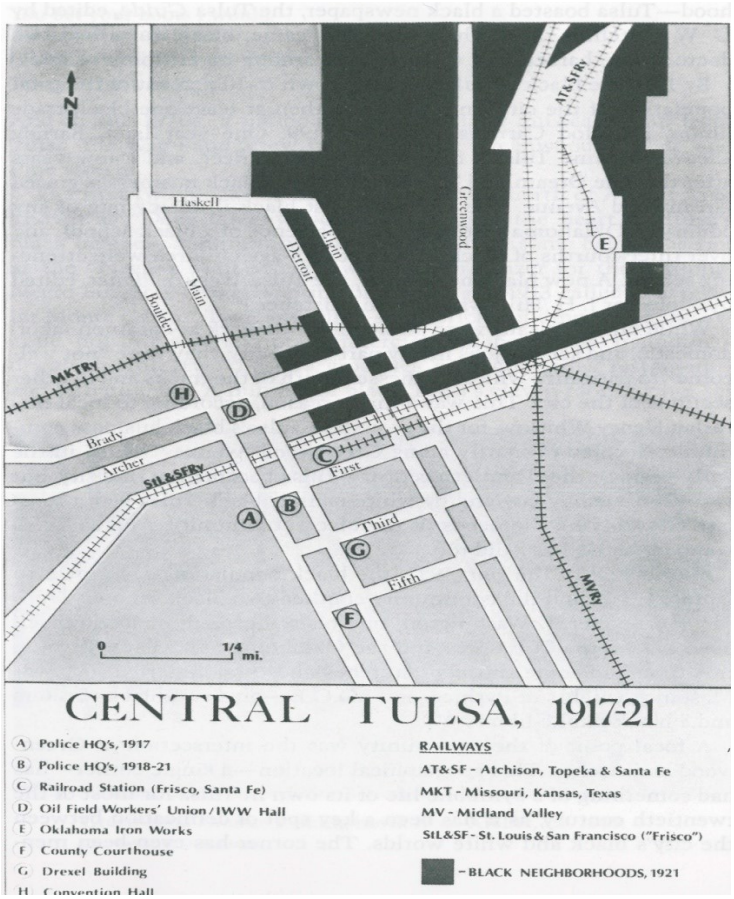
---

165 Connie Cronley, “That Ugly Day in May,” *Oklahoma Monthly,* August, 1976,29. オクラホマ州軍務長官チャールズ・バレット（Adjunct General Charles Barrett）の言葉。

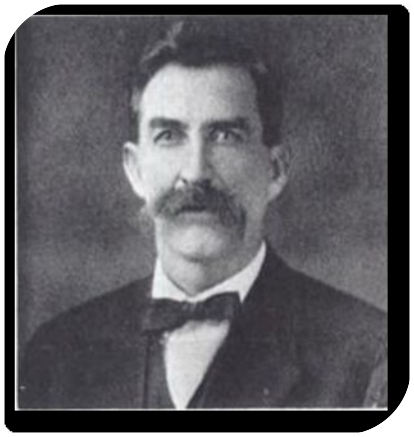
166 “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,” *The Literary Digest*, Vol. LXIX, No.12, June 8, 1921, 8.

にリンチの噂について確認し、安全を考慮して、ローランドは市の留置所からより警備が頑強な郡庁舎の最上階へ移送されることとなった。しかしアドキンソンは、ローランドをタルサの外に出した方がよりリスクが低いと判断し、マッカロー保安官にローランドをタルサから連れ出すよう助言した。ところがマッカローは、これを拒絶したのである[167]。タルサの運命が定まった瞬間であった。

ただ、タルサに着任して間もないマッカローに、ローランドを保護する意志が欠けていたわけでは決してない。それどころか、徹底した警備体制を敷き、ローランドを守り抜く自信を持っていればこその決断であった。留置場の入り口には６人の護衛を配置し、エレベーターも動かせないようにした。これで最上階の留置場へのアクセスは、幅の狭い階段１カ所となり、この階段の入り口も鉄格子で塞いだ。マッカローは護衛たちに、誰が来ても決して中に入れないようきつく命令した。実はその前の年、マッカローの着任前に、



１９１７年―１９２１年のタルサ市街。黒い部分がグリーンウッド。StL&SFRy は白人居住地と黒人居住地を分断していた線路
Ⓑ警察署 Ⓒ白人と黒人が対峙した列車の駅Ⓓ ＩWW（世界産業労働組合）のオフィス Ⓕタルサ郡庁舎Ⓖ ドレクセルビル
Ⓗ暴動時に黒人の収容場所となった催事場



マッカロー保安官
Death in a Promised Land, 50.

[167] Hirsch, 80-81.

留置場から男が連れ出されてリンチにかけられる事件が起きていた。マッカローには、前任者の失態を繰り返すつもりはさらさらなかったのである[168]。

午後４時過ぎ、警察署には張りつめた空気が漂っていた。午後６時から７時の間に、白人たちが郡庁舎前に集まり始めた。７時半までには、群衆の数は３００人前後にまで膨らんだ。午後９時には、その数は４００人にまで増えた。タルサは爆発寸前の事態に直面していた。新聞の扇情的で無責任な報道、これまでになく闘争的で従軍経験を持つ黒人たち、そして白人女性の純潔を守るという大義を掲げて自警団精神を露わにする白人暴徒たち。これらが一触即発の状態でせめぎ合っていたのである[169]。

以下は、ホワイトがタルサの白人市民から聞き取った内容のレポートである。

リンチの噂は、瞬く間に１５，０００の黒人が住むグリーンウッドに広がりました。去年のリンチでも被害者は同じ留置場から連れ出されており、ローランドの身に迫る危機を受け、武装黒人たちは保安官にローランドの警護を申し出ました。保安官は、その必要が生じれば連絡すると返答しました。午後９時には、４００人に上る白人群衆が留置場を占拠したという誤報が流れ、２５人の武装黒人が現場へ急行しました。保安官はローランドの身の安全を保障し、黒人たちをグリーンウッドへ帰しました。更にその後、７５人に増えた武装黒人が再び郡庁舎前にやって来ましたが、保安官は再度帰るよう促しました。その時１人の白人が黒人の銃を奪おうとし、銃が暴発したのです。恐ろしいことになった瞬間だと記憶しています。双方が発砲し、黒人２人に白人１０人が亡くなりました。銃撃戦は真夜中まで続きましたが、人数で圧倒された黒人はグリーンウッドへの退却を余儀なくされました。水曜の朝５時には、白人の数は１０，０００を超え、リトルアフリカに向かって集中攻撃を開始したのです。マシンガンも持ち出されました・・・中略・・・目撃者の証言では、復

Ａ・Ｃ・ジャクソン医師
Tulsa Race Riot, a Report, 23.

[168] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot”, 60; *Death in a Promised Land*, 49.
[169] *Death in a Promised Land*, 49.

員軍人かホームガード[170]（The Home Guard）かはっきりしないものの、制服を着た男たちが灯油缶を持ち込み、略奪後に火を放っていたということです。こうした惨たらしい話を私に伝えたのは黒人ではなく、白人住民なのです。ある人は、１組の老夫婦の話をしました。夜の祈りをしていた夫婦の家に白人が押し入り、後頭部を撃ち抜いたのです。それから略奪を始め、家に火を放ちました。またある人は、A・C・ジャクソン（A.C.Jackson）医師について話しました。彼は「アメリカ一の黒人外科医」と評された優秀な医師で、白人にも黒人にも尊敬される立派な市民でした。そんな彼の家を白人暴徒たちが襲いました。彼は自分と妻子を守るため抵抗しました。ジャクソン医師と顔見知りだったホームガードの１人が、抵抗しなければ攻撃しないと約束しました。ジャクソン医師は言われたとおりにしました。ホームガードは収容所まで医師を連れて行きましたが、その道すがら白人暴徒に銃殺されたのです[171]。

「南西部一の黒人医師」と評判で、当時にしては特筆すべきことであるが、白人の患者も数人いたジャクソン医師の殺害に関して、１９３１年８月発行のスクリブナー誌（*Scribner's Magazine* 1887-1939）によるジャクソン医師の殺害状況は、ホワイトによるリポートとは若干異なる。スクリブナー誌の記事によると、ジャクソン医師は妻と共に手を頭の上に置き、白いハンカチを掲げて玄関から出て来た。彼は、「私は医者だ、撃たないでくれ、と訴えたにも拘わらず、弾丸で穴だらけにされた[172]」と報じている。ジャクソン一家の近所に住んでいた白人裁判官ジョン・オリファント（John Oliphant）も、「彼はジャクソン医師だ、撃ってはいけない！」と叫んだが、白人暴徒にとって、ジャクソン医師の職業や評判など、何ら価値を持たなかった。暴徒の目には、彼はただ１人の黒人でしかなかったのである。彼は銃撃後トラックで収容所に運ばれたが、何の手当も受けることなく失血死した。彼の家もまた放火された。オリファントは、白人たちが略奪しながら、「歌を唄っていました。ピアノを弾いたり、レコードをかけたりもしていました。市民としての義務を果たしているという正義感に裏打ちされた彼らは、略奪行為を楽しんでいました」と証言している[173]。

---

170 はっきりした説明は見当たらないが、*1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey* の21頁に白人退役軍人たちことではないかとの記述がある。*Tulsa Race Riot, a Report* の163頁では、ホームガードはローカルガードと説明されており、資料の文脈から地元タルサ州兵を指しているととれなくもない。エルズワースは、保安官代理たちの事を指していると推測している(*Death in a Promised Land* ,76.)ため、暴動に参加していた白人のほとんどが含まれると考えられる。

171 "The Eruption of Tulsa,"910.

172 Frances W. Prentice, "Oklahoma Race Riot," *Scribner's Magazine*, August 1931,154.

173 *Black Wall Street*, 54; Hirsch, 104-106.

衝突の直接のきっかけとなった銃の暴発について、暴動当時ブッカー・T・ワシントン高校の生徒だったロバート・フェアチャイルド（Robert Fairchild）は、「小柄な白人の高齢者が、銃を持った１９０センチの長身の黒人に近づいて『よう、その銃で何するつもりだい?』と尋ねました。黒人が『いざとなったら使う』と答えると、この白人は『いいや、こっちに渡すんだ』と、無理やり銃を奪おうとしました。もみ合っている内に銃が暴発し、暴動を引き起こしてしまったんです[174]」と説明している。マッカロー保安官は、この銃の暴発から一気に事態は混乱し、「もう私の手には負えなかった[175]」と述懐している。

> 夜の間に５０人ほどの黒人が集まり、ライフルを手に、ローランドが留置されている場所まで赴きました。そこで彼らが目にしたのは、ローランドをリンチしようと集まった大勢の白人たちの姿でした。黒人たちは、留置場の責任者からローランドの身の安全を保証されましたが、彼らがグリーンウッドへ戻る途中、銃が発砲され、闘いの火ぶたが切って落とされたのです。一晩中銃声が聞こえていました。白人の数はどんどん膨らみ続け、５，０００人以上にもなりました。彼らはグリーンウッドを包囲し、夜が明けたら、８，０００人の罪のない黒人住民への攻撃を開始するつもりでした。日の出が近付くと、笛の合図と共に、卑劣な蛮行、殺人が行われたのです。無実の黒人たちが全く予想もしないほど残忍な攻撃が、彼らが眠っている間に始まっていたのです。・・・中略・・・マシンガンをはじめとする様々な殺傷兵器を手にした５，０００人の白人が、四方八方発砲し始めました。黒人たちは男も女も子供も、こぞって安全な場所へ急いで逃げようとしましたが、あらゆる方角から攻撃され、諦めざるを得なかったのです（氏名不詳黒人A.H.の１９２１年６月の証言）[176]。

> 黒人の身の安全を守ることに忠義を誓い、同胞のために必要とあらば命をも投げ出す覚悟の勇敢な黒人たちのグループが、５００を超える白人が群がる留置所前まで行進したのです。白人の数はやがて１,０００人近くまで膨らみました。銃の逸れ玉が誰かに命中し、タルサは暴力の温床と化したのです（パリッシュの証言）[177]。

エレベーターでの出来事の一件が住民の間に広まり、人々が職場から帰宅するにつれ

---

[174] Interview with Robert L. Fairchild, 186(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[175] *Death in a Promised Land*, 52.
[176] Parrish, 47-48.
[177] *Ibid*., 8.

て、白人群衆の数はみるみる増加した。白人は、真偽はともかく白人少女が襲われた、襲われかけたという報道に怒りをたぎらせていた。午後７時３４分の日没時には、数百人の白人群衆が郡庁舎を取り囲んだ。「黒人を渡せ!」の大合唱が始まり、群衆が固唾を呑んで見守る中、午後８時２０分頃、斥けられはしたものの、３人の白人住民が庁舎でローランドの引き渡しを要求している。マッカローは外に出て、群衆に帰宅するよう呼びかけはしたものの、強制はしなかったため、すんなりと帰宅する者など一人もいなかった[178]。

午後６時半頃、『タルサ・スター』のオフィスでは、グリーンウッドの２人のリーダー、スミサーマンとストラトフォードが住民たちと対策を練るための会合を開いていた。必要ならば、武器を用いてでもリンチを防ぐという強固な意志を表明することが重要だという意見で一致し、リンチ阻止のためには手段を選ばないことで同意した。ストラトフォードは会合に集まったメンバーを前に、「黒人がリンチされたら、その時にはタルサの町は血みどろになるだろう」と語った。ただし、ストラトフォードもスミサーマンも、反撃はしてもいいが、決して先制攻撃はしないよう釘を刺している。制御できない怒りの感情の暴走だけは阻止したかったのである。しかし、グリーンウッドの建設者ガーレーは、もっと慎重な行動を取るべきだとして、武装して郡庁舎へ赴くことには反対した。意見の相違はあったものの、午後９時には、武装した２５人の黒人住民が、車で郡庁舎へ向かった。黒人住民にとって、ローランドを守り抜くことは、何よりも正義を貫くことであった。前の年に白人のロイ・ベルトン（Roy Belton）が庁舎から連れ出されてリンチされた事件の記憶は、黒人住民たちにとってまだ鮮明であった。彼らは庁舎でローランド警護の補助を申し出たが、安全は確保されているとして承諾されなかった。しかしこの時、集団で武装して現れた黒人たちの姿は、黒人が想像もできないほどの強い衝撃を白人群衆にもたらしていたのである。武装黒人が現れるなど、白人群衆は予想だにしていなかった。「身の程をわきまえない」闘う黒人の姿を目の当たりにし、多くの白人が激しく動揺した。白人たちの目に、武装した黒人は反逆者と映り、「黒人が白人タルサを攻撃しようとしている、乗っ取ろうとしている」と解釈したのである。

激しい焦りと怒りに駆られ、白人たちは我先にと武器を取りに走った。彼らは、銃や武器調達の目的でスポーツ用品店や金物店に押し入った。また、州兵に阻まれはしたものの、武器を手に入れようとオクラホマ州兵軍タルサ部隊の兵器庫に侵入を試みるとい

[178] *Death in a Promised Land*, 49.

った事態まで起こしている[179]。５月３１日の夜、１６件の金物店や質店が被害に遭い、４２，９２３ドル相当分の商品が盗まれた[180]。１９５４年から２年間タルサ市長を務めたＬ・Ｃ・クラーク（L. C. Clark）は、当時市内の金物店で働いており、「白人たちが侵入して来て、散弾銃、懐中電灯、ポケットナイフをあるだけ全部奪い去った[181]」と証言している。武器庫で群衆と対峙したタルサ部隊のジェームス・Ａ・ベル少佐（Major James A. Bell）は、当時の状況について以下のように語った。

> 武器庫の西側に駆けつけると、数人の男たちが窓の格子を引きはがそうとしていました。男たちに窓から離れるように命令し、彼らが従ったのを確認してから武器庫の正面に向かいました。するとそこには、３００人から４００人にも上る白人たちが集まっていたのです。彼らの目的は、ライフルと銃弾の調達でした。私が何も渡すことはできないと伝えると、誰かが「そんなことはこっちの知ったことじゃない！」と叫びました。私は、銃器も弾薬も州知事の命令なしに何１つ持ち出すことはできないことを説明し、今すぐ退去するよう命令しました。それでも彼らは、威嚇的態度で前へ前へと進み出てきました。私はピストルを抜いて、もう一度退去するよう命じ、「武器庫の兵士たちは全員武装しており、不法侵入があれば銃撃する」と強い態度で臨みました。これでようやく群衆は立ち去りました[182]。

武装黒人の多くが退役軍人で、自衛のための武装を説いていたＡＢＢのメンバーだったという報道もある。オクラホ州兵軍のバレット長官も、軍服を着た黒人の数の多さに驚愕したという。第１次世界大戦の休戦から間もない時期だったこともあり、銃を所有している者は多く、白人・黒人双方とも退役軍人たちは軍事行為に精通していたことが想像できる。ＡＢＢは、２５人の武装黒人たちが庁舎前に集まったのは、法と秩序を守るためだったと主張し、黒人住民の闘う姿勢を称賛し、黒人の攻撃により白人が一時退却を余儀なくされたという成果を強調した[183]。

---

179 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,” 59-61; Hirsch, 84.
180 *Death in a Promised Land*, 54.
181 Ruth Sigler Avery Interview with L.C.Clark on June 25, 1975 at Tulsa County Historical Society, 31 (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
182 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”62; Hirsch, 87-88; *Death in a Promised Land*, 51.
183 Commander, Tulsa Post, African Blood Brotherhood, “The Tulsa Riot,” *The Crusader,* July 1921, Vol.4, No.5, 5; Robert L.Brooks and Alan H. Witten, “The Investigation of Potential Mass Grave Locations for the Tulsa Race Riot” *Tulsa Race Riot*, *a Report*, 124; Chang, 195.

白人は、黒人の方がダメージを受けたと言う。だが実際には、白人の負傷者リストは黒人のリストよりも長いのだ。より多くの白人が銃撃戦で負傷している。黒人の被害の多くは、就寝中の焼死や、高齢者や病人たちが逃げ遅れたことによる死亡である。赤ん坊とその母親も同じように死んでいる。しかし、前線となると話は別だ。銃撃で命を落とした白人は多い。・・・中略・・・黒人戦士たちは、常に白人から姿が見えない位置を取っていたが、白人は隠れもせず、狙いも定めず、ただ闇雲に撃ちまくっていた。決死の覚悟の黒人が白人を銃殺するまで、彼らは黒人を殺すことなど簡単なことだと高をくくっていたに違いない[184]。

タルサの黒人の男たちはただただ法と秩序を守ろうとしていただけである[185]。

デュボイスは１９２６年にタルサを訪問した際、感動と誇りを抑えきれず「タルサは黒人の驚異的な闘志を見せつけた」と、黒人の勇敢な闘いぶりを称え、『クライシス』誌に以下のよう記している。

黒人たちは、リンチを行う白人を銃撃したのである。黒人タルサは、「リンチはもう二度と起こさせない」と宣言した。それ以来、実際にリンチは起きていない。1921 年の人種戦争では、黒人銃撃隊は白人地域にまで攻め入った。押し戻されても、家屋の屋根から白人たちを銃殺した。白人タルサも戦闘に備えて武装した。マシンガンや飛行機まで使って黒人タルサを攻撃した。本当の戦争だ。殺人、放火、強姦、略奪。黒人タルサは死から不死鳥の如く蘇った。タルサの黒人は、もしまた闘うべき時が来たら、再び武器を取って闘うだろう[186]。

事態は刻々と進展していた。午後９時半には白人群衆は男性、女性、子供を含め数百人規模にまで膨れあがっていたが、タルサ市は事態を収拾する努力を怠った。留置場への侵入経路を塞いだ保安官たちは、郡庁舎入口にバリケードを築いていたとはいえ、眠りにつく者もいたほどの悠長さであった。一方、断固とした決意でリンチ阻止に臨まんとする武装黒人たちは、午後１０時半頃、二度目の庁舎訪問をした。５０人から７５人の武装黒人たちが、ローランドを引き渡すよう再度要求したが、黒人保安官補佐バーニ

[184] Commander, Tulsa Post, African Blood Brotherhood, 6.
[185] Cyrill V. Briggs, “The Tulsa Outrage,” *The Crusader*, Vol.4, No.5, July 1921,8,
[186] Hirsch,148; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*29.

ー・クリーバー[187]（Barney Cleaver）は、「ローランドはここで安全だ。こんなことをして、余計問題をこじらすだけだ」と、グリーンウッドへ戻るよう諭した。人種間の口論や小競り合いが繰り返された後、白人の１人が黒人の武器を力ずくで奪おうとした際、銃が暴発し、双方に犠牲者が出た[188]。これをきっかけに、白人対黒人の血みどろの戦いの幕が上がったのである。数分の間に数百の銃弾が飛び交ったという証言もある。あっという間に１０人を超える死体の山が築かれた。犠牲者第１号は１７歳の白人少年であった[189]。

自宅にいたパリッシュは、窓から外を見ていた娘が「ママ、銃を持った人たちがいる」と言うのを聞いて騒ぎに気がついた。多くの黒人住民たちが通りに集まって、何やら興奮した様子で議論している姿が見えた[190]。

> 郡庁舎の方を見ると、黒人・白人群衆が入り乱れて大声を上げ、女性の叫び声が響き渡り、銃声が飛び交っていました。車は町中をでたらめに走り回り、警察官の姿はどこにもありませんでした（Ｊ・リートン・エイヴェリー[J.Leighton Avery]の１９８０年１２月２日のタルサでの証言）[191]。

> ５月３１日は遅くまで働いていて、郡庁舎付近からの銃声を聞いたのは、ちょうど帰宅する準備をしていた時です。私は急いで車に乗り込み、家に向かいました。通りに出ると、銃撃を受けて出血した黒人が、痛みでのたうち回っていました。医師としてできることはないかと近づいてはみましたが、彼の周りに人だかりができはじめ、彼らは救急車を近づけないようにしていました。私にできることは何もありませんでした。野次馬たちはどんどん攻撃的になっていました。黒人は胸部を何発も撃たれており、その上、野次馬たちがナイフで切りつけていました。彼が死ぬのは時間の問題でした。私はそのまま帰路につくしかありませんでした（ジョージ・ミラーの証言）[192]。

> 私がその知らせを最初に聞いたのは、午後９時半くらい、学校で最上級生の劇を見ていた

---

187 タルサ市の黒人警察官第1号(1911年)。夜勤を命じられ、グリーンウッドの治安維持に当たることになったが、白人を逮捕しないよう命令されていた（*Death in a Promised Land*,14,51.）。

188 Parrish, 29; “Blood and Oil,” *The Survey*, Vol. XLVI, No.11, June 11, 1921, 369; “The Tulsa Race Riot,” *The Independent*, June 18, 1921,646.

189 Parrish, 9; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”62-63.

190 Parrish, 8.

191 J. Leighton Avery’s Account of the Tulsa Riot, December 2, 1980, 1 (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

192 Interview with George Miller, 107(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

時です。小さな男の子が息を切らしてやって来て、「黒人がダウンタウンでリンチされる！男たちが止めに行った！」と言うのです。劇は中断し、皆帰宅しました。夜の間中ずっと銃声が響いていて、よく眠れませんでした。翌朝５時頃奇妙な笛の音がしました。これは白人の攻撃開始の合図だったようです。というのも、すぐにひどい銃撃が始まったからです（黒人男性教師ジェームス・Ｔ・Ａ・ウエスト[James T.A. West]の１９２１年６月２０日のタルサでの証言）[193]。

あの晩、私は通常通り聖書を学ぶクラスにいました。クラスが終わって夜も更けた頃、ダウンタウンの方から銃声が聞こえましたが、特に気に留にもめませんでした。それから激しい発砲が続き、ただ事ではないと悟ったのです。朝になると、過熱した銃撃戦が家のすぐ前で行われていました。白人たちは、無抵抗の黒人に発砲していました（黒人男性法律家リチャード・Ｊ・ヒル[Richard J. Hill]の１９２１年６月２２日のタルサでの証言）[194]。

火曜日の夜９時半頃、黒人少年が襲われそうな事態になっているという噂が流れました。私と家族は家に留まっていましたが、しばらくすると銃声が聞こえ始め、人々が口々に「白人が放火・銃撃している」と騒いでいました。私は祈りました。やがて白人のグループがやって来て、私たちに家から出るよう命令しました。私は逃げ出しましたが、１５人ほどの白人のグループが、たった１人の丸腰の黒人を追いかけ銃撃している光景を目撃しました。（黒人女性ロゼッタ・ムーア[Roseatter Moore]の１９２１年６月２２日のタルサでの証言）[195]。

１９２１年５月３１日火曜日の夜９時半頃に銃声を聞きましたが、火災報知機の音だとばかり思っていました。それからしばらくして、何が起こっているのかがはっきりしました。初めは怯えていましたが、勇気を出してドアを少し開けて外を見ると、逃げまどっている人々の姿が目に飛び込んで来ました。私の隣人が、「白人が黒人をリンチするつもりだ」と教えてくれました。・・・中略・・・水曜日の午前４時半頃、グリーンウッドからどんどん人々が逃げているのが見えました。丘に陣取った白人たちが黒人を銃撃し、数人が倒れ、それでも逃げようとしていました。私は、６ブロック先に住んでいた病身の母に迫る危険に思い至り、銃弾の雨の中、何とか母の元に辿り着きました。姉妹と私とで母を着替えさせて担ぎ上げ、再び銃弾の雨をくぐり抜ける途中、６つほどの白人グループが私たちに追い付きました。彼らは私たちに両手を上げさせましたが、武装した白人グループの中には、

[193] Parrish, 24.
[194] *Ibid*., 25-26.
[195] *Ibid*., 26-29.

ほんの１０歳程度の子供も混じっていました。彼らは黒人たちの家に侵入しては好きなものを持ち出し、焼き払っていました（黒人女性キャリー・キンロー[Carrie Kinlaw]の１９２１年６月２３日タルサでの証言）[196]。

丘の上まで逃げると、子供を含む白人たちが集まって、暴動の様子を記念撮影していました。中には、「黒人に土地を売ったタルサを訴えるべきだ」と口にする白人もいました。ある白人女性が、白人居住区のすぐそばに建つ美しい建造物、ファーストバプティスト教会（the First Baptist Church）を見て、「あれは黒人教会でしょう？どうして燃やさないの？」と尋ねると、誰かが、「あれは白人地域にあるからだ」と答えました（氏名不詳黒人女性の１９２１年６月２４日タルサでの証言）[197]。

１人の黒人女性の持ち物が、１１もの白人家庭で見つかったそうです。お金はすべて奪われ、指輪や時計やネックレスも盗まれました。実際、貴金属はすべて例外なく盗まれたのです。・・・中略・・・略奪され、家屋や店を焼かれ、病人・高齢者・障害者は逃げ遅れて多くが炎にのまれ、妊婦たちは野外での出産を余儀なくされました（リチャード・Ｊ・ヒルの証言）[198]。

マッカロー保安官の要請を受け、州兵軍タルサ部隊が事態収集のため出動することとなった。２２０人の白人で構成されたタルサ部隊が現場に到着した時には、既に銃撃戦の真っ只中であった。タルサ部隊の州兵たちは、狙われる可能性が高いと考えられた給水塔、発電所などに重点的に配置され、１５－１８人が警察署の警備に当たった。武器庫を白人暴徒から守り抜いたジェームス・ベル少佐は、後に報告書で、

恐らく午後１０時半頃だったと記憶していますが、バレット軍務長官から電話があり、当時の状況を聞かれましたので、相当深刻な状態であると回答しました。長官からは、出動要請がある場合に備えて、なるべく多くの州兵を待機させるようにとの指示がありました。ほんの数分後、再び長官から電話があり、直ちに二部隊を出動させるよう指示されました。必要なあらゆる援助を行い、法と秩序を守り、生命と財産を保護するためにできる限りのことをするようにとの命令でした[199]。

---

[196] *Ibid*., 36.
[197] *Ibid*., 41-42.
[198] *Ibid*., 62.
[199] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”66; Hirsch, 93.

と、出動時の状況を語っている。タルサ部隊の州兵たちが暴動鎮圧の訓練を受けていたかどうかは明らかではない。彼ら全員が白人で、暴動鎮圧に当たり、白人と黒人を平等に扱っていたかどうかは疑問である。白人群衆同様、暴動を黒人の反乱と決め込んだ州兵も多く、黒人を「敵」と呼ぶ者すらいたのである。当時のタルサの人種関係の悪化は深刻であり、タルサの州兵たちは、黒人が一方的に暴力行為を行っていると疑わなかったのではないだろうか。

州兵たちは、武装白人と共に町のパトロールを行っている。彼らは、タルサ警察が提供したマシンガンを、丘の中腹に、グリーンウッドに向けて設置したのである[200]。いつしか、彼らの目的は暴動鎮圧ではなく、白人暴徒と同じく黒人コミュニティ攻撃に変容していたのである。当初、州兵は武器庫を守り、暴動鎮圧のために出動したはずであった。ところが一旦現場に到着すると、暴動を鎮圧するより先に、黒人住民を次々と逮捕し、収容所に連行したのである。住人を失ったグリーンウッドは白人暴徒の手に落ち、略奪・放火がいとも簡単に行われる状況を作り出したのである。

黒人の住宅に侵入を試みる白人暴徒。下の写真には、同じ暴徒たちが火をつける様子が写っている。
Death in a Promised Land, 56.

タルサの州兵たちが、黒人住民を拘束せずに白人暴徒を逮捕していたならば、グリーンウッドの被害ははるかに小さく食い止められていたはずである。住民の多くは、最終的に暴動を鎮圧した州兵軍のオクラホマシティ部隊には感謝の意を表したが、地元タルサ部隊には非難が集中した[201]。タルサ部隊の州兵は、黒人住民の住宅や資産を保護

[200] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”66-68.
[201] Alfred L. Brophy, “Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law,” *Tulsa Race Riot, a Report*, 160-163.

するとの約束のもとに彼らを自宅から収容所へ連れ出したにも拘わらず、住民の財産を守る努力は一切なされなかった。黒人住民にとって、タルサ部隊の州兵たちは白人暴徒と何ら変わらなかったことになる。

白人たちは暴力の応酬に酔いしれ、まるでお祭り気分で興奮して浮かれ騒いだ。彼らは片手に銃、片手にアルコールの瓶を持って通りをうろついた。白人市民はパトロール用に自家用車を提供し、真夜中までには白人たちを乗せた１００台もの車が、タルサの町を縦横無尽に走り回っていた。白人、黒人双方がライフル、リボルバー、散弾銃を用い、町は交戦状態となった。約２０倍の人数で圧倒された黒人たちはグリーンウッドへ退却を余儀なくされ、白人群衆がその後を追った。もはやローランドはそっちのけで、黒人たちは自らの生命を守るために闘っていた。白人暴徒たちも、ローランドへの関心を失っていた。今や彼らのターゲットは全黒人住民たち、即ちグリーンウッドそのものに変質していた。

６月１日の午前１時までには、白人は総攻撃の準備を整えていた。白人地区と黒人地区を地理的に分断していたのが、フリスコ鉄道（The Frisco Railway）の線路と駅であった。白人と黒人は線路を挟んで向き合ったが、数で圧倒した白人群衆は、この人種の境界線をまるで「闘牛か、獣の死骸に群れる血に飢えた狼[202]」の如く、同じタルサの市民を殲滅せんとなだれ込んだのである。黒人たちには慣れ親しんだ陣地で応戦するという利点があり、数時間に渡り抗戦した。しかし、弾薬の不足から後退に次ぐ後退を迫られ、夜明けを待たずに安全を求めてタルサを脱出する市民も続出した。６月１日の明け方には白人が全てを掌握し、略奪・放火が始まったのである。『タルサ・ワールド』の６月２日の社説によれば「白人群衆が系統的に放火を行い、黒人とみればかまわず銃撃していた[203]。」

> 通りに折り重なる死体、逃げ惑う人々、慌てて家から脱出する人々。カーキ色の服を着て「タルサ・ホームガード」と書かれたカーキ色の巻きゲートルをした退役軍人が、ありとあらゆる種類の銃を丘の上から撃ちまくる。いや、普通の服を着た男たちも、黒人たちを大勢銃殺している[204]。

---

202 Parrish, 9.
203 “Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law,” 165; *Death in a Promised Land*, 55.
204 Ruth Sigler Avery’s Account of Tulsa Race Riot, 7-8(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

私は当時６歳で、バン、バン、バン、と大きな音がしたので、てっきり雹が降っているのだと思っていました。すると母が、ブラインドの隙間から向かい側の建物の屋根を指さして、「あのアメリカ国旗の隣にしつらえてあるのはマシンガンよ。マシンガンの弾が家に命中しているの。まるでアメリカが私たちを攻撃しているみたい」と言いました。これは理想主義の子供に、大きな打撃を与えずにはいませんでした。その時まで憎悪という感情とは無縁だったのですから。アメリカが私たちを銃撃しているなんて、本当に衝撃的なことでした[205]。

黒人は逮捕の際抵抗しなければ留置場へ連行され、反抗すれば撃たれました。男性住民全員が逮捕された後、女性と子供たちは公園に集まるよう命令されました。こうして暴動は終息したのです。しかし、思いもよらないことに、空になった黒人住宅に白人がなだれ込み、価値あるものすべてが奪われました。そして略奪を隠ぺいするために火が放たれたのです（黒人薬剤師Ｐ・Ｓ・トンプソン[P.S.Thompson]の１９２１年６月２２日のタルサでの証言）[206]。

午前１時半には銃撃戦も静まり、これで終わりかと一息ついた途端、通りの誰かが「白人が火を放っている！」と叫んだのです。私たちの目の前に、炎と煙の柱が現れました（パリッシュの証言）[207]。

銃撃戦と放火は断続的に続き、６月１日午前２時頃に出動した消防車の運転手は、５００人余りの白人群衆に消火活動を阻まれ、「ホースから離れないと死人が出るぞ、と脅されました。我々は消防署に戻り、就寝しました。」と証言した。午前７時頃、グリーンウッドの病院が燃えていると連絡を受け、消防が消火に駆けつけると、今度は隣の家が燃え始め、消防がそちらにかかっていると、また病院が燃え始めた。二度目の消火をしたものの、三度目の放火をされ、遂に病院は崩壊した[208]。これに対し、ＡＢＢタルサ支部は異なる見解を出している。「消火活動が白人群衆により阻止されたことになっているが、これは真っ赤なウソである。誰も消防士に発砲などしていない。なぜなら、黒人地区の消火をしようとした消防士など１人もいなかったからである。彼らは、白人地区と黒人地区の間に陣取って、白人地区に延焼がないようにすることだけに気を使っ

[205] Testimony of Olivia Hooker (“Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,” 31.).
[206] Parrish, 29-30.
[207] *Ibid*., 9.
[208] Hirsch, 103; *Death in a Promised Land*, 55.

ていたのだ[209]。」

黒人住民も、消防隊は黒人家屋やビジネスの消火活動ではなく、白人地区への延焼がないようにすることを優先していたという証言をしている。

消防車は白人地域を守るのに忙しく、黒人地域では相変わらず男たちが家々に火を放ち、女たちは買い物カバンを持って略奪にいそしんでいました。・・・中略・・・私は丘の上から自分の家が灰になるのを、ただただ指をくわえて見ているしかありませんでした。すると１人の年配の白人男性がやって来て、「おばさん、ひどいことになってるねえ」と言って、私に食事代として１ドルくれました（氏名不詳黒人女性の１９２１年６月２４日タルサでの証言）[210]。

窓から南の方を見ると、ライフルを抱えた白人を乗せた車が何台も見えました。その数の多さに、私たちが幾ら抵抗を試みても無駄な闘いにすぎないのだと悟りました。私たちはどうにも落ち着かず、窓やドアから外の様子を伺わずにはおれませんでした。敵は夜の間に組織され、ドイツ人がフランスとベルギーを侵略したようにグリーンウッドに侵入するつもりだったのです（パリッシュの証言）[211]。

新たにグリーンウッドに到着した白人たちの攻撃により銃撃戦は再開され、乳児や幼児を連れて焼け出されて逃げる人々がいました。白人はグリーンウッドを見下ろす位置にある穀物貯蔵所に機関銃を設置し、グリーンウッドに集中砲火を浴びせていました（パリッシュの証言）[212]。

武装した多くの人々が、通りを行ったり来たりしていました。午前５時から６時の間に、"Riot Call"（笛による合図）があり、白人たちが一斉にライフルを抱えて丘から降り、黒人居住区を包囲しました。・・・中略・・・白人たちが黒人の家々になだれ込み、略奪、放火していました。私も家の周辺に火が放たれたため、投降することにしました。・・・中略・・・階段を下りる途中、白人にひどい扱いを受けました。両手を上げさせられた状態の私は、顎をしたたか殴られてしまいました（黒人男性建築業 J・C・ラティマー[J.C.Latimer]の日時・場所不詳の証言）[213]。

---

[209] Commander, Tulsa Post, African Blood Brotherhood, 5.
[210] *Ibid*., 41-42.
[211] Parrish, 9.
[212] *Ibid*.,9.
[213] *Ibid*., 44.

タルサから逃げる途中、白人でいっぱいの車に遭遇した私たちは、大慌てで逃げ出しました。その様子に、白人たちは腹を抱えて爆笑しました。２０人の黒人たちが蜘蛛の子を散らすように逃げる光景が、さぞ面白かったんでしょう。彼らは車を止めて「何にもしないよ」と言いました[214]。

１９２１年６月１日水曜日の早朝、重傷者２人の手当てに病院に来るよう連絡を受けました。急いで病院へ向かおうと玄関のドアを開けるのと同時に、発砲を受け、銃弾が足を掠めました。私は慌ててドアを閉めましたが、銃声を聞いた妻がドアを少し開けるや、再度銃撃され、弾が玄関ドアに当たりました。妻が、「行きましょう、命の方が大切よ！」と言いました。私は廊下に鞄を置き、妻と姪と家を出ました。そのすぐ後、笛の音がして家の近くの丘から銃撃が始まりました。・・・中略・・・銃撃は続き、私たちはタルサから２マイル離れた場所まで逃げ続けました。・・・中略・・・暴動後帰宅した私が目にしたのは、道路に積み上げられたピアノと家具でした。金庫はこじ開けられ、現金は全て奪われていました。食器、切子ガラス、衣類など価値あるものは全て失くなっていました。何と聖書までもです！窓やドアも壊され、電話は壁から引き抜かれていました。車や絨毯も盗まれていました（黒人男性医師Ｒ・Ｔ・ブリッジウォーター[R.T.Bridgewater]の１９２１年６月２２日タルサでの証言）[215]。

夜の間は水を打ったように静かでしたが、夜明けの少し前に笛が鳴り渡りました。この時までに、白人は攻撃の準備が整っていたのでしょう、彼らは一斉に攻撃を開始しました。銃撃、放火、やれることは何でも・・・。（葬儀業者Ｓ・Ｍ・ジャクソンの１９７１年のタルサでの証言）[216]。

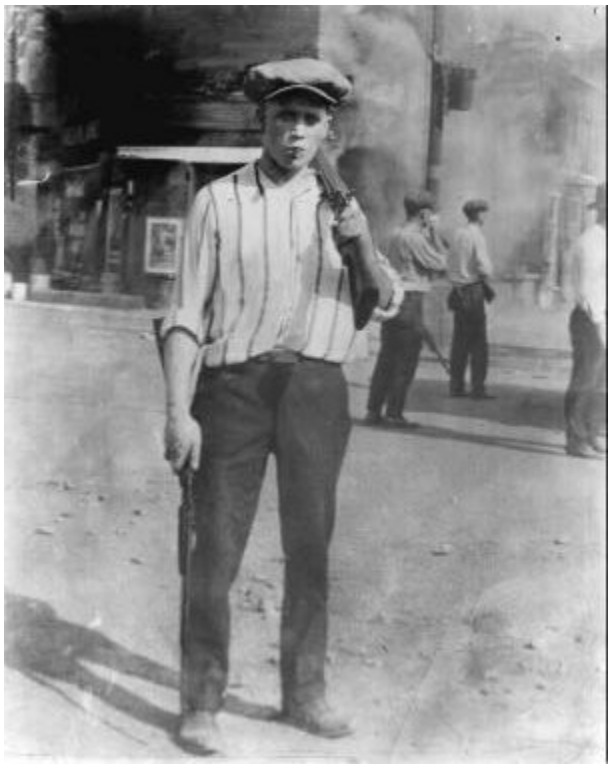
私が見た光景。
負傷した母と息子がお互いを何とか助けようともがいていた。
負傷した男たちが、道路の片隅でもうそれ以上動けないでいる様子。
その日幾つかの早産があったらしい。
子供たちが半狂乱で親を探していた。武装した白人に夫を連れていかれた妻たち。
すべてのアメリカ人たちに告ぐ。この暴力を断罪して（黒人女性ディンプル・Ｌ・ブッシュ[Dimple L. Bush]の日付・場所不詳の証言）[217]！

---

[214] Interview with Robert L.Fairchild, 187(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[215] Parrish, 33.
[216] Ruth Avery Sigler Interview with S.M.Jackson on Riot conducted on June 26, 1971, 9C-10C (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[217] Parrish, 54.

私の両親は衣料品店を営んでいました。一生懸命働いて貯めたお金で購入した、数々の美しい宝石や銀器を奪われ、損失は１，０００ドル以上に上り、２人は錯乱状態でした。暴徒たちは家具を斧でめった切りにし、祖母のベッドとミシンに放火しました。私の人形たちの洋服も全て燃えてしまいました[218]。

６月１日水曜日の早朝、部屋の窓から見えたのは、ホームガードたちが店に侵入し、品物を運び出してトラックに積み込み、白人地区に急いでいる光景でした。黒人の店から盗まれた品々が、白人商人たちによって転売されているのです（黒人保険業者Ｍ・Ｄ・ラッセル[M.D.Russell]の１９２１年６月２２日タルサでの証言）[219]。



両手に銃を持つ白人少年
Tulsa Race Riot, a Report, 63.

葬祭業を営んでいた当時２６歳の黒人男性Ｓ・Ｍ・ジャクソンは、以下のように当時の状況を語った。

私はジャクソン医師の防腐処置を行いました。・・・中略・・・集められた死体の防腐処置

[218] Prepared Statement of Olivia Hooker (“Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”32.).
[219] Parrish, 43.

を行うよう指示されたのです。白人のトラックで、路上の死体集めにも参加させられました。・・・中略・・・多くの死体が防腐処置を施されないままで、身元も分かりませんでした。あまりにひどく焼けていたからです。白人たちも死んでいましたよ。黒人ほどではありませんでしたが。・・・中略・・・身元不明の死者を、少なくとも２０人は埋葬しましたね[220]。

タルサの混乱状況を知らされないまま停車した列車もあり、人的被害は出なかったものの、窓をハチの巣にされるという事態も起きていた[221]。『タルサ・ワールド』紙の記者の証言によれば、グリーンウッドをパトロールしていた車を運転していたのは、名の知れた実業家や知的職業に就いている白人たちが多かったのだという。グリーンウッドを見下ろす丘には、タルサの著名な実業家だったワイアット・テイト・ブレイディ（Wyatt Tate Brady 1870-1925）の居宅があり、ブレイディは自宅で白人に武器を供給していたとされる。２００７年に社会の幸福な調和を目指し、人種融和や人種間の信頼を構築するために発足したグリーンウッドのジョン・ホープ・フランクリン人種融和センター（John Hope Franklin Center For Reconciliation）で、人種暴動を語り継ぐバネッサ・アダムス（Vanessa Adams）は、「ブレイディは、丘とダウンタウン（白人地区）の間にあったグリーンウッドが、タルサの更なる発展の障害になっていると考え、邪魔で仕方がなかったのです。ブレイディはグリーンウッドがなくなってしまえばいいと考えていたのです」と話した[222]。

白人暴徒らは、十数時間に亘り銃撃、略奪、放火を行い、黒人メトロポリス、グリーンウッドは壊滅した。黒人住民の住居を強制的に空にした後で、白人は自由に略奪を行い、その痕跡を消すために放火したのである。放火には主にたいまつが使用され、盗み出したピアノ、蓄音機といった物品を白人地区へ持ち帰るための大型トラックも手配された。建設直後だったマウントザイオンバプティスト教会（Mt.Zion Baptist Church）も、被害を免れることはなかった。教会に５０人が立てこもる中、火が放たれ、慌てて飛び出して来た黒人７人が銃殺された[223]。黒人信者たちは否定したものの、白人たちは教会が武器庫として使われ、「暴動を始めた黒人共産主義者たちが活動拠点にしていた」と主張した。暴動後、教会の神父は徹夜で廃墟に立ち、教会が武器庫ではなかったこと

[220] Ruth Avery Sigler Interview with S.M.Jackson on Riot conducted on June 26, 1971, 2C (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[221] *Death in a Promised Land*, 59.
[222] Personal Interview with Vanessa Adams Conducted on September 10, 2013 in Tulsa, OK.
[223] Cronley, 31; Hirsch, 107.

を証明するため、タルサ市の役人らに瓦礫撤去の立ち合いを要請した。結局、教会に銃器が存在した証拠が発見されることはなかったのである[224] 。

> その朝の光景といったら、聖書で読んだソドムやゴモラよりももっと醜悪でした。町は、火と煙と灰に覆われていました。私が見た最も酷い光景は、卑劣な白人たちが、必死に逃げる母親と子供を銃撃している様子でした。黒人地域の病院は、入院患者ともども焼かれ、逃げることが出来ずに多くの人たちが亡くなったのです（A.H.の証言）[225]。

公式発表による死者数は３６人であったが、この数字は犠牲者の多くが焼かれたり、埋められたり、アーカンソー川に遺棄されたりしたという数々の証言が存在するため、当初から疑問視されている。実際の死者数は、１５０人とも３００人とも推量されている[226]。無知と憎悪の炎は、約２０年に亘って積み重ねた黒人の汗と努力の結晶を、一夜にして焼き尽くしてしまったのである。

> 私はファースト・ナショナル銀行の窓のそばに立っていました。見下ろすと、たくさんの黒人の死体を積んだトラックが南に向かっていました。午前だったか午後だったかは覚えていませんが、多分６月１日の午後だったと思います。・・・中略・・・私の記憶では、死体は全て黒人でした。手足が突き出ているのが見えたんです（『タルサ・ワールド』紙記者白人女性フローレンス・リー・ニコルス・リアム[Florence Lee Nichols Rheam]の１９７１年５月２日タルサでの証言）[227]。

> トラックに黒人の死体が積まれていました。ぞっとする光景でした。私はたったの５歳でしたが、死体だということは分かりました。それからまた別のトラックが来ました。そこにも黒人の死体が山積みされていました。私は向きを変えて逃げ出しました。裏口から家に飛び込み、このことは誰にも言いませんでした（美術教師白人女性ルース・ウィングフィールド[Ruth Wingfield]の証言）[228]

---

224 Hirsch, 181.
225 Parrish, 49.
226 Chris M. Messer and Patricia Bell, “Mass Media and Governmental Framing of Riots: The Case of Tulsa, 1921,” *Journal of Black Studies*, Vol. 40, No.5, May 2010; Minkah, Makalani, *In the Cause of Freedom-Radical Black Internationalism from Harlem to London, 1917-1939*-,The University of North Carolina Press, 2011,66; Messer,173.
227 Ruth Avery Sigler Interview (Version 2) with Florence Lee Nichols Rheam conducted on February 5, 1971 in Tulsa, 1(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
228 Interview with Ruth Wingfield, 143(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

当時４歳だったエイヴェリーも、トラックの荷台に積まれた死体を目撃している。

寝室の窓から外を見ると、積荷がたくさん積まれた家畜用トラックが２台見えました。積まれていたのは、多くが血まみれの黒人の死体でした。裸の死体やズボンをはいただけの死体もありました。荷台からは、腕や足がはみ出ていました。私は恐怖に震え、「ああ、これが死なんだ」と思いました。１台目のトラックに乗せられていた黒人女性の足が、ぶらぶらと揺れていました。２台目には、私と同じくらいの年頃の小さな男の子の死体が乗っていて、赤と青のシャツに、黒いズボンをはいていました。でも、なぜだか裸足でした。トラックがマンホールに乗り上げた拍子に、男の子の頭がくるりと回転し、私の方を向いたのです。まるで、「死ぬのが怖いよ」といった表情で私を見つめていました。腕は投げ出され、口は開いていました[229]。

Tulsa Race Riot, *a Report*, 69.

第２節　飛行機からの攻撃

白人・黒人住民双方が、６月１日の早朝に空からの攻撃があったと証言している。タルサ人種暴動検証委員会の調査報告書でも、飛行機が飛んでいたことは間違いないと結論された[230]。飛行機の数についてははっきりしないが、当時４歳だったエイヴェリーは、

[229] Ruth Sigler Avery's Account on the Tulsa Race Riot, 6(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[230] Richard S. Warner, "Airplanes and the Riot," *Tulsa Race Riot*, *a Report*, 103.

「何時ごろだったかははっきりと覚えていませんが、飛行機が教会を爆撃するのを見ました」と証言している。エイヴェリーは、６機の飛行機がグリーンウッドのレンガ造りの教会の真上を旋回していたことを記憶している。パイロットたちが教会の屋根に何かを落下させると、爆発が起きた。教会の尖塔はまるで頭を左右に揺するように崩れ落ちた[231]。

ブンブン唸るような音がして、何が起こっているのか確かめるためにドアに駆け寄ると、恐るべき光景に心臓が止まるほど驚愕しました。空に巨大な影が現れ、次の瞬間には高速で迫ってくる飛行機が姿を現したのです！黒人居住区の公園に固まっていた黒人住民たちが、飛行機から銃撃されたとも聞きました（パリッシュの証言）[232]。

飛行機がとても低く飛んでいるのを見ました。驚いたことに、飛行機が飛び去った後の町は炎の塊となっていました（パリッシュの証言）[233]。

笛の合図と同時に、１２機以上の飛行機が、テレビン油の玉を黒人住宅地に次々と落下させました（A.H.の証言）[234]。

何をしていたのかは定かではありませんが、飛行機がかなりの低空飛行をしていました（ジェームス・Ｔ・Ａ・ウエストの証言）[235]。

飛行機が時にとても低く飛んでいました。女性が「飛行機に気を付けて！こっちを狙ってる！」と叫んでいました（Ｒ・Ｔ・ブリッジウォーターの証言）[236]。

---

[231] Ruth Sigler Avery Book Draft, 22(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection); Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”73.
[232] Parrish, 10.
[233] *Ibid*., 49.
[234] *Ibid*., 48.
[235] *Ibid*., 24.
[236] *Ibid*., 33.

Tulsa Race Riot, a Report, 103.

母を避難させている最中、飛行機が私たちの前にいた男性に向かって発砲しました（キャリー・キンローの証言）[237]。

飛行機が灯油の入った容器を投下していました。父をはじめ、人々は飛行機に向けて発砲しました。あれは複葉機で、翼が２つありました。自家用機だったと思います（暴動当時高校生だった黒人男性ウィリアム・Ｄ・ウィリアムス[William D. Williams]の１９７０年１１月２９日タルサでの証言）[238]。

黒人の動向を探るため飛行機が８機使用され、黒人住民の証言によると、攻撃してきた飛行機もあるそうです[239]。

飛行機から発火物が落とされ、建物が次々に焼けました。・・・中略・・・私が４５口径のピストルで飛行機を撃つと、向きを変えて飛び去って行きました（Ｓ・Ｍ・ジャクソンの１９７１年のタルサでの証言）[240]。

---

[237] *Ibid*., 37.
[238] Ruth Sigler Avery Interview with William D. Williams on November 29, 1970, 109(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[239] "The Eruption of Tulsa," 910.
[240] Interview with S.M.Jackson, 5C (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

ＡＢＢタルサ支部も、飛行機が黒人地区に焼夷弾を落とし、この爆弾によってグリーンウッドが一掃されたと報告している[241]。しかしながら、６月１日水曜日の未明から飛んでいた飛行機は、被害状況確認のための州兵軍の偵察機であったという報告もある。命の危険に晒され、怯えて夜を明かした黒人住民の目には、飛行機が攻撃して来ると映ったのかもしれない。

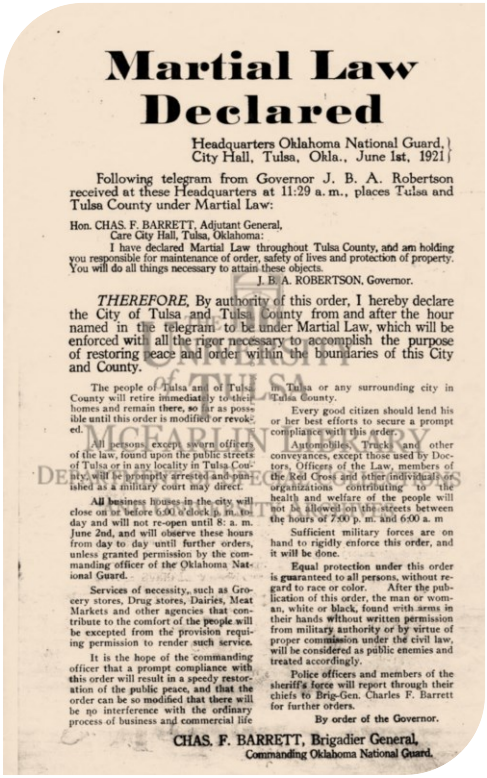
飛行機の目的は何だったのだろうか。１９２１年６月７日、『タルサ・ワールド』が、タルサ警察のジョージ・ブレイン警部（Captain George Blaine）の話として、黒人群衆が白人居住地を攻撃するという噂が広まり、その真偽を確かめるために自家用機を飛ばした、と報じている。白人たちは、黒人の報復を恐れていたのである。自家用機はグリーンウッドだけでなく、ボーリーを含む近隣黒人自治体まで偵察しているが、黒人による報復行動を示すものは一切なかった。飛行機の活動について調査報告をまとめたリチャード・Ｓ・ワーナー（Richard S. Warner）は、飛行機からの銃撃が行われ、爆発物が投下されたのも事実だろうとしながらも、地上での銃撃や放火に比較すると、飛行機が与えた被害の程度は小規模に留まると結論付けた[242]。

[241] Commander, Tulsa Post, African Blood Brotherhood, 5.
[242] Warner, 107; Hirsch, 121; *Death in a Promised Land*, 63.

第３節　州兵軍オクラホマシティ部隊の出動と戒厳令

軍務長官チャールズ・バレットと１０９人の白人州兵を乗せた特別列車が、６月１日午前９時１５分、オクラホマシティからタルサのフリスコ駅に到着した。略奪と放火は続いていたものの、銃撃戦はほぼ終結していた。グリーンウッドの攻撃に加担していた白人数は、５，０００人から１０，０００人にも上っていた。オクラホマシティ部隊の登場は市民に拍手で迎えられたというが、彼らが到着する前に、スミサーマンやジャクソン医師所有の高級住宅は、次々と炎上していた[243]。家を失い、身を隠す場所を失った黒人住民たちは、次々と収容所へ送られ、白人家庭に住み込みで働いている黒人家内労働者までもが連行されていたのである[244]。

路上に転がる大量の死体を前に、オクラホマシティの州兵たちは暴動の鎮圧以前に、死体を収集する作業に追われることとなった。バレット長官はマッカロー保安官に面会しようと郡庁舎へ足を運んだが、空振りに終わり、市の役人との協議の結果、戒厳令を敷く許可を州知事に要請することにした。州知事Ｊ・Ｂ・Ａ・ロバートソン（J. B. A. Robertson）もタルサ入りし、６月１日午前１１時２９分、タルサ一帯に戒厳令が敷かれた。



Martial Law Declared

Headquarters Oklahoma National Guard, City Hall, Tulsa, Okla., June 1st, 1921

Following telegram from Governor J. B. A. Robertson received at these Headquarters at 11:29 a. m., places Tulsa and Tulsa County under Martial Law:

Hon. CHAS. F. BARRETT, Adjutant General,
Care City Hall, Tulsa, Oklahoma:
I have declared Martial Law throughout Tulsa County, and am holding you responsible for maintenance of order, safety of lives and protection of property. You will do all things necessary to attain these objects.
J. B. A. ROBERTSON, Governor.

THEREFORE, By authority of this order, I hereby declare the City of Tulsa and Tulsa County from and after the hour named in the telegram to be under Martial Law, which will be enforced with all the rigor necessary to accomplish the purpose of restoring peace and order within the boundaries of this City and County.

The people of Tulsa and of Tulsa County will retire immediately to their homes and remain there, so far as possible until this order is modified or revoked.

All persons, except sworn officers of the law, found upon the public streets of Tulsa or in any locality in Tulsa County, will be promptly arrested and punished as a military court may direct.

All business houses in the city will close on or before 6.00 o'clock p. m. to-day and will not re-open until 8: a. m. June 2nd, and will observe these hours from day to day until further orders, unless granted permission by the commanding officer of the Oklahoma National Guard.

Services of necessity, such as Grocery stores, Drug stores, Dairies, Meat Markets and other agencies that contribute to the comfort of the people will be excepted from the provision requiring permission to render such service.

It is the hope of the commanding officer that a prompt compliance with this order will result in a speedy restoration of the public peace, and that the order can be so modified that there will be no interference with the ordinary process of business and commercial life in Tulsa or any surrounding city in Tulsa County.

Every good citizen should lend his or her best efforts to secure a prompt compliance with this order.

Automobiles, Trucks and other conveyances, except those used by Doctors, Officers of the Law, members of the Red Cross and other individuals or organizations contributing to the health and welfare of the people will not be allowed on the streets between the hours of 7.00 p. m. and 6.00 a. m

Sufficient military forces are on hand to rigidly enforce this order, and it will be done.

Equal protection under this order is guaranteed to all persons, without regard to race or color. After the publication of this order, the man or woman, white or black, found with arms in their hands without written permission from military authority or by virtue of proper commission under the civil law, will be considered as public enemies and treated accordingly.

Police officers and members of the sheriff's force will report through their chiefs to Brig-Gen. Charles F. Barrett for further orders.

By order of the Governor.

CHAS. F. BARRETT, Brigadier General,
Commanding Oklahoma National Guard.

MCFARLIN LIBRARY DEPARTMENT OF SPECIAL COLLECTIONS UNIVERSITY OF TULSA

オクラホマ州知事による戒厳令の発令
Tulsa Race Riot of 1921 Archive at University of Tulsa.

オクラホマシティ部隊の州兵たちは、消火活動と黒人の収容に当たり、黒人を保護するために収容所の警備を行った。バレット長官は、暴徒のリーダー格だった保安官代理たちの任命の取り消しを市長に求めた。白人の武装解除も行われたが、黒人とは違い、拘束されることもなく、何の咎めも受けず家に帰されただけであった。医師、法務執行官、赤十字（The American Red Cross）関係者以外の午後７時から午前７時の間の

[243] Brent Staples, “Unearthing a Riot,” *The New York Times Magazine,* December 19, 1999, 68; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”71.
[244] *Death in a Promised land*, 61-63.

タルサに到着したオクラホマシティ部隊の州兵たち。
右手に警察署入口がある。
Tulsa Race Riot, a Report, 12.

外出の禁止、黒人が外出する際には、全員が「警察の保護下」（Police Protection）と書かれたカードを６月７日まで携帯することを義務付けられた。このカードには、所有者の氏名、住所、雇用主の情報が記録されており、カード不携帯の場合は逮捕され、再度収容所に入れられた。白人は、軍の許可なしにはグリーンウッドへ立ち入ることは出来ず、黒人はカードを携帯していればグリーンウッドへの帰還を許可された。オクラホマシティ部隊の州兵は、バレット長官の指示で事業所や銀行の見回りも行った[245]。タルサはまるで「墓場のような静けさ[246]」に包まれていた。計り知れない被害をもたらしたタルサ人種暴動は、その発生から２４時間以内にその幕を下ろしたのである。

ロバートソン知事は暴動鎮圧後、「根性のある役人が数人いれば、こんなことにはなっていなかった」と、庁舎前に集まった群衆を解散させることができなかった保安官たちの不始末を非難した。バレット長官も、「このような惨事は見たことがない」と、受けた衝撃の強さを露わにした。もっと早くにオクラホマシティの州兵部隊が派遣されていれば、これほどの被害にはならなかっただろうというのが、市民の共通する思いであった。

[245] Cronely, 32.
[246] “The Tulsa Race Riot,” *The Independent*, 646.

タルサへ向かう途中、数人の男たちが、「黒人がタルサを占拠しようとして、大変な騒ぎになっている」と口々に言いました。私は警察署へ赴き、暴動鎮圧の任務を引き継ぎました。午前１２時５分頃、武装した白人たちが署の前に集まっていました。その中から私は６人の元軍人を選び、保安官代理に任命しました。・・・中略・・・２１歳以下の者に関しては、市が責任を負えないとして武器を取り上げました。・・・中略・・・私は約１５０人の群衆に向かって、「もしタルサの秩序維持に手を貸したいのであれば、勝手に動き回らず命令に従うように」と指導しました。彼らはこれに同意したので、秩序維持と黒人の連行を命じ、人命がかかっている状況以外では、決して発砲しないよう念を押しました。黒人の連行を命じたのは、ろくでもない黒人連中が白人の家を放火する可能性もあると考えたからです。次第に連行されてきた黒人が集まり始め、午前２時半頃、周辺の町々から列車や車で大勢の黒人が加勢にやって来るという情報がもたらされました。この情報はすぐにパトロールの連中にも知らされ、警戒するよう呼び掛けられました。私と上官は車に飛び乗り、パトロールに携わっていた１００人ほどの退役軍人を集め、米国在郷軍人会（the American Legion）の１人を責任者に任命し、駅に向かうよう命令しました。黒人を列車から下ろさないよう指示が出されましたが、実際には列車は貨物列車で、乗っていたのは乗務員のみでした。・・・中略・・・グリーンウッドの建物から火の手が上がっており、消防が出動しましたが、私の聞いたところによると発砲を受けて撤退しています。そうこうする内に火は燃え広がり、消防署長に連絡をし、再度出動の要請をしました。午前３時１５分頃、火は消し止められましたが、この時フリスコ駅付近では、激しい銃撃戦が始まっていました。私が現場に急行すると、プラットフォームに大勢の人々が集まっており、黒人居住地に向かって銃撃をしている者もいました。私はこの時点でボランティアを募り、銃撃を止めさせるよう指示を出すと、ライフルを持った男たち２０人ばかりが集まりました。・・・中略・・・黒人が白人居住地を攻撃した際には、ボランティアの警備隊が人命と財産を守るため大活躍をしたと聞いています。また、黒人の発砲や白人の誤射で、警官らが負傷しました。在郷退役軍人会に関しては、地元メンバーに加え、各地から応援の手が差し伸べられました。私が判断するに、５月３１日の午後９時から６月１日の午前９時までの間に武装していた者は、少なくとも５，０００人はいたと思います（オクラホマ州兵オクラホマシティ部隊少佐チャス・W・ディリー[Chas. W. Daley]の１９２１年７月６日のタルサでの証言）[247]。

こうした州兵による証言により、白人は暴動を起こしているのが黒人であると考え、

[247] "Information on Activities during Negro Uprising May 31, 1921," an Account from Major C.W.Daily to Lt. Col. L.J.F.Rooney, July 6, 1921,85-88(Tulsa Race Riot of 1921 Archive at University of Tulsa).

元軍人であるというだけの理由で、白人住民たちが保安官代理に任命されている事態も明らかになっている。黒人が白人居住地を攻撃したとも述べられており、これはＡＢＢが『クルセイダー（十字軍）[248]』（*The Crusader*）誌で述べた内容[249]と一致している。しかしながら、数の上で圧倒された黒人の攻撃が、白人側に大きなダメージを与えたとは考えにくい。少なくとも略奪の被害に遭った白人住民は１人もおらず、黒人に放火された住宅は報告されていないのである[250]。白人住居は、暴動終結後も暴動前と変わらぬ姿で立っていた。銃撃・略奪・放火を行った白人住民たちには帰る家があったが、黒人たちは住む家を奪われ、積み上げてきた生活の一切が灰と化し、彼らにとって最も重要だったプライドまでも失う危機に瀕していた。

炎上するグリーンウッド地区
Tulsa Race Riot, a Report, 1.

戒厳令が解除されたのは６月３日午後３時で、オクラホマシティの州兵は、４日の午前までタルサに駐留した。州兵に代わって、退役軍人会のメンバーが警察官の補佐として治安維持に当たった。また、友愛団体 Business Men’s Protective League もタルサの秩序回復に協力するため組織され、タルサにやって来る車両や人々の見張りを務めた。彼らがタルサ周辺の警備に配置された主な理由は、周辺地域の黒人住民たちが暴動の復讐に押し寄せることを白人たちが警戒したからである[251]。ボーリーをはじめとする黒人

248 ブリッグスによると、最高発行部数は3，6000部（“Letter to Theodore Draper in New York from Cyril Briggs in Los Angeles, March 17, 1958,” *Theodore Draper Papers*, Hoover Institution Archives, Box 31, Stanford University.）。
249 Commander, Tulsa Post, African Blood Brotherhood, 5.
250 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”88.
251 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 30; *Death in a Promised Land, 78*.

自治体や近隣の町で、報復のための準備が進められているという噂は暴動後もくすぶり続けたが、市外から黒人たちが攻撃を仕掛けて来ることはなかった[252]。暴動後、我に返り冷静になった白人たちは、自らが引き起こした被害の深刻さを認識し、黒人の復讐、つまり彼ら自身が攻撃の対象となることを恐れ始めたのである。

[252] Cronley, 32; Autobiography of Former Tulsa Mayor Loyal J. Martin Prepared in April 1940, 4(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

第５章　暴動後のタルサ

第１節　黒人の強制収容と屈辱

グリーンウッドから遠くまで逃れることができず、近隣の森や丘で一夜を明かす黒人住民たちも大勢いた。住む家や財産を失い、家族や仲間の身の上を案じていた彼らを待っていたのが、強制収容の屈辱であった。抵抗を試みる者、銃を所有していた者はその場で射殺された。黒人のプライドを凝縮したストラトフォードホテルもまた、容赦なく放火された。ストラトフォードは、ホテルには放火させないようにするという州兵のタルサ部隊の言葉を信用し、抵抗することなくホテルを離れ、収容所へ向かうことに同意した。しかし、彼が州兵の車に乗ったそばから、ホテル近隣のドラッグストアに白人暴徒が侵入し、好き放題略奪する様子が目に入った。次のターゲットがストラトフォードホテルであることは、まず間違いなかった。収容所から解放された後、ストラトフォードの目に映ったのは、灰の山と化したホテルの残骸であった[253]。

一方、炎上するグリーンウッドから娘と共に脱出したパリッシュは、翌日タルサ市の外れで赤十字のトラックに拾われ、タルサへ帰還することとなった。彼女は、その際感じた恥辱を以下のように綴っている。

> 私たちを乗せた赤十字のトラックは、グリーンウッドからではなく、白人地区からタルサ入りしました。トラックの荷台で、私たちはまるで移民のようにかしこまって座っていました。どんなに屈辱的だったか想像できますか？白人住民は、私たち見世物を見るために、家の外に出て来ていました。哀れみの目で見る人もいれば・・・・・、ちょっと待って、もしかしてあれは笑顔？私たちが降車した催事場には、数百人の黒人が家畜のように詰め込まれ、監視下に置かれていました。・・・中略・・・そこでは、美しい屋敷や建物を所有していた人々、真正直に働いていた人々が、サンドイッチ、水、着替えの服を何とか手に入れようと、列に並んで待っていました[254]。

> 朝５時半過ぎに銃を携えた男たちが家にやって来て、私に家から出るよう命令しました。私は両手を上げるよう言われ、数人が私の持ち物を検査しました。道路に出て並ばされ、「帽子を被り、ましな靴に履き替えたい」と願い出ましたが、拒絶され、再び並ぶよう強要されました。３０人から４０人が列に並ばされ、手を上げたままの状態で催事場まで歩かされました。ごろつき数人が、列を乱した者の足下めがけて発砲したり、車で列に突っ込ん

[253] Hirsch, 5-6.
[254] Parrish, 13-14.

だりする輩までおり、数人がなぎ倒されました。催事場に着くと、再度身体検査をされ、家畜のように１ヶ所に集められました。病人や負傷者は建物の前に放置され、何の手当も受けられずに数時間に亘って捨て置かれていました（ジェームス・Ｔ・Ａ・ウエストの証言）[255]。

１９２１年６月１日、グリーンウッド。「黒人をタルサから追い出す」と書かれており、
白人が黒人を追い出したがっていた可能性を物語る[256]。
Tulsa Race Riot, a Report, 18.

老いも若きもトラックに積み込まれて収容所に運ばれる道すがら、白人住民は私たちの惨めな姿を面白がって、拍手喝采していました（ロゼッタ・ムーアの証言）[257]。

タルサ市街をトラックで運ばれる３０ブロックもの間、ずっと手を上げさせられっぱなしでした。腕はだるく、焼けつくような日差しに帽子すら被らせてもらえず、頭がすっかり干上がっていました。太陽の光を遮ろうと、ほんの少し手を下げた途端、銃でしたたか殴られ、「手を上げておけ！」と命令されました。トラックで運ばれる私たちを見て、白人た

---

255 *Ibid*.,24,

256 人種暴動検証委員会のメンバーで、タルサ人種暴動に関する著書や論文を執筆したアルフレッド・ブロフィ（Alfred L. Brophy）博士は、2007年の「タルサ－グリーンウッド人種暴動賠償請求法案」（Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007）の公聴会でこの写真について触れ、「この写真の文言は、暴動の本質を捉えていると思います。黒人への憎悪が、タルサの黒人を追い出そうとする動機となったのです。黒人は黒人らしくしろという見せしめの意味もあったのです」と述べた（“Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”12.）。

257 Parrish, 26-29.

ちは男も女も子供も笑って、浮かれ騒いでいました（J・C・ラティマーの日時・場所不詳の証言）[258]。

８０歳の高齢男性は、下半身不随であるにも拘わらず、白人たちから収容所まで行進するよう命令された。男性が、足が不自由な旨を伝えると、白人たちはその妻に収容所へ行くよう命令した。妻は、夫を残しては行きたくないと訴えたが、夫は行くよう諭した。妻が家を出た途端、夫は銃殺され、家は放火された（『シカゴ・ディフェンダー』[*Chicago Defender*] 紙の１９２１年６月１１日の記事）[259]。

午前１０時頃、オクラホマシティの州兵が到着したと知らされました。少しして、軍服を着た男たちが車でやって来て、タルサはもう大丈夫だから戻るようにと言いました。グリーンウッドでは身体検査を受け、催事場に行くよう言われ、帽子を脱いで手を上げたまま行進させられました。催事場に着くと、役人にまた数回身体検査をされました（Ｒ・Ｔ・ブリッジウォーターの証言）[260]。

黒人男性は捕まるとすぐに武器を剥奪されました。１１時頃には白人たちが私の母と姉妹を連れて、安全のためにと催事場へ向かわせました。私ともう１人の妹は、午後１時頃、トラックに乗せられて催事場へ行きました。そこでは母が見つからず、母の捜索を始めました。赤十字の助けもあり、夜になってようやく教会で母を見つけることができたのですが、母はそれから２週間後に亡くなりました。この暴動のせいで、私たちみんなの人生がめちゃくちゃにされたと感じます（キャリー・キンローの証言）[261]。

妻と私は銃弾が飛び交う中外に出たのですが、家から 1 ブロックのところで白人たちに囲まれました。私は、「妻は病人だから離れるわけにはいかない」と訴えました。彼らは私の手を頭上に上げさせ、身体検査をしました。私は帽子が被りたかったのですが、白人の 1 人が躊躇している間に、妻がひょいと投げて寄越しました。私は丘の上まで歩かされ、そこで１０歳から６０歳くらいの白人の男たちから口々に罵倒されました。そこからトラックに乗せられダウンタウンまで運ばれ、再び身体検査をされ、罵詈雑言を浴びせられました。１０歳の少年に、「おとなしく命令に従え！」と怒鳴られました（黒人男性Ａ・Ｊ・ニ

[258] *Ibid*., 44.
[259] *Chicago Defender*, June 11, 1921(Cited in Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”74.).
[260] Parrish, 34.
[261] *Ibid*., 36-37.

ューマン[A.J.Newman]の１９２１年６月２４日タルサでの証言）[262]。

数百人の黒人男性が、手を上げた状態で白人地域を通り抜けて、収容所まで行進させられました。そばには銃を持った白人護衛たちがついて、考えつく限りの悪態をついていました。その脇を、黒人家庭から盗み出された価値ある品々を積んだトラックが走り去って行きました。後に残ったものはすべて灰と化していました。５月３１日火曜日の夜は暴動で、水曜の夜明けまでには侵略が始まっていました（パリッシュの証言）[263]。

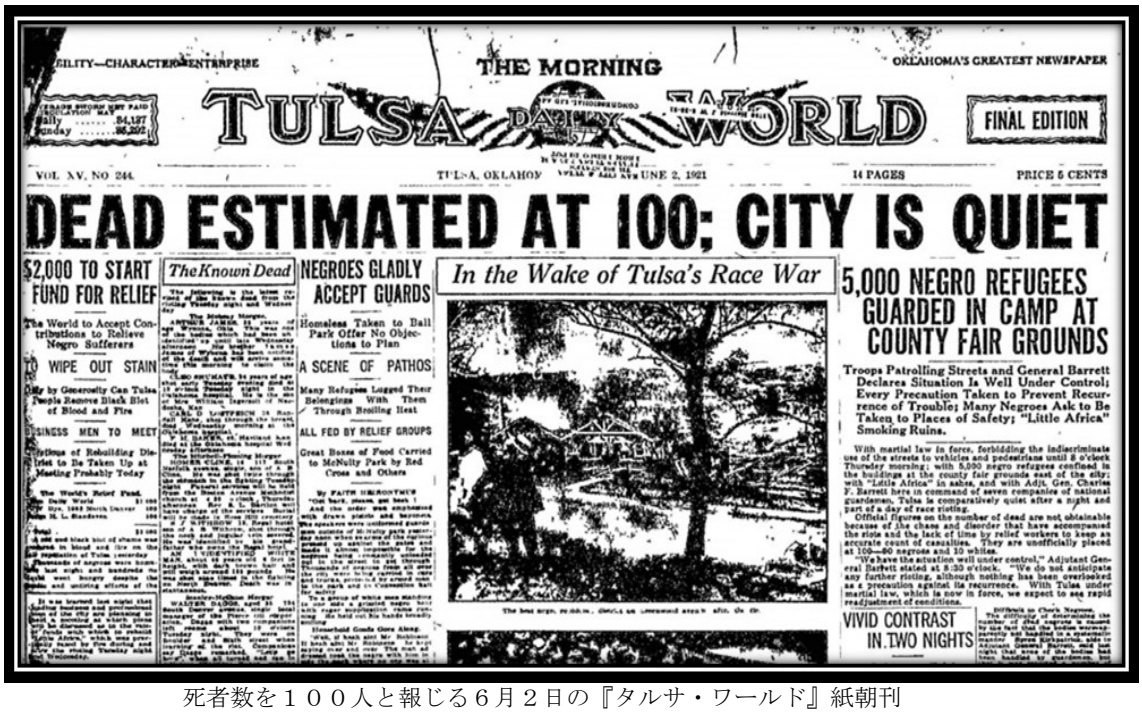
大勢の白人たちが、黒人の行進を眺めていました。憐みを感じている様子の人もいましたが、大半は面白がっているだけでした。私たちが外出する際には「警察の保護下」と書かれた札を身につけなければならず、札を付けていないものは逮捕されました。暴動からしばらくは屈辱の連続でした。白人雇用主のサインがなければ、グリーンウッドに戻ることすらできなかったのです。（ディンプル・Ｌ・ブッシュの証言）[264]。

強制収容所へ連行される黒人たち
Shelby Woods, “An Oklahoma Story: Unveiling Racial Violence in Tulsa,” *Brainstorm*, V. II (2005-2008), 46.

[262] *Ibid*., 38-41.
[263] *Ibid*., 50.
[264] *Ibid*., 53-54.

黒人が自由に動き回るに当たり、住所・氏名・年齢・雇用主（白人に限定）の氏名が明記された緑の札を身に着けていなければならないという警察の規制が発効し、無職の者は赤いカード（このカードの持ち主が午後７時以降に外出していた場合逮捕される、と書かれていた）を身に着けることを義務づけられました。グリーンウッド地域のそこここに警備員が立ち、住民たちは彼らに手荒い扱いを受けたのです。ありとあらゆることが屈辱でした。幸運にも家に戻れたとしても、待っているのは略奪されて荒らされた家でした。靴、ピアノ、車に至るまで、すべて白人に奪われてしまったのです（リチャード・Ｊ・ヒルの証言）[265]。

多くの黒人が白人の軍人に付き添われて行進しているのが、窓から見えます。彼らは保護されるために野球場へと連れて行かれるのです。家を失くした彼らには、何の落ち度もないのです。きっと無力感に苛まれ、一体どうしてこんなことになったのかわけが分らないでいることでしょう[266]。


THE MORNING
TULSA DAILY WORLD
OKLAHOMA'S GREATEST NEWSPAPER
FINAL EDITION
VOL. XV, NO 244. TULSA, OKLAHOMA JUNE 2, 1921 14 PAGES PRICE 5 CENTS

DEAD ESTIMATED AT 100; CITY IS QUIET

$2,000 TO START FUND FOR RELIEF
The World to Accept Contributions to Relieve Negro Sufferers

TO WIPE OUT STAIN
Only by Generosity Can Tulsa Twoels Remove Black Blot of Blood and Fire

BUSINESS MEN TO MEET
Plans of Rebuilding District to Be Taken Up at Meeting Probably Today

The Known Dead

NEGROES GLADLY ACCEPT GUARDS
Homeless Taken to Ball Park Offer No Objections to Plan

A SCENE OF PATHOS
Many Refugees Lugged Their Belongings With Them Through Broiling Heat

ALL FED BY RELIEF GROUPS
Great Boxes of Food Carried to McNully Park by Red Cross and Others

In the Wake of Tulsa's Race War

5,000 NEGRO REFUGEES GUARDED IN CAMP AT COUNTY FAIR GROUNDS
Troops Patrolling Streets and General Barrett Declares Situation Is Well Under Control; Every Precaution Taken to Prevent Recurrence of Trouble; Many Negroes Ask to Be Taken to Places of Safety; "Little Africa" Smoking Ruins.

VIVID CONTRAST IN TWO NIGHTS

死者数を１００人と報じる６月２日の『タルサ・ワールド』紙朝刊
Tulsa Race Riot of 1921 Archive at University of Tulsa.

暴動の直後から、黒人たちは時に暴力を伴う方法で、次々と市内数か所に設けられた収容所へと送られた。黒人たちは列に並んで銃を突き付けられ、手を上げた状態のままで、白人の見世物になりながら収容所まで行進させられた。気温４０度近くにまで上昇

[265] *Ibid*., 66.
[266] "The Lessons of Tulsa," 280.

する中の、汗と恥辱にまみれた負け犬の行進であった。この時、黒人は黒人でしかなかった。どれほど教育を受け、如何にグリーンウッドで尊敬を集める人物であったとしても、白人社会では黒人は黒人以外の何者でもなかった。黒人たちは負けた。彼らは惨めな戦争の敗者であった。

留置場や裁判所は２５０人の黒人で埋め尽くされ、重武装したオクラホマシティの州兵が収容所となった催事場を囲んだ。６月１日の夜には、合計約６，０００人もの黒人「難民」が催事場に収容された。催事場が満杯になると、新たな収容所が設置された。当時グリーンウッドの人口は約１０，０００人であった。実に６割以上の住民が強制収容されたことになるのである[267]。

パリッシュは、なぜ罪のない人々が監視下に置かれる必要があるのか疑問を感じていた[268]。保安官代理たちは次々と黒人を収容所へ送り込み、ある者は、捕えた６人の黒人を縄でつなぎ、バイクの後ろにつないで収容所まで走らせた。収容所では健康な黒人は労働を強要され、エバンス市長（T.D.Evans　任期1920-1922）は、「職に就いていない者、または就労を拒否する者は、全員浮浪罪で拘留する[269]」との警告を出した。黒人は当初、白人の身元引受人がいなければ解放されなかったが、やがて全員が就労証明書を提出する条件で解放された。６月７日には黒人の拘留者は４５０人ほどにまで減ったが、黒人の家を略奪し、燃やしたのは白人暴徒だったにも係らず、白人市民の間からは、黒人の解放は治安の悪化を招くのではないかと危惧する声も上がったのである[270]。

拘束される黒人男性
Tulsa Race Riot, a Report, 77.

収容所から出るのにも屈辱が伴いました。黒人たちは白人に身元の保証をしてもらわなくては自由になれなかったのです。もちろん私にそんな当てはありませんでした（J・C・ラ

[267] Hirsch, 109,144; *Death in a Promised Land*, 63.
[268] Parrish, 17.
[269] “Must Work or Go to Jail is Edict of Mayor Evans,” *Tulsa World*, June 4, 1921, 1.
[270] Prentice, 156, Messer and Bell, 863.

ティマーの証言）[271]。

市当局は、強制収容はあくまでも黒人の身の安全のためであったと主張している[272]。しかし、白人の罪悪感から生じる恐怖心が、黒人住民をひとまとめにして身動きが取れない状態に留め置く動機になったとも考えられる。コミュニティが壊滅し、全ての財産を失って自暴自棄になった黒人たちが、白人を一斉に攻撃するのではないかと密かに恐れたのである。しかし、白人の憂慮は杞憂であった。努力の結晶のコミュニティを失い、黒人住民たちは茫然自失の状態だったからである。報復どころか、黒人こそが更なる暴力を恐れていた。黒人の人種のプライドは粉々に砕け散っており、白人を攻撃するような余力など、どこをどう探しても残っていなかった。

[271] Parrish, 47.
[272] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”86.

黒人を収容する白人たち
Death in a Promised Land, 65.

1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey, 27.

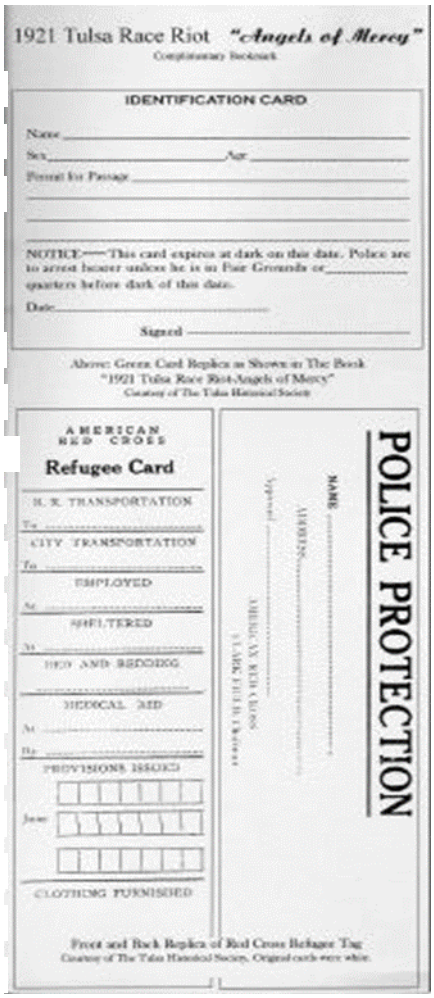
野球場に収容された黒人住民たち
Death in a Promised Land, 73.

第２節　甚大な被害

多くの家々から財産が略奪され、家具類が道路に積み上げられている。焼け残った家の前には、高齢者や子供たちがぼんやりと座っている。誰もが打ちひしがれ、頭を垂れている。その様子から伝わってくるのは、生き残った安堵などではない。友人で隣人だったはずの人々が、いとも簡単に彼らの家々を焼き払い、悪魔のような残忍な所業を行った理不尽さを彼らはどうしても理解することができないのであった（１９２１年６月２日の『タルサ・ワールド』）[273]。

タルサの黒人地帯は、全域真っ黒焦げの瓦礫の山である。掘っ立て小屋１つ残っていない。銃を携帯した州兵たちがパトロールを続け、荒廃した町をうろつく家畜たちが唯一の命の証である[274]。

黒人が多くの富を蓄積してきたタルサ、全米中で最も繁栄していた黒人ビジネス街の１つだったグリーンウッドは、今や灰の降り積もった山でしかありません。瓦礫が撤去されるに従って、焼け焦げた遺体が発見されています。この暴動の正確な犠牲者数が判明することはないでしょう。私は警察署に留め置かれ、負傷者の治療に当たる白人・黒人の医師たちを、日がな１日手伝わされました。トラックいっぱいに積まれた黒人の遺体と負傷者が、次々と到着しました。遺体がそれからどこへ運ばれたかは、私には分かりません。中には、車の後ろに縄で括られ、銃弾が浴びせられる中を引きずりまわされた黒人もいるのです。銃弾が飛び交う中、裸のまま逃げた女性、赤ちゃんを抱いていた女性もいます。このようなこと、またとてもここでは口にできないようなことが、真の民主主義国家を標榜する、ここアメリカで起こったのです。ああ、アメリカ！



外出する際には、黒人全員が「警察の保護下」（Police Protection）と書かれた ID カードを、１９２１年６月７日まで携帯することを義務付けられた。
Tulsa Race Riot, a Report, 13.

[273] *Tulsa World*, June 2, 1921(Cited in “Prologue,” *Tulsa Race Riot*, *a Report*, iv.).
[274] Bob Burke and Angela Monson, *Roscoe Dungee*: *Champion of Civil Rights*, University of Central Oklahoma Press, 1998, 64.

残忍なアメリカ！アメリカは神に背を向けたのです（A.H.の証言）[275]。

パリッシュは、一夜明けて目にしたグリーンウッドについて、「長年の苦労と蓄財が、瓦礫と灰の山、ねじ曲がった鉄屑に姿を変えていた[276]」と描写している。暴動後に再びタルサを訪れたＮＡＡＣＰのウォルター・ホワイトは、「タルサの人種暴動は凄まじい残虐性と、強固な意志に基づく人命と財産の破壊であり、アメリカでこれに匹敵する暴力は見たことがない[277]」と、その凄惨さを語っている。黒人を完全に服従させるための手段としての暴力の行きつく果てを、タルサ人種暴動は克明に示したのである。

１９２１年５月２６日に私用でタルサを出て、暴動後の６月５日に帰郷したある黒人住民は、以下のようにその衝撃を綴っている。

私が後にしたタルサと、今目の前に広がるタルサの何という落差!タルサは生命と希望に躍動する町で、人々は満ち足り、ビジネスは順調でした。彼らは活動的で、真摯に未来を見据えた人々でした。長年の努力の成果を、今やっと手にした人々だったのです。タルサの黒人ほどプライドを持って生活していた人々はいなかったんです（リチャード・Ｊ・ヒルの証言）[278]。

私たちが収容所から家に戻ってみると、戸締りをしっかりしていなかったのか、すべてがひっくり返されていました（リチャード・Ｊ・ヒルの１９２１年６月２２日のタルサでの証言）[279]。

収容所を出て家に帰ってみると、すっかり荒らされていた上に、見知らぬ白人が私の服を試着している最中でした。最も屈辱的だったのは、白人の子供たちに侮辱の言葉を浴びせられたことです。（J・C・ラティマーの証言）[280]。

パリッシュは、赤十字本部で娘のために古着を分けてもらわなければならなかった際の恥辱について綴っている。

---

[275] Parrish, 49.
[276] *Ibid*., 14.
[277] John Hope Franklin and Scott Ellsworth, “History Knows No Fences, An Overview,” *Tulsa Race Riot, a Report,* 24.
[278] Parrish, 56.
[279] *Ibid*., 25-26.
[280] *Ibid*., 47.

無造作に積み重ねられた服や靴を前に、私は自立するために懸命に働いてきた日々を思いました。苦々しい屈辱でした。古着をもらうために並ぶだなんて！でも一体他にどうすることができたでしょう？持ち物は汚れ、買い物にすら行けないのです。ここにいる人々は、必要以上に古着を手にする者がいないように、私たちを見張っているようでした（恐ろしい！）[281]

タルサの病院は重傷者や重体者であふれ返り、死体保安所には死体が山積みとなっていた[282]。パリッシュは、病院の負傷者の光景に驚愕した。

まるで、戦争で考えうる限りの傷を負った兵士たちのようでした。足を失った人々、顔にやけどを負った人々、片目を失った人や頭を包帯でぐるぐる巻きにされている人もいました。頭が混乱している女性たちも大勢いました。もしかして、ここはフランスの野戦病院なのでしょうか[283]？

６月２日の雨で、くすぶり続けた炎はようやく完全に鎮火された。州知事は、ＵＮＩＡシカゴ支部の黒十字看護師５０人派遣の申し出も断り、黒人住民の救援とコミュニティ再建のために州の財源を活用することもしなかった[284]。被害住民を一顧だにしない州と市に代わって救援を開始したのが、モーリス・ウィローズ（Maurice Willows）を中心とする赤十字であった。当時４５歳だったウィローズは、黒人被害者の最大の支援者となり、「災害救援報告書」（Disaster Relief Report）で、タルサ暴動を「黒人の反乱」ではなく「内戦」と定義した人物である。赤十字は、被害者救援と復興に関する全権委任を受け、暴動の被害を免れたブッカー・T・ワシントン高校に赤十字本部を設置した。知事が州兵軍用テントを貸し出すことを拒否したため、赤十字は教会、学校、公共の建物に被災者用テントを調達しなければならなかった。

タルサには公立病院は無く、患者たちは民間病院に送られたものの、どこもすし詰め状態だったため、民間住宅が即席の診療所となった。赤十字は差しあたって最低限の生活必需品、特に、不足していた飲料水の確保に追われ、散り散りになった家族の捜索にも当たった。催事場には、家を失った住民用に数百の仮ベッドが設置された。ある報告書によれば、赤十字の救援活動に携わったタルサ市の白人女性はたったの１０人に留ま

[281] *Ibid*., 18.
[282] “The Lessons of Tulsa,” 280.
[283] Parrish, 19.
[284] Hirsch, 130; *Death in a Promised Land*, 82.

り、内３人が看護師であった。その年の夏から冬にかけても依然救援活動は続き、原状復帰には数年はかかるだろうと見込まれていた。赤十字が公式に災害救助活動を終了したのは、１９２１年１２月３１日である[285]。タルサ人種暴動は、赤十字がその人的・物的資源を供給し、人道支援を行った初の「人災」として永久にその汚点を歴史に刻むことになった[286]。

赤十字の調査によると、放火は主に屋内で行われ、マットレスやシーツ、家具類など燃えやすいものを積み重ねて点火されていた。飛行機からの投下物で燃えた家やビルもあったと報告されている[287]。焼け落ちた家屋は１，２５６棟で、２１５棟の家屋と３１４のビルが略奪の被害を受けていた。暴動後２４時間以内に、１８４人の黒人と４８人の白人が手術のため入院し、５３１人が様々な損傷の治療を受けた。この数には、タルサ以外で治療を受けた人々の数は含まれていない[288]。ウィローズは、４８人という白人入院患者数の少なさについて、白人が赤十字を故意に避けたのではないかと推測する。なぜなら、全ての患者が傷を負った経緯の説明を求められたからである。暴動に関わったことが知れると、後に法的措置が取られるかもしれないと恐れたと考えられるのである。

正確な死者数を把握するのは困難であるが、タルサの公式発表の、黒人２１人、白人１０人という数は、暴動直後からその信憑性が著しく疑われており、白人犠牲者５０人、黒人犠牲者１５０から２００人程度ではないかと見込まれていた。ウィローズは死者数に関して、「推測でしかない。５５人と言う人もいれば３００人と見積もる人もいる。遺体はすぐに運び去られ、多くの埋葬記録が見つかっていない[289]」と述べている。バレット長官が取った措置もまた、死者数の把握を困難にした一因である。バレット長官は、タルサ市全体の緊張状態に加え、教会がホームレスのシェルターとなっていることを鑑み、タルサ市内での葬儀を全て禁止したのである。そのため、死者がどのように埋葬されたのかについての記録が存在しない。当初から執拗に、「２台のトラックに積まれていた黒人の死体が川に捨てられた」という情報が流れていた[290]。タルサ市は黒人犠牲者の身元確認を怠ったまま埋葬し、その埋葬場所はいまだに特定されていない[291]。黒人住民の多くが、亡くなった

---

285 Parrish, 75-76; “Blood and Oil,” 370; Prentice, 156; *Black Wall Street,* 207-208; Hirsch, 130-131.
286 *Black Wall Street*, 68; Hirsch, 131.
287 *Black Wall Street,* 48.
288 Wheeler, E1; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*27.
289 Hirsch, 118.
290 “The Eruption of Tulsa,”110.
291 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”87.

家族や友人がどこに埋葬されたかを知ることがなかったのである。黒人犠牲者数やその死因を特定させない意図もあったであろうし、５月３１日と６月１日のタルサの気温は４０

壊滅したグリーンウッド
Hirsch, 190-191.

度近くまで上がっており、伝染病が蔓延する可能性を考慮し、遺体を素早く処理する必要もあったと考えられる。６月１日、２日に救世軍（The Salvation Army）が、墓堀人として働いていた３７人の黒人に食料を提供している。この２日間で、彼らは１２０の墓を掘らされている。１つの穴に１人ずつ埋葬される際、棺桶は使用されていない。複数の埋葬場所に言及する生存者もいるが、中にはタルサから１２マイルも離れた場所もあった[292]。尚、白人の犠牲者数が少なく見積もられすぎているのではないかという見方もある。人口動態統計局（Bureau of Vital Statistics）の推定では、黒人犠牲者数は２６人、白人犠牲者数は１０人であるが、当時１６歳だった黒人男性W・D・ウィリアムスは、白人がグリーンウッドに侵攻を試みた際、多くの白人が銃撃されるのを目撃している。オクラホマシティの黒人紙『ブラック・ディスパッチ』(*Black Dispatch*)は、１９２１年６月１０日の紙面で、「タルサの著名な黒人市民によると、犠牲者は約

[292] "The Eruption of Tulsa,"910; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 27.

１００人で、黒人・白人が半々」であると報じた[293]。

表３ 赤十字による医療救援活動の概要

赤十字が経費を負担した白人入院患者数	４８
赤十字が経費を負担した黒人入院患者数	１３５
暴動以降の黒人入院件数	９８
病院で治療を受けた全人数	２３３
１９２１年１２月の時点で入院中の患者数	２２
死亡者数	１８
入退院を繰り返す患者数	１９３
暴動中と暴動後の応急処置件数	１９３
治療に当たった黒人医師数	１１
治療に当たった白人医師数	１１
看護師数	４６

Black Wall Street ,220. の資料を基に作成。

１９２１年６月１８日から２８日にかけての大雨でアーカンソー川が氾濫し、テント暮らしの黒人住民たちは、人災に続いて次々に襲いかかる天災に苦しめられた。８月５日には嵐に見舞われ、テントを吹き飛ばされた５０人の黒人住民が赤十字本部に避難した。暴動後７カ月に亘ってタルサに滞在したウィローズは、テント暮らしで冬を乗り切

[293] *Death in a Promised Land*, 69.

るのは不可能だと判断した。本来、グリーンウッドの再建は州や市の責任であるのだが、赤十字は預貯金のない黒人住民の住宅再建にも手を貸している。ウィローズが木材を調達し、黒人の大工が住宅再建に取りかかったが、クリスマスの時点でも４９家族がまだテント暮らしを強いられていた[294]。必要に迫られてテントで生活する人々の中で、病気などで亡くなった数を入れれば犠牲者数は更に増加する。彼らもまた、暴動の被害者であった。１年以上テント暮らしをした住民もおり、洪水、熱波、寒気を耐え抜かなくてはならなかった。天然痘をはじめ、肺炎やチフス、栄養不足、精神的ストレスが蔓延し、

住居を失った１，０００人を超える人々がテント暮らしを強いられた。
1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey, 30

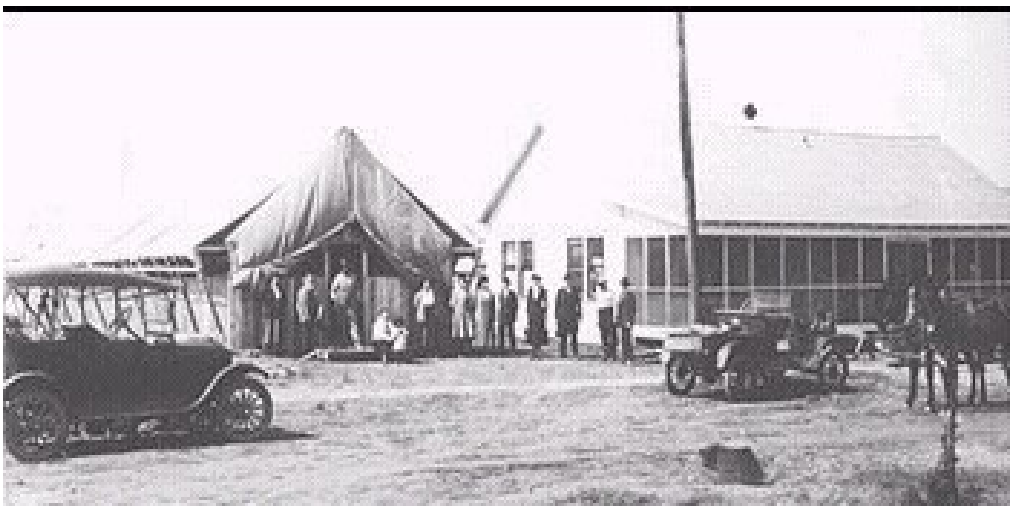
死産も報告されている[295]。暴動から１か月後には、赤十字は暴動が直接の原因ではない疾病の治療に追われていた。２２５人が結核症を発症し、２，５００件もの性感染症が確認され、住民の２５％に広がっていた。長期的な治療の必要性から、赤十字の資金提供でグリーンウッドに病院が建設され、モーリス・ウィローズ病院（The Maurice Willows Hospital）と命名された。

長引く黒人の窮状にも、白人のタルサ市民のほとんどが無関心であった。ウィローズは、「タルサの人々はグリーンウッドのひどい有様を全く理解していない。肺炎が蔓延し、住民の６割がいまだに支給された簡易ベッドで寝なくてはならない。彼らにとって

[294] Hirsch, 145-146,160.
[295] *Ibid*., 118.

は、枕カバーやシーツなど贅沢品なのです。とにかく眠る場所を確保するというレベルの話なのです」と、州からも市からも見放され、捨て置かれたグリーンウッドの惨状を訴え続けた[296]。ウォルター・ホワイトは、１９２１年１０月２５日付の書簡で、黒人住民の状況を以下のように記録している。

> タルサの黒人のほぼ全員がテント暮らしをしており、ＮＡＡＣＰが赤十字を通じて提供した板で建てた小屋住まいの者が少数います。タルサから届いた手紙には「秋を迎え、寒さをしのぐ手だてはなく、このままだと冬にはインフルエンザや肺炎による死者を大勢出すことになるでしょう。これもすべて、再建の約束を反故にした白人市民のせいです」と書かれていました[297]。



モーリス・ウィローズ病院
Tulsa Race Riot, a Report, 14.

赤十字事務局の資料によれば、１９２１年６月１日から翌１９２２年１月１日までの７か月間に赤十字が救援に当たった家族数は、２，４８０（８，６２４人）に及んでいる[298]。赤十字は、主に以下の救援活動に時系列で従事した。

① ６軒の民間病院での緊急手術及び治療
② 看護師による病院及び屋外での救援活動
③ 赤十字を指導する医師団の結成

---

[296] *Ibid*., 159.
[297] *Death in a Promised Land*, 90.
[298] Parrish, 75-76.

④　被災者へのワクチン及び抗チフス血清の投与

⑤　看護師による被災状況調査

⑥　医療救護所の設置

⑦　病院の設備の充実

⑧　被災者の長期治療を見込み、より充実した医療施設を建設し、黒人労働者の協力を得て赤十字が設備を整備。費用は６８，０００ドル。

⑨　１９２１年９月１日付で、赤十字本部として機能してきたブッカー・Ｔ・ワシントン高校から撤退

⑩　赤十字による病院経営を黒人が引き継ぐことを目的とした、黒人病院組合（Colored Hospital Association）の結成[299]

表４　赤十字による医療・生活援助

登録家族数	２，４８０
登録人数	８，６２４
衣服、ベッド、ベッドリネン、テント、洗濯器具、調理具、食器などを受け取った人数	１，９４１
赤十字テント内の教会数	８
投薬件数	８
周産期医療患者数	２６９
交通手段供給件数	４７５
電報処理件数	１，３５０

Events of the Tulsa Disaster,76. の資料を基に作成

[299] *Black Wall Street,* 215-216.

その献身的な救護活動で黒人の厚い信頼を得、１０万ドルを支出した赤十字は、１９２１年１２月にタルサを去った。タルサから引き上げるに当たり、赤十字は、粉塵、汚泥にまみれたグリーンウッドの抱える問題点として、公衆トイレと下水設備の不十分さなどの非衛生的状況と、治安の悪化を挙げた[300]。

第３節　アメリカの反応とタルサの恥

タルサ人種暴動は世界的にトップニュースとして扱われ、ロンドンの『タイムズ』(*The Times of London*) 紙も、「オクラホマで激しい暴動が発生」と報じた。『フィラデルフィア広報』(*The Philadelphia Bulletin* 1847-1982) 紙は、「オクラホマ州タルサで流血の惨事。今日のアメリカ文明において考えられない事態」とレポートし、『ケンタッキー・ジャーナル』(*The Kentucky State Journal*) 紙は、タルサ人種暴動を「オクラホマの恥」、『クリスチャン・レコーダー』(*The Christian Recorder*) 紙は、「タルサはアメリカに泥を塗った」と、それぞれ断罪した[301]。『インディペンデント』(*The Independent*) 誌は、「暴動ではない。虐殺だ。虐殺以外の何物でもない」と断じ、「人種偏見は人類への反逆罪である」と痛烈に批判した[302]。『ニューヨーク・イブニング・ポスト』(*the New York Evening Post*) は、「国辱」と嘆き、『カンザスシティ・ジャーナル』(*Kansas City Journal*) は、「文明と野蛮を分かつ僅かの差」について語り、『セントルイス・ポスト・ディスパッチ』(*St. Louis Post-Dispatch*) は、「この国には醜い人種問題が存在する」と述べ、タルサ人種暴動の４年前にセントルイスの隣町、イーストセントルイス (East St. Louis) で起き、１２５人の犠牲者を出した人種暴動を振り返り、「人種問題は暴動、放火、殺人では解決し得ない」と断言した。また『セントルイス・スター』(*The St. Louis Star*) 紙は、「このままでは人種間の紛争は、１つの市や町に留まらず、州規模で展開されるかもしれない」と警鐘を鳴らした。『オクラホマシティ・リーダー』(*The Oklahoma City Leader*) は、「暴動が頻繁に起こりすぎ、まるで日常茶飯の事態になってしまっている。この流れが止められなければ、人々に計り知れない悲しみをもたらすだろう」と主張した。『ニューヨーク・タイムズ』は「アメリカの都市が経験したことのない未曾有の人種暴動」と報道し、「もしタルサ規模の暴動が海外で起こったなら、アメリカ人はその無法さに呆れ果てるに違いない」と皮肉っ

---

300 *Ibid*., 219; *Death in a Promised Land*, 92.
301 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*29.
302 "The Turk in Tulsa," *The Independent*, June 18, 1921,641.

ている。テキサス州の『ダラス・ニュース』（*The Dallas News*）紙は、「タルサの悲劇の罪は白人にある」と白人の責任を追及し、カンザスの『エンポリア・ガゼット』（*The Emporia Gazette*）も、「もちろん、白人のほとんどにタルサの非道な大災害を起こした責任はないだろう。しかしそれでも、ほとんどの白人に責任があるのだ。コミュニティで起こったことの責任は、そのコミュニティの指導者たちにあるのだ[303]」と、タルサ市と市のリーダーたちの罪と責任に切り込んだ。このように、当のタルサが黒人の窮状に背を向ける中、アメリカ中の白人メディアが暴動の根底にある人種問題を指摘し、白人の責任を厳しく追及し、早急に人種問題を改善する対策を講じる必要があると説いていたのである。

１９２１年６月８日発行の『リタラリー・ダイジェスト』（*The Literary Digest*）誌は、タルサ規模の人種暴動はアメリカのどこででも起こりうるとしてアメリカ国民の注意を喚起した上で、考え得る暴動の要因を挙げ、人種問題解決策を提案している。これらはホワイトが挙げた「８つの要因」とも重なる部分が多い。

> ニューヨークの黒人週刊誌の編集者の話では、人種憎悪は多くのアメリカの都市で潜在的に存在している。ニューヨーク市に限ってみても、きっかけ１つであっという間だろうということだ。タルサ暴動を含む過去数年の人種間の紛争の要因は主に、
>
> - 自警団精神
> - 強制労働
> - 人種偏見
> - 白人と黒人の経済的競争
> - 人種偏見を煽る過激なプロパガンダ
> - 失業
> - 腐敗政治
> - 新しい黒人（ニューニグロ）の闘争性
>
> などであり、解決策としては、
>
> - 新たな立法

[303] "Mob Fury and Race Hatred as a National Danger," 8; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 28-29.

- 厳格で公正な法執行
- 黒人の組合の結成

が挙げられる。

『リタラリー・ダイジェスト』誌は更に、暴動は世界規模で報道されており、民主主義国家を標榜するアメリカに深刻なダメージを与えていると報じた。また、『ヒューストン・ポスト』（*The Houston Post*）は、アメリカはユダヤ人虐殺など海外の人権蹂躙は公然と非難するが、国内の人種暴動に対して断固として反対する国論を作り上げなければ、他国で起こる如何なる非人道的行為にも抗議する資格はないと主張し、国内の人種問題は一向に改善の兆しが見えていないと指摘した。また、ヒューストンでも過去２年間で数千の白人・黒人市民が銃を入手したと報じ、「遅かれ早かれ人種憎悪の火花が散るのではないか」と、南部の多くの地域で、人種衝突を念頭に置いた武装化が進んでいる危機的状況について警鐘を鳴らしている[304]。

一方の黒人メディアの報道であるが、カンザスシティの『コール』（*The Call*）紙は、「黒人が迫害される際に試されているのは、他ならぬ白人文明である。なぜなら、黒人の権利が蹂躙される際に無視され、踏みつけられているのは、アングロサクソン法だからである」と指摘し、『セントルイス・アーガス』（*St. Loius Argus*）は、「タルサの無実の女性・子供たちが悲痛な叫びを上げる時、アンクルサムは一体どこにいるのだろうか？」と、人種問題を放置し続けるアメリカ政府を非難した。『ブラック・ディスパッチ』は、「タルサを所有しているのは疑問の余地なく白人である。黒人は法を順守しようと努めるが、白人が法を破壊し続けているのだ」と報じた。

[304] “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”8.

焼け跡から持ち物を探す人々
Tulsa Race Riot, a Report, 148.

５，０００人以上の白人群衆によって起こされたこの悲劇は、タルサ市の評判を汚し、この素晴らしい石油の町に、決して消えることのない黒いしみを付けたのです（氏名・不詳の黒人住民の証言）[305]。

パリッシュは以下のようにタルサの教訓について綴っている。

教育の機会や経済的に恵まれた黒人は、しばしばそうでない黒人を軽視し、優越感を抱きがちです。しかし今回のような試練に直面した時、私たちは皆同じ黒人であると思い知るのです。黒人は皆同じように被害に遭ったのです。あの日、黒人は黒人でしかなく、両手を上げて何ブロックも行進させられました。今こそ勇気を振り絞り、共に助け合うのです。そもそも黒人の中に優劣など存在しないのですから[306]。

暴動を生き延び、周囲に反対されながらも娘と共にタルサで生きていく決心を固めた

[305] Parrish, 47.
[306] *Ibid*., 23.

パリッシュにとって、暴動後のタルサは黒人住民の正念場を迎えていた。経済的に上昇するのも肝要であるが、人種の団結こそがグリーンウッドの復興には欠かせなかったからである。

第４節 責任追及の枠組み

> 攻撃的な黒人は実際にいたんです。しかし、多くの戦闘的な黒人男性は暴動で死んだので、それ以降、人種間の衝突はなくなりました。銃を持った黒人たちは、白人に撃ち殺されました[307]。

居住地域が壊滅し、大勢の犠牲者を出す事態に見舞われたにも拘わらず、暴動の責めを負ったのは黒人住民で、コミュニティの復興も黒人の責任とされた。白人暴徒がグリーンウッドを壊滅させたタルサ人種暴動は、黒人にとっては、不公正・不正義の象徴であった。しかし、タルサ市長をはじめとする白人リーダーたちや白人住民たちにとって、タルサ人種暴動とは、戦闘的黒人が過剰に平等を求めて起こした抵抗運動であった。武装して郡庁舎に現れた黒人たちは、暴力と好戦性の象徴として捉えられ、タルサに対する反逆者として認識されたのである。グリーンウッドとその住人たちは、暴動の犠牲者ではなく、「片づけるべき厄介な問題」として扱われた。

オクラホマシティ州兵部隊のチャールズ・ベイツ（Charles Bates）は、「人々は、『暴動』とは言わず、口々に反乱だ、反乱だ、と言っていました。黒人たちが、権利を主張するための抵抗行動を計画していたとも聞きました」と報告した[308]。白人市民団体のキワーニスクラブ（The Kiwanis Club）は、「タルサを乗っ取ろうとした悪徳黒人たちと命を懸けて勇敢に闘い、武装解除した白人市民の行動を称賛」し、１００％アメリカニズムを掲げるある白人団体は「この悲劇は武装黒人が事前に計画した反乱であり、何の大義もなく白人に発砲した」と主張した。

６月９日に州によって招集され、１２日間に亘って審議を行った大陪審（Grand Jury）のメンバーは全員が白人男性であり、暴動の直接の原因は武装黒人にあるとの結論を出した。白人住民たちは誰一人として罪に問われず、オクラホマ州もタルサ市も、暴動に関する調査を行うことはなかった[309]。タルサ人暴動は、黒人の蜂起・反乱という枠組み

---

[307] Ruth Wingfield Interview, 147(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[308] Messer, 109.
[309] *Ibid*., 9, “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”4.

で語られることとなったのである。

> 暴動の直接の責任は、ディック・ローランド（Dick Rowland）を保護する目的で、１９２１年５月３１日の夜に郡庁舎にやって来た黒人のグループにあります。白人がローランドを留置場から連れ出すような試みは一切確認されておらず、郡庁舎に集まっていた白人たちは、リンチ目的ではなく、ただの興味本位で集まっていたにすぎませんでした。白人の間にリンチにつながるような暴力的空気はなく、リンチや武装といった話も出ていませんでした。武装した黒人たちが現れるまで、白人たちは物静かにしていたのです[310]（６月２５日に提出された大陪審の最終報告書の抜粋）。

大陪審の最終報告書では、暴動の間接的な原因として、「社会的平等を求める黒人のプロパガンダ」と「法執行機関の怠慢」を挙げている。社会的平等を許さない白人ではなく、社会的平等を求めた黒人の責任が問われたのである。８５人以上の黒人が起訴にまで至ったが、１９２１年９月に行われたローランドの裁判に当事者のサラ・ペイジ（Sara Page）が出頭せず、訴訟は却下された。黒人男性が１人、銃器を隠して携帯していた罪で３０日間の禁固刑を言い渡されているが、実際に服役したかどうかについては不明である[311]。結局、銃撃・略奪・放火の限りを尽くしたタルサの白人住民の誰１人として拘束されることはなく、１つのコミュニティを壊滅させた行為の刑事責任を負った白人住民はいなかったのである。

市内の黒人新聞社２社は暴動で焼失し、暴動を報道したのは白人メディアのみであった。６月４日の『タルサ・ワールド』は、“Bad Niggers!”の見出しを掲げた社説で、「悪人であることを豪語してはばからない黒人たち」に暴動の責任を負わせ、彼らが「タルサのビジネス地区を武装して侵略し、町を乗っ取ろうとした[312]」と裁定した。６月１１日の『タルサ・トリビューン』は、「黒人新聞は、暴動の責任を白人になすりつけようとする報道で溢れている。やめさせなくてはならない」「無法者の黒人たちが武器や弾薬を収集していたことは間違いない。ニガータウン（Niggertown）には法も秩序も存在しなかった」「人種暴動は不良黒人が計画したもので、法を無視する黒人たちに至っ

---

[310] “Grand Jury Blames Negroes for Inciting Race Rioting,” *Tulsa World*, June 26, 1921, 3(Cited in *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 31.).

[311] *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 32; “Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law,”167; Hirsch, 128; *Death in a Promised Land*, 96-97.

[312] “Bad niggers,” *Tulsa World*, June 4, 1921, 4.

ては、より規模の大きい暴動を９月までに計画している[313]」と報じ、６月１５日の『タルサ・ワールド』紙には、「暴動の責任は、武装黒人やその追随者たちにある。半分でもその責任を白人になすりつける者には、はっきりと間違いを指摘するべきである。壊滅した地域はもともと治安に問題があった場所であり、崩壊は時間の問題だった」というエバンス市長の発言が掲載された。市長は更に、「全くの無実の黒人にふりかかった災難は不幸なことで、できる範囲内で援助を受けて然るべきである。けれども、戦闘行為による災害は、罪深い者にも無垢な者にも平等に訪れるのが常である。どのような紛争、侵略、反乱でも起こりうることである[314]」と、罪のない黒人が危険にさらされ、財産を失っても自業自得だというメッセージを発したのである。黒人は黒人である限り、被害を受けても放置されるか、罰せられたのである。議会は、黒人の銃の所持を禁止する法案まで提出するに至った[315]。

白人側の共通理解は、黒人全員が好戦的でないにしろ、一部の戦闘的黒人の存在は、黒人地域全体が報いを受けるに十分であるというものであった。『タルサ・トリビューン』は、６月４日に掲載された社説で、黒人と黒人居住地への蔑視・嫌悪を隠そうともせず、法を守らず暴動を起こした悪徳黒人たちがなぜ逮捕されないのか疑問を呈している。

> タルサにはもう二度と黒人居住地を作らせてはならない。黒人居住地は悪と堕落の巣窟であった。・・・中略・・・グリーンウッドに出向けば、好きなだけ酒が手に入り、そう望めば誰もが口にできないほど下品なダンスホールや売春宿にも出入りできた。こうしたことは市も警察も把握していたにも拘わらず、何ら手を打たずごまかし続けてきたのである。グリーンウッドには多くの望ましくない黒人が住んでいた。不良黒人に酒と麻薬と銃を与えたら、世界中を支配できると勘違いするにちがいない。この４つすべて―酒、麻薬、不良黒人、銃―がグリーンウッドに存在したのだ。・・・中略・・・暴動を起こしたのは粗悪な黒人たちである。市民はどうして暴動を防ぐことができなかったのか知りたいはずだ。なぜ黒人たちは法を軽視して守らないのだ？なぜ彼らは法に歯向かうことができるのだ？警察は何をしていたのだ？不良黒人たちは拘束されるべきで、違法行為からはもう手を引くべきだ[316]。

---

313 "It Must Be Stopped," *Tulsa Tribune*, June 11, 1921, 10(Cited in Alfred L. Brophy, "The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court," *Oklahoma Law Review*, Vol.54, 2000, 70.).
314 "Riot Statement Made by Mayor," *Tulsa World*, June 15, 1921, 7.
315 "Public Welfare Board Vacated by Commission," *Tulsa Tribune*, June 14, 1921, 1(Cited in "The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court," 71.).
316 "It Must Not Be Again," *Tulsa Tribune*, June 4, 1921, 8.

グリーンウッドの復興に賛同する意見もあったが、暴動は一部の「問題のある黒人」によって引き起こされたのであり、根本的な問題解決には、黒人居住地そのものをなくすべきだと主張する者もいた。暴動の責任は、「貧しい黒人、ギャンブラーや密売人、共産主義者[317]」にあると言い立てる者もいた。教会関係者たちは、人種の対立は人種分離によって防ぐべきであり、「ホテル、教会、学校などを分離し、社会的平等など目指すべきではない」「人種平等など過去に存在したこともなく、これからも存在しえないだろう。これは神が決めたことだ」と、白人と黒人の関わりをなくし、黒人がアメリカ人としての権利や平等を要求しなければ人種問題は解決されるという立場を表明した。暴動から数日後、ある白人牧師は、暴動の責任は黒人にあり、白人群衆には何ら暴力的要素はなかったにも拘わらず、「酔っぱらった黒人犯罪者たちが現れたことで、白人が怒りに駆られたのだ[318]」との主張を展開した。白人の教会関係者たちは、暴動の責任は戦闘的な黒人にあるという見解を出し、ある司祭は信徒を前に「社会的平等などは、黒人にも白人にも考えられる限り最悪のシナリオである[319]」と語った。この司祭はまた、暴動の前の３月にタルサを訪問していたデュボイスについて、「この国で最も危険な黒人」であり、「（デュボイスの）タルサ訪問の意図を追及しなかったことを深く後悔している」と、白人には急進派と理解されることも多かったデュボイスと暴動の関連を仄めかす発言もしている[320]。タルサ市長も教会のリーダーたちも、暴動の責任を「戦闘的黒人」に負わせ、グリーンウッドを「悪の巣窟」と断定し、彼らが被った被害を自業自得と切り捨てた点で一致している。また、デュボイスが編集に携わっていた『クライシス』誌も、グリーンウッドに出回っていた急進的雑誌の１つとして名指しされ、他州で起こった白人による黒人の迫害を報道することで、白人への怒りと嫌悪を煽っていたと話す白人もいた[321]。

グリーンウッドにはしかし、必ずしも白人に対する嫌悪や不信が蔓延していたわけではない。平和にビジネスを営むためには、白人との間に波風を立てず、敢えて人種問題には立ち入らないほうが賢明だと考える人々もいたからである。そのため、白人が暴動を「黒人の反乱」という枠組みだけで語ることにはより一層の強い抗議と非難の意を表した。

---

317 Wheeler, 1E.
318 *Death in a Promised Land*, 76.
319 “Causes of Riots Discussed in Pulpits of Tulsa Sunday,” *Tulsa World*, June 6, 1921, 1.
320 Messer and Bell, 854-859; Hirsch, 126; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey*, 29.
321 “The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court,”92.

白人たちは、人種平等を訴える黒人に暴動の責任を押し付けようと躍起になっているようですが、私たちは何も、急進的な変化を求めているわけではないのです（M・D ラッセルの証言）[322]。

青年は謝るべきだった。女性も真実を説明するべきだった。新聞は扇情的報道をすべきでなかった。白人は留置場前に集まるべきでなかった。法の裁きに任せるべきだった。黒人は警察機関をもっと信頼すべきだった。警察は早い段階で、白人・黒人のグループ双方を解散させるべきだった。この「・・・べきだった」とは何と悲しい言葉だろうか！しかし、眠っていた１２，０００人の黒人を家から追い出し、収容所まで行進させ、白人に比べハンデを背負った状態で苦労した者たちから奪い、放火した事実を正当化することは決してできないのです（リチャード・Ｊ・ヒルの証言）[323]。

白人たちは略奪・放火だけでは飽き足らず、暴動の責任を黒人リーダーたちに被せたのです。常に人種間の問題の種となっていたのは、無教養で定職にも就かない白人・黒人の良からぬ連中の係り合いであって、黒人リーダーたちは一度だって問題を起こしたことはなかったのです （P・S・トンプソンの証言）[324]。

自らも危うく銃撃されそうになり、略奪の犠牲者ともなった黒人医師ブリッジウォーターは、暴動後数日に亘って病院に泊まり込み、負傷者の治療に当たった。しばらくすると彼には身に覚えのない「栄誉」が与えられた。

私が２年前に暴動を引き起こした張本人だという報道が流れたのです。まるでグリーンウッドに多くの不動産を持つ私の評判を地に落とし、影響力をなくしてしまおうとしているかのようでした（R・T・ブリッジウォーターの証言）[325]。

テキサス州の『フォートワース・スター・テレグラム」（*The Fort Worth Star-Telegram*）紙は、北部の新しい黒人（ニューグロ）の扇動が暴動の根本的な原因であったと述べた。

端的に言うと、グリーンウッドの黒人たちは、ニューヨーク、シカゴといった大都市の黒人過激派の暴力的プロパガンダに焚き付けられたのだ。過去２年半、黒人雑誌には南部白

[322] Parrish, 43.
[323] *Ibid*., 62.
[324] *Ibid*., 30.
[325] *Ibid*., 35.

人を糾弾する記事が溢れており、極端なものでは暴力を推奨してもいる。このようなプロの扇動家たちは、彼らが説く暴力の結果には一切おかまいなしに、気の向くままに白人への憎悪を煽っているのだ。タルサ人種暴動は、東部の宣伝屋が南部の黒人に植え付けた醜く根深い不満の結果であり、彼らの教育の成果だと言える。この暴動で家族や住む家を失くした黒人は、暴力黒人のプロパガンダの被害者なのである[326]。

タルサ暴動の責任を具体的に押し付けられたのは、アメリカ全土に１５０の支部を持ち、メンバー数５万人を有すると公言していたＡＢＢであった。ＡＢＢは、１９１９年にブリッグスを中心にニューヨーク市で設立された組織で、彼らが取り組むべき課題として挙げたのは「リンチに対する武装自衛、普通選挙、黒人の平等権、団結権、人種隔離の即時撤廃[327]」であり、自らを「コミュニティを進んで死守しようとする、人種の雄々しい救い主[328]」であると宣伝していた。レッドサマーの激しい人種暴動を受け、ブリッグスは「黒人の、黒人による、黒人のための政府[329]」を要求する。彼は早くから黒人解放のための黒人の自治権を訴えており、ＡＢＢは黒人のための黒人州が必要であると主張した最初の団体でもあった[330]。また、黒人の自衛を推進し、コミュニティの安全を守る目的の「自警団的民兵団」の組織も提案していた[331]。実現されていたかは定かではないが、タルサには復員兵が多くおり、民兵団の組織は十分可能だったと考えられる。

１９２１年６月３日の『ニューヨーク・タイムズ』紙が、「当局が、ＡＢＢタルサ支部の非常に攻撃的な複数のメンバーが、黒人群衆を率いて動乱を煽った証拠を握っている」と報道した[332]。ＡＢＢは、タルサ暴動で黒人大衆を「扇動」したとして名指しされたのである。ＡＢＢは暴動扇動を否認し、『ニューヨーク・タイムズ』の４日の紙面で、代表者のシリル・ブリッグス（Cyril V. Briggs 1888-1966）が、「タルサ人種暴動は、ある意味歓迎すべき事態だったと言えなくもない。黒人が臆病者ではなく、権利を守るためにどこまでも闘うことを証明したからだ」「ＡＢＢの活動目的は、攻撃されたら反撃しなければならない、と黒人にはっきり認識させることである。でないと黒人は臆病者のままであり、白人の手にその運命を永遠に握られてしまうことになるからだ。黒人

326 “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”9
327 Robin D.G.Kelly, *Race Rebels-Culture, Politics, and the Black Working Class*-, The FreePress, 1994,106.
328 ロビン･D･G･ケリー「フリーダム･ドリームス」高廣凡子、篠原雅武訳、人文書院、2011年、90頁。
329 ケリー、90頁。
330 Dawson, 112.
331 *Death in a Promised Land*, 24.
332 “A.B.B. Accused of Fomenting Tulsa Riot,” *The Crusader,* Vol.4, No.5, July 1921, 12.

が生き残るためには積極的自衛が必須である」「闘う黒人に栄光あれ、反撃した新しい黒人に栄光あれ、１件のリンチより１，０００の暴動の方が望ましいではないか」と、ＡＢＢの信条を述べた。しかしブリッグスは、暴動を起こしたのはあくまで白人側であるとの主張を変えることはなく、ＡＢＢの暴動扇動については否定している。記事の一部は以下の通りである。

> タイムズの記事を読むと、まるでタルサの不幸な出来事の責任がＡＢＢにあるといわんばかりであるが、我々は黒人が不正な暴力に対して自衛のために団結することを目指しているだけである。これまでに判明している事実から判断すると、暴動を引き起こして攻撃をしたのは、明らかに白人の方である。・・・・・自衛の権利は、白人だけのものなのだろうか[333]？

１９２１年７月号の『クルセイダー』誌の記事、「ＡＢＢ、タルサ暴動を扇動したとして糾弾される」（“A.B.B. Accused of Fomenting Tulsa Riot”）で、ＡＢＢは「攻撃されたら黒人は反撃できるし、すべきだし、またしなくてはならない[334]」と訴えている。オクラホマ州軍当局は、ＡＢＢが暴動を扇動し、「黒人を束ねて暴動を画策している、高度に攻撃的な団体」であると非難した。しかしブリッグスは、暴動の扇動に関しては「全くの見当違い」であり、「ＡＢＢは侵略や攻撃目的で組織されているのではなく、無防備になりがちな黒人を守る目的で組織されているのだ」と否定している[335]。ＡＢＢ攻撃の裏には、リーダー不在の黒人集団が効果的に自衛をした事実に、白人たちが不意を突かれ、驚愕したこともあったと考えられる。タルサの白人は黒人たちをみくびっていた。復員軍人が存在したとはいえ、ＡＢＢのような戦闘的組織による手助けがあったからこそ、グリーンウッドの黒人は抵抗し、闘えたに違いないと結論付けざるを得なかったのである。

１９２１年１０月１日付の共産党系新聞『労働者』（*The Toiler*）に、ブリッグスがＣ・Ｂ・バレンタイン（C.B.Valentine）のペンネームで書いた記事「黒人代表会議」（“The Negro Convention”）で、彼はＡＢＢが「タルサ暴動で黒人の自衛を指導して

---

333 “Denies Negroes Started Tulsa Riot-Head of Brotherhood Defends the Purpose of the Organization,” *The New York Times*, June 5, 1921, 21.
334 “A.B.B. Accused of Fomenting Tulsa Riot,”12.
335 Cyril V. Briggs, “The Tulsa Riot and the African Blood Brotherhood,” *The Crusader*, Vol.4, No.5, July 1921, 10.

糾弾された実績を持つ[336]」と、暴動扇動を疑われた事実をアピールしている。ＡＢＢの暴動扇動の証拠は結局見当たらなかったが、ブリッグスはこの証拠の不在を逆にＡＢＢの宣伝に利用したとも考えられる。タルサ支部が黒人大衆を組織し、主導したとして、ＡＢＢの知名度は一気に国際レベルにまで引き上げられることとなったからである。秘密結社的存在から一夜にしてメジャーとなったＡＢＢは、ニューヨーク市ハーレムで暴動に関する集会を開き、暴動の犠牲者への寄付金を集める催しも行っている[337]。このような活動は、人種問題啓発の目的だけでなく、暴動への関与の積極的アピールであったと見ることも可能である。

エルズワースは、ＡＢＢタルサ支部は少なくとも１９１７年には確認されており、アメリカ中に支部が存在していたと述べているが、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（University of California at Los Angeles）の歴史学教授ロバート・ヒル（Robert Hill）によると、タルサにおけるＡＢＢ支部の存在は暴動以前には一切確認されていない。彼は、ＡＢＢ支部が存在し、暴動に関与したとする方が組織にとって得策だという判断があったのではないかと推測している。ヒル教授は、「ＡＢＢは東海岸から広まることはなく、地理的に見てタルサに支部があったとは考えにくい」との見解を示している。「（タルサに）ＡＢＢが存在したとは思わない。でも結局のところ、そんなことは問題ではない。ＡＢＢは当局にスケープゴートにされ、そのスケープゴートは黒人にとって実在の英雄となったのだ。黒人が立ち上がり、団結して闘ったという自信をもたらした」。ＡＢＢは当初２０人以下のメンバーで発足し、最盛期でも３，０００人を超えることはなかった。ブリッグス自身が、「『大衆的組織』とまでは発展しなかった」と後に認めている[338]。

暴動から３７年後の１９５８年、恐らくは１９６０年に出版された「アメリカの共産主義とソ連：形成期」（*American Communism and Soviet Russia, The Formative Period*）を執筆中であった、歴史家のセオドア・ドレイパー（Theodore Draper 1912-2006）に宛てた書簡で、ブリッグスはタルサ人種暴動について以下のように触れている。

---

336 C.B.Valentine (Cyrill Briggs), “The Negro Convention,” *The Toiler*, Vol.4, No.190, October 1, 1921, 13.

337 Mark Solomon, *The Cry Was Unity-Communists and African Americans, 1917-36*, University Press of Mississippi, 1998, 15; Makalani, 66.

338 Hirsch, 262-263.

ＡＢＢが暴動を扇動したと非難された件に興味がおありでしょうね。あの暴動では、黒人は反撃しただけでなく、白人居住地にまで攻め入ったのです。ＡＢＢが暴動を扇動したというデマを流したのは、私にインタビューした『ニューヨーク・タイムズ』です。根拠は単に「支部」という意味で我々が使用していた "post"という単語にあったのでしょう。"post"には、「軍隊の駐屯地」という意味もあるからです。 また、タルサ支部のメンバーのほとんどが退役軍人だったことから、戦闘的なイメージを持ったとも考えられます[339]。

この書簡を執筆した当時、７０歳になっていたブリッグスによれば、ＡＢＢタルサ支部は実在したが、暴動を扇動した事実はなかった。ＡＢＢのような黒人の抵抗・反撃を標榜する団体が出現した背景には、激しい人種差別と、まかり通る不正義とがあった。自衛のために武装を訴えるこうしたグループは、白人にとっては現状を揺るがす現実的脅威であり、リンチや虐殺といった残忍な社会統制手段を用いる動機となった。しかし、オクラホマの黒人の多くは、自由民や南部からの移民など、フロンティアを生き抜いた人々の子孫である。日頃から銃に親しみ、退役軍人も多く、自立と自衛の精神でコミュニティを自らの手で発展させてきたタルサの黒人たちには、指導者は必要なかったのである。アメリカ人として自ら立ち上がり、闘う準備は整っていた。たゆまぬ努力でようやく手にした安全地帯をそう易々と手放すわけにはいかなかった。「約束の地」に懸けられた希望、そして多くの黒人の夢と信頼を裏切ったオクラホマへの積年の恨みも、彼らの戦闘性に拍車をかける要因になっていたかもしれない。１９世紀に先住民の奴隷としてオクラホマに強制移住させられ、自立と自衛の精神で経済的成功を掴んだ黒人たちには、闘う精神と人種のプライドが宿っていた。タルサ暴動の前には、黒人の積極的自衛を訴えたデュボイスと、アメリカに幻滅した黒人たちに新たな「約束の地」の希望を与えたチーフ・サムもタルサを訪れていた。彼らは黒人大衆に向けて、黒人を欺き続けるアメリカと闘うか、或いは捨て去るかの選択肢をグリーンウッドの住民たちに向かって提示していたのである。彼らの取るべき道は明らかであった。

オハイオ州の黒人新聞ユニオン（*Union*）は、暴動から１０日後の６月１１日の紙上に「タルサ暴動！」（“Tulsa Riot!”）の見出しの記事を掲載した。この記事は、タルサ暴動の遠因として「反黒人感情を煽る激しいプロパガンダ」を挙げ、直接の原因には、黒人に権利を与えず、正義を行うことを怠ってきた政治に責任の所在があると批判している。

[339] “Letter to Theodore Draper in New York from Cyril Briggs in Los Angeles, March 17, 1958.”

黒人は白人と同じ軍服を着て、フランスで民主主義のために闘った。白人と同じ権利がないなど、到底認められるはずもない。黒人は服従を拒否し、果敢に権利を求め続けるだろう。このことは黒人自身にも危険をもたらし得るが、この流れを止めることは不可能であり、暴動を招いたのは、不正義をまかり通らせてきた政治の失態である[340]。

タルサ人種暴動の背景には、人種間の軋轢、白人の権益喪失への恐怖、黒人の成功と闘争性に対する反感があった。北部のような多様な黒人団体やリーダーは存在しなかったかもしれないが、「新しい黒人（ニューニグロ）」の闘う精神は、フロンティアを力強く生きてきたオクラホマの黒人に浸透し、闘う土壌を作り上げていた。様々な苦難を乗り越え、自由を求めて「約束の地」オクラホマに移住し、戦争で祖国のために闘った彼らは、祖国にも同様の忠誠を求めた。アメリカのために闘い、貢献した彼らが、政治的権力や富の拡大といった応分のシェアを期待・要求するのは当然のことであった。戦後、アメリカも、そしてオクラホマも、戦前と何ら変わらず黒人を二級市民の座に押し留め、排斥し続けると悟った時、彼ら自らの手で確立したコミュニティを死守する用意は出来上がっていたのである。

貧困・差別と決別し、ひとかどの人物になろうと人生の再出発を目指してオクラホマのフロンティアにやって来た黒人たちは、理不尽な扱いに頑強に抵抗する資質を備えていた。白人にとって、グリーンウッドの黒人リーダーたちは高慢で分をわきまえず、暴動の責任を負わせるのに都合の良い存在であった。その１人が『タルサ・スター』紙の発行人、Ａ・Ｊ・スミサーマンであった。１９１３年にタルサに移住した彼は、新聞を媒体にして影響力を行使し、人種平等実現のため妥協することなく粘り強い闘いを挑んだ人物であった。彼は常々、ジムクロウは倫理的に間違っていると明言していた。１９１７年にオクラホマ州のデューイ（Dewey）で、黒人家屋２０軒が白人暴徒に放火された事件では、スミサーマンは自ら現地に赴いて調査し、その報告書を州知事に提出している。この報告書を受けて、デューイの市長を含む白人３６人が逮捕されることとなった。翌１９１８年にはオクラホマ州ブリストー（Bristow）で、黒人男性が危うくリンチされかかる事件があった。スミサーマンは、州の援助を要請した後、３人の黒人と共に現場へ赴き、すんでのところでリンチを食い止めている。しかしながら、彼自身が白人暴徒に捕えられ、脱出するまで１時間に亘り暴行を受けた。彼は、自身の暴行事件についても詳しく新聞で報道した。暴動で『タルサ・スター』社も住居も焼き尽くされた

[340] Wendell P. Dobney, “Tulsa Riot!,” *Union*, Vol.16, No.24. June 11, 1921, 1-2.

スミサーマンは、ある告発によってタルサを追放されてしまう。その告発というのは、スミサーマンが自身のオフィスで黒人を組織し、ローランドのリンチ阻止を指示したというものであった[341]。多くの白人が、率直な語り口で知られるスミサーマンの『タルサ・スター』が白人に対する黒人の敵意を煽ったとして責め立て、スミサーマンが武装黒人を組織したと非難したのである。

ストラトフォードもまた、暴動の責任を問われることとなった。ストラトフォードをはじめとする黒人住民たちが、白人居住区に乗り込み、白人を銃殺し家屋を損壊したと報じられたのである。実際には、リンチの噂を聞きつけたストラトフォードは、数人の仲間と郡庁舎へ様子を見に行っただけである。それがどういうわけか、「暴動を扇動した」と訴えられることになった。彼はタルサから列車で脱出したが、２日後にカンザス州で拘束される。１９２１年６月７日の『トリビューン』は、「ストラトフォードを裁判に連れ戻せ」（“Bring Stradford Back for Trial”）という見出しの記事で、カンザス州で身柄を拘束されているストラトフォードは黙秘を続けているが、タルサへ送還される見通しであると伝えている。しかし結局ストラトフォードはタルサへ戻ることなく、シカゴへ逃げ、逃亡者としてその生涯を終えたのである。グリーンウッドでストラトフォードに次ぐ著名人であったスミサーマンもタルサから脱出し、ニューヨーク州で亡くなっている。アメリカ一の黒人医師と称えられ、住民の誇りであったジャクソン医師も殺害され、暴動で１５７，７８３ドル（現在の価値で１００万ドル以上）を失ったグリーンウッドの創設者ガーレーも、暴動後行方不明となった[342]。

暴動の責めを負って逃亡せざるを得なかったスミサーマンとストラトフォードは、グリーンウッドのリーダーであると同時に、住民の精神的支柱でもあった。彼らの不在は、後にタルサ人種暴動がタブー視され、語り継がれなくなったことにも大きく影響したと考えられる。もしも『タルサ・スター』社が焼失していなければ、スミサーマンは白人の暴力と、タルサ市の不正義・不誠実さを余すところなく正確に伝えたことであろう。ストラトフォードやガーレーも、不当な行為を告発し、立ち向かったはずである。彼らは経済的にすべてを失っただけでなく、その名誉と未来までをも奪われてしまったのである。

---

[341] Parrish,76-79.『タルサ･スター』社の前で数人の武装黒人が集合し、郡庁舎に向かったという記述はあるが、スミサーマンが黒人を組織してローランド保護を命じたという記録は見当たらない(*1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey*,19.)。

[342] Staples, 68, “Bring Stratford Back for Trial,” *Tulsa Tribune*, June 7, 1921; Hirsch, 154. “Prologue,” vi-vii; *Black Wall Street,* 64-65.

暴動の最中から暴動後にかけて、タルサを脱出した黒人住民たちもいる。徒歩で近隣の町に逃げた者もいるが、中には下水路を９マイル歩き続けた者もいた。暴動から２週間の間にタルサを後にした住民の数は、２００人程度と見積もられている。この内、１５０人に関しては赤十字が列車のチケットを購入し、支払い能力を有していた黒人たちも半額を免除されている[343]。タルサを捨てた人々は、コミュニティ全壊の被害者である黒人に責任を負わせようとするタルサに愛想を尽かし、更なる暴力を恐れたのである。グリーンウッドに平和と経済的基盤を見出した黒人たちが、またもや裏切られ、同じ町の市民から住む場所を奪われたのである。とはいえ、タルサの白人住民全員が黒人を敵視し、攻撃したわけではもちろんない。黒人メイドや黒人住民を自宅にかくまった白人もいれば、暴動で負傷した黒人を地下に数日隠し通した白人もいた。黒人をかくまっただけでなく、直接白人暴徒と対決した白人もいる。タイピストのメアリー・ジョー・エアハート（Mary Jo Erhardt）は就寝中、知人の黒人ポーター、ジャックの差し迫った声で起こされた。武装白人に追われるジャックを大型冷蔵庫に素早く隠れさせた彼女は、その後すぐに激しいノックが聞こえたと話している。

> 玄関口に３人の粗野な中年男性が立っていて、体格のいい男がカギのかかったドアを無理やりこじ開けようとしていました。３人とも銃口を私に向けていました！「一体何の用？」と、私は厳しい口調で尋ねました。不思議と銃は怖くはありませんでした。それどころか、あまりの怒りに３人を八つ裂きにもできそうでした。３人の武装白人が、たった１人の無害な黒人を追い詰めているなんて。私は誰に対しても憎しみを感じたことなどなかったんです、この時までは。１人が、「奴はどこへ行った？」と尋ねたので、「誰がどうしたって？」と聞き返しました。「あの黒人だ。中に入れたのか？」「あのね、私は誰一人ここに入れたりなんてしていない！」と答えました。彼らが立ち去って１０分くらい経って、ようやく安心できたのでジャックを外に出しました。もう少しで凍死しそうでしたが、とにもかくにも生きていたのです[344]！

グリーンウッドで商店を営んでいたユダヤ人一家の１人は、暴動時に黒人たちを白人の目に触れないよう保護していたと証言した。

> 地下室に黒人たちをかくまっていたのを覚えています。母は黒人の子供を自分のスカート

[343] *Death in a Promised Land*, 74.
[344] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”79-80.

の中に隠していました[345]。

暴動に心を痛めた白人たちがどれほどいたのかは不明であるが、食糧や寄付金を送った白人たちもいる[346]。彼らにとって、暴動は悲劇であるだけでなく、タルサの恥であった。

黒人新聞『セントルイス・アーガス』紙は、１９２２年４月の紙面でコミュニティの指導者の不在による人種間の断絶について述べている。

> ８，０００から１０，０００の黒人住民がいるが、ビジネスでも個人でも白人社会とつながりを持つ者はほとんどいない。住民はそれで満足で、この分離を利用して人種のプライドや人種向上の刺激剤として利用しているフシすらある。分離しているせいで、黒人の努力や業績が全く白人に伝わらない状態となってしまっている[347]。

暴動は人命・財産を奪っただけではなく、もともと乏しかったタルサ住民の人種間の信頼関係もまた、大きく後退させる結果となったのである。

むすび

ローランドが白人暴徒の手に落ちてしまうかもしれないという差し迫った事態に瀕し、その多くが復員軍人である武装黒人の集団が郡庁舎前に現れた。彼らの姿に衝撃を受けた白人たちは、我先にと銃を取りに走ったのである。リンチの危険性は、当時現実的であった。暴動の１年ほど前には、白人青年が警察に護送されている途中に白人暴徒の手に落ち、リンチされ、殺されている。白人ですら法執行機関による保護が期待できない中、黒人が守ってもらえるとは到底期待できなかった。彼らは自分自身、家族、仲間、そしてコミュニティを自ら死守しなくてはならない立場に置かれていたのである。しかしながら、彼らの決死の覚悟も、白人側には「反乱」と受け取られ、人種平等を求め続けた黒人住民の声は、暴動の大きな要因の１つとみなされてしまうこととなったのである。

法執行機関の白人暴徒への対応は後手に回り、暴徒を解散させる機を逸してしまう。タルサ市は、暴動鎮圧のために多くの市民を保安官代理に任命して武装させたが、彼ら

---

345 *Black Wall Street,* 67.
346 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”88.
347 George W. Buckner, “Second View of City of Ruins,” *St. Louis Argus*, April 21, 1922(Cited in Parrish, 95.).

は全員が白人で、暴動を鎮めるどころか暴力行為に加担したのである。一方、保安官代理やタルサの州兵たちによって拘束され収容所に連行されたのは、全員が黒人であった。家主を失った家は略奪の格好の対象となり、その痕跡を消すために放火が行われた。かくして、インディアン準州の田舎町にそのルーツを持ち、ブラックウォールストリートと呼ばれた全米の黒人の憧れの町は、その日常と共に姿を消したのである。

廃墟となったグリーンウッドは、黒人に対する白人の蔑みや憎悪を如実に現したが、人種偏見やそこから生まれた隔離政策や嫌悪の念だけで、コミュニティ一帯を焼き尽くすほどの凄まじい蛮行の動機になりえるだろうか。白人社会にとっても黒人の労働力は必要であり、無視できなかったはずである。グリーンウッドの破壊により、黒人は金銭や不動産だけでなく、精神的支柱をも奪い去られた。グリーンウッドは単なるコミュニティではなく、彼らの、そしてアメリカ中の黒人たちの希望の象徴だったのである。ジェームズ・ハーシュは、暴動が、「敵意の表出に加え、黒人と白人のお互いに対する無知と無理解、コミュニティの断絶と不信感[348]」を反映していると述べている。白人は、黒人が人種の境界を超えてタルサ市を乗っ取ろうとしていると誤解し、武装黒人たちが力でタルサを制圧しようとしたと信じて疑わなかった。黒人は暴力的傾向があると思い込んでいた白人は、比較的少数の黒人の姿にも重篤な危機感を抱いたのである。ローランドをリンチから守るために集まった武装黒人たちはもちろん戦闘的であったが、白人群衆は数では１０倍以上勝っていたにも拘わらず、オクラホマ中の黒人が白人を攻撃しに大挙してやって来るのではないかとパニックに陥った。黒人がタルサを占拠しようとしていると見誤ってしまったのである。大戦をきっかけにして抑圧に抵抗し始めた黒人に対して白人が抱いた不安の背景には、彼らの想像力と経験の限界があった。タルサはいくつもの顔を持つコミュニティだったにも拘わらず、完全な人種分離のために多様性は排除され、それぞれの貢献や価値から目を逸らし、お互いを無視・軽視し続けることになったのである。

実際にローランドを守ったのは郡庁舎で警護に当たっていた保安官たちであったが、黒人たちにとって、ローランド奪還を試みた復員軍人たちこそが英雄であった。黒人新聞『ウィルミントン・アドヴォケート』（*The Wilmington Advocate*）紙は、「黒人たちは悪魔と戦闘した。飛行機から火を放たれながらも、血に飢えた野獣と勇敢に闘った[349]」と、黒人住民の堂々たる戦いぶりを讃えた。暴動以降、タルサでは１人の黒人もリンチ

[348] Hirsch, 112.
[349] *Ibid*., 149.

されることはなかった[350]。人種暴動という多大な犠牲を払ってリンチを止めたことになるが、暴動での黒人の抵抗・反撃、それを支えた彼らの戦闘的精神は、もう二度と暴力の犠牲にはならないという確固たるメッセージを、白人社会に向けて明確に示したのであった。

ちなみに、リンチの恐怖に怯えていたであろうローランドは無事であった。ローランドとペイジの関係についても様々な証言があり、恋人同士だったと話す黒人もいた。葬祭業を営む黒人住民Ｓ・Ｍ・ジャクソンは、１９７１年のインタビューで、「２人はカンザスシティに引っ越した。今でもそこにいると聞いている。勿論２人は知り合いだった。友達だったんです[351]」と証言した。ローランドのその後については、育ての親であるダミー・ローランド・フォード（Dammie Rowland Ford）の１９７２年７月２２日のインタビューで明らかにされている。

> ディックは白人とも黒人とも赤線地帯で遊び歩いていて、私はディックが犯罪行為に関わっているのではないかと心配していました。白人の女の子の友達も大勢いて、サラ・ペイジのことも聞いていました。・・・中略・・・靴磨きの仕事では、石油関係の仕事をする顧客からチップをたくさん稼いでいました。・・・中略・・・私にもよく生活費を渡してくれました。５月３０日の正午、彼は慌てて、息を切らして飛び込んできて、「警察に追われている」と言いました。ドレクセルビルの３階に靴を配達に行った後、トイレを使い、ペイジのエレベーターに乗ろうとしたところ、つまずいて彼女の足の甲を踏んでしまったと言うのです。彼女は痛みに怒り狂い、持っていたバックでディックの頭を何度も何度も叩きました。あまりに激しく叩いたので、バックの柄が外れてしまうほどでした。ディックは、攻撃を止めさせるために彼女の腕を取ったんだそうです。エレベーターが１階に着くと、ペイジは「襲われた！」と大声を上げました。エレベーターのそばにいた衣服商の男が駆け付け、ディックを捕まえようとしましたが、何とかかわして逃げたということでした。ディックは「明日まで隠れていなきゃ」と言いました。家中のブラインドを下げ、私は彼にどこにも行かないよう指示しました。しかし翌３１日火曜日の朝になると、ディックは友達に会いたいと言い始め、出かけてしまいました。それ以降彼は帰宅せず、私は心配でたまりませんでした。ディックはその後電話をかけてきて、「２人の黒人警官に逮捕された」と言いました。・・・中略・・・その後数週間、ディックには会えませんでした。マッカロ

---

350 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 34; *Tulsa Race Riot*, *a Report*, 11, 47; *Death in a Promised Land*, 22.

351 Interview with S. M. Jackson, 7C (Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

一保安官が、水曜日の午前中にディックをこっそり留置場から連れ出し、カンザス州まで送り届けたんだそうです。ディックは、カンザスのペイジの友人の家に連れていかれました。そこはペイジが前夫と住んでいた家だったそうです。ディックはカンザスから一度だけ私に会いに来ました。ペイジは起こったことに罪の意識を感じており、２人は一緒にいるとのことでした。ペイジはディックを告発しませんでした。・・・中略・・・ディックはカンザスにいる間、毎月私に手紙を寄越し、近況を知らせてくれました。それから彼はオレゴンに引っ越し、ペイジはカンザスに残りました。彼はオレゴンで港湾労働をしていて、唯一の身内である私への連絡は絶やしませんでした。それからほんの２、３年前に、連絡がぷっつり途絶えたんです。ある日、ディックのルームメイトだったという人が、ディックが波止場で起きた事故で亡くなったと知らせて来ました。ディックは私のことを、そのルームメイトに話していたんだそうです。ディックは生涯独身のままでした。これが私の知る息子の人生の最後です[352]。

[352] Ruth Sigler Avery Book Draft, 91(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

表５　タルサ暴動のタイムライン

第１段階：暴動へのカウントダウン

１９２１年5月３１日午後６時３０分—午後１０時３０分

午後６時３０分：庁舎で銃撃が発生、死傷者数人。黒人はグリーンウッドへ退却。

午後７時—１０時３０分：約５００人の白人が保安官代理に任命される。

午後９時３０分：タルサ州兵軍の招集。

第２段階：激戦

５月３１日午後１０時３０分—６月１日午前３時

白人暴徒がグリーンウッドに侵攻を試み、グリーンウッドの２ヵ所で特に激しい銃撃戦が行われる。

午前２時：タルサ州兵軍がグリーンウッドに到着。フリスコ駅を挟んでの凄まじい銃撃戦。

午前３時：マウントザイオンバプティスト教会が放火される。

第３段階：拘束

６月１日午前５時—１０時３０分

午前５時：サイレンの合図と共に白人暴徒がグリーンウッドへ侵攻し、放火・殺人が相次ぐ。

午前７時３０分：州兵軍が黒人住民を拘束し始める。

午前８時：大量の黒人住民の武装解除が行われ、強制的に収容所へ行進させられる。

６月１日—６月４日

６月１日と２日にかけて黒人を埋葬するための穴が１２０掘られる（棺桶は使用されていない）。この間、黒人住民は強制収容所で過ごす。

Prepared Statement of Charles Ogletree JR., 45. を参考に作成

第３部　タルサ人種暴動の要因

まえがき

大戦後、白人・黒人双方の退役兵士たちは、それぞれの期待を背負って祖国へと帰還したが、彼らを待っていたアメリカは彼らの思い描いた姿とは異なり、不況、人種関係の劣化・悪化、自警団精神の蔓延など、暴力と相互不信がはびこる不穏な空気に包まれた社会であった。

白人が留置されたローランドを引きずり出そうと庁舎前に集まる直接の原因となったのは、ローランドのリンチをたきつけた『トリビューン』の記事である。しかし、その教唆にいとも簡単に踊らされる素地がタルサにあったこともまた事実である。タルサでは２つのコミュニティの２つの勢力が微妙な均衡を保って併存していたが、ジムクロウを武器に黒人の社会的地位の向上を阻止したい白人たちは、社会的平等と経済的発展を求める黒人の要求を、リンチに代表される暴力で制圧していた。

当時、黒人は様々な制約の中で生きることを余儀なくされていた。例えば、日没後には黒人が出入りすること禁じた町、サンダウン・タウン（Sundown Town）もタルサ周辺に存在したし、黒人はほんの些細なこと、例えば白人女性をじっと見つめた、などの言いがかりをつけられてリンチされることすらあった。そのような状況の下、タルサの町中の人通りの多いビルの、いつ人が乗り込むとも知れないエレベーターの中で、黒人男性が白人女性を暴行するとは考えにくい。それにも拘わらず、新聞報道に煽られた白人群衆が、ローランドをリンチにかけようと結集したのである。

タルサの法執行機関は、集まった白人群衆を解散させる有効な手立てを発揮することが出来ず、結局戦闘の勃発を防ぐことができなかった。彼らが力づくでも群衆たちを追い払っていれば、暴動は避けられていたはずである。しかし、黒人は警察が守ってくれるとははなから期待していなかった。警察は黒人に対する犯罪の取り締まりには消極的であったし、黒人がリンチされても加害者が拘束されることはなかった。こうした絶望的な状況から、黒人たちは復員軍人を中心に自衛の必要性・重要性に目覚める。彼らは戦闘的黒人として白人コミュニティに悪名を轟かせたのである。

市に放置されたグリーンウッドの治安は悪く、多くの白人たちが黒人住人たちは退廃していると考えていた。その要因の１つがメディアの報道姿勢であり、黒人の犯罪は白人の犯罪より大きく報道される傾向があった。黒人は暴力的だと考えていた白人たちは、グリーンウッドと住人たちを守るために現れた黒人武装退役軍人たちの姿に恐怖心と

敵愾心とを同時に抱くことになったのである。黒人を封じ込めるためにリンチを求めた白人群衆の暴徒精神と、自衛の手段として暴力を肯定する黒人たちの闘争性が火花を散らした。後はもう、ただ時間の問題であった。

第３部では、暴動の直接のきっかけとなったエレベーター内での出来事と、それを歪曲して、憶測に基づいた記事を掲載して黒人のリンチを煽った新聞記事の詳細と、この記事が引き起こした様々な反応を紹介する。加えて、暴動を発生させた地域的、時代的、社会的要因を検証し、アメリカ史上最悪と呼ばれた人種暴動が、なぜ１９２１年のタルサで起きたのかを明らかにする。

第６章　暴動の近因と遠因

第１節　直接の引き金

タルサ人種暴動は、人種間の信頼の欠如や根拠なき恐れがはびこる、戦後の非寛容さを増す社会の緊張状態の中で起こった。きっかけは、１９２１年５月３０日、当時１９歳の靴磨きの黒人少年ディック・ローランドが乗ったビルのエレベーター内での出来事である。エレベーターには１７歳の白人オペレーター、サラ・ペイジが乗っており、ペイジの叫び声を聞きつけた近くの店の店主が駆け付けたところ、彼女はローランドに暴行されたと訴えたのである。ローランドは、翌３１日にグリーンウッドで逮捕され、留置される。朝刊紙の『タルサ・ワールド』には間に合わなかったが、午後３時１５分頃出回り始めた夕刊紙の『タルサ・トリビューン』が、１面に「エレベーターで女性を襲った黒人をひっ捕らえろ！」（“Nab Negro for Attacking Girl in an Elevator”）の見出しを掲げた。『トリビューン』は、同じ新聞の社説で、「今晩黒人をリンチする」（“To Lynch a Negro Tonight”）というタイトルで、白人少女に手を出した黒人がリンチされるだろうという、根拠のない扇動報道をしたのである[353]。人種間の不穏な空気が高まる中、白人がローランドを引きずり出してリンチするという噂は、電光石火のスピードで黒人コミュニティに広まった。ちなみに『トリビューン』の１面記事と社説の原本は、紙面のマイクロフィルム化の際に消失し、今もって見つかっていない[354]。以下は『トリビューン』の１面の記事の内容である。

> 「ダイアモンド・ディック」の通称で知られ、本名をディック・ローランドという１９歳の黒人配達人が今朝逮捕された。罪状は、昨日ドレクセルビルで起きた１７歳の白人エレベーター・オペレーターに対する暴行未遂である。この事件は地方裁判所で今日の午後審理される予定である。被害女性は、事件の数分前から３階の廊下を行ったり来たりする黒人に気が付いていた。まるで周辺に人がいないかどうか確認しているかのような様子だったという。数分後、その黒人がエレベーターに乗り込み、彼女を襲い、顔と手を引っ掻き、服を引き裂いた。女性の叫び声を聞いて、近くの店の店主が駆け付けたが、黒人は逃走した。しかし、ローランドは今朝拘束された。ドレクセルビルのテナントによると、女性には身寄りがなく、ビジネス学校の学費を稼ぐためにエレベーターのオペレーターを務めているのだという[355]。

---

[353] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”59; Parrish, 29.
[354] Staples, 67; Messer, 7.
[355] Cronley, 29; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”58.

『トリビューン』は暴動までの数週間の間、グリーンウッドを「ニガータウン」や「リトルアフリカ」と侮蔑的に呼び続け、タルサ市の犯罪やトラブルの温床になっているという報道を繰り返していた。当時、『トリビューン』と『ワールド』は、販売部数拡大を巡って熾烈な競争を繰り広げていたため、記事は次第にセンセーショナルになり、扇情的な報道をする傾向があった[356]。特に『トリビューン』は、１９１９年に発行され始めたばかりであり、知名度を上げるのに必死だったと考えられる。しかし、『トリビューン』の刺激的な記事にも拘わらず、その後ペイジは、エレベーターではつまずいてしまっただけで、つい動揺して過剰反応してしまい、暴行の事実はなかったと証言している[357]。

> 近年、貧しい白人たちは、黒人の繁栄と自立に対して憎悪の念を高まらせていました。こうした白人たちは、白人女性と黒人の交友にも厳しく目を光らせていました。しかし、黒人に対する白人の嫌悪を最も煽ったのはイエロージャーナリズムです（黒人男性水道業者Ｅ・Ａ・ループ[E.A.Loupe]の１９２１年６月２２日タルサでの証言）[358]。

バレット軍務長官も、暴動を引き起こしたのは、ドレクセルビルで起きた出来事と「刺激的報道を得意とする新聞の大騒ぎ[359]」だったと述べている。

> 黒人は『トリビューン』の記事を見て、「なんてことだ！こんなことになるなんて！」と一様に衝撃を受けました。多くの黒人たちが集まって悪態をついていました。リンチを阻止するために、彼らはライフル、拳銃、散弾銃、ピストルなどを手にして車に乗り込んだんです[360]。

グリーンウッドのブッカー・Ｔ・ワシントン高校を卒業した著名な歴史家ジョン・ホープ・フランクリン（John Hope Franklin 1915-2009）の父親で、法律家のＢ・Ｃ・フランクリン（B.C.Franklin）は、その午後について以下のように振り返っている。

> 私がぶらぶらと歩道を歩いていると、新聞配達の少年がけたたましい声を上げながら、「黒

---

356 Ruth Sigler Avery Book Draft, 197(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
357 Prentice, 151; *Black Wall Street,* 37.
358 Parrish, 35.
359 *Death in a Promised Land*, 48.
360 Interview with Robert L. Fairchild, JR., 185(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

人が白人少女を襲った！」と大声で宣伝して歩いていました[361]。

『トリビューン』の記事と社説を受け、リンチの噂は黒・白タルサの両方に「山火事のように広まった[362]。」タルサ市全体が張りつめた空気に包まれていた。『トリビューン』の報道は悪意と憶測に基づいており、白人の自警団精神だけでなく黒人の戦闘性にも火を点けることになった。その結果、黒人地域は破壊され、数千人が家と財産を失くす空前の事態が引き起こされてしまったのである[363]。

全ての発端、ドレクセルビル
Death in a Promised Land, 47.

実際にエレベーターの中で何が起きたかは定かではないものの、憶測も入り乱れて諸説存在する。先述したローランドの育ての母の証言と同様、パリッシュの *Events of the Tulsa Disaster* には、黒人少年が誤って白人少女の足を踏んだことが原因だと書かれている。タルサで速記者をしていた人物は、６月１日に黒人雑誌『アウトルック』に以下のような内容の文書を送っている。

吐き気を催さんばかりの人種戦争がタルサを引き裂いています。きっかけはよくある話です。白人のエレベーターガールを若い黒人が襲おうとした、というのです。彼は否定していますが、彼の言い分なんて聞いてもらえるはずがありません[364]。

『アウトルック』の記者は６月１５日発行号で、暴動の原因について「分かってきたことは、足を踏まれた白人女性がローランドの頬をはたき、ローランドが女性の喉を掴

[361] Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”59.
[362] *Ibid*., 59.
[363] “Tulsa,” *The Nation*, June 15, 1921,839.
[364] “The Lessons of Tulsa,”280.

んだこと」らしいと述べている[365]。以下は、ＮＡＡＣＰのウォルター・ホワイトが現地から『ニューヨーク・イブニング・ポスト』に送った記事である。

> 暴動の直接の原因は、白人少女が１９歳の黒人少年ディック・ローランドに襲われたと主張したことです。この少女サラ・ペイジは、タルサのドレクセルビルのエレベーターのオペレーターでした。ペイジは、ローランドが彼女の腕を掴んだと話しましたが、ローランドの方は、つまずいた拍子にペイジの足を踏んでしまったと言っています。彼女が叫び声を上げ、ローランドは逃げ出しました。翌日『トリビューン』がこの件と、ローランドの逮捕を報じました。警察局長のジョン・Ａ・グスタフソン、保安官マッカロー、市長のＴ・Ｄ・エバンス、その他、著名な石油業者を含む多くの良識的市民が、ペイジは襲われていないと断言しました。『トリビューン』も報じた内容、「ペイジの顔は傷だらけで服は引き裂かれていた」の部分は誤りだったと認めています[366]。

ホワイトによる１９２９年の別の記事[367]では、ペイジは乗り込んで来たのが黒人と見るや、横柄な態度でドアを開け、ローランドが乗り込むか乗り込まないかの内にエレベーターを降下させ始めたことになっている。慌てたローランドが、弾みでペイジの足を踏んでしまったのだという。ローランドがペイジを襲おうとしたという報道に関しては、真っ昼間に黒人男性が白人女性を襲うことに伴うリスクを考えれば、ほぼあり得ないとホワイトは断言する。黒人が白人女性を襲ったとなれば、暴力の格好のターゲットになることは分かりきっていたからである。ホワイトは、１９２１年６月２９日発行の『ネーション』誌（*The Nation* 1865-）で、タルサ暴動のきっかけとなったエレベーターでの出来事について、何が起きたのか結局うやむやのままに暴動が始まったと説明している。

> 興奮した白人少女が、真っ昼間に人口１０万の町のオフィスビルのエレベーターで、１９歳の黒人少年に襲われそうになったと話した。誰も事の真偽を確かめもせず、騒ぎを起こした女性の信ぴょう性を調べてみることもしなかった・・・中略・・・タルサ市民は、よりにもよって、いつでも人が乗ってくる可能性のあるエレベーターで女性を襲おうとする人間が存在するかどうか、考えようとすらしないらしい[368]。

---

365 *Ibid*., 281.
366 “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”8.
367 Walter F. White, “I Investigate Lynchings,” *The American Mercury*, January 1929, 82.
368 “The Eruption of Tulsa,”909-910. 当時17歳だったサラ･ペイジには離婚歴があり、詳細は不明で

ドジな黒人少年が、白人のエレベーターガールの足の指を踏みつけ、引っぱたかれました―彼にとっては痛いしっぺ返し―。彼はその後暴行殴打の罪で逮捕されました。しかし新聞は「殴打」の部分を削除して報道したため、大衆は白人少女が強姦されたと思い込むことになったのです（リチャード・Ｊ・ヒルの日付・場所不詳の証言）[369]。

黒人が白人少女を襲って逮捕され留置場に入れられており、白人群衆が彼をリンチするために集まっている、と報道がありました（氏名・性別不詳の黒人住民の証言）[370]。

『トリビューン』の報道は瞬く間に広まり、白人女性の純潔を守るという大義を抱えた多くの白人の自警団精神を駆り立て、ローランドのリンチに加わろうと留置場前に結集させたのである。

第２節　地域的要因

１　人口増加と人口構成の特徴

１９世紀から農業に依存してきた黒人自治体が衰退する中、黒人住民たちは生き残りを賭けて進むべき新たな道を模索した。その１つの答えとなったのが、様々な機会を提供する用意があったオクラホマの新興都市タルサであった。タルサ市の黒人人口は、１９１０年の１，９５９人から１９２０年には８，８７８人に急増している。グリーンウッドは、独立した自治体並みの規模に拡大しつつあった。『タルサ・トリビューン』の前身、『タルサ・デモクラット』（*Tulsa Democrat*）紙は、黒人移住者の増加を受け、１９１２年に「タルサはオクラホマで最も白い町のステータスを失いつつある」「タルサは黒人犯罪者、詐欺師、賭博師、ギャンブラー、密売商人、売春婦の侵略に耐えられるだろうか？」「タルサは白人が支配する町であり、黒人による入植は今すぐ終わりを告げなくてはならない」など、反黒人キャンペーンを張った[371]。

表７は、アメリカ全土で女性１００人に対して男性が１０４人であることを示している。タルサでは、特に白人男性の比率が高く、女性１００人に対して男性１１１．１人となっている。これは、石油産業が若い白人男性にとって最も魅力があったためと考えられる。白人女性が白人男性に比べて少ないという事実は、白人女性を黒人男性の手か

あるが、黒人たちは彼女を信頼できない人物だと考えていたようである。勿論、結果を考えれば、黒人コミュニティには、ペイジに暴動の責任があると考えた住民もいたであろう。

[369] Parrish, 61-62.
[370] *Ibid*., 47.
[371] *Black Wall Street*, 8.

ら守らなくてはならないという自警団精神を増進させることにつながった。黒人に限ってみると、男女比は白人の逆で、女性の方が男性の人口を上回っていた。黒人は石油産業からは排除されていたため、タルサが特に男性だけを惹きつけたわけではないからであろう。

表８にあるように、タルサの人口構成の特徴は白人・黒人共に若年層（２５歳―３４歳）の多さである。新興都市タルサでは、石油産業に限らず、その他の産業が様々な職業機会を提供し、全米から若い労働者が集まったためと考えられる。「タルサは他の都市と比較して法に無関心」と指摘されていたが、その理由としてタルサの特徴である「若さ」が挙げられる。タルサは石油の発見に伴い、他の都市とは比べものにならない速度で発展した。暴動時タルサに居住していた黒人女性速記者は、暴動の原因について「暴動を起こす機会を窺い、刺激を探し求めていた不良白人少年」にあるという見解を示している。タルサは若者たちで溢れており、彼らは溜め込んだエネルギーを発散する機会を常に窺っていたのである[372]。

表６　１９１０年―１９２０年のオクラホマ州全体とタルサ市の人口の変化

	年	全人口	黒人人口	黒人の割合（%）
オクラホマ州	１９１０	１，６５７，１５５	１３７，６１２	８．３０
	１９２０	２，０２８，２８３	１４９，４０８	７．３７
タルサ市	１９１０	１８，１８２	１，９５９	１０．７７
	１９２０	７２，０７５	８，８７８	１２．３２

Messer,77. の１９１０年と１９２０年の人口調査を基に作成

表７　１９２０年の男女比（女性を１００とした場合）

	男女比
アメリカ全土（全人種）	１０４．０
タルサ市（全人種）	１０９．３
タルサの白人人口	１１１．１
タルサの黒人人口	９６．８

Messer,80. の１９２０年の人口調査を基に作成

[372] “The Lessons of Tulsa,”280.

表８　１９２０年のタルサ市の人口構成

年齢	白人男性（%）	白人女性（%）	黒人男性（%）	黒人女性（%）
０-５	４．５	４．４	４．２	４．２
５-９	４．２	４．１	５．２	５．５
１０-１４	３．８	３．８	４．０	４．３
１５-１９	３．８	４．３	３．８	５．１
２０-２４	５．９	６．３	５．３	７．２
２５-３４	１２．７	１１．４	１１．０	１２．２
３５-４４	８．８	６．７	８．７	７．５
４５-６４	７．５	５．３	６．３	４．３
６５歳以上	１．２	１．１	０．７	０．７

Messer, 81. の１９２０年の人口調査を基に作成

２　タルサの法執行機関と住民の法と秩序の軽視

ローランドが拘留されている庁舎前に群衆が集まり始めました。保安官は彼らを追い返そうとはしましたが、強制はしませんでした。やがて、リンチの知らせを受けた武装黒人も庁舎前に現れました。黒人警官がローランドの無事を約束し、彼らに引き返すよう告げ、多くが引き返そうとしましたが、リーダーが彼らを呼び戻しました。白人と黒人の数は増え続けたにも拘わらず、警官たちは何ら有効な手立てを打てませんでした。それから銃声がして、白人が倒れました。こうなっては、数人の警官ではもうどうにもなりませんでした。白人と黒人の闘いが始まったのです[373]。

要するに、マッカローは群衆にしり込みしたんです。外で群衆が猛り狂う中、庁舎の中に逃げ込んだのです。マッカロー保安官には十分な数の部下がおり、その気になれば下品で侮蔑的な態度の輩たちを追い払うことはできたはずです。扇動者たちを早いうちから拘束しておけば、あんな大混乱に陥ることもなかったでしょうに。市民たちとの直接対決に怖気づく役人を見て、心底うんざりしました。彼らは秩序を守るために選挙で選ばれたはずでしょう[374]？

[373] *Ibid*., 281.
[374] Ruth Sigler Avery Book Draft,202（Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection）.

リンチの危機が迫る中、タルサ市は近隣自治体が取っていた暴徒対策を参考にすることも可能であった。タルサ人種暴動の３カ月前、タルサ近郊の町オクムルギー(Okmulgee)で、リンチに発展する可能性があった事件が、すんでのところで食い止められる出来事があったばかりであった。白人を銃殺した罪で拘束されていた２人の黒人のリンチを未然に防ぐため、当局は彼らをオクムルギーから別の郡に移送し、その移送先を決して明かさなかったのである。こうした対策はリンチの予防策として有効であり、タルサの警察機関がローランドをあらかじめタルサから別の場所に移しておけば、白人暴徒が郡庁舎に集まることもなかったはずである。マッカロー保安官がローランドをタルサから移動させたのは、略奪・放火が甚大な被害をグリーンウッドに与えてしまった後、６月１日の朝８時頃の事であった[375]。

バレット長官は悪化する事態の報告を受け、グスタフソンに連絡を取り、オクラホマシティの州兵部隊を出動させる必要があるかどうか確認している。しかし、警察局長に任命されて間もないグスタフソンは、暴動鎮圧の手立てが無かったにも拘わらず、軍の力を借りずに問題を解決できると強調した[376]。結局グスタフソンは、州兵軍のタルサ部隊の出動を要請することになるのであるが、暴動の拡大よりも、自らに無能の烙印を押されることをより恐れたのである。しかし、銃弾が飛び交う中、２００人のタルサ州兵では５，０００人はいたと考えられる白人暴徒に対応することは不可能であった。オクラホマシティの州兵軍の助けなしでは収まりきれない状況であったにも拘わらず、市長をはじめ、保安官も警察も、援助を求めることを先延ばしにし続けた。傲慢なタルサのプライドのせいで、刻一刻と犠牲者数は増えていった。

徐々に悪化する状況を懸念したバイロン・ カークパトリック少佐（Major Byron Kirkpatrick）は、バレット長官の許可を取り、オクラホマシティの州兵軍の出動を要請するための州知事宛ての電報作成に取り掛かった。州知事は５月３１日午後１０時半にグスタフソンと電話で話しているが、グスタフソンはオクラホマシティの州兵軍の援助は不要であると州知事に伝えていた。電報には警察局長、保安官、裁判官の署名が必要であった。グスタフソンと裁判官の署名を得るのは容易だったが、マッカローはローランドと共に郡庁舎に立て籠もっていた。マッカローに遣いを送っても、暴徒だと勘違いされてなかなか中に入れない状態が続いた。マッカローの知人である新聞記者を代わりに送って、ようやくマッカローの署名を得、カークパトリック少佐は電報を送ること

375 *Death in a Promised Land*, 61.
376 Hirsch, 93.

ができたのである。ロバートソン州知事が電報を受け取ったのは、６月１日午前１時４６分のことであった。

> 人種暴動が拡大。数人の犠牲者。暴動鎮圧不能。特別列車でのオクラホマシティ州兵部隊の出動を要請。深刻な状況。

６月１日午前３時、知事はオクラホマシティ州兵部隊に出動命令を出し、バレット軍務長官と１００人の州兵を乗せた特別列車が、午前５時、タルサへ向けてオクラホマシティを出発した[377]。

尚、白人の民間人を安易に保安官代理に任命し、銃器を支給したことも暴動被害を拡大させた大きな要因である。別の町から仕事でグリーンウッドに来ていた黒人男性、グリーン・スミス（Green Smith）は、午前５時に笛が鳴り響いた後、銃撃を耳にして窓から外を覗いた。午前９時半までには暴徒たちがドアを叩いて回り、火を放っていた。彼らの素性についてスミスは、「多分警官で、白人でした」と話している。この根拠として、スミスは「彼らが保安官代理のバッジを付けていた」からだとしている。白人たちに５０ドルを奪われ、彼らと向き合わざるを得なかったスミスは、バッジを至近距離から確認することができたのである[378]。

バレット長官は、保安官代理に任命された男たちこそが暴動の主犯格であると看破し、エバンス市長に彼らの保安官代理職を解くよう命令した。暴動後、彼らに貸し出された銃器の回収は進まず、「銃器は、状況が改善された時点で直ちに返却されるという理解の下で貸し出されたものである。しかしながら、まだ多くの銃が出回ったままになっている。全ての銃器を３日以内に返却すること」という内容の、命令とも依頼ともつかない文書が警察局長によって公布された[379]。バレット長官は、保安官代理たちの性質と破壊行為について以下のように述べている。

> （保安官代理を任命した）警察局長は、保安官代理に任命された白人の多くが、暴徒と破壊精神を共有していたことに気が付いていませんでした。彼らは暴徒の中でも最も危険な存在となり、私がタルサに到着し戒厳令が公布された後、真っ先に消防士の消火作業を妨害した保安官代理たちを止めました。火を点けたのも保安官代理たちだったと非難されて

377 *Ibid*., 94-95; *Death in a Promised Land*, 53-54.
378 “The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court,”89.
379 Messer, 84-86; Hirsch, 142-143.

います[380]。

武装した白人のボランティアら（黒人の目撃証言によれば１０歳程度の子供から６０歳くらいまで）に加えて、約５００人の白人が保安官代理として任命された。彼らの多くがローランドをリンチするために集まっていた群衆のメンバーであり、この無作為な任命によって、グリーンウッドの壊滅は免れない事態となった。実に彼らは、「黒人の奴らを殺して来い！」と指示されていたのである[381]。保安官代理に関して最も緊迫感のあるレポートが、ＮＡＡＣＰのウォルター・ホワイトが行った秘密潜入調査のドキュメントである。１９２９年１月号の『アメリカン・マーキュリー』（*The American Mercury* 1924-1981）誌に掲載されたこの調査の概要では、タルサ暴動が虐殺にその姿を変えようとする最中にタルサ入りし、肌の色の薄い容姿を利用して保安官代理に任命された際のスリリングな体験が綴られている。

私は暴動で殺気立つタルサの町に到着した。ニューヨークで働いていたことがあるというプロのカメラマンに紹介され、ニューヨークの新聞社で働いていると自己紹介すると、大歓迎された。彼は、白人住民が町を守り、黒人の反撃に備えて保安官代理が任命されていることを説明した。私は、ひょっとしたら自分も任命してもらえるかもしれないと思いついた。これは思っていたよりずっと簡単だった。その晩市役所で聞かれたことと言えばほんの３つだけ―氏名、年齢、住所―だったのだ。私が凶悪な殺人者、または逃亡犯だという可能性もあるというのに！もちろん、タルサを台無しにしている暴徒たちにとってそんなことはどうでもよかった。私の肌は白く、それで十分だった。５０人から６０人の保安官代理たちが任命された後、私の隣の人相の悪い男が、何気なく、いや、声に喜びすら滲ませて、「黒人を見たら撃ち殺せ。法は俺たちの味方だ」と言い放った。

１９２５年頃のウォルター・ホワイト
"I Investigate Lynchings," *National Humanities Center Resource Toolbox*, Vol. III, 1917-1968, 1

乗り込む予定のパトロールの車が回って来るのを

380 "Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law," *Tulsa Race Riot, a Report*, 159.
381 Staples, 68, "Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,"12-13.

市役所の廊下で待っていると、軍服を着た男がこっちをじっと見ているのに気が付いた（男は浅黒い肌をしていたが白人とみなされ、私は黒人と分類されている）。男は敵意を滲ませた様子でもあり、何か聞きたそうでもあった。私は、この男には気を付けなくてはならないと自分に言い聞かせた。これまで私が行ってきた暴動の調査歴や、黒人であることがバレたらとんでもないことになる。男は遂に私の正体に気付いたのか、こちらに向かって歩いて来た。男は私を廊下の隅に追い込んで、聞きたいことがあると言った。別の４人の男も近づいてくるのが見えた。この浅黒い肌をした男は、顔を近づけて私の目を覗き込んだ。そして挑発的に「名前はホワイトだって？」と尋ねた。私はそうだと答えた。

「新聞記者だって？」

「そうだ。身分証を見るか？」

「いいや。ただ１つ言っておく。南部には黒人嫌いの組織があって、支部がそこら中にあるんだ。名前は聞くなよ。この組織は、いまいましい黒人向上組織を潰すために再結成されたんだ。俺たちはこの黒人組織の動きを注視しているし、南部の黒人に平等意識を埋め込もうとしているやつらを痛い目にあわせてやるんだ」

彼が言った南部の黒人嫌いの組織とは明らかにＫＫＫであり、黒人向上組織とはＮＡＡＣＰのことであった。私はできるだけ冷静に、手の震えを悟られないよう煙草に火を点け、彼に尋ねた。

「それはそれは興味深い話だけれど、この人種暴動と何か関わりでも？」

丸々１分間の間、私たちはお互い目を逸らさず睨み合った。４人の仲間は更に距離を詰めているようだった。男はようやく私から目線を外すと、曖昧な笑みを浮かべながら肩をすくめ、「いや、全然関係ない。ただ、タルサの人種関係について説明したかっただけだよ」と言うと、去って行った。

夜の間中、彼らと同じ車で市内をパトロールする間、私は注意を怠らなかった。後にタルサ暴動についての記事が出版され、私の身元（黒人でＮＡＡＣＰの幹部）が明らかになると、１００通以上の匿名の脅迫状が届いた[382]。

白人レンガ職人ローレル・バック（Laurel Buck）は、保安官代理に任命してもらう目的で警察署へ赴いた。任命はされなかったが、その代わり「銃を持って黒人を撃って来い」と指示された。バックはタルサ金物店へ行き、そこで銃を受け取っている。他の保安官代理同様、バックもまたタルサ市を通じて武器を入手したのである[383]。

黒人保安官補佐Ｖ・Ｂ・ボスティック（V.B.Bostic）は、白人警官から家を追い出さ

[382] “I Investigate Lynchings,”82-83.
[383] “Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law,” 159.

れた後、油をまかれ家を焼かれた。ある白人住民は、白人警官が一旦帰宅し、私服に着替えた上でグリーンウッドに赴き、白人暴徒を従えて略奪を繰り返していたと話した。裁判官ジョン・オリファントは、「放火していた者の多くは保安官代理たちだった」と証言し、黒人警官ヘンリー・パック（Henry Pack）も、１０人の保安官代理が放火しているのを目撃した。騒動の中、白人は一切逮捕されていない。拘束されて収容されたのは黒人だけであった。ＡＢＢは、行為ではなく肌の色で誰を逮捕・拘束するかが決め手となった事態に対し、以下のように指摘している。

> 白人が始めた暴動を鎮圧する過程で、法執行機関が拘束したのは黒人ばかりであった。タルサで任命された保安官代理は全員が白人で、収容所へ連行されたのは全員が黒人だったのである[384]。

黒人紙『シカゴ・ディフェンダー』は、

> 警察は法と秩序を著しく軽視し、タルサでは肌の色次第でどう扱われるかが決定され、裁判ではなく棍棒で正義が行われていた。このような目に余る状態の中、黒人たちはローランドを守らなくてはならなかった。警察がローランドの保護の努力を怠ったために、黒人が武装して出向かなくてはならなかった[385]。

と、警察への信頼の欠如が黒人を武装させることにつながったと報じた。この信頼の欠如こそ、黒人の自衛を加速させた主な要因の１つである。警察が黒人を守ってくれないとなれば、彼らは武装して自衛するしかなかった。黒人を保護する意欲と能力を著しく欠いた連邦政府、州政府、法執行機関に対する黒人の不信感は根強く、彼らを「白人の人種主義の武装代表者[386]」とみなしていたのである。黒人を社会の最下層の地位に押し込めようとする白人の暴力に対し、黒人たちには団結して自衛するしか取るべき道が残されていなかった。これに対し、『メッセンジャー』は、暴動を防ぐ対策の１つとして、大規模黒人警察部隊を組織することを提案している[387]。彼らを黒人居住地に重点的に配

---

384 “The Tulsa Outrage,”8.
385 “Bombs Hurled from Aeroplanes in Order to Stop Attacks on the Whites,” *Chicago Defender,* June 4, 1921, 1(Cited in “The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court,” 77-78.).
386 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*11.
387 “The Cause of and Remedy for Race Riots,”21.

置することで、暴動を抑え込めると主張した。

暴動後、法執行機関の怠慢が暴動の原因であると指摘する声が次々に上がった。黒人医師ブリッジウォーターは、「黒人がリンチされるとなれば、法に基づいた護衛が約束されていたとしても、守られることはほとんどなかった」と証言している。ブリッジウォーターはまた、「リンチされる者が有罪か無罪かは重視されず、まるでガソリンに火が点いたように、暴力は歯止めが効かなくなっていました。リンチの噂があれば我々は自衛を余儀なくされていたのです。まずリンチの噂、次に武装、無法状態の急速な広まり、暴力を抑止する冷静さと敏速さの欠如、というサイクルの繰り返しでした」とも語っている[388]。

タルサ市警察は、１９２０年に組織の立て直しと治安状況改善に臨もうとしていた。新たな警察局長に就任したグスタフソンの下には、士気の低い４５人の警察官たちがいた。内２人は黒人で、グリーンウッドのパトロールを担当していた。前年には約半数が賃上げを求めてストライキを起こし、３週間後に交渉が妥結している。グスタフソンには以前から犯罪組織との関係が噂されていたため、マッカローはグスタフソンの就任に不満を抱いていたと言われている[389]。法執行機関内部が、不満やひずみを抱えていたのである。

ロバートソン州知事、『タルサ・トリビューン』、『タルサ・ワールド』は、白人暴徒が集まり始めた時点で、タルサ市当局が断固とした態度で彼らを解散させていれば、このような事態は起きなかっただろうという共通の見解を持っていた。州知事はタルサの惨状について、「憎むべき」で「言い訳が立たない」としてタルサの法執行機関を厳しく批判した[390]。暴動後招集された大陪審も、戦闘的黒人と並んで法執行機関の怠慢が暴動の原因であると結論付けている。グスタフソンは、暴動時に被害を食い止める予防措置を取ることを怠ったことと、車両強盗から報酬を受けて取って釈放したという、暴動とは無関係の１件で起訴され、１９２１年７月２２日に有罪判決を受けた。彼は有罪が確定する前の６月３０日に罷免されている[391]。

７月に行われたグスタフソンの裁判で、警察本部長アドキンソンは、暴動時の警察署の様子を陳述している。アドキンソンの説明によると、警察署に男たちがやって来て、タルサを守るために何かできることはないかと申し出たのだという。協議の結果、グス

---

388 Parrish, 30.
389 Hirsch, 69-70.
390 “The Lessons of Tulsa,”281.
391 Messer, 9; *Black Wall Street,* 67.

タフソンが男たちを保安官代理に任命する決定を下した。保安官代理の任命手続きはやや雑に行われたといい、保安官代理たちが放火を行ったと思うかどうか、との質問に対し、アドキンソンは、「分かりません」と答えた[392]。

> 制服を着た男たちが火を点けていたという証言はありません。あるのは、星形の階級章を付けた男たちが火を点けていたという証言ばかりです。彼らはその晩保安官代理に任命され、昔の警察の階級章を与えられていたのです。保安官代理を選ぶ際、えり好みはできず、その数を制限することもできませんでした。冷静な状態を保てるだろうと見込んだ者たちを任命したつもりでした。興奮した輩が火を点けたかもしれませんが、だとすればこれは明らかな命令違反です[393]。

暴動の混乱の只中にあったとはいえ、グスタフソンとアドキンソンは、興奮した男たちの簡単な身元調査すらせずに、安易に、しかも大量に保安官代理に任命してしまったのである。ところが、実は彼らの多くが、群庁舎前でリンチを唱えていた暴徒たちだったのである。

グスタフソンは後に、郡庁舎に集まった白人群衆を退去させようという努力はしたと主張している。しかし、群衆の数と熱狂が急ピッチで拡大する中、彼もマッカローも一度も警察官の増員を図らず、野次馬たちを解散させる有効な手立てを取ることはなかった。グスタフソンは警察官全員を現場に呼び出していなかったことも分かっている。グスタフソンによれば、当日は丁度シフト変更が行わる日に当たり、５月３１日の午後８時に出勤していたのは３２人だけであった。また、グスタフソンは爆発寸前の群衆を残して郡庁舎を離れ、警察署に戻っていたことが確認されている[394]。グスタフソンは、暴動の責任を公に問われた唯一の白人であった。白人住民たちは、無能な警察局長が闘争的な黒人を制御できなかったことこそが責められるべきで、白人住民たちは自衛をしていただけだという物語を作り上げた。グスタフソン１人に罪を負わせることで、銃撃、略奪、放火の限りを尽くした白人暴徒たちは、武装黒人の攻撃から身を守るために闘っただけだとして無罪放免となったのである[395]。

『インディペンデント』誌は、「アメリカ中のコミュニティで、平和を保つのに十分

---

392 “The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court,”88.
393 “Inefficiency of Police is Denied,” *Tulsa World,* July 19, 1921, 1, 7(Cited in “The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court,”88.).
394 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”62; *Death in a Promised Land*, 52.
395 Hirsch, 128-129.

な法の力が及んでいない事実が明らかになった。警察は緊急事態に対応するには小規模すぎる[396]」と、警察機関の規模の拡大と人員の増強を求めた。オクラホマ州の『マスコギー・フェニックス』（*The Muskogee Phoenix* 1888-）紙は、「役人たちが素早く行動していれば、群衆を止めることができたはずだ」と述べ、オクラホマシティの『タイムズ・デモクラット』（*The Times-Democrat*）紙も「タルサでは法執行機関が麻痺していた」と断じ、『タルサ・トリビューン』も「全ての情報を総合してみれば、タルサでは長期に亘って法が蔑ろにされてきた事実が明らかにされている」と、タルサ市で法が軽視され、警察機関も機能していなかった状態が暴露されている。タルサのとある記者は、『ニューヨーク・ワールド』（*The New York World* 1860-1931）紙へ以下の記事を送信している[397]。

> 今回の件も含めて度々あったことですが、警察は暴動を阻止する権限を持ちながら、重大な局面でその責任を果たしませんでした。武装黒人のグループが現場に到着した時点で、彼らを拘束するべきでした。しかし、愚かにもタイミングを逸し、黒人の手から銃を奪った白人の発砲によって、火薬に火が点けられてしまったのです。・・・中略・・・もしもタルサ市や警察がきちんと機能しておれば、この大災害は防ぐことができたでしょう。我々のビジネスや住宅が破壊されることもなかったでしょう（Ａ・Ｊ・ニューマンの１９２１年６月２４日タルサでの証言）[398]。

> 白人であれ黒人であれ、法や社会秩序を軽視する者たちが図々しくのさばっていました。市民が抗議の声を上げようにも上げられない状態でした。わけても、チョックジョイント[399]（The "Chock" Joint）は下等な白人・黒人連中の最悪のたまり場になっていました。こうした連中が長年たぎらせてきた憎悪と報復心が一気に噴き出し、雪崩のように襲いかかったのです。何の落ち度もない人々が最も苦しむことになりました。私も含めてほとんどの人々が、ホームガードかオクラホマシティの州兵が助けに来ると信じて、おとなしく待っていました。ところがホームガードは白人暴徒に加勢し始めたのです。私たちは家族と数人の友人たちと共に４マイルほど避難したところで、州警察に保護されました。州警察はとても礼儀正しく、私たちを本当のアメリカ市民のように扱ってくれました（ループの証言）[400]。

---

396 "The Turk in Tulsa,"641.
397 "Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,"8.
398 Parrish, 38-41.
399 グリーンウッドにあったバーの名 前。
400 Parrish, 35-36.

堕落した政治が暴動の根本的な原因です。当局が適切な措置を取ってさえいれば、今回の惨事は防げたはずです（黒人男性理容室経営Ｃ・Ｌ・ネザーランド[C.L.Netherland]の１９２１年６月２４日タルサでの証言）[401]。

一体いつまでこうした非道行為が許されるのでしょうか。アメリカには何ら暴力を防ぐ手だてがないのでしょうか？双方に改めるべき点はあるのでしょうが、法と秩序は守られるべきです（黒人女性速記者の１９２１年６月１日タルサからの手紙）[402]。

ＮＡＡＣＰの事務局長を務めていたジェームス・ウェルドン・ジョンソン（James Weldon Johnson 1871-1938）は、黒人に対する暴力の取り締まりの手ぬるさは全国的現象であるとして、「政府は黒人の法的権利の問題になると途端に機能しなくなる」と非難した。『シカゴ・トリビューン』（*The Chicago Tribune*）紙は、「タルサをはじめとする他の暴動でも、真犯人は行政の腐敗である。もしも行政が犯罪と結びついていなければ、タルサ、シカゴ、イーストセントルイスで点いた暴動の火花は初期の段階で消し止めることができたはずである」と、タルサ市が犯罪行為に目をつぶり、順法精神の薄い層の取り締まりを怠ってきたことに原因があるとまとめている[403]。

タルサの教会リーダーたちは、暴動後最初の日曜日の説教で「タルサには銃や犯罪が蔓延し、タルサ市政府は全く機能していなかった」と述べ、「法、秩序、道徳が守られる新しいタルサ」の建設を呼びかけた[404]。

以下は、６月２日の『タルサ・ワールド』紙に掲載されたマッカロー保安官のインタビューの抜粋である。

午後４時頃、警察本部長から電話があり、ローランドのリンチの噂が飛び交っていると伝えられました。本部長は、ローランドをタルサから他の町へ移動させた方がいいのではないかと言いましたが、私には留置場を守り抜く十分な自信がありました。ローランドを連れ出せる者など誰一人としているはずはありませんでした。それでも念のため、夜の間ずっと留置場に張り付いていました。午後８時２０分に、見覚えのない白人の男たちが３人やって来ました。私は、「リンチの噂があるようだが、ローランドは誰にも渡さない」と伝えました。彼らは車に乗り込むと、盛んに大声で喋っていました。しばらくして人々が集

401 *Ibid*., 42.
402 “The Lessons of Tulsa,”280.
403 “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”9.
404 Cronley, 29, 34.

まってきました。それから私は保安官補佐らに、エレベーターを最上階で止め、そこに待機し、何があっても留置場のドアを開けないよう指示しました。群衆の留置場へのアクセスは狭い階段１つのみで、最上階の階段のドアの後ろには警備員が配置されていました。この後私は外に出て、群衆に家に帰るように指導しました。私は大変なブーイングを浴びましたが、先ほどの３人の乗った車は走り去りました。しかし車はすぐに戻り、益々人が増えました。荒々しいのは１００人程度で、武装もしていませんでした。１時間後、２５人の武装黒人が現れ、私は留置場には万全の警備が敷かれているから大丈夫だと伝え、引き返すよう諭しました。彼らは、一旦は去ったものの、すぐに数を増やして戻って来ました。私は内２人の武器を没収しましたが、その他の黒人は武装させたままにしておきました。そうしなければ黒人たちは騒ぎ始めていたでしょう。私は彼らを追い返す自信があったのに、その時誰かが発砲したのです。次の瞬間、黒人たちは次々に空中に向けて発砲を始め、白人たちも銃を抜き始めたんです。私は庁舎に戻りました。暴動が始まってしまいました。止めることができなかったのです。私は翌朝８時にローランドを庁舎から連れ出しました[405]。

[405] Ruth Sigler Avery Book Draft, 23(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

第３節　歴史的要因

１ 第１次世界大戦と新しい黒人（ニューニグロ）の誕生

8, 000 人の労働者を募集する北部造船所の求人広告。
Gifford, 19.

工業化した北部の労働力需要を受けて、２０世紀初頭に黒人の大移動（グレートマイグレーション）が幕を開け、１９１７年の春から夏にかけての移住の波は奔流となって北部都市に押し寄せた。当時アメリカ南部の黒人は激しい人種差別に晒され、リンチの恐怖に怯えながら貧しく惨めな生活に喘いでいた。労働と生活環境の改善を求め、１９１６年から１９２１年の５年間だけで、約５０万人の黒人が北上したとされる。１９１０年には、アメリカの黒人人口の約７割に当たる９００万人が農村部に居住していた。ところが１９２０年になると、都市部に住む黒人人口が初めて農村部の黒人人口を上回ったのである[406]。アメリカが都市化するのと並行して、黒人も就労の機会やより良い安全な暮らしを求めて農村を後にした。

黒人労働者は、従軍した白人労働者と急激に減少したヨーロッパからの移民の穴埋め役を果たすこととなった。黒人移住者たちが、それまでに経験したことのない職業機会に恵まれることに反感を抱く白人もいた。彼らは、黒人が白人の仕事を後継することに

表９　南部から脱出した黒人人口（１９００年―１９３０年）

１９００-１９１０年	１９１０-１９２０年	１９２０-１９３０年
１９４，０００人	５５５，０００人	９０３，０００人

樋口、１２６頁。

強い抵抗を感じ、黒人が高慢になっていると憤ったのである。１９１４年には１２０万人を数えた移民が、１９１５年には戦時緊急措置法の影響で３２万人にまで減少し、都

[406] Kevin Ramsden, “The ‘New Negro’: A Study of the Changing Social, Economic and Political Status of the African-Americans in the Early 20th Century,” *Ritsumeikan Annual Review of International Studies*, Vol.14, No.2, 2001, 50.

市部は深刻な労働者不足に陥っていた[407]。黒人たちは、北部の都市で危険な重労働に低賃金で従事させられることが多かったにも拘わらず、白人労働者からはライバル視された。

北部では人種分離は法律で定められていなかったものの、事実上黒人と白人は分離され、黒人が移住すると、黒人と同じ地域に住むのを嫌った白人は次々と郊外に転出した。その結果北部の都市には、黒人ゲットーと呼ばれる黒人だけの貧民街が次々と誕生することになる。１９２０年当時、ハーレムには８万人の黒人が居住しており、ゲットーは「貧困、人口過密、病気の蔓延」が甚だしく、不衛生で目を覆うような有様であった。医療機関も不足し、１９１４年から１９３７年まで学校すら無かったのである。ゲットーの実態を調査したデュボイスは、「黒人は雇用の面で徹底的に差別されている上にゲットーに幽閉され、社会的地位を向上させる機会を完全に奪われている」との調査結果を発表した[408]。

第１次世界大戦直後のアメリカは、人種を問わず増加し続ける失業者、露営して除隊許可を待つ兵士たち、離散家族を探し回る人々が大量にうごめき、混乱状態に陥っていた。兵士たちは郷里に帰らず都市で生活することを選ぶ者が多く、都市部の人口をより密集させた[409]。１９２１年時点では、失業者は全国で６００万人に上っていた（製造業３５０万、交通運輸業８０万、鉱山業２５万など）[410]。

従軍は黒人にどのような変化をもたらしただろうか。約１００万人が徴兵登録を行い、その内の約４０万人が兵役に服した。彼らの半数以上が海外に配属され、国際民主主義のために闘った[411]。アメリカ国内で、全人口（１９１７年７月１日付けでおよそ１億３００万人[412]）の１０％程度であった黒人は、軍隊では１３％を占めていた。黒人を差別する国家に忠誠を誓う必要はない、と従軍反対の意見もあったにも拘わらず、なぜ黒人は積極的に入隊したのであろうか。それは、従軍が「白人だけがアメリカ人ではなく、われわれもアメリカを祖国とする、同じアメリカ人であることを、内外に示す絶好の機

---

407 J.M. Pawa,“The Search for Black Radicals: American and British Documents Relative to the 1919 Red Scare,” *Labor History* ,Vol. 16, No.2, 1975, 272; Kevin Boyle, *Arc of Justice-A Saga of Race, Civil Rights, and Murder in the Jazz Age-*, Henry Holt Books, 2004,89.

408 パップ･ンディアイ「アメリカ黒人の歴史―自由と平和への長い道のり―」遠藤ゆかり訳、創元社、2010年、55-63頁。

409 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*10.

410 樋口、121頁。

411 Ramsden,49; Gerald Early, “The New Negro Era and the Great African American Transformation,” *American Studies*, Vol. 49, Spring/Summer 2008,10.

412 *Population Estimates Program*, Population Division, U.S. Census Bureau, April 11, 2000.

会[413]」であると信じたからであった。黒人も「祖国に忠実なアメリカ人」であることと身をもって証明しようとしたのであった。「愛国心は黒人にとって宗教のようなもの」[414]だったのである。

黒人は、ヨーロッパではアメリカで受けたような激しい人種差別に晒されることもなく、１４万人以上の黒人が派遣されたフランスでは、連合国側の軍隊は平等の扱いを受けた[415]。そのためアメリカの白人たちは、黒人がフランスから余計な思想を持ち帰るのではないかと勘ぐり、警戒した[416]。黒人部隊が人種平等に慣れてしまうと、母国で悪影響が出るのではないかと恐れたウッドロー・ウィルソン大統領（Woodrow Wilson　任期1913-1921）は、「諸君はこれから本国へ帰るのだが、フランスで経験したようなデモクラシーを、決してアメリカに求めてはならない[417]」という内容の警告を出すまでに至った。アメリカは、戦後も黒人問題を何ら改善する意思はなく、黒人が平等を求めるのを恐れ、封じ込めようとしていたことが窺える。実際に兵役に就かなくても、黒人は食肉加工工場、製鋼工場といった、戦時中不可欠な産業に従事することでアメリカに貢献していたのである[418]。民主主義の為に闘った自負と、新たな自由の概念を持って帰国した黒人たちにとって、祖国での変わらない人種差別は、落胆と憤りをもたらす以外のなにものでもなかった。南部では、帰還兵が軍服を着たままの状態でリンチされることすら起こっていたのである[419]。

> 民主主義のために闘った自負を持って帰国した黒人たちは、祖国の状況もきっと改善されていると信じていたのです。ところが、何一つ変わってはいませんでした。白人は黒人を「偉そうな黒人」と呼んでいました。黒人が不正義に抵抗するのは当然のことです。黒人たちは、その信条ゆえに暴動で命を落としたのです（ルース・ウィングフィールドの１９８７年3月１３日のタルサでの証言）[420]。

デュボイスは、１９１９年５月号の『クライシス』誌上で、論評「帰還兵士」

---

413 猿谷要 「歴史物語　アフリカ系アメリカ人」 朝日選書、2000年、151頁。
414 Early,11.
415 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*10.
416 ンディアイ、59頁。
417 猿谷、153頁。
418 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 10.
419 Ramsden, 51;Ta-Nehisi Coates, “The Case for Reparations,” *The Atlantic*, June 2014, 64.
420 Ruth Sigler Avery Interview with Ruth Wingfield (Version2) held on March 13, 1987 in Tulsa, 153(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

（“Returning Soldiers”）発表した。

アメリカはリンチを許す。
リンチは、人類史上最も卑劣な性質の野蛮行為であるにも拘わらず、半世紀もの間、大戦中にも週に２人のペースで黒人がリンチされ続けた。
アメリカは公民権を剥奪する。
公民権の剥奪は、貧民の金持ちに対する、黒人の白人に対する唯一の保護手段を奪うことを意味する。黒人の公民権を剥奪していながら民主主義を標榜する国は、大嘘つきである。
アメリカは無知を助長する。
アメリカは黒人を教育しない。したくないのだ。アメリカは使用人、犬、娼婦、猿が欲しいのだ。アメリカは黒人を人間扱いしない言い訳として、卑しくも、「黒人は堕落している。黒人は教育できない」と声高に叫ぶのだ[421]。

民主主義のために闘うことが黒人の地位向上につながるとの信念から従軍を奨励したデュボイスの失望と怒り、自責の念は如何ほどのものであっただろうか。祖国のために闘った黒人兵士への差別・暴力は、黒人が「肉体的に、文化的に、そして知的に」反撃することがもはや不可避であるという認識をもたらした[422]。平等と経済的成功を得るためには、黒人はこれまでよりもっと激しく、より攻撃的にならなければならないとの決意を新たにしたのである。デュボイスはこの論評の後半部分で、「自国の生き地獄に対し、断固とした不屈の闘いを挑まないとすれば、われわれは臆病者の間抜けである」と、黒人を戒めている。祖国と民主主義のために闘った黒人の、アメリカ人としての自信と希望が完膚なきまでに打ち砕かれた時、人種関係における新たな闘争性が展開し始めたのである。「帰還兵」掲載号は１０万部を売り上げ、大きな注目を浴びた。従軍の経験は、黒人に反撃する術を授けた。黒人はもう二度と、おめおめと二級市民階級に戻るつもりはなかったのである。黒人のこの新たな闘う姿勢について『ニューヨーク・グローブ』（*The New York Globe* 1904-1923）紙は、「従軍経験に加えて、戦時中の彼らの労働者としての価値の上昇によって、黒人がこれまでのように不正義に従順に服従することはないだろう。良かれ悪しかれ、５年前に比べれば白人の攻撃に反撃する確率は確実に高まっている[423]」と述べている。タルサ人種暴動後の６月２２発行の『ニュー・リ

[421] W.E.B. Du Bois, “Returning Soldiers,” *The Crisis*, May 1919, 14.
[422] Sondra Kathryn Wilson, *The Messenger Reader*, Random House, 2000, xxiii.
[423] “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”9.

パブリック』誌（*The New Republic* 1914-）は、「人種間の紛争の新たな展開は、黒人の自衛にかける決意[424]」によるものだとレポートしている。

> アメリカの人種問題の新たな脅威は、黒人の暴力的反撃精神である。多くの黒人指導者たちが、「銃を取れ！反撃し、我々に敬意を払わせるのだ！」と黒人大衆を先導している。しかしこれは危険な教えでもある。・・・中略・・・こうした黒人の闘争性は白人には理解しづらいが、アメリカで黒人が多数派だったと仮定しよう。黒人が全ての公職を独占し、警察や司法を管理し、ほぼ全ての富を手にしていたとしたら？白人を搾取するだけでは足りず、集団でやって来て家から連れ出し、殴り、銃撃したり、リンチしたりしても、何のお咎めもなしだったら？白人を焼き殺すと派手な広告が新聞紙上に出され、仕事も学校も休みになって見学ツアーが組まれたとしたら？こんな状況で、武装しない白人なんて１人でもいるだろうか？

黒人が経験してきた不正義と不平等に理解を示しているかのようにも見える記事であるが、記事の後半では、黒人がタルサ暴動で抵抗していなければ、被害はもっと少なかったはずだとし、「最悪でも黒人少年がリンチされただけだ」と、黒人の命の軽視とリンチを容認する姿勢が窺われ、「黒人グループがローランドの保護に駆けつけたがために、多くが命を落とし、１万人以上が焼き出されたのだ」と黒人の責任を追及している。しかし、

> 好むと好まざるとに拘わらず、黒人たちは連帯意識を持ち始めている。彼らは自衛の精神に目覚めた。南部白人は、黒人のこの戦闘性が人種戦争の要因だと言う。ドイツ兵と闘った黒人たちは、ヨーロッパでは一等市民の扱いを受けた。祖国での選挙権剥奪やリンチに不満を持つのは当然だと言える。戦争がなくても、恐らく黒人の不満は高まっていたはずだ。・・・中略・・・黒人の集団的な抵抗の精神の始まりが何であったにしろ、既に黒人人口に浸透しているこの闘争的精神は、アメリカにとって重大な問題である。我々は人種問題解決が不可能だと諦め、放置すべきだろうか？それとも、黒人が人間として当然の権利を得る方法を真剣に考えるべきだろうか？暴民政治や不安定な労働環境は、黒人の不満を募らせるだけだろう。人種暴動で最も被害を受けるのは黒人だろうが、白人も犠牲を覚悟しなくてはならない事態となっている[425]。

---

[424] "The Week," *The New Republic*, No.XXVII, No.342, June 22, 1921, 92.
[425] *Ibid*., 97.

と、このまま人種問題を放置して黒人を差別し、暴力で抑圧し続ければ、白人も無傷ではいられないだろうと釘を刺している。

この頃、ハーレムでは戦闘的な「新しい黒人」（New Negro）[426]が颯爽と登場し、黒人社会に新風を吹き込んでいた。

> 新しい黒人は、大戦後のあらゆる前衛的で進歩的グループや運動と共に現れた。彼は世界中の文明国において、政治的、経済的、社会的権力を支配しつつある偉大なリベラル運動、急進運動を生みだした力の産物なのである。現在のような経済的混迷、政治的動乱、社会的窮状において、新しい黒人が現れ出たのは必然の運命である。そして彼こそが、この困難な嵐と重圧の時代に黒人を導いてくれる存在なのである[427]。

戦闘性的「新しい黒人」が登場した背景には、南部のような構造的差別の存在しない北部でも不動産や職業差別が横行し、日常的な人種間の摩擦が起こっていることがあった。白人との接触は、実際に民主主義を享受しているのは白人だけだという冷徹な現実を黒人たちに突き付けたのである。

１９１７年のアメリカの大戦参戦は、国内の軍需産業を活発にした一方で、接触する機会が増加した白人と黒人の労働者の間の緊張を高め、各地で暴動を誘発する事態となっていた。大戦の終結と共に工場閉鎖が相次ぎ、戦後不況は多くの人種間殺傷事件の引き金となった。それでも北部の人口は増え続け（ヨーロッパ移民は都市を好む傾向があり、退役軍人に加え、南部からの黒人の移動も続いていた）、左翼排斥運動の高まりも加わって、社会不安と混乱が増大した。

---

426 前世代の黒人指導者たちの妥協政策を排した、闘う黒人新世代。完全な社会平等を求め、黒人の自衛の必要性を強く訴えた。1920年の8月号の『メッセンジャー』誌によれば、「新しい黒人」とは教育や自衛を通じて完全な社会平等を達成し、言論・集会の自由を復活させ、必要ならば、自分のため家族のために死ぬことをいとわないような者であった。（A.Phillip Randolph and Chandler Owen, “The New Negro—What Is He?,” *The Messenger*, August 1920,73-74.）

427 Randolph and Owen, 74.

1924 年のＵＮＩＡのハーレム地区パレード
「新しい黒人（ニューニグロ）には怖いものはない」
Gifford, 25.

新しい黒人（ニューニグロ）の概念を固め、普及させたのが黒人大学ハワード大学（Howard University）の哲学科教授アラン・ロック（Alain Locke 1885-1954）である。彼はアンソロジー、*The New Negro, An Interpretation of Negro Life* を１９２５年に出版し、「過去１０年ほどのあいだに、統計には現れてこない何事かが、アメリカ黒人の生活のなかに起こってきている」と、その冒頭部分で述べている。黒人は生き延びる手段として、常に受け身の存在であり続けることが求められてきた（「押しとどめられるべきもの」、「分を守るべきもの」、「救いあげられるべきもの」）。これらの公式に当てはまる生き方を押し付けられ続けた結果、黒人自身がそうしたステレオタイプをまとって、「みずからを社会問題のゆがめられた視野の中で捉えるようにさせられてきた」のだという。そんな黒人にとって、南部から北部への大移動（グレートマイグレーション）は、西漸運動やアフリカ帰還運動と同様、黒人が未来のために主体的に取った行動であった。ロックは、黒人が守られ、救われ、恐れられ、心配されるという恒常的な受け身の状態から、「内側からの弾力」ともいえる変化と共に登場したのが、黒人社会の胎動、「新しい黒人（ニューニグロ）」であると定義した。ロックは、「われわれは、黒人問題の古い殻を脱ぎ捨てることによって、精神的な解放」を達成しつつあると記している。彼は、「新しい黒人（ニューニグロ）」を誕生させた黒人社会の変化について、大移動（グレートマイグレーション）による黒人の都市化を挙げている。１９１０年から１９２０年の間

には、毎年７５，０００人の黒人が南部から流出しており[428]、この移住の真の動機は、白人のテロの恐怖や経済的困窮以上に、機会と自由を求めた黒人の気勢であった。ロックは、黒人の農村地帯から都市部への移動は、「中世的なアメリカから現代のアメリカへ向けての意識的な移動でもあった」のだと述べている[429]。黒人の移住は、精神的にも肉体的にも解放されるために必要不可欠だったのである。

また、新しい黒人（ニュー・ニグロ）誕生と共に現れ出たのが多種多様な黒人の思想であった。漸進主義を掲げたブッカー・Ｔ・ワシントンが１９１５年に亡くなると、黒人は社会主義や国際政治の雑誌を出版し始め、ブラックナショナリストたちが先導したアフリカ帰還運動も盛り上がりを見せた[430]。ＵＮＩＡのマーカス・ガーヴェイは近代ブラックナショナリズムの創設者と呼ばれるが、後に白人社会からの分離を説いたネーション・オブ・イスラム（Nation of Islam）のイライジャ・モハメッド（Elijah Muhammad 1897 - 1975）やマルコム X（Malcom X 1925 - 1965）などに大きな影響を与えた。

「ハーレム急進主義の父」と呼ばれた西インド諸島出身のヒューバート・ヘンリー・ハリソン（Hubert Henry Harrison 1883-1927）は、黒人の敢闘精神を目覚めさせようと言論活動に取り組んだパイオニアである。自身が創刊した雑誌『ボイス』(*The Voice*)で、「白人が無抵抗の黒人を殺すなら、黒人も命と財産を守るために白人を殺すべきである」と主張した。ハリソンは、黒人の団結と武装こそが白人の暴力を止める最も有効な策だと断言し、「楽に人殺しができるなら、人は気の赴くままに殺人を犯すだろう。しかし、犠牲を伴うとなると、一転躊躇するものだ」と述べた。ハリソンは、人種差別に根差した暴力への自衛を、粘り強く訴え続けた。ガーヴェイも、１９２０年のＵＮＩＡの集会で、「肌の色を理由に黒人が受ける野蛮な扱いに対し、徹底して自衛しなくてはならない」と訴えた。この自衛の精神は、多くの黒人リーダー、メディアによって共有され表明されることとなった。『メッセンジャー』の編集者Ａ・フィリップ・ランドルフ（A. Phillip Randolph 1889-1979）は、白人襲撃者に対しては断固として武力で立ち向かわなければならないと説き、黒人ジャーナリスト、ジョン・エドワード・ブルース（John Edward Bruce 1856-1924）は、「平等とは誰かが与えてくれるものではない。

---

428 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 9.

429 アラン･ロック「新しい黒人」(黒人論集)、山形正男、古賀邦子、砂田一郎、小山起功訳、研究社、1975年、207-213頁（Alain Locke, “The New Negro,” in *The New Negro,* 1925.)。

430 Early, 16.

勝ち取るものである」と主張した[431]。白人の理不尽な暴力に団結して武装自衛することは黒人が生き残るために不可欠であり、正しい道だと主張する新しい黒人の精神が黒人社会に広まり、根を下ろしつつあった。

２ 赤狩り（The Big Red Scare）とレッドサマー[432]（The Red Summer）

頻発する人種間の衝突と高まる左翼運動を受け、J・エドガー・フーバー（J.Edgar Hoover 1895-1972）の指揮の下、捜査局は、黒人政治団体やそのリーダーたちの監視を開始した。フーバーは、黒人運動と左翼運動の関連を確立させ、双方を一網打尽にしようと試みたのである。しばしば部下の報告をないがしろにしながら、フーバーは社会の混乱の原因が、黒人リーダーたちの急進主義と左翼の破壊活動の広まりにあると結論付けた[433]。

大戦以降も政府機関による防諜活動や対抗宣伝が行われ、１９１９年―１９２１年の赤狩りは、監視やスパイ行為を定着させることとなった。警察機関に加え、民間の愛国者団体（自警団）や大企業も政府に協力して、情報や人的資源を提供した。戦時中彼らはドイツ系や日系などの敵性外国人、平和主義者、社会主義者、労働運動家、そして積極的に政府や社会への不満を訴える黒人に調査の焦点を絞っていた。大戦の勝利がアメリカ社会に融和をもたらすことはなく、排外主義、１００％アメリカニズムが台頭する不穏な空気が漂い、アメリカ的でないとみなされた人々は、共和国の敵として監視と疑念の対象となったのである。

当時アメリカでは、競合関係にある複数の勢力がしのぎを削っていた。上流社会が中心の保守層、１００％アメリカニズムを唱導するクー・クラックス・クラン（Ku Klux Klan 略称ＫＫＫ）といった排外主義集団、そして非アメリカ的とレッテルを張られた移民や左翼層、黒人たちである[434]。社会の急激な変動で高まった大衆の不満は、アメリカを内向きにさせ、外国人（西欧や北欧以外の出身のヨーロッパ人や有色人種）を嫌う風潮を蔓延させ始めた。移民や左翼排斥の世論も高まり、アメリカの国家文化は白人中心主義であるという主張が幅を利かせるようになり、ＫＫＫも次第に南部以外に活動の場を広げてゆく。ＫＫＫの暴力は黒人だけでなく、ユダヤ人や移民など、彼らにとって「１０

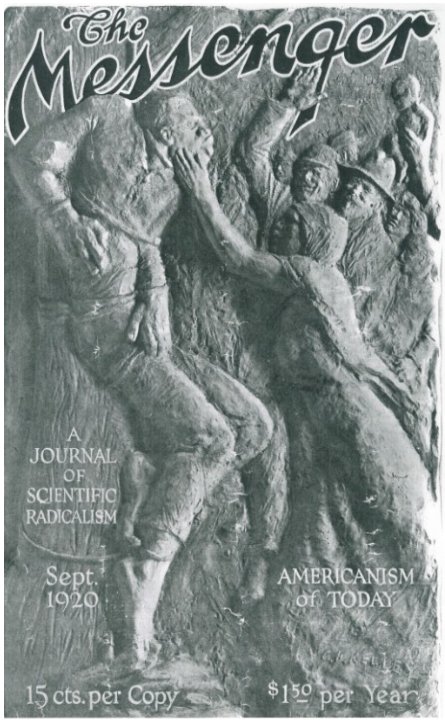
---

431 *Death in a Promised Land*, 23.
432 1919年に全米各地で吹き荒れた人種暴動。「血の夏」とも呼ばれる。
433 Mark Ellis, “J.Edgar Hoover and the ‘Red Summer,’ of 1919,” *Journal of American Studies,* Cambridge University Press, 1994, 40.
434 樋口、181頁

０％アメリカ人」でない者すべてに向けられたのである。

戦後、国内の脅威として監視の対象となったのは、１９０５年にシカゴで結成された急進的労働団体、世界産業労働組合（The Industrial Workers of the World 略称ＩＷＷ）、外国人、共産主義者、その闘争性を顕著にしてきた黒人たちであった[435]。戦後８カ月に亘り、デュボイス、『メッセンジャー』の共同編集者ランドルフとチャンドラー・オーウェン（Chandler Owen 1889-1967）、ガーヴェイらを含む黒人活動家たちが監視下に置かれた[436]。人種間の衝突だけでなく、排外主義や反共産主義プロパガンダが横行し、都市部は一触即発の状態であった。

ドイツの脅威は排除したものの、アメリカは国外でなく国内の敵に疑心暗鬼を募らせていた。戦後のアメリカ社会に渦巻く不満と疑念により、移民や左翼団体、急進派とされる人々が「アメリカの敵」とレッテルを貼られ、大量に拘束されて国外追放となった。アメリカ国内の敵に対する憎悪は、国外の敵を失ってぽっかり空いたアメリカ人の心の穴を埋める役割を果たしたのである。



１９２０年９月号の『メッセンジャー』の表紙。木に縛り付けられた黒人に白人たちが襲いかかっている。
Jean Blackwell Hutson General Research and Reference Division, Schomburg Center for Research in Black Culture.

『メッセンジャー』誌は、暴力に対する自衛や報復、完全な社会平等、ＩＷＷへの支援を訴え、「黒人出版物の中で最も危険」と目されていた。数ある黒人新聞・雑誌の中でも『メッセンジャー』は白人に最も脅威を与えたといわれる。『メッセンジャー』が人種差別やリンチに対する黒人の憎悪を代表しており、白人への敵愾心を煽っていると断定されたのである。人種関係の現状維持は、白人にとって権益と社会の安定を守るためには欠かせなかったため、現状を揺るがそうと画策する戦闘的黒人はアメリカの敵であった。新しい黒人（ニューニグロ）の運動とは、即ち破壊活動であるという説明は、白人にとって都合がよ

435 Ellis, 41; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 11. Theodore Kornweibel Jr., *"Seeing Red"-Federal Campaigns against Black Militancy, 1919-1925*, Indiana University Press, 1998, 15-16.
436 Ellis, 41.

く理解しやすかったのである[437]。１９１９年に捜査局が行った黒人出版物の調査では、黒人紙や黒人雑誌は「危険な兆候を帯び」ており「白人への敵意が一般黒人大衆にまで浸透している」と報告されている[438]。

一般に赤狩りの目的は共産主義の追放であるが、アメリカの共和主義を破壊すると考えられた集団の中には、平等と権利を求めて現状を変えようとする黒人も含まれていた。レッドサマーの「赤」は黒人にとっては、革命ではなく流した血の色であった[439]にも拘わらず、黒人も共産主義者同様攻撃の対象となった。アメリカの現状を揺るがす共産主義も黒人も、アメリカの「敵」として一括りにされたのである。アリス・ラブレース（Alice Lovelace）は、赤狩りと人種暴動には相関性があると述べている。

> 人種と経済の問題は絡み合っており、人種問題があるところには必ず経済問題がある。黒人の経済発展を押しとどめようとして白人が起こす暴動と、賃金や労働環境の改善を訴えた共産主義者たちの追放は、両方が「赤」という色で象徴されるようになったのです[440]。

自らも革命を経験したアメリカは、当初はロシア革命にも好意的であったが、一転、１１月革命が有産階級に重篤な危機意識を植え付けた。伝統的価値観を持つ多くのアメリカ人にとって、ソビエトが掲げた共同所有、無信仰、自由恋愛などは受け入れがたかった。ロシア革命のあおりを受けて、合法政党の社会党（The Socialist party of America 1901-）も排外主義のターゲットとなり、５人の党員がニューヨーク州議会から追放され、急進主義者とされた６，０００人が逮捕された。１９１９年の１年間で、革命の象徴である赤旗を掲げることが２６州で禁止された。アメリカ中でスト中の労働者が暴行被害に遭い、社会主義者の集会は中止され、急進的とみなされた新聞も圧力をかけられる事態となっていた。十分に愛国的でないという理由で教師が解雇され、強制的に国家に忠誠を誓わせようと行われる暴力も頻発していた。連邦政府は、アメリカ社会を分断しているのは国外からもたらされている急進主義であると考え、国民統合のため、急進主義者をいち早く見つけ出すべく民間のボランティアを活用した。排外主義は戦争によってのみもたらされたのではなく、共和主義を守るべく高揚した積極的市民意識による

---

437 Kornweibel Jr., 21-22.
438 Ellis, 43.
439 Joyce Moore Turner, *Caribbean Crusaders and the Harlem Renaissance*, University of Illinois Press, 2005, 84.
440 Lovelace, 5.

影響も大きい。

１９１０年代には、労働現場の管理体制の強化に反発した労働者のストライキも頻発したが、経営者側は、労働運動（イコール）＝共産主義とレッテルを貼ることで、労働者の団結と勢いを潰すツールとして活用した。東部の都市部では、１９世紀以降労働運動が頻発しており、市民との半ば平和的共存が可能となっていた一方、２０世紀に入ってから急速な工業化・都市化を遂げた西部では、労働運動は異質なよそものであった。労働運動は革命の前段階であり、ストライキはロシアの無政府状態をアメリカに輸入するものだというプロパガンダが全国に普及し、労働運動は大衆の共感を得られなくなっていく。アメリカ人の多くは、アメリカ政府は弱く、みなで守るべきものと考えており、労働運動はアメリカに対する挑戦状であると受け止められたのである。特に攻撃の対象となったのは、大戦中最も警戒されたＩWWであった。ＩWWのメンバーの多くは移民であり、反アメリカ的で、共和国への脅威であるとみなされた。ＩWWは、「人種や国籍に拘わらず全ての労働者を１つの組合の下に団結させることと、ゼネストによる社会と経済の大規模転換」を目的としていた[441]。政府は大戦をＩWW排撃の好機と捉えた。ＩWW殲滅に向け、退役軍人会をはじめとする組織が活躍する。軍人会のＩWW本部攻撃で退役軍人の死者が出るや、反ＩWWの大騒乱が巻き起こった。アメリカの理念に反するＩWWへの攻撃は正当であるとみなされ、ＩWWは瀕死の状態に追い込まれたのである。

> 通常なら集団での暴力は許されることではありませんが、「アカ」の息の根を止めたのは適切で正しいことでした[442]。

１９１９年の７月から１２月の間に、人種間の緊張が高まっていた２５都市以上で４０件の暴動が起こり、空前の人種闘争を展開した。この時期の人種暴動の特徴は、黒人が初めて団結して自衛、反撃したことである。白人群衆は、黒人による平等や社会正義の要求を、白人優位の現状に対する挑戦状であると受け止めた。白人は、白人が支配する社会体制を死守するため、且つ社会的弱者である黒人への攻撃を経済的・社会的不満を晴らす手段として暴動を起こしていたのである。しかし、黒人の抵抗・反撃が初めて集団で行われたとはいえ、レッドサマーもそれまでの人種暴動と同様、白人暴徒が黒人

---

441 Kornweibel Jr., 155.

442 M.J.Heale, “American Anticommunism: Combating the Enemy Within, 1830-1970,” Johns Hopkins University Press, 1991, 64.

地域に攻め入って、銃撃・略奪・放火を行ったという点では共通している。

レッドサマーの先陣を切った、１９１７年７月１日にイリノイ州イーストセントルイスで起きた「イーストセントルイスの大虐殺」（East St. Louis Massacre）では、少なくとも４０人の黒人が年齢、性別を問わず殺害された。１００人の犠牲者を出したとする報道もある。数百人が負傷し、放火により数千人が家を失った。犠牲者の多くは埋葬されず、川に流された遺体もあったため実際の被害者数は不明のままである。この人種暴動を受け、ＮＡＡＣＰ初代事務局長を務め、「レッドサマー」の名付け親でもあるジェームス・ウェルドン・ジョンソンは、約１万人の大規模パレードを組織し、抗議の意を込めてニューヨーク市を沈黙したまま行進した[443]。

第１次世界大戦に従軍し、アメリカ人として民主主義のために闘った自負をもって帰国した黒人たちは、祖国での変わらぬ差別に大きく落胆し、憤った。黒人兵が戦地から帰還してみると、人種関係は改善されるどころか悪化していた。南部の人種主義が着実に北上し、アメリカが世界の超大国として頭角を現すのと同時に、攻撃的な人種主義が台頭していたのである。人種間の緊張の高まりの原因には、南部の黒人の北上があった。

人種暴動に抗議した１９１７年ニューヨーク市での沈黙パレード
Gifford, 25.

南部の人種問題が北部の人種問題となり、アメリカの「南部化」が進行していたのであ

[443] Boyle, 89.

る。アメリカ社会は戦後不況による職の奪い合い、黒人の闘う姿勢への白人の反感、そして急激な社会変化と近代化を受けて内向きになっていた。アメリカ人としての意識と自信を身につけた黒人の戦闘性が、白人には脅威と映り、黒人による白人同等の権利要求に反発を覚えた。「黒人の攻撃的姿勢は、新しい闘争的精神[444]を象徴しており、黒人社会への蛮行や暴力に対する消極的態度の一層の拒絶を証明した[445]」のである。

他州の黒人と同じく、オクラホマ州の黒人も戦争を熱く支持して従軍した。オクラホマ州全体で、徴兵により４３５，６８８人が兵役登録し、９０，１２６人が軍務に就いた。その内、黒人は約５，０００人であった[446]。オクラホマシティの黒人週刊新聞『ブラック・ディスパッチ』の編集長を務めたロスコー・ダンジー(Roscoe Dungee 1883-1965)は、「民主主義の実現のためなら、オクラホマ州の黒人は喜んで闘うだろう。ただし、民主主義が国内でも海外でも必ず実現するという保証が必要である[447]」と主張し、オクラホマ州政府は黒人兵の戦場での働きを正当に評価するべきだと訴えた。黒人の間には、アメリカは相応の権利をすぐにでも彼らに付与するべきだという思潮が浸透し始めた。黒人は二度と劣等的地位に甘んじるつもりはなかったが、従軍兵士たちが帰還したオクラホマ州も、アメリカ全土の様相がそのまま反映された緊張状態に陥っており、反黒人感情は依然として強固なままであった[448]。

ハーレムの著名な黒人詩人であったクロード・マッケイ (Claude McKay 1889-1949)の「もし死ななければならないのならば」(“If We Must Die”)は、黒人の戦闘性を賞賛し、喧伝する聖歌、またレッドサマーの戦闘歌の役割も果たした[449]。

もし死ななければならないのならば
豚みたいには死にたくない

狂って飢えた犬どもにみじめに追い詰められ、

---

444 白人の理不尽な暴力に団結して武装自衛することは、黒人が生き残るために不可欠であり、正しい道であるとする思想。

445 George Robertson, “Speak Out Now When Others Grow Silent: The Messenger and Debates over New Negro Radicalism,” *The Harry Bridges Center for Labor Studies*, University of Washington, 2008, 4.

446 McDonald and Fisher, 364.

447 Charles A. Simmons, *The African American Press*: *A History of News Coverage During National Crises, with Special Reference to Four Black Newspapers, 1827-1965*, Mcfarland and Co. Inc. Publishing,1997,57.

448 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”46.

449 ケリー、93頁。

奴らはわれわれの運命をいまいましく嘲笑う

もし死ななければならないのならば
気高く死にたい
尊い血が流されたとしても無駄にはならないから
そして、怪物たちすらわれわれ死者を称えずにはおれないのだ！
ああ、同士たちよ！われわれは共通の敵と対決せねばならない
数でははるかに負けていようと、勇敢さを示すのだ
数え切れない鉄拳に、一発の致命的打撃！
目の前に空っぽの墓が掘られていたからってどうだっていうんだ？
男として堂々と残忍で卑怯な奴らに向き合うのだ
壁に押し付けられ、死にそうになっても、反撃するのだ！[450]

『ウィルミントン・エブリ・イブニング』（*The Wilmington Every Evening*）紙は、暴動の北上について以下のように報道している。

明らかに北部都市であるイリノイ州イーストセントルイスの暴動では、１９１７年７月に１２５人が死亡した。１９１９年７月１９日から始まった首都の暴動では７人が死亡し、多くの負傷者を出した。数日後の７月２６日からは、明らかに南部ではないシカゴで３８人が死亡し、５００人が負傷した。同じ年の１０月２日には、中西部アーカンソー州エレイン（Elaine）で３０人が死亡、揉み合いになって数百人が怪我をしている。その３日前には、西部ネブラスカ州オマハ（Omaha, Nebraska）で３人が死亡し、多くが負傷した。暴徒たちがオマハ市長を縄にかけ、すんでのところで命拾いする事態が起きていた[451]。

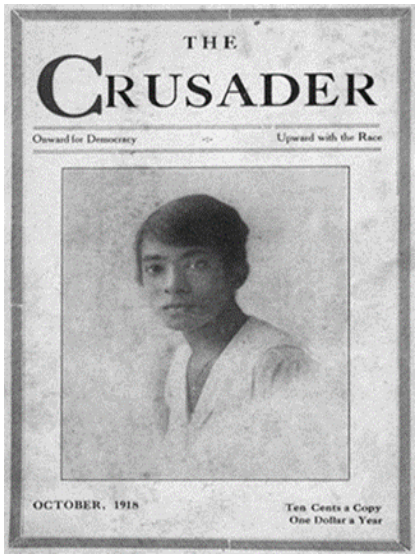
暴動の北上は、南部の人種主義の拡散を意味していた。黒人がジムクロウの枠からはみ出そうとすると、それを力で押し戻そうとする白人の容赦ない攻撃にさらされたのである。シカゴで起きた暴動のきっかけは、ある湖の白人の遊泳場所で黒人が泳いだことである。白人たちがこの黒人に投石し、黒人が殺害された[452]。レッドサマーの背景には、社会の暴力的傾向、人口移動、黒人が就労する職業の向上などに加え、黒人がこれまで押し込まれ、押しとどめられていた場所から自由になることに対する白人の警戒、反感

[450] W.A.Domingo, “If We Must Die,” *The Messenger,* Vol.2, No.9, September 1919, 4.
[451] “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”7-8.
[452] Messer, 15.

が存在した。レッドサマーがそれまでの暴動と大きく異なるのは、黒人が抵抗し反撃を試みたことで、白人も犠牲者を多数出すことになったことである。テキサス州ヒューストンで起きた１９１７年の暴動では、銃撃を行った黒人兵士たち４１人が終身刑、１３人が死刑となっている。祖国での変わらない差別と暴力は、黒人コミュニティ内における自衛の必要性の主張と、「白人への報復」ムードを高めることになった。１９１９年の『クライシス』誌は、黒人の自衛と武装を呼びかけている。

> 我々は今や自衛という強固な武器を手にした。黒人はもう二度と殺人者に背を向けたりはしない。もしも白人が武装して黒人をリンチしようとするならば、我々も武装して彼らに対峙するのだ。もしも奴らが攻撃して来るならば、レンガ、棍棒、銃を使って迎え撃つのだ[453]。

ルイジアナ州の『シュリーブポート』（*The Shreveport*）紙は、レッドサマーをもたらした要因について以下のように述べた。



「クルセイダー」１９１８年１０月号
Jean Blackwell Hutson General Research and Reference Division, Schomberg Center for Research in Black Culture.

> 南部の人種問題の９割は、身の程知らずの黒人に責任があると言って間違いないだろう。もしも黒人が黒人らしく振舞い、黒人らしく働き、黒人らしく話をすれば、暴動も、喧嘩も、衝突も起こらないだろう[454]。

白人は、暴動をはじめとする人種問題が「分をわきまえない」「厚かましい」黒人による平等や権利の要求にあると考えたが、黒人は反撃・抵抗が例え失敗したとしても人種の新たな力になるという信念を抱くようになっていた。黒人の出版物は次々と、「黒人が殻を破り本当の男として誕生した」「アメリカは黒人を憎み、リンチし、奴隷にするが、それは我々が黒人だからではない。我々が弱いからだ。白人群衆には火ででも銃ででも立ち向かわなくてはならな

[453] *Death in a Promised Land*, 23.
[454] Hirsch, 59.

い」と黒人の戦闘性を奨励し、鼓舞した[455]。白人の暴力は黒人の南部脱出を助長し、北部都市の黒人ゲットーの人口を増加させ、黒人労働者と白人労働者の軋轢が強まるという負のサイクルが繰り返された。

開拓地特有の自衛の精神が浸透したオクラホマでは、黒人も含めほとんどの住民が銃に親しんでおり、自身と家族、所有物を守るために闘うことはごく自然なことであった。黒人にとって、自衛の精神によりもたらされる自立と身の安全は、オクラホマ以外の地では得難いものであった。１９１１年９月発行の州内の黒人新聞は、黒人住民を追い出しにかかった白人暴徒との一触即発の事態を伝えている 。

> 黒人たちは生命と財産を死守すべく団結している。白人が何らかの行動に出れば、深刻な事態を招くであろう。・・・・黒人たちは最悪の事態に備え、法ではなく彼ら自身で身を守る準備を整えている[456]。

> ＫＫＫはどこにでもいて、黒人をしょっちゅう脅かして楽しんでいました。でも私たちはミシシッピやアラバマ辺りの黒人とはわけが違うんです。私たちは彼らに立ち向かって闘うんです。白人は私たちの闘う精神をみくびっていました（黒人男性ロバート・フェアチャイルドの証言）[457]。

レッドサマーに代表される人種関係の著しい悪化を受け、戦争を契機に登場した「新しい黒人（ニューニグロ）」たちの闘う精神と積極的行動主義こそが黒人の希望であるという思想が、黒人たちに浸透した。こうした黒人の戦闘性の高まりを受け、国務省は急進的黒人出版物を警戒し、検閲をかけ始めた。西インド諸島出身でニューヨーク市の黒人新聞『アムステルダム・ニュース』（*The New York Amsterdam News*）の編集を担い、後にタルサ人種暴動扇動の疑いをかけられることになるシリル・ブリッグスは、報道の自由の制限と白人の黒人居住地攻撃を非難した。人種問題の改革を訴えるプロパガンダは治安妨害とみなされ、検閲は戦時中特に強化された。ブリッグスは、戦地での黒人負傷兵士放置といった批判記事や国内のリンチ数を報道したことで、二度に亘って聴取されている[458]。

---

455 Rollin Lynde Hartt, “The New Negro. When He's Hit, He Hits Back!” *The Independent*, January 1921, 59–60, 76.

456 “Bryan County Negroes Organized,” *The Muskogee Cimeter*, Vol. 12, No. 46, Ed. 1, September 2, 1911, 1.

457 Interview with Robert L. Fairchild, JR., 184(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

458 Michael C. Dawson, *Black Visions-The Root of Contemporary African-American Political*

彼は社説の内容に政府の圧力がかかったことに抗議し、１９１８年に『アムステルダム・ニュース』を辞職した。同年創刊した月刊誌で、後にＡＢＢの機関誌となった『クルセイダー』の編集者になった後も、政府からの圧力は続き、議会ではある南部の議員が「(ブリッグスら戦闘的黒人は）反逆罪で銃殺されるべき」と発言している[459]。ＡＢＢを監視していた捜査局のニューヨーク支局は、ＡＢＢについて「著しく急進的で反白人[460]」の団体であるとの評価を下していた。

ＡＢＢメンバーは西インド諸島出身者が多数を占めていた。１９００年代に急増した西インド諸島からの黒人移民の多くが英語を話し、アメリカ黒人に比べて高い教育を受けており、識字率はほぼ１００％であった。未熟練工が多かったアメリカ黒人と比べ、ホワイトカラーや熟練職が多かったのが彼らの特徴である[461]。西インド諸島にも人種差別は存在したが、アメリカほど構造的ではなく「人種と階級が複雑に絡み合う形で地位が規定され[462]」、人種が唯一の決定因子ではなかった。そのため彼らは、アメリカで肌の色だけで差別されることに一様に戸惑い、憤慨した。その状況に甘んじているかのように見えたアメリカ生まれの黒人同胞に怒りを感じることもあった。高い教育やスキルを持ちながら、その肌の色ゆえに門を閉ざされる経験は、彼らを急進化させる大きな要因になったと考えられる。

ブリッグスは１９２１年１月の『クルセイダー』誌上で、活発化するＫＫＫの暴力に対し、「我々の自由と権利、存在そのものをかけて徹底的に闘う。我々にとってこれは権利を守ると同時に、生命を守る闘いでもある」と宣言している。分の悪い闘いを強いられている黒人が「手に入るありとあらゆる武器をとって闘うのは当然のことである。殺人者に喉元を掴まれている時に、武器を選んでいる余裕などない。毒であれ、火であれ、何でもいいから一番身近なもので反撃するのだ[463]」と、黒人の自衛の必要性を力強く訴えた。

Ideologies-, The University of Chicago Press, 2001,177,181.

459 *Ibid*.

460 Kornweibel Jr., 31.

461 竹本友子「第1次世界大戦後の合衆国黒人運動におけるカリブ移民の役割―シリル・ブリッグスにおける人種と階級―」、早稲田大学大学院文学研究科紀要、第4分冊、2003年、45－46頁。

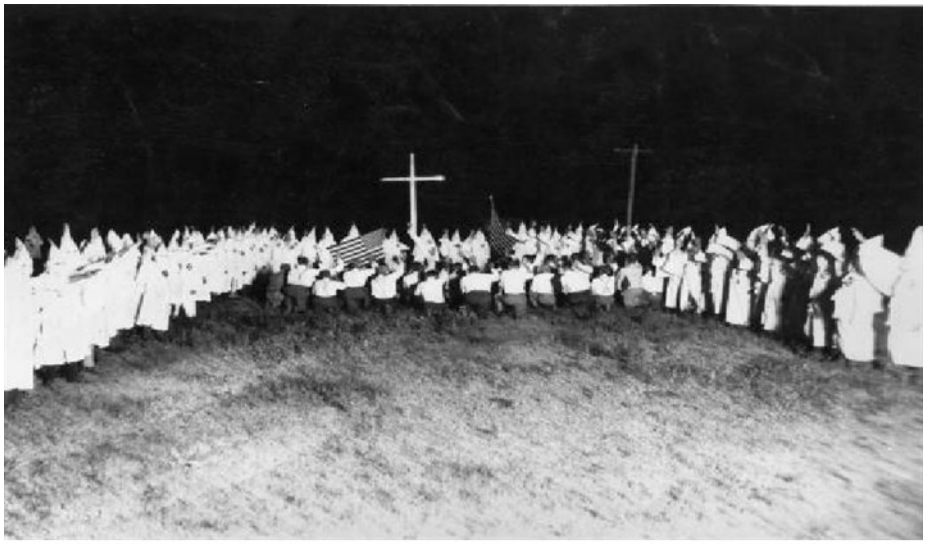
462 竹本、前掲書、53頁。

463 Cyril V. Briggs, “The Ku Klux Klan,” *The Crusader*, Vol.3, No.5, January 1921, 5.

３ リンチと自警団精神

（１） 法を超越したリンチ

排外主義や１００％アメリカニズムは、ＩWW攻撃の前衛部隊であった復員軍人会などの自警団的要素の強い愛国団体を生み出した。外国からのあらゆる影響を拒絶し、急進的外国人の強制送還を謳う退役軍人会は１９１９年に組織され、その年の末には１００万人を超えるメンバーを集める急成長ぶりを見せた。ワシントン州やアイダホ州などの西部の州では、ＩWW攻撃の目的でメンバーが招集され、次第に法の手を借りずに独自の制裁を加え始める。彼らは労働集会を妨害したり、急進派の新聞社を閉鎖に追い込んだりと、その活動を活発化させていた。黒人たちが新しい黒人として戦闘性に目覚めたように、国家と民主主義のために闘った白人の軍人たちも、アメリカの共和主義を守るため、外国からの影響や急進主義を排撃せねばならないと立ち上がったのである。彼



１９２０年代のオクラホマ州のＫＫＫ入会の儀式
Death in a Promised Land, 21.

らにとっての急進主義とは、「革命によって政府の形態を変えようとする試み[464]」であり、アメリカ市民としてのモラルや規範、道徳意識の守護者としての役割を買って出たのであった。

この時期１００%アメリカニズムを唱道していたのは退役軍人会だけに留まらない。ＫＫＫは１９１５年に再び活動を始め、１９１９－１９２０年の赤狩りの時期に会員数の伸びを見せ、中西部にまでその勢力圏を広げた。リンチが頻発する事態を受け、１９

[464] Heale, 82.

１８年にはリンチ阻止法案（Dyer's Anti-Lynching Bill）が提出された。しかし、１９２１年には５７人の黒人が全国でリンチにかけられていたにも拘わらず、１９２２年に廃案となった[465]。ＫＫＫの主なターゲットは黒人、ユダヤ人、カトリック教徒であったが、しばしば彼らがアメリカ的でないとみなした急進主義者、日系人、南欧からの移民、無神論者に加え、酒類の密売人、不倫を行う男女、労働運動リーダーや一般の犯罪者など、非道徳的とみなされた人々も攻撃の対象となったのである。ＫＫＫをはじめとする自警団的愛国団体は、自らの存在意義のため国内の敵を確立する必要があったと考えられる[466]。

ＫＫＫは１９２０年代半ばにメンバー数のピークを迎え、北部、南部、中西部に５００万の会員を有していた。１９１０年代までのオクラホマでは、ＫＫＫの影響力はごく限られていたが、１９２０年に本格的にオクラホマに進出を果たした。オクラホマでは最高で１０万人のＫＫＫ会員がいたと報告されている。急激な都市化と犯罪件数増加に取締りが追いつかず、オクラホマシティやタルサといった都市部では、犯罪者を法に代わって罰する自警団が続々と誕生していた。ＫＫＫは、酒や麻薬の密売人、売春の斡旋業者をリンチにかけることで、犯罪件数減少に貢献したとして評価されることもあった。１９２１年には、オクラホマの都市部でＫＫＫのメンバーや信望者が数千人規模で増加している。ＫＫＫはオクラホマでは有力な組織で、タルサの白人著名人もその多くがメンバーであった。メンバーたちは一般的に治安維持に熱心で犯罪的傾向は無かったが、血の気が多く狂信的で、自らの手で犯罪者を懲らしめたいと強く望む者も中にはいた[467]。当時の新聞記事は、自警団の活動目的やメンバーの特徴に触れている。

> メンバーの多くが著名な実業家たちだという噂で、彼らは危機に際して、法の手を借りずに悪を罰することをよしとする市民たちであった。普段は目立たないものの、一旦愛国的団結が脅かされたなら、直ちに一堂に会するであろうと期待されていた[468]。

タルサでも、ＫＫＫは暴動後に活動を活発化させ、会員数は急増し、暴動から２カ月が経った１９２１年８月にタルサで開かれた講演会には、２，０００人が詰めかけたと

---

465 樋口、126頁; Hannibal B. Johnson, "Righting the Wrongs of History: Reparations and the 1921 Tulsa Race Riot," *Oklahoma Humanities*, Summer 2012, 24.
466 Heale,43-67;*1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*11.
467 Burke and Monson, 46-47.
468 "Tulsans Discuss Meeting Townley," *Tulsa World*, January 18, 1921, 16(Cited in Messer, 97-98.).

いう。暴動後の白人コミュニティは、闘う黒人への恐怖、行った行為に対する羞恥心、罪悪感に苛まれていたと想像できる。暴力・破壊行為を正当化する術を探していたのかもしれない。そうした不安定な状況に、ＫＫＫがつけいる間隙が生じたのではないだろうか。

１９２１年の年末までに、タルサのＫＫＫ会員は３，２００人にまで増加し、全米中で最も強い勢力を誇る支部にまで成長を遂げた。１９２０年代半ばにかけてメンバーは更に増加し、６，０００人程度にまで達している。タルサには、全米でも数少ないＫＫＫ青年部（１２歳から１８歳までの少年が対象）と女性部が存在していた。

新恵理はアメリカのヘイトクライムに関する論文で、ヘイトクライムを３つのカテゴリー（スリル追求型、反応型、使命型）に分類し、ＫＫＫはこの中で使命型に分類されている。新は使命型ヘイトクライムを、「ある特定のカテゴリーに属する人々を、文化、経済、人種的伝統の純潔を破壊する悪魔だと認識し、その激しい憎悪から、彼らを世界から排除することが自分たちに与えられた使命であると信じて引き起こされる」と定義している。ＫＫＫメンバーも、100％アメリカニズム、白人女性の純潔、アメリカ市民の道徳を守り抜く使命を神から与えられたと考えていた[469]。そのため、彼らの信条に反する行為に対して制裁を加える権利があると信じて疑わなかったのである。

オクラホマシティのテレビ局ＯＥＴＡテレビ（OETA Television）が１９８０年６月１日に放送したインタビュー番組で、数人の出演者がオクラホマ州やタルサのＫＫＫについて意見を交わした。

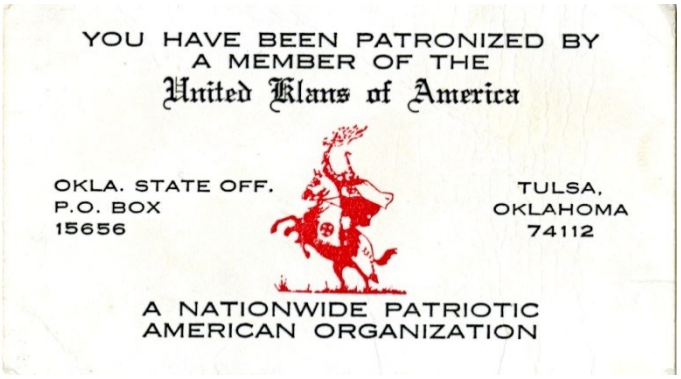
司会者：タルサの町の繁栄に比例して、ＫＫＫの力も高まっていました。１９１５年の映画「国民の創生」（The Birth of a Nation）の影響もあり、メンバーが全国的に増えていました。・・・中略・・・ほとんどの都市にＫＫＫのローカル部隊や集会場がありました。タルサも例外ではありませんでした。

デービッド・ブリード[David Breed]（都市史家）：タルサではＫＫＫは興味深いグループでした。悪意ある自警団というより、市民グループと言った趣です。一時期は電話帳に「タルサ慈善会」という名前で載っていたそうです。

ジョン・ホープ・フランクリン（タルサ出身の著名な黒人歴史家）：ＫＫＫが、クラブや草の根組織だったなんて今更言うのはよしましょう。ＫＫＫは政治・社会を操っていたし、

469 新恵理「アメリカ合衆国におけるヘイトクライム法とその問題点」地域研究論集、Vol.3, No.1, 2000年3月10日、79－81頁。

牛耳っていたんですから[470]。



自警団組織、United Klans of America のオクラホマ州のメンバーズカード（１９２０年代発行）
Oklahoma State University-Tulsa
Ruth Sigler Avery
Tulsa Race Riot Collection.

当時ＫＫＫは大きな力を持っていました。彼らは町の北側のＢＥＮＯホールを拠点としていました。ＢＥＮＯがどんな意味かはみんな知っていました。"Be No Catholic, Be No Nigger, Be No Jew"です。彼らがメインストリートを行進するのを見たことがあります。白い頭巾を被って白いローブをまとっていましたが、体の大きさで大体誰なのか見当はつきましたよ。芝生で十字架を燃やす類のことはやっていましたね。でもいいこともしていたんです。例えば、家族を養わずに遊び回っている男がいたとすれば、ＫＫＫが脅しをかけて懲らしめていました。人としてやるべきことをやらせていたんです。だから悪いことばかりしていたわけじゃありません。・・・中略・・・兄はハロウィーンにはＫＫＫのコスチュームを着ていました。他の子もやってました。暴動の後でも、です。趣味が悪いですね。暴動後１週間もしない内にＫＫＫは町中を行進しました。とにかく大勢でした。当時のタルサの著名人のほとんどがメンバーでした。でも、黒人はよく問題を起こしていた事も確かです。白人女性にちょっかいを出すとか、強姦もあったらしいです。白人は優位に立っていましたから、問題を起こす必要がなかったんです（ルース・ウィングフィールドの１９８７年３月１３日のタルサでの証言）[471]。

ＫＫＫは黒人の生活の妨害をしていました。１９１８年か１９１９年のことですが、タルサの近くの町で黒人女性がリンチされた末、車でひきずり回されるという事件がありました。ＫＫＫがグリーンウッドにやって来ると、いつも何かトラブルが起きました。タルサ

470 OETA Television Program Transcript, June 1, 1980, 4-5(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
471 Interview with Ruth Wingfield, 147-149(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

の激しい暴力は日常茶飯事で、人と会えば会話はいつも「昨日誰か殺された？」の挨拶で始まったものです（ロバート・フェアチャイルドの証言）[472]。

ＫＫＫはオクラホマに進出していたが、暴動時にタルサに支部があったかどうかは定かではない。ただ、暴動のすぐ前にはＫＫＫのスカウトがタルサにも現れていたという。ＫＫＫは、新たに入会する者から１０ドルの会費を徴収するシステムを導入したため、自警団精神がふんだんで、人種関係も劣悪なタルサのような町では、多くのメンバーと利益の獲得が期待できたはずである。『トリビューン』は、ＫＫＫが暴動時に既にタルサに支部を設置していたとしてもおかしくはない、とその可能性に言及している。法執行機関に代わって犯罪者を迅速に成敗することを好む自警団が、タルサのように犯罪が横行する町を放っておくはずはなかったからである[473]。

ＫＫＫの会員には農民、農場主、油田労働者、鉱山労働者、商人、実業家、教会関係者、新聞編集人、保安官、警察官、消防士、投資顧問、役人、教員、法律家、裁判官、政治家、医師、理容師、郵便配達人、配管工、清掃婦、花屋など、ありとあらゆる職業の人々が名を連ねていた。要するに、ＫＫＫの信条や影響力は、社会のあらゆる階級層に浸透していたのである。

ＫＫＫは白人を黒人の暴力から保護し、白人女性の純潔を守る組織として自らを巧みにプロモーションしたのである。しかし、もちろんタルサ市民が全員ＫＫＫに共感したわけではない。１９２０年代前半、タルサではＫＫＫによるムチ打ち、略取、威嚇、暴行といった行為がオクラホマ一頻発するようになり、１９２３年にはタルサの商工会議所が、タルサ市の役人の多くがＫＫＫの勢力下にあると明らかにし、非難する声明を発表した。ＫＫＫの自警団精神による暴力はタルサ市のイメージを汚すとして敬遠されるようになり、彼らの暴力に怯えた犯罪者たちにとっても、ＫＫＫは煙たい存在であった。ＫＫＫによる度を越えた暴力に人々が次第に嫌悪感を抱き始め、１９２０年代以降急速にその勢力は衰えてゆき、１９２６年にはタルサ市から、そしてオクラホマ州全体でもＫＫＫは事実上消滅した[474]。

タルサでは、ＫＫＫの近代版と呼ばれた自由騎士団（The Knights of Liberty）が１９１７年に結成され、黒いマントを羽織ったメンバーたちが、犯罪者、平和主義者、Ｉ

---

472 Interview with Robert L. Fairchild, JR., 183(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
473 Messer,98;Hirsch,163.
474 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 11; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”45-46; *Black Wall Street*, 21; Hirsch, 164-165.

WWなどに対して暴力的な威嚇を始めた[475]。タルサ市やオクラホマ州の黒人にとってリンチや暴力は現実であり、ごくごく身近な存在であった。黒人がローランドのリンチ阻止を試みるため武装して集まったのも、リンチが実際に起こり得たからであった。多くの黒人が司法や警察を信頼しておらず、黒人を守ってくれるとは期待していなかったのである。

タルサ暴動の前の数年間に、タルサの暴力的で暴力に寛容な傾向を顕著に示すリンチ事件が２件起こっている。タルサ暴動の直近の事件が、暴動の前年１９２０年７月、２５歳のタクシードライバーを殺害したとして、１８歳の白人少年ロイ・ベルトンが郡庁舎の最上階の留置場から連れ出されてリンチにかけられた事件である。マッカロー保安官の前任のウーリー保安官（Sherriff James Woolley）は、ベルトンを保護するために護衛を２人増員して警護に当たった。重体の被害者が亡くなればリンチが起こるだろうという噂が飛び交う中、『トリビューン』は暴徒精神を煽るかのように、黒髪をオールバックにし、如何にも不良少年といった趣のベルトンの写真を１面に大きく掲載した。「心神喪失の抗弁で無罪になろうとしている」「金持ちの姉が無罪を買うだろう」など、センセーショナルな見出しも踊っていた。事件から数日後に被害者は亡くなり、その妻は『トリビューン』のインタビューに、「正義が行われることを望みます。私の幸せと罪のない命が奪われたのですから。加害者がリンチされればいいとは思いますが、法で裁かれる方がきっと適切なのでしょう[476]」と答え、素早い刑の執行を求めるタルサの自警団精神に煌々と火を灯した。何しろ当の未亡人が正義を望んでいるのだから。

被害者が亡くなった当日の午後１１時前、男たちが郡庁舎前に集まり始めた。『タルサ・ワールド』によれば、「ほんの少しの間に男たちの人数は数百に膨れ上がり、やがて約１，０００人が期待と好奇心をにじませて集まった。」その内、約５０人が武装し、マスクを被っていた。代表の数人が庁舎に乗り込み、ウーリー保安官に銃を突き付けてベルトンの引き渡しを要求した。保安官は「彼の始末は法に任せよう。すぐに電気椅子送りになるはずだ」と抵抗したが、男たちは保安官の武器を奪い、ベルトンを連れ去った。留置場から連れ出されたベルトンを待っていたのは、男たちの歓声と、違法に持ち出された被害者のタクシーであった。ベルトンを乗せたタクシーに続いて、暴徒たちが乗る１０台以上の車が連なって走っていたが、その数は見る間に１００台以上に増えたという。数千のタルサ市民が１８歳の少年の殺人ショーの観覧に駆けつけ、警察が見物

475 *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*17.
476 Hirsch, 67; *Death in a Promised Land*, 41.

客の車両の交通整理を行っていたという多数の証言がある[477]。

ベルトンが暴徒の手で殺害された後、ベルトンを守り抜けなかったウーリー保安官は、「リンチは確かにタルサの面汚しである。しかし一方で、法による死刑執行よりも犯罪者がリンチで殺されて有益だったとも思う。タルサの男たちの犯罪に臨む本気度が示されたからだ」と、法執行官である保安官がリンチを糾弾するどころか、その有効性を認めてしまったのである。新たに警察局長に就任したグスタフソンも、リンチは「残念なこと」ではあったが、「残忍な殺され方をした被害者を思えば、リンチを求める市民感情も理解できる」と述べ、「暴徒のやることは許されることではない。私は１００％リンチには反対だが、ベルトンがリンチされたことで、タルサやその近郊には犯罪に対する抑止効果が生まれたのではないだろうか。その意味で、リンチは恩恵をもたらしたといえる」「タルサは特殊な土地柄で、リンチにあまり抵抗感がない」とも語った。グスタフソンは、リンチの現場に到着した警察官が暴徒を制止するのを禁止していた。「もし警察が介入していたら銃撃戦になっていた。そんなことになれば多くの人々の命が奪われていただろう」と述べ、リンチを野放しにした自らの行為を正当化した。目の前で行われるリンチを前に、警察は観衆が暴徒たちに近づかないよう見張っただけであった。迅速な罰を望むタルサ市民の風潮と、リンチを許容する警察の姿勢がリンチのやまない要因になっていたのである。ベルトンの遺体は葬儀屋に運ばれたが、夜中であるにも拘わらず、多くの市民が遺体の見物目的で詰めかけたという[478]。

『タルサ・ワールド』は、暴徒によるリンチが「正義に根差した抗議」であったと主張し、「リンチが行われた夜、集まった群衆たちには破壊精神のかけらすらなかった。あったのは、犯罪に甘く、非効率的な政府への憤りにかられた市民精神であった」と、白人群衆が正当な理由で集まり、何ら暴力的傾向がなかったという記事を掲載し、ウーリー保安官をはじめとする役人たちが犯罪取り締まりに弱腰だとして非難した。『タルサ・トリビューン』も、リンチは正当化できないと述べる一方で、リンチに加わった白人暴徒ではなく、警察と役人を糾弾する社説を掲載した[479]。

ベルトンのリンチを受けて、黒人は白人のように悠長な態度ではいられなかった。リンチされたのは白人であった。白人が易々とリンチされるならば、黒人であれば疑問の余地はなかった。ベルトンのリンチ殺害から２か月後の１９２０年９月４日、スミサー

---

477 *Black Wall Street*, 34-35; Hirsch, 67-68; *Death in a Promised Land*, 40-44.
478 *Death in a Promised Land*, 42-43.
479 *Ibid*., 43-44.

マンは『タルサ・スター』紙で、「郡庁舎の最上階の留置場は安全であるという神話が崩壊した[480]」と、法執行機関に対する怒りと不信を露わにした。スミサーマンは、「どんなに非道な犯罪を懲らしめるためであっても、リンチは決して正当化できない[481]」という強固な信念の持ち主であった。スミサーマンは、リンチを非難すべき行為というだけではなく、社会の恥ずべき「汚点」として捉えていた。タルサの新聞の中で、リンチを真っ向から非難したのは『タルサ・スター』のみであった。リンチは、白人に比べて被害者になり易い黒人に、より大きな影響力を持っていた。この事件は、法執行機関がリンチ阻止に本気で取り組む意志があるのかという問題に、決定的な決着をつけることになったのである。同時に、タルサ市民の選択も明らかにした。タルサ市民は、時間と労力を要する刑事司法制度ではなく、市民の手による素早い暴力的報復行為を選択したのである。黒人を守るのは黒人しかいないという厳然たる事実が、グリーンウッドの住民に突きつけられたのであった。

この事件の３年前の１９１７年には、ＩWWが自由騎士団の暴力のターゲットとなった。ＩWWの社会主義的傾向と人種平等の理念は、自由騎士団の反感を買っていた。多くの白人にとって、ＩWW、共産主義団体、ＮＡＡＣＰなどの運動団体は社会の現状を揺るがす元凶であり、忌み嫌うべき存在であった。黒人の団結と武装自衛を唱えた『メッセンジャー』は、ＩWWがアメリカで唯一黒人差別をしない労働団体であるとして、黒人のＩWW加入を強く推奨している[482]。加入者の多くが未熟練労働者で、人種融和の理念を掲げていたＩWWは、その大多数が未熟練労働者であった黒人の支持を得た。しかし、一方で、黒人を組合から排斥し続け、現状維持を望んでいた白人たちの怨嗟の対象となったのである。

第１次世界大戦中から、労働問題、共産主義、不況、黒人の権利拡張運動、犯罪や汚職といった問題が社会を不安定にし、白人がアメリカ社会で支配力を失いつつあるという危機感が蔓延し始めていた。この危機感と自信喪失とが、自警団による過剰な暴力として噴出したのである。ＩWWメンバーのリンチ事件は、こうした自警団精神がたけなわで、市が法と秩序を維持できなくなった状況で起こった。黒人労働者に手を差し伸べたＩWWは、白人にとって、人種的脅威としてだけではなく、ストライキの扇動など、経済的脅威でもあった。

---

480 “The Eruption of Tulsa,”909; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”53-54.
481 “Gov. Invokes Law vs. Mobbists,” *Tulsa Star*, September 4, 1920, 1.
482 “Why Negroes Should Join The I.W.W.,” *The Messenger*, July, 1919,8

１９１７年１０月、タルサの石油会社副社長の住宅が爆撃される事件が起きた。副社長とその家族は無事であったが、住宅が半壊する被害に遭った。タルサのメディアは、ＩＷＷの犯行であると即断し、その自警団精神を余すところなく発揮した。『タルサ・ワールド』は、社説で自警団の介入を支持し、ＩＷＷのメンバーのような野蛮な活動家も泥棒も、同じ犯罪者であるのだから同じように罰せられるべきだと訴えた。ほどなく、タルサ市警察も、ＩＷＷが爆破事件に関わっていると発表した。オクラホマがＩＷＷメンバーで溢れ返っているという噂が飛び交い、タルサ警察がＩＷＷの集会所を捜索し、メンバーが拘束された。警察が有罪判決を受けた彼らを護送している際、黒装束の自由騎士団約５０人のメンバーに連れ去られたのである。自警団精神に満ちたタルサでは、裁判の有罪判決では十分ではなかった。メンバーたちはタルサ西部の峡谷に連行されたが、そこでは既にＩＷＷの他の１７人のメンバーたちが木に縛りつけられた状態でムチ打たれていた。彼らはタルサの町を去るという条件で解放され、タルサの町中に、「ＩＷＷへの警告：日暮れまでに出ていけ 」と言うビラがまかれた。生々しい敵意と暴力を前に、ＩＷＷはタルサから撤退せざるを得なかったのである。リンチは市民から絶賛され、自由騎士団は「愛国的団体」と評されることとなった。このリンチ事件で自由騎士団が咎めを受けることはなく、誰一人逮捕されることはなかったのである。市民自由局（National Civil Liberties Bureau　略称 ＮＣＬＢ）によると、市当局者に加え、数人のオクラホマ州や連邦の役人がリンチを事前に把握しており、自らリンチに参加した者もあるという。市民自由局は以下の油田労働者の手紙を紹介し、ＩＷＷのメンバーと思しき油田労働者たちが、労働者を団結・組織させることに成功していたのだと述べている。

> 今回のトラブルは、１年ほど前にタルサにやって来たＩＷＷのメンバーが、賃上げと時短を求めるために油田労働者を団結させたことへの報復なのだと思います[483]。

ＩＷＷへ向けられたメディアや市民の極端な反応は、２０世紀初頭に活発だったオクラホマの社会党の存在も一因であった。ＩＷＷと社会党は密接に結びついていたからである。社会党は、貧困にあえぎ、苦役から解放されたいと願うテキサスとオクラホマの農民層に広く支持されていた。オクラホマの社会党は、アメリカ中のどの州の社会党支

---

[483] *The "Knights of Liberty" Mob and the IWW Prisoners at Tulsa, Okla. (November, 9, 1917)*, National Civil Liberties Bureau, February 1918,3-4.

部よりも活発で、民衆による強い後押しを受け、党員の数も全国一であった[484]。社会党は第３の勢力として既成政党に危機感を抱かせるほどの影響力を持ち、メンバーは主に労働組合主義者、抗夫、移民、知識層で構成されていた。オクラホマ州の多くの農民たちは経済的な苦境に置かれており、下層階級の人々は貧富の格差に不満を抱いていた。また、社会党はジムクロウと闘い、黒人や先住民の支持も得ていた[485]。社会党は、貧困層と有色人種の要求を吸い上げて代弁したために、その支持を確実に増やしたのである。とはいえ、ＩWWの撤退後、全国的な排外主義の蔓延と共に、社会党も衰退を余儀なくされることとなった。

（２）黒人封じ込めの手段としてのリンチ

黒人は二級市民以下の存在とみなされ、黒人を隔離してその権利を剥奪する行為は正当化され続けた。黒人は支配され、抑圧されるべき存在であり、白人の暴力にうってつけの標的となった。ＮＡＡＣＰは、リンチを以下の条件に該当すると定義している。

① 被害者が違法な手段で殺害されている。
② ３人以上の加害者が殺害に加わっている。
③ 加害者らは、リンチを行うことで正義と伝統に奉仕したと考えている[486]。

リンチは違法であり、多くの場合、住民たちは加害者の身元を知っていたにも拘わらず、加害者のほとんどが処罰の対象にはならなかった。リンチは被害者の落ち度とされ、正当化され続けてきたのである。ある報道関係者は１９２１年に、リンチに対する法執行機関の怠慢を訴えている。

> 近年、オクラホマでは数多くのリンチ事件が起きている。こうした殺人に関わった個人は、いまだかつて１人として法によって罰せられたことがないのである[487]。

リンチの多くは、黒人男性が白人女性を暴行したという嫌疑で始まっている。メディ

---

484 Garin Burbank, “The Disruption and Decline of the Oklahoma Socialist Party,” *Journal of American Studies*, British Association for American Studies, Vol.7, No.2, August 1973, 133-134.
485 McDonald and Fisher, 349-350.
486 Hirsch, 16.
487 Messer, 85.

アは、黒人には性的な暴力傾向があり、リンチは白人女性の純潔を保つ合法的な手段だという意識を白人たちに深く植え付けた。悪化する人種関係の中、「白人女性を守るため」と、リンチが罰せられることもなく正当化されたことが、暴力がエスカレートしていく要因の１つとなった[488]。１９２６年のフォーラム誌（*The Forum* 1885-1950）のディベート記事、「リンチは正当化できるか」（“Is Lyinching Ever Defensible?”）で、テネシー州のある法律家は、

> 黒人が白人女性を襲うという、白人社会に常につきまとっている恐怖が暴力を誘発している。・・・中略・・・白人が社会的平等を恐れるのは、白人と黒人の異人種間混交に結び付くと考えるからである。黒人に対して特別に偏見を抱いているのではない。白人女性との混交という問題さえなければ、社会的平等が達成されることに反対ではない。・・・中略・・・北部の人間には、南部男性の恐怖は到底理解できないだろう。南部の田舎では、カギをかけずに外出したらどんな恐ろしいことになるか。私たちが数値やデータを無視して勝手に不安に苛まれ、過剰反応をしているのはよく承知している。・・・中略・・・しかし、襲われるかもしれないのは、どこかの名もなき娘ではなく、コミュニティ全体の、我々の娘たちなのだ[489]。

と、南部白人男性が、黒人男性と白人女性の混交の可能性に激しい嫌悪と恐怖を抱いていたことをリンチ正当化の理由として挙げている。ところが、彼らはこの恐怖が理不尽で、十分な根拠がないことも理解していたのである。一方、このディベートでリンチを正当化できないとしたテネシー州の新聞記者も、黒人への暴力の根底に存在する異人種間の性的タブーを指摘する。「白人と黒人の接触は、古くから存在する集団的過剰反応を引き起こしている[490]」として、黒人男性を極度に恐れ、警戒する白人男性の姿を浮き彫りにしている。白人は人種分離を正当化するために、黒人男性を野蛮、性的にルーズ、道徳心が欠けている、などとしきりに宣伝してきたため、自らがそのプロパガンダに縛り付けられてしまっていた。彼らは、白人女性を黒人男性に奪われることが不安でたまらなかったのである。

デュボイスは軽蔑の意を込めて、リンチを「アメリカ式のスリリングなスポーツ」と呼んだが、白人にとってリンチは、「劣等人種が白人女性に乱暴するのを終わらせる決

---

488 *Ibid*., 17.
489 George W.Chamlee, “The Motives of Judge Lynch,” *The Forum*, December 1926, 813-816.
490 John P. Fort, “The Mind of the Lynching Mob,” *The Forum*, December 1926, 820-821.

意」の建前で正当化され続けたのである[491]。１８９０年から１９４０年までの間、リンチは黒人に対する社会統制の手段として行われ、儀式化された慣習にさえなっていた。リンチのような極端な暴力が行われた背景には、暴力に寛容な社会が不可欠であった。この間、分かっているだけで３，４４５人の黒人がリンチの犠牲となっており、１，２８９人の白人もリンチの犠牲となっている。またこの期間には、白人が黒人コミュニティを攻撃し、放火、殺人によって一掃する事件も起こっていた[492]。１９１０年から１９２０年間には、リンチされた黒人は８４７人に上り、１９２０年から１９２７年にかけても３０４人がリンチされている。１９１９年だけで７７人がリンチで殺害され、メディアは、リンチが「不道徳な黒人」を懲らしめる正統的な手段だと、しきりに流布するようになっていく[493]。

黒人は白人の暴力に対し、雑誌や新聞を通して多くの不法行為を糾弾した。『クライシス』誌は、年間リンチ数を発表し、『シカゴ・ディフェンダー』はその社説で、黒人は自らの権利を主張するべきだと訴え続けた[494]。デュボイスは、黒人が理不尽な暴力に武器を持って立ち向かうべきだと力説した[495]。『メッセンジャー』も、レッドサマーが吹き荒れた１９１９年、「黒人やその他虐げられている人々は、リンチや暴徒に対して自衛の手段を取らなくてはならない。命を奪おうとする相手よりも、自らの命がより重要だと常に認識していなくてはならない。リンチを行おうとする群衆よりも、自らの命を守ることを選択するべきだ。・・・中略・・・たった１人の黒人をリンチするのに１００人から１，５００人の白人が参加する。黒人は手足の自由を奪われ、防御すらできないというのに、リンチ見物にこれだけの人数が集まること自体、臆病で卑怯な人々の集まりだということは明らか[496]」であるとして自衛を強く促している。更に同じ年の別の記事では、「武力は最終手段でなくてはならないが、必要不可欠な場合もある。１００の説教、新聞記事、祈り、抗議、請願でも効き目がなければ、１発の弾丸の方がはるかに説得力を持つ。弾丸は暴動で黒人を救ってきた。黒人は、暴動が白人にとっても如何に犠牲が大きく、無駄なことかを知らしめたのだ[497]」と、黒人の反撃により白人にも

---

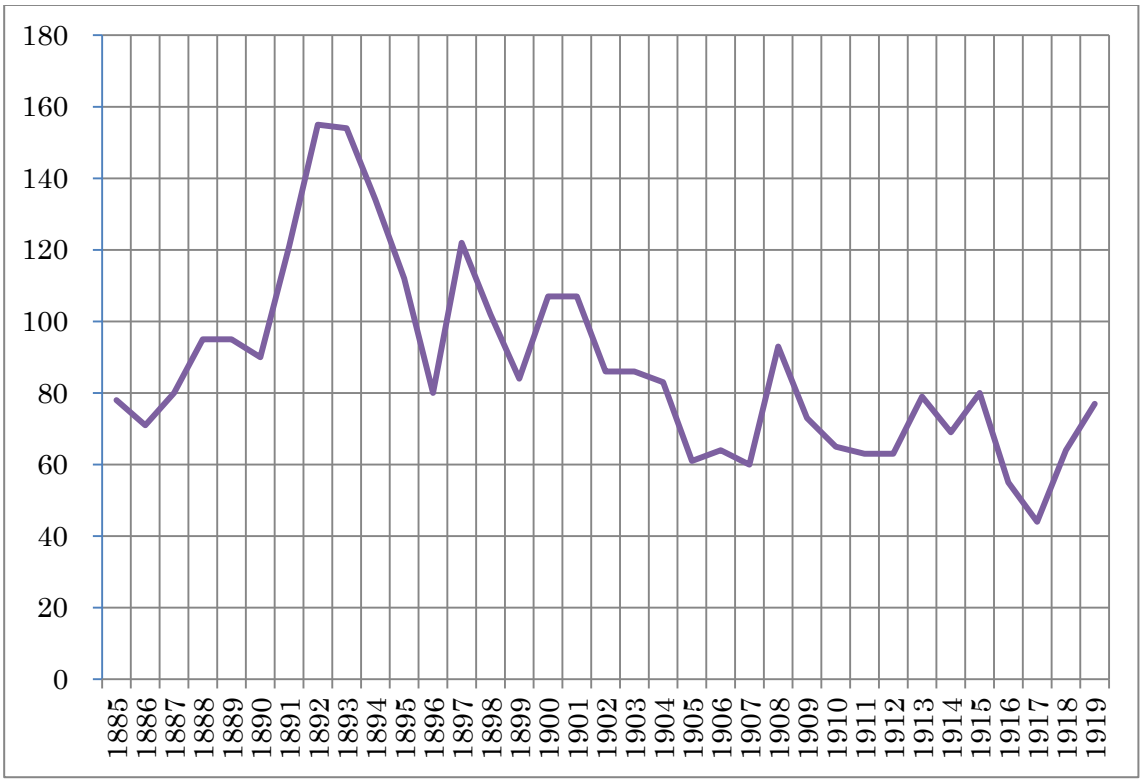
491 アール・オファリ・ハッチンソン「ゆがんだ黒人イメージとアメリカ社会―ブラック・メイル・イメージの形成と展開」脇浜義明訳、明石書店、1998年、26頁。
492 Lillegard, 2.
493 Gifford, 13; Messer, 67.
494 Ramsden, 52.
495 Cronley, 28.
496 “How to Stop Lynching,” *The Messenger*, August 1919,8
497 “The Cause of and Remedy for Race Riots,”21.

被害が出ている実態に触れている。

ブッカー・Ｔ・ワシントンも、南部で多発するリンチに警鐘を鳴らし、１９０４年２月、アラバマ州バーミンガム（Birmingham, Alabama）の新聞に、リンチに対する抗議文を寄せた。

> 過去２週間の間に、３人の黒人が火あぶりにされた。３人のうち１人は女性であった。火あぶりは真昼間に行われ、２件は教会のすぐそばで、日曜の午後に行われている。アメリカの著しい経済発展の中、リンチのような残酷で非人間的な行為を懸念している者はほとんどいないのではないだろうか。人間を火あぶりにするという残虐行為が珍しくもなくなり、注目すら集めなくなっているのだ[498]。

図１　１８８５年―１９１９年の黒人リンチ被害件数の推移（アメリカ全土）



Gifford,13.の表を基に作成。

[498] Booker T. Washington, “Lynching in the South-A Protest against the Burning and Lynching of Negros,” *The Birmingham Age-Herald*, February 29, 1904(Cited in Gifford, 12.).

「昨日１人の男がリンチされた」
ＮＡＡＣＰのニューヨーク本部は、１９３８年まで、リンチされた人数を記した旗を掲げていた。
Gifford, 24.

Ａ・Ｊ・スミサーマン
Tulsa Race Riot, a Report, 52.

タルサの白人住民が最も嫌悪していたのが、物言う黒人、ストラトフォードとスミサーマンであった。ビジネスマンだったストラトフォードは、一等車の切符を持っていた彼を黒人用の席に座らせたことで鉄道会社を訴えたり、差別的発言をした白人に暴行を加えたりといったことで白人の間にも名を馳せていた。常に銃を携帯していたスミサーマンもその激しい気性で有名で、リンチに対しても厳しい態度で臨んだオクラホマの黒人の代表的存在である。タルサ暴動の３年前には、タルサ近郊の町で黒人のリンチを阻止するために黒人の武装集団を組織している。彼は、『タルサ・スター』にリンチ阻止にかける自衛の決意を掲載している。

オクラホマでリンチは常態化してしまっている。どうにかしてストップをかけなくてはならない。州政府や連邦政府からの保護は全く期待できない。オクラホマでは多くの黒人男性に加え、女性・子供もリンチ被害に遭っている。リンチを行った暴徒は、ただの１人として罰せらず、法執行機関もリンチ阻止の努力を怠っている。黒人男性よ、自衛するしか

ないのだ。自衛こそが正義への道である。銃で反撃して我が身を守ろう。例え血が流れることがあったとしても、大歓迎だ。法と正義を守るためなら死だっていとわない[499]。

１９１６年になると、武装黒人がリンチを阻止したニュースが報じられ始める。タルサ人種暴動のほんの５カ月前にも武装黒人によるリンチ阻止が成功し、スミサーマンは「彼らはまさしくヒーローである。彼らのような市民がもっともっと必要である[500]」と、不条理な暴力に団結して立ち向かうことを黒人たちに呼びかけた。しかし、白人はスミサーマンをはじめとする「身の程をわきまえない、物言う黒人」に憎悪を募らせていた。白人と白人優位の社会に公然と歯向かってくる黒人たちを、何とか封じ込めなくてはならなかったのである。

黒人は白人の暴力から身を守るために、集団で団結して自衛する必要があった。オクラホマは、リンチの８８％が集中する南部から、命からがら逃れてきた黒人が集まった場所だったため、リンチに対する反感は殊に強かった。とはいえ、白人暴徒による暴力はオクラホマの日常であった[501]。準州時代から、フロンティアの無法と混乱に便乗し、馬泥棒、牛泥棒など主に白人がリンチにかけられてきた。無法地帯では、素早い懲罰行為が市民の手で行われることが常であった。１９０７年から１９２１年の間にオクラホマでは３３人がリンチされ、内２７人が黒人であった。１９１１年以降は、被害者は全員が黒人となり、それからの１０年間で女性２人を含む黒人２３人が、オクラホマ各地でリンチにかけられている[502]。暴動までの数年間、白人による暴力は過激さと頻度とを増し、オクラホマ州内の黒人の居住地が放火される事件も相次いでいた。市や郡の留置場から連れ出された黒人たちがリンチされる事件も起こっていたが、市当局は黒人を保護することに熱心でなく、黒人は家族や財産、そしてコミュニティ全体を守るための自衛を余儀なくされていくのである。

黒人は南部の州でリンチされるか、ベルギーでドイツ人に射殺されるかを選ばなくてはならないわけです[503]。

---

499 “Another Man Lynched,” *Tulsa Star*, August 8, 1914, 1(Cited in Messer, 102.).
500 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”53.
501 Hirsch, 17-18; Messer, 18.
502 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”46; *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 17.
503 *The Messenger*, July 1928, 13(Cited in Kornweibel Jr., 78.).

オクラホマでは、自警団精神もまざまざと発揮された。土地と石油に手繰り寄せられた白人の多くは、ジムクロウが染みついた南部出身者である。白人同様に土地と機会を求めてオクラホマを目指した黒人たちも、その多くが南部出身であった。決定的に違っていたのは、黒人がオクラホマでの自由と平等の実現を信じたのに対し、白人はオクラホマに南部の掟を再現しようとしたことである。リンチは黒人に恐怖を与えると当時に、彼らの劣った地位を強化・固定する目的があった。白人にとって、生意気な新しい黒人（ニューニグロ）こそが諸悪の根源であり、奴隷が持っていた遠慮や慎みとはまるで無縁の新しい黒人（ニューニグロ）は、野獣同然の存在であった。野獣は力で抑え込むしかない、とリンチを正当化したのである。

リンチ加害者は身元を隠す必要すらなかった。オクラホマの週刊誌『ハーローズ・ウィークリー』（*Harlow's Weekly*）は、「オクラホマでは、黒人をリンチするのは罪とは考えられていない。これまでもずっとそうだったように、ここでは役人から黒人囚人を奪って死刑に処したとしても、逮捕される可能性はゼロである」と報じた。オクラホマでは、写真に撮られた被害者の無残な姿が絵葉書として売られるなど、白人たちにとって、リンチは楽しむべきエンターテインメントであり、彼らはショーを観覧するために正装までしてリンチの現場に出向いたのである。オクラホマの新聞はリンチをありありと報道し、リンチに使われたロープや、被害者の拳や指の販売広告まで載せていた。以下の１９２０年の『タルサ・ワールド』の記事ように、リンチは生々しく報道されていたのである。

> 犠牲者の服の切れ端を何とか手に入れようと、数百人が死体にわっと詰めかけた。リンチに使われたロープも、記念品として細かく切り分けられた。被害者のズボンや靴は切れ切れの状態で、群衆たちがそのむごたらしい手土産を巡って争っていた。死体は車に運ばれたが、遅れてやって来た見物人たちは、既に裸に近い死体から何か奪うものはないかともみ合いをしていた[504]。

[504] "Mob Lynches Tom Owens," *Tulsa World*, August 28, 1920, 1(Cited in Messer, 67).

４ 戦後不況と白人の嫉妬

戦後の１９２１年、軍需工場の閉鎖やインフレによってアメリカは不況に喘ぎ、失業率は新記録（１１．７％）を樹立した。帰還した白人兵士たちは、彼らが就いていた仕事に黒人が就いていることに驚き、反感を抱いた。低賃金で働く黒人たちに職を奪われたと不満を訴える白人が大勢いたため、黒人は白人失業者の嫉妬をひしひしと肌で感じていた。白人と黒人の衝突の背景には、黒人がスト破りに使われたこともあった。労働組合から締め出された黒人労働者をスト破りに使う手法は、南部の港湾業や炭鉱で１８９４年から見られ、北部でも２０世紀初頭から用いられるようになっていた[505]。

『メッセンジャー』の共同編集者チャンドラー・オーウェンは、雑誌のインタビューに答え、「タルサ人種暴動の潜在的要因は、白人を襲った失業の波」だと指摘している。白人が黒人より深刻な失業状態に陥っていたかどうかについて、オーウェンは「黒人が同じ仕事でも低い賃金で引き受けた」ために、白人よりも比較的容易に職にありつけたのではないかと推測している[506]。

デュボイスも暴動直後、『クライシス』誌で人種間の経済的競合関係を暴動の要因として挙げている。

> 私は、タルサの黒人コミュニティほど高度に組織された地域を見たことがない。人種分離が徹底され、白人の町の中に黒人の町が存在するのである。黒人地域にある白人の店はボイコットされ、行き詰っている。黒人は黒人だけの商店やビジネスを組織して助け合い、蓄財しているのである[507]。

ウォルター・ホワイトも、裕福になり損ねた白人の不満と、一部の成功した黒人への嫉妬が暴動につながったと指摘している。「優れた選民」である白人たちにとって、「劣った人種」である黒人が分不相応な富にあずかることは看過できず、許し難いことであった。ホワイトは、南部出身の白人たちが拭い去ることのできなかった人種差別意識についても触れている。彼らにとって、二流市民の黒人が白人以上に経済的成功を達成するのは耐え難いことであった。暴動前には原油価格が下落し、石油関連会社の従業員が一時解雇される事態となっており、白人労働者の妬みと焦りの感情を増幅させたと考えられる。著者は不明であるが、ある白人出版物の記事は、暴動の原因に「金持ちの黒人」

---

[505] Williams, 15.
[506] “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”9.
[507] *Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,*29.

を挙げている[508]。

タルサ人種暴動で、白人がグリーンウッドの家々を物色した際、黒人の持ち物を巡って嫉妬に駆られた発言・行動もあった。

> 買い物用カバンを持った白人女性たちがやって来て、家に侵入し、引き出しを開け、衣服から食器、宝石に至るまでありとあらゆる装飾品を盗みました。男たちは、「黒人のくせに白人よりいい物を持っていやがる！」と罵りながら家具を運び出していました（氏名不詳の黒人女性の１９２１年６月２４日タルサでの証言）[509]。

> 暴動の２日目、１９２１年６月１日に焼かれた裕福な黒人の家には、豪華な家具が備え付けられていました。白人群衆は怒りに駆られて皿を割ったり、高価なピアノや蓄音機を叩き壊したり、ヨーロッパ製の豪華なカーテンを引きちぎったりしていました[510]。

タルサには少数ながら医師、法律家といった富裕層の黒人もおり、彼らは白人住宅と比べても遜色ない住まいに暮らしていた。人種暴動は、黒人が比較的恵まれた居住環境にあったり、黒人の経済状態が白人のそれと近づいたりすると起こりやすいことが明らかになっている[511]。タルサ人種暴動も、白人がグリーンウッドの繁栄と一部の成功した黒人を妬み、その更なる発展を抑え込もうとしたことが根底にあった。

第４節　社会的要因

１　メディアの報道と人種間の無知、無関心

１９２１年５月３１日の『トリビューン』の報道について、軍務長官バレットは「扇情的報道で定評のある新聞が、ドレクセルビルの出来事をかなりオーバーに書き立てていた[512]」と証言する。『トリビューン』は部数拡大のため、黒人居住地をリトルアフリカやニガータウンと呼んで蔑み、黒人の犯罪は積極的に取り上げたが、黒人のビジネスの成功や彼らの活躍についてはほとんど報道しなかった[513]。同じタルサ市民でも、黒人が上げた業績は無視されたのである。

---

508 Messer, 8, 76; “The Eruption of Tulsa,”909; Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”49.
509 Parrish, 41.
510 Messer, 71.
511 Lillegard, 4-5.
512 Ellsworth, “The Tulsa Race Riot,”59.
513 Messer, 88.

当時、黒人は白人に比べて知能程度や理解能力が低く、犯罪行為に走りやすい傾向があると報道されることが多く、この考えは一般に広く浸透していた。新聞報道では、黒人が罪を犯した場合、人種だけでなく住所まで明らかにされることが常であった。『トリビューン』も『ワールド』も、こぞって黒人の犯罪を報道し、まるでタルサには白人の犯罪者は１人も存在しないかのようだった[514]。

こうした選択的報道の手法は全国的な傾向であり、例えば黒人・白人の両方が同じ犯罪に関与していたとしても、新聞は「黒人の犯罪」として報じることが大半であった[515]。オクラホマの白人メディアは、黒人が怠惰で、コミュニティを汚す伝染病であるかのように宣伝を重ねた。タルサの聖職者ジェームス・Ｅ・マッコーネル（James E. McConnell）は、１９１４年７月の教会の説教で、「黒人には貞節や純潔の観念がない。衛生にも気を配らず、このままの状態が続けば、この不潔で汚らわしく節操のない人種は数十年で死に絶えるだろう。黒人には名誉や誠実を評価する術がない。盗みを働かなかったり、嘘をついたりしない黒人は非常に稀だからだ[516]」と語った。

白人が正義や民主主義の名の下に自警団精神で行う暴力は非難されないが、黒人の戦闘性は凶悪で非人間的だと報じられた。アメリカの白人の多くは、黒人が野蛮であると信じていた。映画や舞台で描かれる黒人といえば、田舎者、泥棒、ギャンブラー、賭博師といった人物に限られ[517]、黒人が劣った人種だという刻印を押す手助けをするものばかりであった。第１次世界大戦前後には、黒人男性を暴行犯や泥棒として生々しく描く新聞や書籍が数多く出回った。しかし、実際にはタルサの黒人は教育を重視しており、識字率でいえば、１９２０年には１０歳以上の黒人の全国平均識字率は２３％だったのに対し、タルサでは黒人の９５％が読み書きができたのである[518]。しかし、タルサの黒人の教育熱心さについて、白人が関心を持っていたかどうかは怪しいと言わざるを得ない。分断された社会で、黒人に関するポジティブな報道が一切ないとすれば、一般の白人市民が黒人たちの教育熱について知る機会は限られていたであろう。実生活で関わることのなかった黒人のイメージは、メディアを通して白人に刷り込まれていったのである。

白人の傲慢さは、メディアにもその責任の一端があります。黒人の犯罪は新聞の１面で大

514 *Ibid*., 94.
515 ハッチンソン、29頁。
516 Hirsch, 39.
517 “The Cause of and Remedy for Race Riots,”19.
518 Messer, 88-90; Hirsch, 47.

きく取り上げるのに、例えば私がフルブライト奨学金を受賞した記事なんて、死亡記事欄の脇にとても小さく載っただけでした。黒人の新聞社でなければ、黒人のいいニュースは一切報道しなかったんです（黒人女性セシリア・ネイルズ・パーマー博士[Dr. Cecelia　Nails Palmer]の１９７７年３月２８日のタルサでの証言）[519]。

黒人とつながりを持たないタルサの白人社会では、着々と富を蓄積する黒人たちが白人社会に浸出して来るのではないかという不安が高まっていた。このような恐怖の裏にあったのは、白人と黒人の間の断絶と無知であった。両人種が関わることはほとんどなく、お互いの胸の内を知る機会は皆無であった。人種偏見に基づいたステレオタイプばかりが独り歩きし、疑心暗鬼から恐怖心ばかりが煽られていたのである。

白人と黒人のリーダーたちが集まって問題解決に取り組んでさえいれば、暴動は避けられただろうというのが私たちみんなの見解です（Ｍ・Ｄ・ラッセルの証言）[520]。

黒人にとって現実的な恐怖であったリンチ問題に関しても、白人は比較的無自覚であった。リンチ阻止のための自衛・武装を繰り返し訴えた黒人紙『タルサ・スター』を読む白人はいなかったし、スミサーマンの意見を報じる白人媒体も存在しなかったからである。暴動を御膳立てした『トリビューン』は、グリーンウッドが壊滅して尚も、黒人と黒人コミュニティに対する侮蔑と憎悪を隠そうともしていない。暴動後の紙面には、

- 「黒人のプロパガンダに暴動の責任あり」
- 「黒人社会の企み？」
- 「黒人には先導者がいた！」
- 「人種戦争で流された血がタルサを清めるだろう」[521]

といった見出しが躍り、暴動で多くを失い途方に暮れる同じタルサの同胞に対する同情、共感は一切示されていない。それどころか、追い打ちをかけるような報道ばかりが相次いだのである。

---

[519] Interview with Dr.Cecelia Nails Palmer, 5(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
[520] Parrish, 43.
[521] Hirsch, 92.

２　ゆがめられた黒人のイメージと人種間混交の恐怖

奴隷制の時代、黒人は男女共に野蛮で、性的にルーズだとみなされていた。白人男性にとって奴隷の女性は、「いつでも簡単に手に入る」存在であった。１８８０年代あたりから自由黒人が増加するにつれ、黒人男性は性犯罪に走りやすく、白人女性への脅威であるというイメージが作り上げられていった。この黒人男性の性的攻撃性を強調するプロパガンダは、白人男性が黒人男性を奴隷時代と同じように押さえつけ、劣った地位に押しとどめ、人種分離を維持するためのツールであった。黒人男性は、再び白人男性に厳しく統率されなければならない存在となったのである。２０世紀に入ってからも、メディアはしきりに黒人男性の野蛮さと人種間混交の恐怖を煽り続けた[522]。

リンチや暴動の引き金にもなった人種間混交であるが、科学者も黒人を劣った人種と規定して白人の嫌悪をかき立てた。進化生物学者だったヴァーノン・ケロッグ（Vernon Lyman Kellogg 1867－1937）は、「白人と黒人の両親を持つ子供は、両親共に黒人の子供よりは優れているが、両親が白人の子供と比べると劣っている[523]」と、１９２０年の著書に記している。２０世紀初頭、ジョージア州の神学者、W・S・アームステッド（W.S. Armstead）は、黒人を「狡猾で、打算的で、『残忍な欲望』のまま行動し、白人女性を『待ち伏せする』野蛮な変質者[524]」と断定した。「自己統制力に欠けた黒人による白人女性の強姦」に対する強固な不安が白人社会に広まり、黒人の略奪的性質に関する疑似科学が広まった。ジョージア州の論客レベッカ・フェルトン（Rebecca Felton）は、１８９７年のスピーチで、「性的略奪者」である新しい黒人（ニューニグロ）について、「未開のゴリラの恐ろしい欲望が狂気の沙汰をもたらしている。・・・中略・・・女性の純潔を守るためにリンチが必要ならば、１週間に１，０００人のリンチを！」と、熱弁をふるった。「必要ならば、１週間に１，０００人のリンチを！」のフレーズは、メディアが好んで繰り返し使用した。黒人男性が白人女性に危害を加えるかもしれないという恐怖はあまりに大きく、黒人男性が白人女性のそばに立つことすら不適切と考えられたほどであった[525]。

２０世紀になっても、白人女性への暴行や暴行未遂ほど白人の暴力的報復の恰好のターゲットになったものはなったため、真っ昼間にタルサ市の人通りの多いビジネス地区

---

522 Joane Nagel, “Ethnicity and Sexuality,” *Annual Review of Sociology*, Vol.26, 2000,122-123; Christina Simmons, “African Americans and Sexual Victorianism in the Social Hygiene movement, 1910-1940,” *Journal of the History of Sexuality*, University of Texas Press, Vol. 4, No. 1, July 1993,56.

523 Messer, 15.

524 ハッチンソン、19頁。

525 Hirsch, 53-54.

で、黒人が白人女性を襲うとは、極めて考えにくかった。しかし、『トリビューン』の報道を真に受けた白人たちは、「白人女性の純潔を汚した復讐[526]」のために黒人を懲罰しようと詰めかけたのである。

> 当時黒人は常に恐怖を感じて生きていたので、白人女性との交際なんて考えもしませんでした。黒人の女の子で満足していたんです（ロバート・フェアチャイルドの１９７６年４月１８日のタルサ大学での証言）[527]。

それでは逆のパターンはどのように社会に認知されていたのだろうか。

> 黒人の女の子目当てにグリーンウッドにやって来る白人男性はいましたよ。白人は、黒人女性が白人男性の誘惑に抵抗するのは良くないことだと言っていました。私は白人男性を拒絶したせいで、二度も留置場に入れられたんですから（セシリア・ネイルズ・パーマー博士の１９７７年３月２８日のタルサでの証言）[528]。

黒人男性と白人女性との関係はタブーとされ、白人女性に対する不適切な発言程度でもリンチを招くことがあった[529]。ところが白人男性はといえば、黒人女性に自由に手を出し、黒人女性は白人男性を拒絶するべきではないと考えていたのである。異人種間混交とは、黒人男性が「身の程をわきまえずに」境界線を越えることを意味しており、白人男性にはこの境界線は課されていなかった。ＮＡＡＣＰの元事務局長ロイ・ウィルケンス（Roy Wilkens）は、ローランドとペイジの一件を歴史的文脈で以下のように説明する。

> タルサ人種暴動は、黒人のリンチを正当化する目的で利用されてきた「黒人による白人女性の暴行」という典型的なウソが招いた好例である。・・・中略・・・リンチ事件の２割が黒人と白人の性的関係が原因とされるが、実際に性的関係が存在したと考えられるのは全事件の１割以下でしかない。ここでいう性的関係とは、手紙の交換や思いの告白程度のことも含まれている[530]。

---

526 “Mob Fury and Race Hatred as a National Danger,”8.
527 Interview with Robert L. Fairchild, JR., 184(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
528 Interview with Dr.Cecelia Nails Palmer, 9(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).
529 *Death in a Promised Land*, 18; *Black Wall Street*, 36.
530 *Black Wall Street*, 36.

ローランドが実際にペイジへの暴行をはたらいたかどうかは問題ではなかった。ただ「何かが起きた」という疑惑だけで充分であった。白人女性の純潔を汚し、人種の垣根を越えて白人女性に手を出したかもしれない、という可能性だけでも、彼は社会の暗黙のルールを破ったとみなされたのである。掟破りの黒人には、自警団による制裁が加えられなくてはならず、大勢の白人暴徒が黒人に思い知らせてやろうと一堂に会したのである。

終章　半世紀の沈黙とタルサ人種暴動の遺産

１　黒人住民の団結と復興

被害状況を正確に把握し、善後策を講じるため、タルサ市は暴動後迅速に再建委員会（Reconstruction Committee）を立ち上げた。元タルサ市長ロイヤル・Ｊ・マーティン（Loyal J. Martin）は、「タルサは黒人地域を破壊し、アメリカ中に恥を晒しました。アメリカのみなさん、真のタルサ市民はこの筆舌に尽くしがたい惨状を嘆いているのです。我々は、最後の最後に至るまで償いをするでしょう」「我々が責務を放棄してきた結果、市政府の威信は地に落ちました。警察も機能しておらず、我々はそのツケを払わなくてはなりません。この大災害はタルサ市とタルサ郡に法的責任があります。これまで暴動が起きた都市では、その復興費用を自治体が負担してきました。市民としての責務を放棄してきた我々は、復興にかかる費用を負担するべきです[531]」と、タルサがグリーンウッド復興への経済的支援を行うべきだとの見解を表明した。ところが、暴動の被害者たちは誰一人として、何ら補償を受けることはなかったのである。全米から寄付金の申し出があったにも拘わらず、タルサ市はグリーンウッドの復興に全責任を持つとして、その全てを固辞していた[532]。タルサ市は黒人住民の窮状を救うことより、体面を繕うことに重きを置いたのである。施しを受けるなど、タルサのプライドが許さなかった。数多くの命を奪い、黒人住民の生活をずたずたに切り裂いたタルサ人種暴動も、タルサ市やオクラホマ州の人種政策に影響を与えることはなかった。それどころか、タルサ市は、グリーンウッドを黒人住民の町として再建するのではなく、工業地帯として再開発すると決定したのである。黒人地域は鉄道の駅へのアクセスもよく、駅庁舎を建設するのにぴったりのロケーションだと判断された。黒人にはもっと北に移動してもらい、黒人と白人をより一層分離するためにも、両人種の居住地の間に工業地帯を設ければ一石二鳥であると目論んだのである。住む家を失った黒人は今、その土地までをも奪われようとしていた。駅庁舎を建設するとなれば、タルサを訪れる人々が最初に目にするのが黒人居住地であってはならなかったのである[533]。黒人地域は恥であり隠すべきもので、タルサは白人の町でなくてはならなかった。黒人から土地を買収するため、市は鉄道会社と結託し、タルサ市を去るという条件で黒人に対する運賃値引きサービスを開始した。他の自治体からの寄付を断り、グリーンウッドの再建に責任を持つと対外的に表明した

---

[531] “Tulsa,”839; “The Tulsa Race Riot”, 647.
[532] Messer, 10.
[533] *Ibid*.; Hirsch, 136.

タルサが行ったのは、グリーンウッドを裏切る、正反対の行為だったのである。

> ６月１０日から、ミズーリ・カンザス＆テキサス鉄道（The Missouri–Kansas–Texas Railroad）は、タルサ市を退去する黒人に運賃の半額サービスを行う。値引き券が必要な黒人は、まず赤十字の許可を取ること[534]。

しかし、土地の売買交渉が妥結することはなかった。白人たちは、よもや黒人たちがタルサに残りたいはずがないと考え、実際の価値よりも格段に安く土地を買い取ろうと画策する者もいた。だが、ここにも赤十字の支援があり、ウィローズをはじめ赤十字の職員たちは、黒人に土地を手放さないよう忠告し続けたのである。暴動の混乱に乗じて、グリーンウッドの土地を市場価格より大幅に低い値段で買い取ろうとする白人住民の動きを根拠として、ＡＢＢは、暴動が「黒人の土地を狙っていた白人により引き起こされた[535]」という持論を展開した。

土地の買収に失敗したタルサは、黒人住民によるグリーンウッド再建を妨げるため、より狡猾で強引な策を練ることを迫られた。その結果登場したのが、６月７日に出された防火区画延長条例であった。この条例は、グリーンウッド地区の建設物すべてに耐火性を課すもので、区画内に新たに建設される建物は少なくとも２階建てで、コンクリート、レンガ、鉄筋建築でなくてはならず、木造家屋は許可されなかった。住宅の再建費用の増加につながるため、黒人がグリーンウッドの復興を諦めるだろうと踏んだのである。

> まるで戦争捕虜のように収容所に集められ、今やホームレスとなった彼らは、噴煙を上げる家々を前に震えていました。絶望の淵に立たされた彼らの前に、更なる試練が立ちはだかったのです。それが、グリーンウッド復興を阻む目的で画策されたタルサ防火区画延長条例です。傷ついた心が血を流し、離れ離れになった家族の身を案じて苦しむ中、タルサ市長をはじめ、不動産業者らの面々は、キリストを磔刑にした者たちのような残酷さで、黒人住民の血と汗の代償である土地を奪おうとしていたのです！黒人がどれほど苦労してあの小さな土地を手に入れたか、ほんの少しでも思いやってくれたなら！・・・中略・・・彼らは地主である黒人の許可もなく、
> 「タルサに卸問屋募集」

534 “Half Fare Rates to Blacks Leaving City,” *Tulsa World,* June 11, 1921, 10.
535 Commander, Tulsa Post, African Blood Brotherhood, 5.

「６月１４日付で市より任命された再建委員会は、火事で焼失したリトルアフリカに卸問屋や工場を誘致します。現在リトルアフリカは市の防火区画内にあるため、耐火建築物しか新たに建てることはできません。」
といった広告を出しているのです（リチャード・Ｊ・ヒルの証言）[536]。

テントで開業した即席の法律事務所
Ed Wheeler, "Profile of a Race Riot," *Oklahoma Eagle*, November 2, 1978, 4E.

この条例はグリーンウッドよりも北の地域には適用されず、グリーンウッドから黒人を退去させ、より北に移住させようとするタルサ市のあからさまな黒人追放計画であった。市の役人もメディアも、条例が黒人住民の安全のためだという建前すらも主張しなかった。タルサ市が、グリーンウッドを工業地域にする目的で土地を接収しようとしていることは、誰の目にも明らかだったのである[537]。

『タルサ・ワールド』は、黒人たちはグリーンウッドが工業地帯に生まれ変わることを歓迎していると報じたが、実際には反対派が多数を占めていた。コミュニティを守るため、廃墟と化したグリーンウッドに即席の黒人法律事務所が立ち上げられた。スピアーズ・ フランクリン・シャペル法律事務所（The Law Firm of Spears, Franklin & Chappelle）である。黒人の土地を守るため、若い弁護士たちが、更なる困難を前に呆然とする住民たちのために立ちあがったのである。１９２１年７月３０日までに、この事務所でタルサ市や保険会社に対する、４００万ドルを超える１，４００件もの賠償請

536 Parrish, 62-66.
537 Hirsch, 137; *Death in a Promised Land*, 85.

求の書面が作成され、日々様々な住民の相談や要求に対処し続けたのである。住民による保険会社への賠償請求のほとんどは、暴動による免責条項を理由に１９３０年代半ばまでに棄却されている[538]。被害者たちはグリーンウッドの復興を彼ら自身の手で成し遂げるか、新たな土地に移住することを余儀なくされたのである。

１９２１年８月、スピアーズ・ フランクリン・シャペル法律事務所は防火区画延長条例を受けて、市が黒人地域の再建を妨害することのないよう地方裁判所に申し立てた。９月、裁判所は、適正な手続きを経ずに市が私有財産を奪うことはできないとの判断を下し、黒人住民は画期的な勝利を手にした。この違憲判決の後、グリーンウッドの再建が本格化することになる[539]。スピアーズ・ フランクリン・シャペル法律事務所は、１９２１年１１月末までテントで業務を存続した後、グリーンウッドに再建されたビルに移った。

暴動の犠牲者の救援・治療・介護の中心を担ったのはアメリカ赤十字であったが、精神的に犠牲者に寄り添ったのは教会であった。建設費７５，０００ドル（内５万ドルはローン）を投じたマウントザイオンバプティスト教会は、建設後ほんの６週間で暴動に遭い、放火された。建物が消失したため、個人の住居などで定期的な集会を開いていたが、ローンが重くのしかかっていた。建物に保険はかけてあったが、ここでも暴動は免責条項に該当するとして、保険金の支払いは認められなかったのである。破産手続きの道も選ぶことができたが、建物は失われても道義的責任から借金を返済することを選択した。この借金は数十年かけて返済され、現在では建て直された新しい教会が建っている[540]。

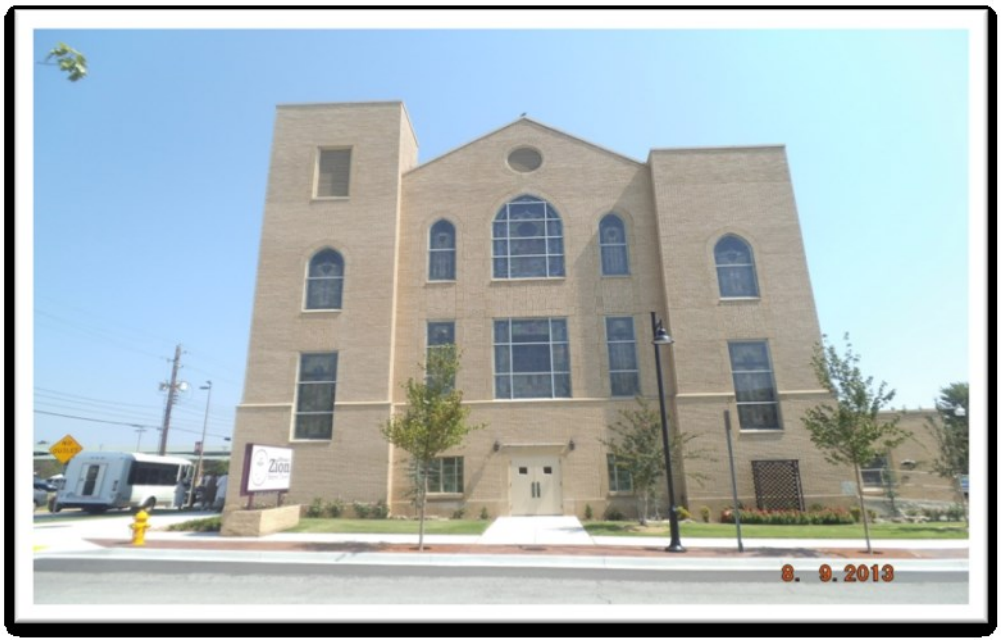
翌１９２２年４月の『セントルイス・アーガス』紙に、グリーンウッド再建と灰の中から気丈に立ち上がる住民たちの様子が記されている。

> 去年の６月１日の惨状を知る人であれば皆、今日のタルサを見て感銘を受けずにはいられないであろう。焼け跡は、小規模ビジネスが並ぶ近代的ビル群に生まれ変わろうとしており、テントや掘っ立て小屋が立ち並び、まるで戦争のキャンプのような有様だった居住区にも、急速に頑丈な住宅が建ち始めている。今では赤十字が提供したテントも数えるほど

538 Prepared Statement of Charles Ogletree Jr., 39.
539 Parrish,88-89; *Black Wall Street*,95;Hirsch,139,141; *Death in a Promised Land*,88-89; Staples,69;Messer,124; “Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law,” 166-167; Messer and Bell,866.
540 *Acres of Aspiration,* 177-178; *Black Wall Street*, 85.

しか残っていない。タルサの黒人に顕著な精神とはどのようなものだろうか？それは「黒人のプライド」としか言い表すことのできないものである。・・・中略・・・「これからどうするつもりなのか、って市の偉い人たちに聞かれましたよ。私はこの場所で一から出直しますよ、と答えました」とは、ある黒人住民の弁で、このことは彼らの気概をよく表している。黒人たちは、自分たちの土地から離れるつもりなど毛頭なかった。この闘う精神で、グリーンウッドを工業地帯に変えるという白人の計略を粉砕し、防火区画延長防止にも成功したのである[541]。

暴動で焼けるマウントザイオンバプティスト教会
Parrish, 73.



現在のマウントザイオンバプティスト教会
（筆者撮影　２０１３年９月８日）

[541] Buckner (Cited in Parrish, 93-94.).

黒人住民たちは驚異的な回復力を発揮し、以前の建物を凌ぐ事業所や住宅の再建を加速させた。黒人は「約束の地」を求めて、国内・海外移住を繰り返してきた。しかし、グリーンウッドで焼け出された黒人たちの多くが、留まって町を復興させる道を選択したのである。彼らはどんな迫害にも負けず、彼らの土地でふんばり、前進して生き抜く覚悟のほどを見せつけた。１９２２年にはグリーンウッドの復興は軌道に乗り、８０の事業が再開した。ブラックウォールストリートの名に恥じない、以前にも増した活気あるまちづくりが本格的に始動したのである。損壊した建物はほとんどが解体されたが、新たに建てられた建物の多くは、暴動前とそっくりに再建された。

グリーンウッド住民のW・D・ウィリアムスは、暴動から半世紀たった１９７１に、「覚えておかなくてはならないのは、暴動が始まったのも、暴動を闘ったのも、そして暴動後の復興も、全てが黒人の人種のプライドを糧にしていたということです[542]」と、グリーンウッドを守るために命を賭して闘い、コミュニティの再建に住民が一枚岩となって取り組んだ黒人の闘争的精神を強調する。グリーンウッドの再生は、その昔グリーンウッドを作り上げた先駆者、父祖たちへの感謝と尊敬の証でもあった。グリーンウッドは赤十字の援助を受けて、黒人住民の力で蘇った。フロンティアの自助・共助、そして闘う精神で、コミュニティを復興させたのである。１９４１年のグリーンウッド商工会議所の刊行物は、灰の中から蘇ったグリーンウッドの住人たちに宿っていたタルサ魂（The Tulsa Spirit）について触れている。

> タルサの最大の資源は、結局のところ住民に宿るタルサ魂であろう。他に例を見ないこの魂は、タルサ市民に神秘的で超人的な力をもたらしている。タルサ魂を説明するのは容易ではないが、タルサ市民は圧倒的試練に対峙した時、闘争的意思で立ち向かう独特の力を有している。この能力が発揮された典型的な例が、１９２１年６月の災害からの復興であった[543]。

ただ、グリーンウッドの復興がすべてスムーズに運んでいたわけではないことを物語る証言もある。歴史家ジョン・ホープ・フランクリンの父親は、テントで法律業務を行った弁護士の１人、B・C・フランクリンである。父フランクリンは、１９２１年初頭タルサに移住して法律事務所を開き、落ち着いてから妻と息子をタルサに呼び寄せる予定であった。しかし、妻子を迎えに行く丁度その日にタルサ人種暴動が発生し、彼らの

[542] *1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey,* 34.
[543] *Black Wall Street*, 243.

タルサでの新しい暮らしは、何と４年も先延ばしにされたのである。

私たちがタルサに出発する予定だった日、母と私は長いこと、丸１日以上父親が迎えに来るのを待っていました。２日目に、人種暴動で多くの犠牲者が出ていることを新聞で知り

再建中のグリーンウッド
Tulsa Race Riot, a Report, 14.

ました。しばらくの間は、父が生きているのか死んでいるのかどうかも分かりませんでした。それからしばらくして、ようやく父から無事の知らせが届きましたが、収容所に収容されていて身動きが取れなかったということでした。父は、私たちはタルサにはまだ移住できない、と告げました。私たちが住む予定だった地域は燃えてしまい、とても普通の生活ができる状態ではないということでした。私たちはただ待つしかありませんでした。４年の月日が流れ、私が１０歳の時にようやくタルサに移ることができました。実際タルサに行ってみると、町はまだまだ再興の途中であり、暴動から４年経っていたとはいえ、その惨状を肌で感じることができました。建築工事がそこここで行われていて、半分だけ出来上がった住宅や、地下だけ工事が済んだ教会などが中途半端で異様な姿を晒していました[544]。

ジョン・ホープ・フランクリンは更に、彼が見たタルサの暴動後の姿が、「第２次世界大戦で壊滅したヨーロッパを写した写真にそっくり」だったとも語る[545]。

---

544 “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”24.
545 Prepared Statement of John Hope Franklin, “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”28.

グリーンウッドは大不況を何とか乗り切るが、１９４０年代にピークを迎えた町の規模と経済は、その後凋落の一途を辿った。人種の統合に加え、都市の再開発、リーダーたちの高齢化と共に、１９６０年代以降、グリーンウッドは急速に縮小し始めたのである[546]。忘れ去られたかに見えたグリーンウッドが再び脚光を浴びるまでには、１９９０

１９３８年のグリーンウッド
Death in a Promised Land, 109.

年代に入り、暴動の記念碑やグリーンウッド文化センターが建設され、１９９７年にタルサ人種暴動検証委員会による暴動の最終調査が始まるのを待たなくてはならなかった。

２　遅すぎた暴動の再検証―暴動のタブー化とコミュニティの沈黙―

３００人を超える死者を出したともいわれるタルサ人種暴動であるが、暴動後半世紀以上に亘って公に語られることはなかった。暴動から実に７６年が経った１９９７年、タルサ人種暴動検証委員会が立ち上げられるまで、人々は沈黙を守り、暴動の事実に初めて触れた人々は驚愕した。なぜ半世紀以上もの間、沈黙は破られなかったのか。白人は恥や罪悪感から口を閉ざしたのであろうか。黒人は暴動の恐ろしい記憶に苛まれていたために口をつぐんだのか。それとも、子供たちに恐ろしい暴動の事実を背負わせたくなかったからだろうか。

タルサは、闇に覆われ続けてきた自らの不名誉な歴史をようやく白日の下にさらし、犠牲者への償いのプロセスを開始した。１９９７年、合衆国下院議長、合衆国上院仮議

[546] “Righting the Wrong of History,”26.

長、タルサ市長、タルサ市議会議員など、白人・黒人の両人種からなる１１人がオクラホマ州議会により任命され、タルサ人種暴動検証委員会が発足した。委員会の目的は、暴動を調査し、事実に基づいた証拠書類を作成し、その結果に基づいてタルサ市に勧告や助言を行うことで、２０００年１１月、２８４ページに及ぶ最終報告書が完成した。報告書は暴動を科学的、歴史的、法的に検証し、それまでに発表されていた公式死者数も３６人から３８人に訂正された。内２５人が黒人で、１３人の白人犠牲者の内、１０人（７７％）が病院に運ばれ、彼らの死亡証明書は医師により発行されている。一方、黒人犠牲者で病院に運ばれたのは６人（２４％）のみであった。

報告書は、「タルサ人種暴動の真実がすべて明らかにされることはないだろう。多くの証拠が破壊されたか、隠滅されている 」と結んでいる。暴動後７６年が経過しての調査開始は、あまりに遅きに失したと言わざるを得ない。

暴動後しばらくの間は、黒人の死体写真が絵葉書になって売られるなど、白人たちは暴動での武勇伝を自慢げに披露していたが、行った行為を恥じたのか、責任を問われることを恐れたのか、暴動に触れる者は徐々に減少した。新聞や雑誌から暴動に関する記事が消え、学校でも触れられず、まるで暴動など起こらなかったかのように人々の口にも上らなくなった。歴史から削除されたタルサ人種暴動は、次第に人々の記憶の隅に追いやられ、その扉は固く閉ざされることとなったのである。タルサのメディアも暴動には一切触れることはなく、１０年、２０年の区切りの年にもタルサ暴動を完全に黙殺した[547]。

パリッシュの *Events of the Tulsa Disaster* が１９２３年に出版された後、２０年近くの間、暴動に関する記録や記事が出版されることはなかった。沈黙がタルサを包む中、第２次世界大戦に従軍したタルサ大学大学院の学生、ローレン・ギル（Loren L. Gill）が、１９４６年にタルサ人種暴動を修士論文のテーマに選んだ。白人のギルは論文執筆に当たり、新聞や雑誌の記事をはじめ、タルサ市の役人、警察官を含む住民へのインタビューも行っている。黒人生存者にもインタビューしているが、人種分離が行われていた中での、人種の境界線をまたいでのリサーチであった。しかし、彼の修士論文に脚光が当たることはなく、タルサ人種暴動はその後も歴史の中に埋もれたままだったのである[548]。

暴動から半世紀が過ぎた１９７１年６月１日、過去に向き合い、正しい歴史を広め周

[547] Messer, 131-134; Franklin and Ellsworth, 26; Hirsch, 7.
[548] Franklin and Ellsworth, 28-29.

知させなくてはならないという信念のもと、黒人生存者たちがマウントザイオンバプティスト教会に集まり、タルサ人種暴動５０周年記念プログラムを挙行した。しかし参加者は、一握りの白人を含めてごく少数であった。この時、タルサがまだ道半ばだと示す出来事が起こっていた。タルサ商工会議所の出版部長が、タルサ人種暴動５０周年を記念して、商工会議所の刊行物『タルサ』で暴動の特集を組むことを計画した。出版部長は、ラジオ局の歴史番組を担当していた当時３２歳で白人退役軍人のエド・ウィーラー（Ed Wheeler）に白羽の矢を立てた。１９７０年から１９７１年の冬にかけて、ウィーラーは取材を進め、聞き取り調査や文献調査に当たった。新聞の調査を進める過程で、彼は時間の経過と共に「黒人」が「黒人共産主義者」に、「白人」が「無実の白人」にと、その呼称が変遷していることに気が付いた。彼は４０人の黒人と２０人の白人に聞き取り調査を行ったが、暴動から半世紀が過ぎても尚、黒人生存者の恐怖は生々しかった。再び侵略されるのではないかと心底怯えていたのである。彼らはウィーラーに会うのも人目を避けて、夜、教会の神父と共にこっそりインタビューを受けた。彼らの多くが、暴動時の古びて黄ばんだ写真や、暴動後に身に着けていなくてはならなかった名札を持参した。ウィーラーは調査の最中、二度に亘って見知らぬ白人男性から記事の執筆を止めるよう警告された。その後、彼の電話は四六時中鳴り始め、

「記事を書くよりましな仕事があるだろう」

「休暇にでも出たらどうだ？」

「ところで、お前の４歳の息子は元気かい？」

など圧力がかかり始める。ある朝など、車のフロントガラスに「これからはボンネットの下に何があるか気をつけろ」となぐり書きがしてあった。彼は大事を取って妻と子供を妻の実家に移動させたが、暴動調査にどっぷり浸かっていた彼は、記事の執筆を中断するつもりは毛頭なかった。こうしてウィーラーは、妨害や脅迫に屈することなく記事を完成させ、出版部長も功をねぎらったが、商工会議所は最終的には記事を掲載しないという判断を下したのである。ウィーラーの記事には、これまで公になっていなかった、恐らくは多くのタルサ市民が世に出してほしくないと思うような内容や写真も含まれていた。白人出版社から掲載を拒否され続け、ウィーラーは記事を『トリビューン』と『ワールド』にも持ち込んだが、ここでも掲載は見合わされた。結局この記事は、黒人雑誌『インパクト』（*Impact Magazine*）に掲載され、日の目を見ることとなった。雑誌はグリーンウッドでは大評判となり完売したが、黒人雑誌を読む白人はほとんどいなか

った。白人が暴動について知る機会がまたも先延ばしされたのである[549]。ウィーラーは、人種暴動の要因について、両人種間の「偏見、不信、無知、憎悪」を挙げ、「不寛容、怒り、噂、そして恐怖が火を点けた」と結論付けている[550]。

タルサ大学の社会学教員を務めたナンシー・フェルドマン（Nancy Feldman）は、１９４６年にシカゴから移住した後で初めてタルサ人種暴動について知った１人である。彼女が授業で暴動についての話をしたところ、学生は一様に驚き、退役軍人や１８歳の新入生から成るクラスの誰一人として暴動に関する知識を有していなかった。フェルドマンに意義を唱え、事実かどうかを疑う者すらいた。そこでフェルドマンは、まだ存命していた暴動の生存者を教室に招き、経験を語ってもらう機会を設けた。それでも尚、学生の間には疑念と否認が根強く残った。多くの学生が両親に暴動について質したが、彼らは決まって暴動の事実を否定したのである。フェルドマンは、学部長に暴動についての講義を止めるよう忠告されたものの、彼女の意思は固く、次の学期にも暴動の生存者を講義に招いている。フェルドマンは、学生やその親たちだけに限らず、白人たちが一様に暴動の話題を避けたと証言する。また、カンザス出身で１９５０年にタルサに移住し、タルサ短期大学（Tulsa Junior College）で教鞭をとったナンシー・ドッドソン（Nancy Dodson）も、類似した経験を持つ一人である。ドッドソンは、「少なくとも白人コミュニティでは暴動がタブー視されることがあった」と語っている。「私がタルサに到着するや否や、暴動について触れないよう忠告されたのです。初めは、白人たちが暴動を恥じていることが原因なのだろうと思いました。しかし実際には、タルサの人々は、暴動に触れることそのものが新たな紛争の火種になることを恐れていたのです[551]。」

歴史家ジョン・ホープ・フランクリンは、タルサは沈黙を強制する空気に覆われていたと話す。

> 暴動からしばらくすると、暴動の話題は一切出なくなりました。白人の子供たちに至っては、暴動についての知識が一切ありませんでした。タルサ初の女性市長、スーザン・サベージ（Susan Savage 任期 １９９２年７月―２００２年４月）も、タルサに長らく居住していたにも拘わらず、人種暴動については大人になるまで全く知らなかったそうです。沈黙が強制されていた結果としか言いようがありません。白人地域では、暴動は全く語られることはなく、黒人地域でも、ごく内々にひっそりと語り継がれてきました。１つには、

549 *Ibid*., 29, 30, Hirsch, 200-204.
550 Wheeler, E1.
551 Franklin and Ellsworth, 27-28; Hirsch, 183.

彼らが闘いに負け、破滅したことを認めるのは、プライドが許さなかったからかもしれません[552]。

暴動の生存者は、タルサ市とオクラホマ州が故意に暴動の事実を隠していたと主張する。１９９７年になって初めて暴動を公式に認めたタルサは、住民たちに７５年に亘る「沈黙の協定[553]」（Conspiracy of Silence）を強いたのである。暴動がタブー化することで、人種間の不信感は払しょくされず、白人と黒人のコミュニティの分断だけが連綿と続いたのである。暴動が故意に隠されていたという主張は、『トリビューン』の記事の消失や遺体の埋葬場所がはっきりせず、いまだに正確な死者数が確定していないことからも裏付けられる。暴動を隠し、口をつぐむことで誠実さを奪われたタルサは、いつ終わるともしれぬ否認状態に自らを置かなくてはならなかったのである。

ルース・シグラー・エイヴェリーは、１９８３年に「私の頭の中には詳細な記憶が残っているのに、アメリカ史上最悪の人種暴動はオクラホマの記録からすっかり消えてしまっている」と語った。エイヴェリーは、本を書き上げることなく亡くなってしまったが、彼女によると、多くのオクラホマ州民が暴動の事実を認めたがらず、タルサの新聞だけでなく裁判所の記録からも暴動の件が消え去っているという。

タルサホテルの屋上にマシンガンが設置され、グリーンウッドを銃撃していました。黒人は全てを失ったのに、白人は１人として拘束されず、罰を受けることもありませんでした。しかし、グリーンウッドを破壊して灰の山にしたのは白人なのです。黒人被害者の話は涙なしには聞けません。何の落ち度もない人々の暮らしが、同じタルサ市民にめちゃめちゃにされたのです。暴動を調査することで、私が人種間の紛争を煽っていると言う人もいます。でも私は真実を伝えたいだけなのです。あの暴動以来、タルサは何も変わっていません。相も変わらず、白人はタルサ市の南部、黒人は北部に住んでいます。本当に恥ずかしいことです[554]。

552 “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”24.
553 Hirsch, 169.
554 “The Conspiracy of Silence,” *Oklahoma Eagle*, June 2, 1983, 1A-6A.

３ コミュニティの和解に向けて

（１）苦難の記憶を紡ぐ記念碑

タルサ人種暴動を掘り起した１番の功績は、タルサ市生まれのオクラホマ州議会議員のドン・ロス（Don Ross 1941-）にある。公民権運動にも携わっていたロスは、グリーンウッド再建のために長年議会で働いてきた。議員になる以前、ロスは、タルサ商工会議所発行の雑誌やタルサの白人新聞に拒絶されたエド・ウィーラーの暴動の記事を掲載した雑誌、「インパクト」の編集者であった[555]。ロスは、黒人たちの沈黙の原因について、「黒人たちは全てを失くし、また白人が攻め込んで来るのではないかという恐怖を半世紀以上に亘って抱いてきた」ためであるとその心情を代弁した。

グリーンウッドの中心地に立つロス
Tulsa Race Riot, a report, 30

> タルサに住み続けた多くの住民たちの内実は、恐怖に支配された年月でした（セシリア・ネイルズ・パーマー博士の証言）[556]。

黒人新聞社は焼けてしまい、暴動を語る媒体も失われてしまった。黒人住民がその恐怖の体験を語り継ぐ術が奪われたのである。ある生存者は、「暴動で最悪だったのは、持ち物を失くしたことではなく、心の平安やゆとりを失ってしまったことです。暴動の後何年たっても、血まみれの死体や家々を燃やし尽くした大火の悪夢に苦しめられてい

555 Staples,65.
556 Interview with Dr.Cecelia Nails Palmer, 1(Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection).

たのです」と、物質的損害ではなく、心に刻まれた一生消えない傷と恐怖を抱えて生きた日々の過酷さを吐露した。暴動によって、オクラホマ中の黒人コミュニティには危機感と不信感が蔓延することになったのである。それでも、暴動経験者たちは、人種暴動検証委員会による調査開始と共にようやく恐怖心を払拭し、重しが外れたように口々に証言し、溢れ出る思いを吐き出し始めたのである。タルサ歴史協会（The Tulsa Historical Society）の職員は、ある高齢黒人男性が、「暴動で非武装の白人を銃殺したことを生涯悔いてきた」と告白したと語った。またある看護師は、死に際にあった白人男性が、「暴動で多くの黒人を殺害して線路のそばに埋めた」と打ち明けたと証言した[557]。

人種暴動検証委員会は５０人以上の暴動生存者を特定し、記録を開始した。暴動当時８歳だったタルサ在住の８６歳の男性生存者は、

> 屋根裏部屋に隠れていると、白人に銃を突きつけられた父親が「頼むから家には火を点けないでくれ」と嘆願するのが聞こえました。白人は結局火を放ちましたが、屋根裏に隠れていた我々子供５人は何とか脱出することができました。２つ下の妹が、「世界中が火事なの?」と聞いてきました。私は、「そうじゃないよ、でも大変なことになっているよ」と答えました[558]。

と、証言した。暴動時５歳で、母親と３人の兄弟と一緒だったという８３歳の生存者は、検証委員会の聞き取り調査に以下の証言をした。

> 家の前にたいまつを持って歩いて来る４人の男が見えました。たいまつの火が赤々と燃えさかっていたのを覚えています。母は私たちに「ベッドの下に隠れて」、と言いました。私たち兄弟はみなベッドの下に潜り込みました。私が最後で、姉が私の手を引っ張りました。隠れていると、白人たちが家に入ってきてベッドのそばまでやって来ました。その内の１人が私の指を踏みつけ、あまりの痛さに思わず叫び声を上げそうになりましたが、姉がすんでのところで私の口を手で覆いました。男たちはカーテンに火を放ち、家は焼け落ちました[559]。

---

557 Staples,64.
558 *Ibid*., 65.
559 *Ibid*., 68.

８２歳の黒人女性も暴動の夜の恐怖を語った。

> ５人の白人が家に入ってきて、祖父に、母と私たちを連れて逃げてもいいと言いました。私は、祖父が殺されずにほっとしました。祖父はきっと、「いい白人もいたもんだ」と考えていたことでしょう。タルサを出る道すがら、白人に止められ、「一体どこに行くつもりだ？」と聞かれました。祖父は「町を出るんだ」と答えました。するとその白人は「今日は無理だな」と言うなり、祖父に発砲したのです。祖父は倒れ、母は、「殺したのね！」と半狂乱になって叫びました。私は、母までも殺されてしまうのではないかと、心底怯えていました[560]。

タルサ歴史協会には暴動に関する情報が寄せられ始めたが、その主なものは黒人の死体に関するものである。「黒人の死体が記念写真撮影のために薪のように路上に積まれていた」「ワゴンやトラックに黒人の死体が積み重なっていた」「ダウンタウンの地下通路に死体が埋められた」などの内容であった。川に流された遺体の噂も当初から執拗に流れていた[561]。容赦なく照りつける日差しと、４０度近くまで上がる熱波の中、伝染病を防ぐために最も効果的な手段だと考えられるのが、集団埋葬である。集団埋葬の噂は暴動当時から絶えず、１９９８年７月から１９９９年１１月にかけて、埋葬場所として最も可能性が高いとされた３カ所で先端技術を用いた地質調査も行われたが、いまだに場所は特定できていない[562]。

コミュニティの沈黙はタルサに何をもたらしたのであろうか。被害者の救済もせず、暴動を歴史から抹消し、市長を務めたスーザン・サベージが公式に謝罪する[563]まで、ひたすら時間だけが過ぎ、コミュニティとその住人たちは置き去りにされたままであった。この間、暴動を隠ぺいした町では人種間の溝は狭まることなく横たわり続けたが、検証委の調査によって、人々は過去が残した爪痕に向き合い、どうすれば傷を癒し、９０年前の出来事を償うことができるのか模索し始めたのである。

検証委員会の報告書の完成から遡ること５年、ロスは一大プロジェクトに挑む決意を固めていた。ロスはタルサの沈黙に終止符を打つため、暴動から７５周年となる翌年の１９９６年に記念碑を設立し、式典を開こうと計画したのである。その１０年前には、

---

560 *Ibid*.
561 *Ibid*.,65.
562 *Tulsa Race Riot*, *a Report*, 131.
563 “Righting the Wrongs of History,”27.

タルサの宗教指導者たちが暴動の記念式典を開催したものの、参加者はまばらで、Riot（暴動）という単語を発することすら憚られる雰囲気であった。タルサ人種暴動というタブーを突き破り、目に見える形で暴動を記憶するためにも、記念碑の建立は不可欠であると、ロスは確信していたのである。

ロスが計画実行へ向けて奔走する中、１９９５年４月１９日午前９時２分、全米を震撼させたオクラホマシティ（Oklahoma City）連邦ビル爆破事件が起きた。全米各地からジャーナリストやレポーターがオクラホマに殺到した。メディアが自らロスのお膝元に駆けつけてくれたわけである。これは、タルサ人種暴動を周知させる絶好の機会であった。ロスは、誰彼かまわず暴動についての解説をし、記念式典のアピールをした。タルサ市民が口を閉ざすというならば、部外者に話を広めてもらおうという作戦に出たのである[564]。

ブラックウォールストリート記念碑
（筆者撮影　２０１３年9月７日）

広く寄付を募って建設された記念碑の披露が、１９９６年６月１日に行われる運びとなり、再建されたマウントザイオンバプティスト教会が式典会場に選ばれた。犠牲者を悼み、敬意を表するこの記念碑は、地域活性化のシンボルとして前年に３００万ドルを投じて建設されたグリーンウッド文化センターの正面に据えられた。グリーンウッドにまで足を運ぶ白人市民は稀なため、白人たちが記念碑を目にする機会は残念ながら限られるであろうと考えられたが、白人地域に記念碑を建設することは現実的ではなかった。

[564] Hirsch, 218.

記念碑の一方の面には破壊された事業所名が彫られ、もう片面には暴動の詳細が綴られたこの記念碑は、ロスにより「ブラックウォールストリート記念碑」（Black Wall Street Memorial）と命名された。式典前日から当日の朝まで降り続いた雨も、午後１時半の除幕式の開始までにはすっきりと晴れ上がり、期待以上の参加者が集まった。１，２００人の人々が教会の会衆席とバルコニーを埋め尽くし、約７００人が、隣接する講堂で大スクリーンに映し出される式典の模様に見入った[565]。タルサの和解へのプロセスが遂に始動したのである。

記念碑の除幕式には大勢の市民が詰めかけた。右下は生存者のロバート・フェアチャイルド。
この式典の 9 週間後に 92 歳で亡くなった。
Tulsa Race Riot, a Report, 27.

（２）コミュニティを分断する賠償問題

２０１２年４月６日金曜日の午前１時ごろ、タルサ市北部で、黒人男性ばかりを狙った銃乱射事件が発生した。銃撃された５人の内、３人が死亡、２人が重傷を負った。被害者はそれぞれ歩行中に被害に遭い、お互い顔見知りではなかった。人種差別意識に根差した行為だとの見方が広がり、黒人が報復に出るのではないかとタルサは異様な緊張感に包まれた。タルサの法執行機関は迅速にタルサ市警、タルサ郡保安官事務所、連邦保安局、連邦捜査局によって構成される相乗り捜査チームを結成し、２日後の８日日曜日には容疑者を拘束するスピード解決に至った。事件を受けて、タルサ市長のデューイ・バートレット（Dewey Bartlett 任期 ２００９年１２月―）は、ニュース番組のイ

[565] *Ibid.*, 219-223.

ンタビューに答え、「これはタルサでは前代未聞の事件だ」とコメントした。しかし、多くの市民がこの事件を９０年前のあの日の出来事に重ね、新たな人種暴動の発生が危惧される事態に戦慄を覚えていたのである[566]。タルサ暴動は生々しい存在感を伴って、亡霊のように住民たちの間を今尚漂い続けているのである。

暴動後、タルサ市やオクラホマ州が黒人コミュニティの復興に真摯に取り組み、被害者に対して十分な救済措置を取っていたならば、この乱射事件が人種紛争の現実的恐怖を蔓延させる事態にまで発展していただろうか。暴動の事実に蓋をし、半世紀もの間歴史から葬り去り、今もって被害者と黒人コミュニティへの正義がなされていないからこそ、この事件が人々を恐怖に陥れたのではないか。コミュニティの和解には、過去の不法行為に対する償いが欠かせない。その償いは如何なる形にしろ、過去に起きた不正義の認定、公式の謝罪、そして二度と同様の過ちを繰り返さないための教育とセットで行われる必要がある。しかし暴動後、被害者への経済的、道義的責任は、長きに亘り放置され続けてきた。

暴動検証委員会は２０００年の最終報告書で犠牲者やその遺族を特定し、暴動による経済的損害を算定し、犠牲者やその遺族に対する損害賠償を推奨した。タルサは、黒人が過去の不正義に対する賠償金を得ることができるかどうかが試される、全米の注目を集める存在となったのである。例えばこれが奴隷制に対する賠償であれば、損害賠償の懐疑論者は「被害者はとうに亡くなっている」と支払い拒否を正当化しようとする。しかしタルサ暴動の場合、当時数人ではあるが生存する被害者がいたのである（最後の生存者は１０４歳で２０１３年１０月に死亡）。検証委員会は、「グリーンウッドコミュニティに具体的な形で賠償を行うことは、適切な公共政策であり、過去の悲惨な出来事により引き起こされた感情的かつ肉体的な傷を癒すことにつながると考えられる[567]」との理由で賠償勧告をした。委員会は、オクラホマ州とタルサ市の責任を認定し、具体的に以下の５つを推奨した。

---

[566] Hazel Trice Edney, “Terror in Tulsa, Two Whites Arrested in Shootings of Black Males,” *The Louisiana Weekly*, April 16-22, 2012,16; Ronni Michelle Greenwood, “ ‘*Yesterday Redeemed and Tomorrow Made More Beautiful’*: *Historical Injustice and Possible Collective Selves*,” *Political Psychology*, Vol.XX, No.XX, 2014,13; “Tulsa Shooting Suspect Charged, Bond is Set at $9.1 Million Each,” *New York Beacon*, April 15-18, 2012, 3,22; Kate Galbraith, “Documentary Fuses Past and Present to Show Racial Tensions Still Present,” *The Advocate*, DePaul College of Law, Spring 2014, 6.

[567] *Tulsa Race Riot, a Report*, 2.

① 生存者への賠償金の支払い

② 被害者の子孫への賠償金の支払い

③ グリーンウッドに経済特区を設置

④ 黒人学生対象の奨学金基金の設立

⑤ 記念建造物の建立[568]

賠償の主たる目的は、償い、コミュニティの復興、そして人種間の和解であるが、暴動とは無関係だと主張する市民はこれら、特に①と②に強力に反対した。彼らは金銭の支払いの有効性を疑問視し、賠償を支持する市民と、その責任を否認する市民の間に亀裂が走り始めた[569]。市はこれらの提議を受けて尚、何ら具体的な動きを見せることはなく、オクラホマ州は委員会の提案を拒絶し、暴動との関わりを否定した。オクラホマ州もタルサ市も、賠償金の支払いを拒否したのである。

そんな中、複数の宗派のメンバーで構成されたクリスチャングループや黒人団体は、「黒人コミュニティとの信頼関係の復活に道筋をつけ、和解への大きな１歩となる[570]」として検証委員会の損害賠償の提案を支持し、評価した。彼らは過去の蛮行への道義的責任を果たすため、草の根の募金活動を行い、タルサ商工会議所も、暴動の生存者への給付金のための寄付金を募った。タルサ大学の法科大学院は、学外の法律家と共にタルサ市に対して損害賠償請求の訴を連邦地方裁判所のタルサ支部に提起した。しかし、２００４年３月に除訴期間の経過が適用され、連邦地方裁判所は訴えを棄却。９月には上訴裁判所も地裁の判断を支持、最高裁も２００５年に上訴を退けた[571]。こうして裁判所の指示による損害賠償の道は潰えることとなった。

アラバマ州の新聞モービル・レジスター（*Mobile Register*）が２００２年に行った奴隷制度への賠償に関する意識調査では、同紙がそれまでに行ったどの調査よりも人種間の意見の分裂が顕著に見られた。州内の黒人の６７％が賠償に賛成したのに対し、白人で賛成したのはたったの５％に留まった。この数字は奴隷制を経験した南部アラバマ

---

568 Hirsch, 273; “Righting the Wrongs of History,” 26; *Acres of Aspiration*, 185; Messer, 10-11.

569 Hirsch, 1-2.

570 *Acres of Aspiration*, 185; Rick Kern, “Buffalo Civil Rights Advocate Exonerated,” *The Buffalo News*, December 11, 2007, 4.

571 Greenwood,3; “Righting the Wrongs of History,” 26; Alfred L. Brophy, “Norms, Law, and Reparations: The Case of the Ku Klux Klan in 1920s Oklahoma,” *Harvard BlackLetter Law Journa*l, Vol.20, 2004, 41; Meser,11; “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”5; Prepared Statement of Charles J. Ogletree, JR., 36,40.

州に特有なものではなく、全国的に同様の結果が出ている[572]。奴隷制への金銭による賠償となれば、その額は計り知れないものになる。賠償が「どこまで広がるのか」に不安を抱く人々は多い。誰が支払い、誰が受け取るのか、いくら支払うのかという疑問が直ちに湧き上がる。損害賠償の懐疑論者が挙げる賠償金支払いの論点は主に、

① 前世代の不法行為による損害を正確に測ることが可能なのか
② どのような基準で賠償額を算定するのか
③ 現在の社会的・経済的不平等は過去の不正義に起因するのか

などである。中でも最も頻繁になされる議論は、人種間の収入や学歴の格差は、奴隷制や人種差別の負の遺産ではなく、黒人の文化的な問題なのではないのかというものである[573]。

白人タルサは暴動後も順調に発展を続け、「世界の石油首都」として名を馳せ、白人の蓄積した富は受け継がれ続けた。一方、焼き尽くされ、破壊された黒人コミュニティに残されたのは、灰と瓦礫の山であった。受け継がれるはずだったものは全て奪い去られ、断ち切られてしまったのである。１９９９年１２月に７５０人の住民（年齢、性別、人種構成は不詳）を対象に行われた調査では、賠償金の支払いに税金が使われることに賛成したのは１２％で、税金が使われないならば賛成しても良いと答えた者でさえ２６％に留まった。実に住民の７割以上が賠償金の支払いに反対したのである[574]。これに加え、２５人のタルサの白人住民（女性１２人、男性１３人で、年齢は２５歳から７８歳。職業は、宗教指導者、政治家、地域活動家、ジャーナリストなどで、このうち１４人が検証委員会による報告書やこれに関わる論争についてある程度の知識を有していた）を対象に行われた調査（年月日は不詳だが、調査結果は２０１４年に発表されている）によって、賠償に関する白人側のさまざまな意見が明らかとなった[575]。まずは賛成派の意見から紹介する。

---

572 Alfred L. Brophy, “Realistic Reparations,” *The Freedom Center Journal*, University of Cincinnati, College of Law, Vol.1, Issue 1, Spring 2008, 3.
573 Alfred L. Brophy, “Reconsidering Reparations,” *Indiana Law Journal*, The University of Alabama School of Law, Vol.811, 2006, 834.
574 Hirsch, 321.
575 Greenwood, 3.

グリーンウッドがあのまま繁栄を続けていたなら、きっと豊かなコミュニティになっていたことでしょう。受け継がれていくはずだったものが全て失われてしまったのは残念なことです。
タルサが「我々は重篤な犯罪に加担した。応分の支払いをしよう」と、黒人コミュニティを迅速に再建していたなら、今頃は何の問題もなかったでしょう。黒人居住地の復興に使われるべきお金は、白人地域の更なる発展に費やされました。私もその利益にあずかっている１人なのです。タルサ市が黒人居住地を再建しないと決めた、その選択からの利益を享受しているのです。

回答者:暴動の事実を隠さずにきちんと向き合っていれば、今のタルサはより建設的な社会になっていたでしょう。悲惨な暴動を経験したとはいえ、今のタルサを誇れたはずです。暴動は私たちの歴史の一部分であり、過去の過ちを正す努力を怠らなかったと胸を張れたはずです。タルサは過去に傷を負ったけれど、素晴らしい再生の物語も紡げたことでしょう。
インタビュアー:あなたは過去と現在に強いつながりを感じますか？
回答者:未来を素晴らしいものにするために、今を精一杯生きたいと考えています。今日という日は、過ぎ去った過去と未来をつなぐ役割を担っています。今日をどう生きるかに、過去を取り戻すことができるかどうかが懸っているのです。

子孫に歴史を正しく伝えなくてはなりません。世代を超えての対話を途切れさせないためには、時間、お金、行動力が必要です。白人の特権は４００年に及ぶ人種差別に根差しています。社会を変えていくのは私たちの役目です[576]。

以下は、検証委員会が発足した１９９７年から２００７年までの期間に、『タルサ・ワールド』に寄せられた住民の意見である。賛否両論の意見の内、１３％が賠償金支払いを支持、３２％が反対であった。以下は賠償金支払いを支持する意見である（年齢、性別、人種は不詳）。

暴動で家族が殺され、負傷し、財産も失ったならば、私たちは間違いなく賠償請求をするでしょう。社会の暴力による損失を埋め合わせることは正しいことです[577]。

賠償金に関する議論の核は金銭ではなく、タルサの白人住民が過去に大変な過ちを犯したこ

576 *Ibid*., 4-5, 10.
577 “Pay Up and Move On,” *Tulsa World*, April 7, 2000, 2.

とを認めることに尽きます。過去を無視するのではなく、過去から学んだ上で前進しなくてはなりません[578]。

お金で過去の苦しみや悲しみを消すことはできませんが、何もしないよりはずっとましです。タルサは歴史の暗闇から解放されるべきです。検証委員会がやり遂げたことは並大抵ではありません。この機会にタルサ市民が本当の家族になるため、未来のために賠償をするべきです[579]。

黒人コミュニティから奪い去られたものは命だけではありません。未来を奪われたのです。市はグリーンウッドの原状回復に尽くすべきです[580]。

賠償を支持する人々の多くが、賠償金の受け取り手を犠牲者個人だけではなくコミュニティ全体であるとみなし、過去に向き合い、償った上で、和解を目指すという未来志向を共有していた。彼らはまた、躍動するビジネスや将来を突如収奪され、断ち切られたコミュニティ全体の復興こそがタルサの２つのコミュニティの和解につながるという意見を明らかにしている。賠償賛成派の特徴は、歴史の継続性の認識であり、過去の過ちを認め、賠償を推進することで、将来の人種間紛争の抑止と次世代を担う子供たちへの教育効果も発揮するという信念を抱いていることである。更に、検証委の報告書が推奨した賠償の形態を広く白人社会に周知させる必要性があるとも述べ、損害賠償は単に支払いを済ませれば終わるものではなく、暴動を記憶し、その責任を認めて人種関係を修復することは、より良い社会を形成するために必要不可欠であるという見解を示している。

一方、賠償に反対する人々の主張はどのようなものだろうか。まずは白人住民を対象に行われた調査の回答を紹介する。

回答者：ほとんどの、いや、現在生きている人々全員があの暴動とは何の関わりもないのです。つまり、暴動と無関係の人間を罰する一方で、直接の被害者でない人間に褒美を与えることになるのです。過去に戻って被害者に支払いをするなんてできないことです。
インタビュアー：まだご存命の被害者もいらっしゃいますよ。
回答者：ほんの少しだけです。ほとんどの生存者は高齢で、彼らは当時、ほんの子供だった

578 “The Heart of the Debate,” *Tulsa World*, April 22, 2007, 20.
579 “Reparations Better than Nothing,” *Tulsa World*, February 12, 2000, 18.
580 “Community’s Future Purloined,” *Tulsa World*, December 6, 1999, 18.

んです。２、３歳ですよ。彼らの記憶は当てにはなりません。小さすぎたから。

賠償金の話を始めたら、一体どこまで遡ることになるんです？アメリカの奴隷制ですか？それともイギリスの奴隷制？これを言い出すと厄介なことになるだけです。私の曽祖父は奴隷を所有していましたが、その責任を私が負うんですか？冗談じゃありません。奴隷がいたことは残念なことですが、当時はそれが普通でした。政府のお金を賠償に使って欲しくありません。

今のグリーンウッドの住民に賠償金を支給することには意味がありません。彼ら自身が暴動の被害者ではないからです。実際に被害に遭ったのは彼らの祖父母でしょう？彼らが１万ドルを手にしたからどうだっていうんです？心からの詫びさえないのに？ただ、もし教育に特化した賠償金だというなら理解できます。

インタビュアー：タルサ暴動について白人は謝罪すべきですか？
回答者：その必要はありません。いつだって白人が悪く、黒人は救済の対象というわけですよね。黒人にお金を渡して、どんな効果があるというのです？「あんたたちは被害者だからこれをどうぞ」だなんて、黒人の自立を阻むだけでしょう？
インタビュアー：なるほど。
回答者：もし私が黒人コミュニティのリーダーであれば、白人を許して、人種暴動記念館を建設して、過去のごたごたは忘れ、被害者であり続けることと他人を責めることを止めるでしょうね。自分の生活に責任を持つべきでしょう。誰かから施しをもらおうという態度そのものが、彼らの特性を明らかにしていませんか[581]？

次は、『ワールド』紙に寄せられた賠償金反対の人々の意見である。

タルサの納税者の大多数が暴動とは無関係なのに、なぜほんの少数の悪人の過去の行いの責任を取らされるんです[582]？

たまたま今私がタルサに住んでいるからといって、どうして他の白人がこしらえた借金を支払う義務がありますか？私の借金じゃないのに[583]！

---

581 Greenwood, 6-9.
582 “Money Won’t Dissolve Wrongs,” *Tulsa World*, March 22, 1997, A16.
583 “Correcting Some Wrongs,” *Tulsa World*, March 17, 2003, A9.

立派な暴動の記念建造物の設立といったことは忘れて、税金をもっと有効に使いましょう。子供のためのプールなんてどうですか[584]？

１９６０年代の暴動で黒人が損壊した分を弁償したならば、タルサ暴動で事業を失った人々への賠償にはやぶさかではありませんよ[585]。

タルサ暴動はいがみ合う２つのグループの衝突でした。当時のオクラホマ州やタルサ市は秩序の回復のため、直ちに州兵を送り込んで暴動を鎮圧しました。数時間で略奪や放火、銃撃は終息し、住む家を失って怯えた黒人たちは、自ら州の保護下に入り[586]、収容されたんです[587]。

どうして大金を投じて過去の出来事の調査をする必要があるのでしょう？みんなの辛い記憶を蘇らせるだけなのに[588]。

上記の意見からは、暴動は対等な人種間の争いにすぎず、黒人も過去の暴動では損害を引き起こしているではないか、と１９２１年当時の暴動と１９６０年代の暴動を同一視する乱暴さも見受けられる。過去に向き合って和解を目指すのではなく、不幸で不都合な歴史は忘れた方がいい、と考えていることと、暴動があったことそのものは認めるが、過去に責任はないという態度が賠償反対派の特徴を形成している。彼らは、当事者が支払いをするべきだとは考えるが、直接かかわりのない住民が支払うことは拒絶している。このことは、半世紀以上に亘って続いたタルサの沈黙と密接に関係しているであろう。ただ、こうした意見の背景には、過去を明らかにすることが未来の紛争の抑止に必ずしもつながらないのではないか、という疑念もある。中には、黒人だけでなく白人の犠牲者もいるではないかと指摘する者もいる[589]。しかし、黒人コミュニティに侵入し、略奪、放火、銃撃をしたのは白人暴徒たちであった。ただ、賠償懐疑論者たちの中にも、教育に特化した賠償金であるならば理解できると述べる者もいる。恐らく彼らは、直接の給付金を、賠償というよりむしろ「施し」と捉えるために抵抗を感じるのであろう。給付金を渡すことで黒人が依存し、自立の妨げになるという考え方である。黒人が現在でも生活に窮しているとしても、それは奴隷制でも人種暴動のせいでもなく、自らの努

584 “Let’ Put Water under Bridge,” *Tulsa World*, May 31, 2003, A2.
585 “Blacks Should Make Restitution First,” *Tulsa World*, February 6, 1997, A2.
586 黒人の収容に関しては、自ら進んで収容されたという証言も記録も見当たらない。
587 “Cows of a Different Color,” *Tulsa World*, November 26, 1999, 24.
588 “Race Riot Study a Step Backward,” *Tulsa World*, July 6, 1997, A2.
589 “Something Seems Missing,” *Tulsa World*, July 10, 2002, 14.

力不足というわけだ。こうした賠償に否定的な人々にとって、過去と現在はつながりを持たず断絶している。過去は現在の彼らにとっては無関係なものであり、過去の不正義や差別の影響が今尚グリーンウッドに影を落としている可能性については考え及ばないのである。

タルサは現在でも白人と黒人の居住地はほぼ分離され、黒人は主にグリーンウッドから北に数マイルの、中心地からは離れたエリアに集中して暮らしている。黒人コミュニティには大規模なスーパーやショッピングモール、劇場、病院、ファミリーレストランもないが、マクドナルドだけは常に大繁盛している。商工会議所が、ディスカウント大手のスーパーに開店を要請したものの、黒人住民の収入の低さから収益は望めないとして断られている[590]。

住民の誇りであったブラックウォールストリートは、今ではほんの数ブロックを残すのみとなり、かつての面影はどこにもない。グリーンウッドは静けさに包まれ、繁栄の残滓すらも見当たらない。グリーンウッドがブラックウォールストリートと呼ばれる日はもう二度とないであろう。タルサは過去から目を背け続け、その結果長い間暗雲に覆われ続けてきた。誠実に過去と対峙することを避け続けたタルサは、まだ暴動から真の復興を遂げたとは言えないであろう。

賠償に反対する市民は多いが、それでも多くが暴動の社会的・経済的悪影響と、暴動の記憶が十分に共有されていないことについては認めている。２０１１年にオクラホマ大学（University of Oklahoma）とジョン・ホープ・フランクリン人種融和センターが、現在のタルサの人種関係に関する調査を共同で行い、２，０６３人の市民から回答を得た。調査の主な目的は、

①タルサの人種関係に関する住民の意識や知識に関する実情の把握
②調査によって得たデータをタルサの人種関係改善に向けた取り組みに生かすこと
③人種関係に関する住民の認知と意識を高めること

の３点である[591]。

現在のタルサの人種関係に関する住民の意識調査の結果は以下の通りである。

---

590 Hirsch, 321-322.

591 Heather Hreadgill, Judy Branum, and Chad V. Johnson, *John Hope Franklin Center for Reconciliation Tulsa Area Race Relations and History Survey*, The University of Oklahoma Tulsa Schusterman Center and John Hope Franklin Center for Reconciliation, 2011,8.

① 黒人の約４割、白人の約２割がタルサの人種関係はあまり良好ではないと考えている。
② 黒人の約半数、白人の２５パーセントが、タルサではいまだに人種マイノリティが差別されていると感じている。
③ 黒人の約半数がマイノリティはメディアによって歪んだ報道をされていると回答した一方、そう答えた白人は８％に留まった。
④ 黒人の５５％、白人の２４％が、白人が社会で優遇されていると感じている。
⑤ 黒人の４５％、白人の２４％が、タルサの人種関係を改善させる何らかの策が必要だと考えている[592]。

タルサの住人たちの人種暴動に関する知識と見解についての主な結果は以下の通り。

① 黒人の６割、白人の３割が人種暴動と現在の人種関係には関連があると回答。
② 黒人の約７割、白人の約半数が、人種暴動を公立学校で教えるべきだと回答。
③ 黒人の５％、白人の３％のみが、人種暴動が若い世代に十分語り継がれていると回答。
④ 黒人と白人の約７割が、人種暴動がタルサ市の経済に悪影響を及ぼしたと回答[593]。

この調査は、タルサの人種関係が今もって発展途上であり、公立学校での取り組みなど、歴史を正しく認識し、継承する必要性を指摘している。損害賠償請求は最高裁で退けられたが、タルサ人種暴動から８０周年を迎えた２００１年６月１日、暴動の記念建築物の建設費用、そしてグリーンウッドの再開発とマイノリティの奨学金の基金の設立のためとして、７５万ドルを提供するオクラホマ州議会の法案、タルサ人種暴動和解決議（Tulsa Race Riot Reconciliation Act）がオクラホマ州議会を通過した[594]。けれども、結局この決議が生存者への賠償金支払いにつながることはなかった。タルサ人種暴動の生存者の誰一人として賠償金を受け取ることは遂になく、無念の思いと共にこの世を去ったのである。

被害者全員が亡くなってしまったとはいえ、タルサ人種暴動は現在から隔離された歴史上の一事件ではなく、タルサの人々、社会、経済にも綿々と影響を与え続けている。裁判所による賠償命令はなくとも、グリーンウッドコミュニティの発展への寄与や、人

592 *Ibid*., 8-9, 16-27.
593 *Ibid*., 9,-34.
594 *Acres of Aspiration*, 187-188.

種の境界線を越えての交流を進めることこそ、タルサ人種暴動の教訓、そして遺産を生かすことになるのではないだろうか。

４　そそがれた汚名

グリーンウッドの黒人新聞『タルサ・スター』の発行人で、暴動を扇動したとして告発され、家族とともにタルサから逃れたＡ・Ｊ・スミサーマンは、８６年の時を経て、２００７年１２月１１日、 遂に無罪となった。スミサーマンは、１９２５年にニューヨーク州バッファロー市 (Buffalo) に移り住み、１９６１年に７７歳で亡くなるまで、黒人新聞『バッファロー・スター』(*The Buffalo Star*) 紙を発行し続けた。逃亡者である彼は、ＮＡＡＣＰの援助を受けながら、タルサへの送還命令を拒み続けた。

Civil Rights Advocate Exonerated in case dubbed 'worst race riot in American History'... Read full story on page 3

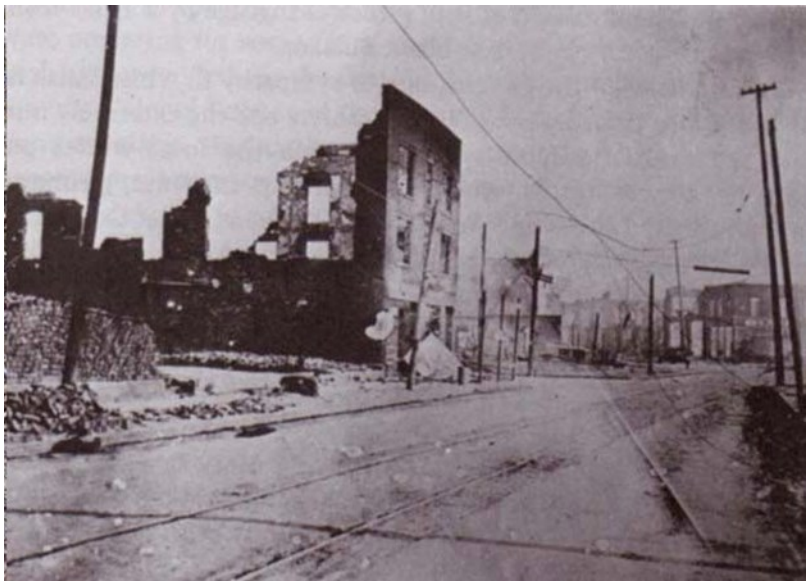
A. J. スミサーマン(右端)の潔白が証明されたことを伝える２００７年の新聞記事（写真は１９４４年に撮影されたもの）
The Buffalo News, December 6, 2007, 3.

スミサーマンへの告発を棄却する手続きが行われることになったのは、バッファロー

大学（University of Buffalo）のバーバラ・ネバーゴールド博士(Barbara Seals Nevergold)の功績である。タルサ人種暴動についての調査を行う過程で、スミサーマンの無実を確信したネバーゴールド博士は、２００７年５月、タルサ郡の地区検事長ティム・ハリス（Tim Harris）に、スミサーマンに対する訴訟を見直し、潔白を証明するよう要請した。ハリスが起訴に関する記録の再調査をしたところ、暴動当時のタルサの法制度は崩壊しており、機能していなかった事実が発覚したため、起訴を取り下げる決定を下した。この決定についてハリスは、「これは正しい決定であり、最も正義にかなっている。タルサは過去の傷を癒さなくてはならない」と述べ、起訴に足る十分な証拠は存在しなかったと語った。スミサーマンが汚名をそそがれるのに８６年の月日を要したことについて、ハリスは、「正義の遅延は正義の否定ではない。」と強調した[595]。

グリーンウッドのもう１人の黒人リーダーあり、暴動でグリーンウッドの富と繁栄のシンボル、ストラトフォードホテルを失ったＪ・Ｂ・ストラトフォードは、スミサーマンに先立つこと１１年、１９９６年１０月１８日に無罪となっている[596]。

暴動により財産を失ったストラトフォードに追い打ちをかけるかのように、彼は暴動扇動の罪で起訴された。ストラトフォードのひ孫の１人で、かつてＮＡＡＣＰの弁護士や巡回裁判所の裁判官を務めたコーネリアス・トゥール（Cornelius E. Toole）は、タルサ人種暴動から７５年が経った１９９６年、積年の願いであった曾祖父の汚名をそそぐ決意をした。ストラトフォードが１９３５年に７５歳で亡くなった際、トゥールは２歳であったが、彼の祖母（ストラトフォードの一人娘）が、ストラトフォードの偉業



焼け落ちたストラトフォードホテル
Death in a Promised Land, 80.

595 "A.J.Smitherman and 54 Other Men are Vindicated in a Historic Court Proceeding," *Uncrowned Queens Newsletter*, the Monroe Fordham Regional History Center, January 2008, 17-18; Kern, 3-4.

596 Hirsch, 238.

や暴動による被害などをトゥールに繰り返し語り聞かせていた。ストラトフォードがタルサから脱出し、カンザス州で逮捕された際には、弁護士で息子のコーネリアス・ストラトフォード（Cornelius Stradford）が駆け付けている。彼は、父親がタルサへ送還されればまず間違いなくリンチに遭うという切羽詰まった状況下、保釈された父親をシカゴへと逃亡させたのである。ストラトフォードは以降の人生をシカゴで過ごしている。

ストラトフォードに対する起訴を取り下げるべきだというトゥールの意見に、ドン・ロスも賛成した。ロスはこの件をタルサの黒人裁判官に相談したが、起訴取り下げの決定権を持つのは、タルサの若き白人地区検事長、ビル・ラフォーチュン（Bill LaFortune）であった。裁判官にストラトフォードの件の再調査について持ちかけられた際、ラフォーチュンは検事になって１年にも満たなかった。暴動から７５年が過ぎており、１人の人間の行動をどのように調べれば良いのか、調査は困難を極めると予想された。また、ラフォーチュンのスタッフも、既に抱えているケースを先行させるべきだとして、ストラトフォードの件を扱うことには反対した。しかし、最終的にはラフォーチュンはストラトフォードの１件を調査することに決めた。１９２０年代後半からタルサに居住する一族の１人として、タルサ人種暴動に関わる沈黙を終わらせるため、そしてまたストラトフォードに公平なチャンスを与えるためにも、真実を明らかにしなくてはならないと考えたのである。ラフォーチュンはこの件の担当に、４年前に弁護士資格を取ったばかりの６５歳の白人女性、ナンシー・リトル（Nancy Little）を任命した。

タルサ育ちのリトルは、暴動当時１５歳だった父親からタルサの人種関係にまつわる話を聞かされていた。当時、白人が道を歩いていれば、黒人はさっと隅によけて道を譲るのが常だったなど、黒人が白人を恐れていたという話も耳にしていた。また、父親が人種暴動について“The Arkansas ran red.”（アーカンソー川が赤く染まった）と話していたことも覚えていた。リトルの少女時代の記憶は、人種の分離と不平等に満ちている。例えば、デパートのトイレは白人用・黒人用と分かれていたが、白人は白人用が壊れていれば黒人用を使えたのに対し、勿論逆の場合は不可能であった。リトルが学生の頃、分離されていたバスの車内では、白人が前、黒人が後部座席に座るのが常だった。しかし、リトルたち学生は前の席が空いていたとしても後部座席を占領し、車内で騒ぐこともしばしばであった。こうした場合、黒人がバスに乗り込んでも、前にも後ろにも座れずただ立っているしかなかった。こういったふるまいが正しくないとは認識していても、誰にも咎められることはなく、リトルも深く考えることはしなかった。しかし暴動から７５年が経過し、リトルには醜く残酷な実態に迫る覚悟ができていた。

ストラトフォードに対する起訴状によると、彼は殺人、強盗、放火の罪に問われていた。リトルの調査について聞き及んだグリーンウッド文化センターの職員が、彼女にパリッシュの暴動の記録本 *Events of the Tulsa Disaster* を送って寄越した。ボロボロになったその本（１９２３年に出版。２００８年、２００９年に再発行）は、リトルが想像すらしていなかった暴動の実態を明らかにしていた。白人暴徒が黒人たちを攻撃し、略奪・放火を重ねたその描写は、リトルが聞いたこともないものだったが、パリッシュの表現はあまりに的確かつ鮮明であり、とても真実でないとは考えられなかった。リトルは、*Events of the Tulsa Disaster* を読んだ衝撃を振り返り、「私のそれまでの人生で最も心に響いた本」であり、「激しい衝撃を受けました。タルサは私の生まれ育った町なのにと、信じられない思いでした。ひどい虐待が行われていたのです」と述べた。ところが、明らかになった暴動の実態を白人の仲間たちに告げると、彼らは暴動の新たな事実を受け入れることを拒絶した。パリッシュの本を貸しても、何の感想も述べない者もいた。リトルの話を聞いて「全くのデタラメ」とこきおろす者もいた。ただ、リトルにも彼らの心情は理解できた。過去にタルサの白人住民たちが黒人を虐殺したなど、信じたくないのは当然であった。リトルに与えられた調査期間の３週間は瞬く間に過ぎて行った。彼女は、ストラトフォードが銃を所持して庁舎へ向かったことと、保釈後に他州に逃亡したことは事実であり違法であるが、ストラトフォードが暴動の教唆や、殺人・強盗・放火に関わったことを裏付ける証拠は全く存在しないという報告書をまとめた。最終的な決定を下すに当たり、ラフォーチュンはリトルに「彼は無実だと思うか」と尋ねた。リトルは、「彼は、私たちの誰もがその状況下でやらなくてはならないことをやっただけだと思います」と答えた。ラフォーチュンはストラトフォードの起訴を取り下げる決定を下した[597]。

スミサーマンもストラトフォードも、晴れてその潔白を証明できたが、２人はとうの昔に亡くなっており、彼らは一生を逃亡犯として過ごしたのである。ストラトフォードの孫、エマ・モンロー（Emma Monroe）は、「祖父の無実の証明は勿論嬉しいことですが、もともと無実の人間の汚名をそそぐのに７５年もかかるなんて・・・・あまりに長すぎました」と、その複雑な心境を明らかにした。トゥールも、「ようやく終わったという感慨はありますが、痛みはまだ残ったままです。痛みと喪失感は消えることはないでしょう。曾祖父はビジネスの頂点を目指していましたが、その機会をもぎ取られてしまっ

[597] *Ibid.*, 229-234.

たのですから[598]。」

タルサ人種暴動の生存者たち（グリーンウッド文化センター）
（筆者撮影　２０１３年９月７日）

むすびと今後の課題

黒人自治体建設運動が、経済的向上を通してアメリカ人として認められるための集団的欲求を体現した闘いだったとするなら、タルサ人種暴動における黒人の反撃は、アメリカ人であることを守り抜くための闘いであった。ブッカー・T・ワシントンは、黒人が努力し経済的自立を達成すれば、白人は感銘を受けて黒人への差別や迫害を止め、手を差し伸べるだろうと信じた。経済的成功により白人の尊敬を勝ち取るべきだという信念は、オクラホマの黒人たちにも広く受け入れられ、目標となった。ところが、積み重ねた努力の末に経済的繁栄を達成した黒人たちにもたらされたのは、白人の尊敬とは正反対の、コミュニティへのテロ行為だったのである。

「約束の地」を求めて移住を繰り返した黒人たちが建設した黒人自治体は、農業中心社会であり、工業社会へと変貌しつつあったアメリカから取り残された存在となった。

598 *Ibid.*, 236.

住民たちは北部、西部、そして海外へと流出したが、同じオクラホマ州内の新興都市、タルサを目指した者もいた。タルサでは全米屈指の黒人地区、グリーンウッドが繁栄したが、タルサ人種暴動は、兵役、経済的発展、都市部への移住、コミュニティの形成による人種意識の芽生えによって醸成された黒人としての自信と、民主主義国・共和国としてのアメリカへの高まる期待を粉砕した。社会の現状維持を望む白人は、ジムクロウの精神と物理的な境界線を乗り越えようとする黒人を封じ込めるため、組織的な暴力を用いた。暴動では、黒人はその財力や地位に拘わらず、大人も子供も、男も女も一様に攻撃の対象となり、黒人であること自体を罰せられたのである。タルサはフロンティア文化を色濃く残しており、自警団精神が蔓延する、リンチにも寛容な土地柄であった。犯罪者は法ではなく、民衆の暴力により迅速に処罰された。タルサの黒人は暴力と隣り合わせに生きており、リンチは身近な存在であった。法執行機関による保護を期待できなかった黒人たちは自衛の精神に目覚め、白人同様銃器を所有していた。名誉とコミュニティを守る準備は整っていたのである。しかし、数で白人に圧倒された黒人は、その抵抗も空しく、「約束の地」グリーンウッドは白人暴徒の手に落ちた。

黒人住民たちは赤十字の助けを借りてグリーンウッドを復興させる。この再建が特殊なのは、タルサを去った黒人もいたものの、住民の多くがグリーンウッドに留まる道を選んだことである。状況が厳しくなるたびに移住を繰り返して来たアメリカの黒人たちが、なぜ今回ばかりは残虐な人種虐殺が行われて尚、タルサに留まる道を選択したのであろうか。そこには、新しい黒人（ニューニグロ）の戦闘的精神がしっかりと根を張っていたからではないだろうか。彼らは長い闘いを経て、遂に彼らの居場所を見つけたのだ。アメリカ人として、彼らがその場所を誰かに譲る必要はさらさらなかったのである。とはいえ、タルサの和解への道は遠かった。タルサには無言の圧力がかかり、コミュニティは半世紀に亘る沈黙を課されたのである。白人・黒人共にそれぞれの理由から口を閉ざしたのだが、両グループに共通していたのが、暴動が再び起こるのではないかという現実的恐怖であった。半世紀が過ぎても黒人生存者たちの記憶は鮮明であり、彼らは語らないことで精神の均衡を保ってきたのである。現在でも正確な犠牲者数は判明しておらず、恐らく明らかになることはないであろう。集団埋葬されたとされる黒人犠牲者の遺体も発見には至っていない。人種分離政策が幕を下ろして半世紀になるが、タルサは現在でも分断され、黒人人口が流出したグリーンウッドはかつての繁栄からは想像もできない静けさに包まれている。１９７０年代の都市再開発により、グリーンウッドの歴史を語るのは、

残された数ブロックの通りだけとなった。

２００１年に、人種暴動検証委員会がグリーンウッド住民やその子孫への損害賠償を提言したものの、実現には至っていない。２００５年に賠償請求を最高裁に退けられた暴動生存者たちとその弁護団は、連邦議会に望みを託すことにした。下院議員ジョン・コンヤーズ（John Conyers）は、２００７年に「タルサーグリーンウッド人種暴動賠償請求法案」(Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007)を提出した。この法案の目的は、法案制定後５年以内であれば、過去に訴訟を起こして判決を得ていない場合に限り、暴動の生存者やその子孫たちが民事訴訟を起こすことができることを可能にすることであった。しかし反対意見が多く、成立は困難となった。コンヤーズ下院議員は２００９年、２０１２年、２０１３年に法案を再提出しているが、成立の見込みは薄い。法案を審議する２００７年の公聴会でコンヤーズ議員は、「私たちはこの法案を成立させることで、９０歳を過ぎた原告たちが暴動の事実を受け入れ、最終的な心の整理をし、悲劇の歴史の幕を閉じ、悲しみに終止符を打つことができる機会を提供することができるのです[599]」と述べた。

オクラホマシティの黒人週刊新聞『ブラック・ディスパッチ』の編集長を務めたロスコー・ダンジーは、１９２３年、紙上で以下のように述べていた。

> タルサの白人住民は、彼らが燃やし尽くした黒人の家々やビジネス、そして奔放に奪った命に対する償いをしてはいない。私は、彼らが引き起こした甚大な損害を賠償しようとする努力が、いつかなされることを信じてやまない。彼らはタルサ人種暴動を決して忘れてはならない。彼らは暴動が不当な行為であることを認めている。きっと、心の奥底では償いをするべきだと感じているはずだ[600]。

１９９５年のオクラホマシティ連邦ビル爆破事件では、大統領も哀悼の意を表するため現地を訪れ、被害者全員に損害賠償金が支払われ、実行犯も処罰された。９・１１でも被害者は賠償金を受け取り、全米が怒りと悲しみに包まれる中、事件の真相解明に全力が尽くされた。タルサ人種暴動は、９０年以上前に起きたとはいえ、その爪痕は今尚深い。不正義に対する怒り、苦しみ、やるせなさ、そしていつまでもコミュニティに対

---

599 “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”9.

600 Roscoe Dungee, “Tulsa’s Distress,” *Black Dispatch*, March 15, 1923, 4 (Cited in “Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007,”18.).

する償いがなされないことへの焦燥感は、途絶えることなく今もグリーンウッドのそこここに息づいている。

本研究は、オクラホマの黒人がアメリカ人としてのアイデンティティを得、確保するために挑んだ闘いについて、黒人自治体建設とタルサ人種暴動における抵抗・反撃という課題を設定し、検証した。しかし、残されている課題はまだ多くある。本研究では、事例研究としてオクラホマを中心に検討し論証したため、オクラホマ以外の黒人自治体やタルサ以外の暴動に潜む特徴を見出せない部分が存在していることが否めない。したがって、今後調査資料の範囲を広げ、同時期に各地で起きた黒人自治体建設や他の人種暴動との対照研究を行うことも求められる。

黒人自治体建設に黒人の西漸が果たした役割は大きいが、西漸運動は北部や東部都市への大移動（グレートマイグレーション）に比べて知名度は低い。当時、オクラホマだけでなく南部や北部、西部にも黒人自治体は建設されていた。大移動（グレートマイグレーション）の影に隠れた西漸以外の黒人の集団移住について調査することも可能である。また、タルサと他の暴動との対照研究を通して、タルサとの共通点及び差異を考察し、それぞれの暴動との因果関係についても究明し、タルサ人種暴動の特徴を浮かび上がらせる必要がある。タルサ暴動を含むレッドサマーの暴動は、第一次世界大戦前の白人群衆の一方的暴力と、後に拡大していく公権力に対する黒人による暴動というアメリカの暴動史の転換点に発生した。今回の研究結果を入り口として、今後人種暴動に関する研究の枠組みを更に拡大し、最終的にアメリカの人種暴動史の全体像を浮き彫りにすることを目指したい。

表１０　タルサ人種暴動に関する見解の変遷（１９２１年－２００１年）

１９２１年：	「暴動を引き起こした直接の非は、一部の戦闘的黒人にあります。」（暴動後に招集された大陪審の声明）
１９２３年：	「人々は法を無視して勝手気ままに行動していました。」（タルサの保険会社が、賠償金支払い拒否の理由として述べた１文）
１９７１年：	「白人と黒人が、ほぼ同時に銃撃を始めた。質屋や金物店は強盗に入られ、銃器が残らず奪い去られた。」（エド・ウィーラーによる暴動調査の記事）
１９８２年：	「黒人住民は収容所に送られ、白人はグリーンウッドを自由に放火・略奪した。」（スコット・エルズワースの著書 *Death in a Promised Land* より）
１９９７年：	「白人群衆たちは次第に手に負えなくなり、家に帰るようにという保安官の命令にも従わなかった。」（オクラホマ州両院合同決議）
２００１年：	「暴動を『黒人の反乱』と定義した、当時の報道や報告書は誤りであった。白人自警団たちがアメリカのブラックウォールストリートを破壊したのである。」（暴動検証委員会の最終報告書）

Prepared Statement of Charles Ogletree Jr., 46. を参考に作成。

参考文献

〈英文文献〉

1921 Tulsa Race Riot-Reconnaissance Survey, National Park Service, 2005.

"A.B.B. Accused of Fomenting Tulsa Riot," *The Crusader*, Vol.4, No.5, July 1921.

Adams, Catherine Lynn, *Africanizing the Territory, The History, Memory and Contemporary Imagination of Black Frontier Settlements in the Oklahoma Territory*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts Amherst, September 2010.

"A. J. Smitherman and 54 Other Men are Vindicated in a Historic Court Proceeding," *Uncrowned Queens Newsletter*, the Monroe Fordham Regional History Center, January 2008.

A Look at Oklahoma, Oklahoma Tourism & Recreation Department, 2012.

"Bad Niggers," *Tulsa World*, June 4, 1921.

Bashi, Vilna, "Globalized Anti-Blackness: Transnationalizing Western Immigration Law, Policy, and Practice," *Ethnic and Racial Studies*, Vol.27, No.4, 2004.

Bernard, Phyllis E., "Oklahoma: The New Africa," *Oklahoma City Law Review*, Vol. 26, January 2001.

Bittle, W.E. and Geis, Gilbert, *The Longest Way Home*: *Chief Alfred Sam's Back-to-Africa Movement*, Wayne State University Press, 1964.

"Blacks Should Make Restitution First," *Tulsa World*, February 6, 1997.

"Blood and Oil," *The Survey*, Vol. XLVI, No.11, June 11, 1921.

"Bombs Hurled from Aeroplanes in Order to Stop Attacks on the Whites," *Chicago Defender,* June 4, 1921.

Boyle, Kevin, *Arc of Justice-A Saga of Race, Civil Rights, and Murder in the Jazz Age-*, Henry Holt Books, 2004.

Briggs, Cyril V., "The Ku Klux Klan," *The Crusader*, Vol.3, No.5, January 1921.

Briggs, Cyril V., "The Tulsa Outrage," *The Crusader*, Vol.4, No.5, July 1921.

Briggs, Cyril V., "The Tulsa Riot and the African Blood Brotherhood," *The Crusader*, Vol.4, No.5, July 1921.

"Bring Stratford Back for Trial," *Tulsa Tribune*, June 7, 1921.

Brooks Robert L. and Witten, Alan H. "The Investigation of Potential Mass Grave Locations for the Tulsa Race Riot" *Tulsa Race Riot, a Report by the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921*, February 28, 2001.

Brooks, Roy L., *Integration or Separation -A Stage for Racial Equality-*, Harvard University Press, 1996.

Brophy, Alfred L., "Assessing State and City Culpability: The Riot and the Law," *Tulsa Race Riot, a Report by the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921*, February 28, 2001.

Brophy, Alfred L., "Norms, Law, and Reparations: The Case of the Ku Klux Klan in 1920s Oklahoma," *Harvard BlackLetter Law Journal*, Vol.20, 2004.

Brophy, Alfred L., "Realistic Reparations," *The Freedom Center Journal*, University of Cincinnati, College of Law, Vol.1, Issue 1, Spring 2008.

Brophy, Alfred L., "Reconsidering Reparations," *Indiana Law Journal*, The University of Alabama School of Law, Vol.811, 2006.

Brophy, Alfred L., "The Tulsa Race Riot of 1921 in the Oklahoma Supreme Court," *Oklahoma Law Review*, Vol.54, 2000.

"Bryan County Negroes Organized," *The Muskogee Cimeter*, Vol. 12, No. 46, Ed. 1, September 2, 1911.

Buckner, George W., "Second View of City of Ruins," *St. Louis Argus*, April 21, 1922.

Burbank, Garin, "The Disruption and Decline of the Oklahoma Socialist Party," *Journal of American Studies*, British Association for American Studies, Vol.7, No.2, August 1973.

Burke, Bob and Monson, Angela, *Roscoe Dungee, Champion of Civil Rights*, University of Central Oklahoma Press,1998.

"Causes of Riots Discussed in Pulpits of Tulsa Sunday," *Tulsa World*, June 6, 1921.

Chamlee, George W., "The Motives of Judge Lynch," *The Forum*, December 1926.

Chang, David A., *The Color of the Land*: *Race, Nation, and the Politics of Landownership in Oklahoma, 1832-1929*, The University of North Carolina Press, 2010.

Chicago Defender, January 5, 1924.

Christian, Mark, "Marcus Garvey and the Universal Negro Improvement Association （UNIA）, with Special Reference to the 'Lost' Parade in Columbus, Ohio, September 25, 1923," *The Western Journal of Black Studies*, Vol.28, No.3, 2004.

Coates, Ta-Nehisi, "The Case for Reparations," *The Atlantic*, June 2014.

Colburn, David R., "Rosewood and America in the Early Twentieth Century," *The Florida Historical Quarterly*, Vol.76, No.2, Fall 1997.

Commander, Tulsa Post, A.B.B., *"The Tulsa Riot," The Crusader,* July 1921.

"Community's Future Purloined," *Tulsa World*, December 6, 1999.

Comstock, Amy, “Over There-Another View of the Tulsa Riots,” *The Survey*, July 2, 1921.

“Correcting Some Wrongs,” *Tulsa World*, March 17, 2003.

“Cows of a Different Color,” *Tulsa World*, November 26, 1999.

Crockett, Norman, *The Black Towns*, Regents Press of Kansas, 1979.

Cronley, Connie, “That Ugly Day in May,” *Oklahoma Monthly*, August 1976.

Dann, Martin, “From Sodom to the Promised Land: E.P. McCabe and the Movement for Oklahoma Colonization,” *Kansas Historical Quarterly*, Vol.XL,No.3, Autumn 1974.

Dawson, Michael C., *Black Visions-The Root of Contemporary African-American Political Ideologies-*, The University of Chicago Press, 2001.

“Denies Negroes Started Tulsa Riot—Head of Brotherhood Defends the Purpose of the Organization,” *The New York Times*, June 5, 1921.

Dobney, Wendell P., “Tulsa Riot!,” *Union*, Vol.16, No.24, June 11, 1921.

Domingo, W.A., “If We Must Die,” *The Messenger,* Vol.2, No.9, September 1919.

Du Bois, W.E.B., “Close Ranks,” *The Crisis*, July 1918.

Du Bois, W.E.B., “Returning Soldiers,” *The Crisis*, May 1919.

Early, Gerald, “The New Negro Era and the Great African American Transformation,” *American Studies*, Vol. 49, Spring/Summer 2008.

Economic and Commercial Development in the Town of Langston, Oklahoma-Final Report, Center for Urban Progress, Howard University, 2002.

Edney, Hazel Trice, "Terror in Tulsa: Two Whites Arrested in Shootings of Black Males," *The Louisiana Weekly*, April 16-22, 2012.

Ellis, Mark, "J. Edgar Hoover and the 'Red Summer,' of 1919," *Journal of American Studies*, Cambridge University Press, 1994.

Ellsworth, Scott, *Death in a Promised Land*: *The Tulsa Race Riot of 1921*, Louisiana State University Press, 1982.

Essein-Udom, E.U., *Black Nationalism*: *a Search for an Identity in America*, University of Chicago Press, 1962.

Forbes, Gerald, "Southwestern Oil Boom Towns," *The Chronicles of Oklahoma*, Vol.17, No.4, December 1939.

Fort, John P., "The Mind of the Lynching Mob," *The Forum*, December 1926.

Franklin, John Hope and Ellsworth, Scott "History Knows No Fences: An Overview," *Tulsa Race Riot, a Report by the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921,* February 28, 2001.

Galbraith, Kate, "Documentary Fuses Past and Present to Show Racial Tensions Still Present," *The Advocate*, DePaul College of Law, Spring 2014.

Garvey, Marcus, *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey or, Africa for Africans,* Universal Publishing House, 1923-1925(Reprint by The Majority Press, 1986.).

Gifford, Nina, "Lynching Statistics from *the Crisis*(1920)," *The Harlem Renaissance*, National Center for History in Schools, University of California, 1999.

"Gov. Invokes Law vs. Mobbists," *Tulsa Star*, September 4, 1920.

"Grand Jury Blames Negroes for Inciting Race Rioting," *Tulsa World*, June 26, 1921.

Greenwood, Ronni Michelle, " 'Yesterday Redeemed and Tomorrow Made More Beautiful': Historical Injustice and Possible Collective Selves," *Political Psychology*, Vol.XX, No.XX, 2014.

"Greenwood-The Black Wall Street of America," *Historical Greenwood District- A Walking Tour-*, Greenwood Chamber of Commerce, 2013.

"Half Fare Rates to Blacks Leaving City," *Tulsa World*, June 11, 1921.

Hartt, Rollin Lynde, "The New Negro, When He's Hit, He Hits Back!" *The Independent*, January 1921.

Heale, M.J., *American Anticommunism*: *Combating the Enemy Within, 1830-1970*, Johns Hopkins University Press, 1991.

Hill, Mozell C., "The All-Negro Communities of Oklahoma: The Natural History of a Social Movement, Part I," *The Journal of Negro History*, Vol.31, No.3, July 1946.

Hirsch, James S., *Riot and Remembrance*: *America's Worst Race Riot and Its Legacy*, Houghton Mifflin Company, 2002.

"History of African-Americans in Oklahoma," *Oklahoma! The Guide*, Portland Center Stage, 2011.

"How to Stop Lynching," *The Messenger*, August 1919.

Hreadgill, Heather, Branum, Judy and Johnson, Chad V., *John Hope Franklin Center for Reconciliation Tulsa Area Race Relations and History Survey*, The University of Oklahoma Tulsa Schusterman Center and John Hope Franklin Center for Reconciliation, 2011.

Iles, R. Edgar, "Boley, an Exclusively Negro Town in Oklahoma," *Opportunity, Journal of Negro Life,* August 1925.

"Inefficiency of Police is Denied," *Tulsa World,* July 19, 1921.

"Information on Activities during Negro Uprising May 31, 1921," an Account from Major C.W.Daily to Lt. Col. L. J. F. Rooney, July 6, 1921.

"It Must Be Stopped," *Tulsa Tribune*, June 11, 1921.

"It Must Not Be Again," *Tulsa Tribune*, June 4, 1921.

Jacques-Garvey, Amy ed., *Philosophy and Opinions of Marcus Garvey*, The Universal Publishing House, 1923, Ⅱ (Reprint by Arno Press and the New York Times, 1968.).

James, Winston, "Being Red and Black in Jim Crow America," *Souls*, Fall 1999.

Jessee, Sharon, "The Contrapuntal Historiography of Toni Morrison's *Paradise*, Unpacking the Legacies of the Kansas and Oklahoma All Black-Towns," *American Studies*, Mid-America American Studies Association, Vol. 47, No.1, Spring 2006.

Johnson, Hannibal B., *Acres of Aspiration-The All-Black Towns in Oklahoma-*, Eakin Press, 2007.

Johnson, Hannibal B., *Black Wall Street*: *From Riot to Renaissance in Tulsa's Historic Greenwood District*, Eakin Press, 2007.

Johnson, Hannibal B., "Righting the Wrongs of History: Reparations and the 1921 Tulsa Race Riot," *Oklahoma Humanities*, Summer 2012.

Katz, William L., *The Black West: A Documentary and Pictorial History*, Anchor Press, 1973.

Kelly, Robin D.G., *Race Rebels-Culture, Politics, and the Black Working Class-*, The Free Press, 1994.

Kern, Rick, "Buffalo Civil Rights Advocate Exonerated," *The Buffalo News*, December 11, 2007.

Kornweibel Jr., Theodore, *"Seeing Red"-Federal Campaigns against Black Militancy, 1919-1925*, Indiana University Press, 1998.

Langley, J. Ayo, "Chief Sam's African Movement and Race Consciousness in West Africa," *Phylon*, Vol.32, No.2, 1971.

"Let' Put Water under Bridge," *Tulsa World*, May 31, 2003.

"Letter to Theodore Draper in New York from Cyril Briggs in Los Angeles, March 17, 1958," *Theodore Draper Papers*, Hoover Institution Archives, Box 31, Stanford University.

Lillegard, Theresa M., "We Return Fighting: A Comparative Analysis of Three American Riot Cities between 1917-1921," *Lethbridge Undergraduate Research Journal*, Vol.3, No.2, 2008.

Lovelace, Alice, "The Tulsa Riot of 1921," *In Motion Magazine*, 2000.

Makalani, Minkah, *In the Cause of Freedom-Radical Black Internationalism from Harlem to London, 1917-1939-*, The University of North Carolina Press, 2011.

McDonald, Bonnie and Fisher, Deena, *Oklahoma*: *Land of Contrast*, Clairmont Press, 2007.

Messer, Chris, *Tulsa Race Riot of 1921*: *Determining Its Causes and Framing*, Doctoral Dissertation, Oklahoma State University, 2008.

Messer, Chris M. and Bell, Patricia, "Mass Media and Governmental Framing of Riots: The Case of Tulsa, 1921," *Journal of Black Studies*, Vol.40, No.5, May 2010.

"Mob Fury and Race Hatred as a National Danger," *The Literary Digest*, Vol. LXIX, No.12, June 8, 1921.

"Mob Lynches Tom Owens," *Tulsa World*, August 28, 1920.

"Money Won't Dissolve Wrongs," *Tulsa World*, March 22, 1997.

Mundende, D.Chongo, "The Undesirable Oklahomans: Black Immigration to Western Canada," *The Chronicles of Oklahoma*, Vol.LXXVI, No.3, Fall 1988.

"Must Work or Go to Jail is Edict of Mayor Evans," *Tulsa World*, June 4, 1921.

Nagel, Joane, "Ethnicity and Sexuality," *Annual Review of Sociology*, Vol.26, 2000.

Ogunyemi, Boluwaji, "Greenwood Testament to Black Prosperity," *The Gazette*, University of Western Ontario, February 8, 2008.

"Organizing the Negro Actor," *The Messenger*, November 1917.

Owen, Chandler, "Du Bois on Revolution," *The Messenger*, September 1921.

Owen, Chandler, "The Failure of Negro Leadership," *The Messenger*, January 1918.

Owens, J.P., *Clearview, Documentary of the History of Clearview*, 1995.

Parrish, Mary E. Jones, *Events of the Tulsa Disaster*, 1923(Reprint by John Hope Franklin Center for Reconciliation, 2009.).

Pawa, J.M., "The Search for Black Radicals: American and British Documents Relative to the 1919 Red Scare," *Labor History*, Vol. 16, No.2, 1975.

"Pay Up and Move On," *Tulsa World*, April 7, 2000.

Population Estimates Program, Population Division, U.S. Census Bureau, April 11, 2000.

Prentice, Frances W., "Oklahoma Race Riot," *Scribner's Magazine*, August 1931.

"Public Welfare Board Vacated by Commission," *Tulsa Tribune*, June 14, 1921.

"Race Riot Study a Step Backward," *Tulsa World*, July 6, 1997.

Ramsden, Kevin, "The 'New Negro': A Study of the Changing Social, Economic and Political Status of the African-Americans in the Early 20th Century,"*Ritsumeikan Annual Review of International Studies*, Vol.14, No.2, 2001.

Randolph, Phillip, "Du Bois Fails as a Theorist," *The Messenger*, December 1919.

Randolph, Phillip, "Immigration and Japan," *The Messenger*, August 1924.

Randolph, Phillip, "The Negro in Politics," *The Messenger*, July 1919.

Randolph, Phillip and Owen, Chandler, "The New Negro—What Is He?," *The Messenger*, August 1920.

Redkey, Edwin S., *Black Exodus*: *Black Nationalist and Back-to-Africa Movements, 1890-1910*, Yale University Press, 1969.

"Reparations Better than Nothing," *Tulsa World*, February 12, 2000.

"Residents of Edmonton and Strathcona to Sir Wilfrid Laurier, Premier of Canada", *Immigration of Negroes*, April 18, 1911.

"Riot Statement Made by Mayor," *Tulsa World*, June 15, 1921.

Robertson, George, "Speak Out Now When Others Grow Silent: The Messenger and Debates over New Negro Radicalism," *The Harry Bridges Center for Labor Studies*, University of Washington, 2008.

Robinson, Gerold T., "Racial Minorities" in H.E. Stearns, ed., *Civilization in the United States*: *an Inquiry by Thirty Americans*, Harcourt, Brace and Company, 1922.

Ruth Sigler Avery Tulsa Race Riot Collection at Oklahoma State University Tulsa.

Schomburg Research Collections at Schomburg Center for Research in Black Culture.

Scott, Daryl, "Immigrant Indigestion—A. Phillip Randolph, Radical and Restrictionist," *Backgrounder*, Center for Immigration Studies, June 1999.

Scroggs, Wm. O., "Interstate Migration of Negro Population," *Journal of Political Economy,* Vol.25, No.10, December 1917.

Shepard, R. Bruce, "Diplomatic Racism: Canadian Government and Black Migration from Oklahoma, 1905-1912," *Great Plains Quarterly*, 1983.

Simmons, Charles A., *The African American Press*: *A History of News Coverage During National Crises, with Special Reference to Four Black Newspapers, 1827-1965*, Mcfarland and Co. Inc. Publishing, 1997.

Simmons, Christina, "African Americans and Sexual Victorianism in the Social Hygiene movement, 1910-1940," *Journal of the History of Sexuality*, University of Texas Press, Vol. 4, No. 1, July 1993.

Solomon, Mark, *The Cry Was Unity-Communists and African Americans, 1917-36*, University Press of Mississippi, 1998.

"Something Seems Missing," *Tulsa World*, July 10, 2002.

Staples, Brent, "Unearthing a Riot," *The New York Times Magazine*, December 19, 1999.

Stephney-Roberson, Rochelle, *Impact, Blacks in Oklahoma History*, Forty-Six Star Press, 2011.

Stuckey, Melissa N., "Why Oklahoma? All-Black Towns and the Struggle for Civil Rights in Indian Territory," *Research Matters*, Center for the Study of Women in Society, University of Oregon, Fall 2011.

The Boley Progress, March 16, 1905.

The Buffalo News, December 6, 2007.

"The Cause of and Remedy for Race Riots," *The Messenger*, September 1919.

"The Conspiracy of Silence," *Oklahoma Eagle*, June 2, 1983.

The Indian Chieftain, March 6, 1890.

The Indian Journal, September 4, 1908.

The "Knights of Liberty" Mob and the IWW Prisoners at Tulsa, Okla. (November, 9, 1917), National Civil Liberties Bureau, February 1918.

"The Lessons of Tulsa," *The Outlook,* June 15, 1921.

The NAACP: A Century in the Fight for Freedom, Teacher's Guide Primary Source Set, Library of Congress.

The Niagara Movement Pamphlet, The Monroe Fordham Regional History Center.

"The Right Thing," *Tulsa World*, February 13, 2000.

"The Tulsa Race Riot," *The Independent*, June 18, 1921.

"The Turk in Tulsa," *The Independent*, June 18, 1921.

"The Week," *The New Republic*, Vol. XXVII, No.342, June 22, 1921.

Threadgill, Heather, Branum, Judy and Johnson, Chad V., *Tulsa Area Race Relations and History Survey*, The University of Oklahoma Tulsa Schusterman Center and John Hope Franklin Center for Reconciliation, 2011.

"TIMELINE: 1860-1920", *The Making of African American Identity*, Vol. II, 1865-1917, National Humanities Center.

"To Make a Negro State," *The New York Times*, February 28, 1890.

"Tulsa," *The Nation*, June 15, 1921.

"Tulsa-Greenwood Race Riot Claims Accountability Act of 2007," Hearing before the Subcommittee on the Constitution, Civil Rights, and Civil Liberties of the Committee on the Judiciary, House of Representatives, One Hundred Tenth Congress, First Session on H.R. 1995, April 24, 2007.

Tulsa Race Riot, a Report by the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921, February 28, 2001.

Tulsa Race Riot of 1921 Archive at University of Tulsa.

"Tulsa Shooting Suspect Charged, Bond is Set at $9.1 Million Each," *New York Beacon*, April 15-18, 2012.

Turner, Joyce Moore, *Caribbean Crusaders and the Harlem Renaissance*, University of Illinois Press, 2005.

Valentine, C.B. (Cyrill Briggs), "The Negro Convention," *The Toiler*, Vol.4, No. 190, October 1, 1921.

Walker, James W. St. G., *Racial Discrimination in Canada*: *The Black Experience*, The Canadian Historical Association, Ottawa, 1985.

Warner, Richard S., "Airplanes and the Riot," *Tulsa Race Riot, a Report by the Oklahoma Commission to Study the Tulsa Race Riot of 1921.*

Washington, Booker T., "Boley, A Negro Town in the West," *The Outlook*, January 4, 1908.

Welday, J.O., “The Socialist Party in Oklahoma,” *Oklahoma Graphic*, Vol.1, No. 2, February 1915.

Western New York Heritage-Western New York’s Illustrated History Quarterly-, Vol. 13, No.4, Winter 2011.

Wheeler, Ed, “Profile of a Race Riot,” *Oklahoma Eagle*, November 2, 1978.

White, Walter F., “Chicago and Its Eight Reasons,” *The Crisis*, October 1919.

White, Walter F., “I Investigate Lynchings,” *The American Mercury*, January 1929.

White, Walter F., “The Eruption of Tulsa,” *The Nation*, June 29, 1921.

Williams, John A., “The Long Hot Summer of Yesteryears,” *The History Teacher*, Vol.1, No.3, March 1968.

Wilson, Sondra Kathryn, *The Messenger Reader*, Random House, 2000.

Woods, Shelby, “An Oklahoma Story: Unveiling Racial Violence in Tulsa,” *Brainstorm*, V. II (2005-2008).

Woodward, C. Vann, *The Strange Career of Jim Crow*, Oxford University Press USA, 2001.

〈和文文献〉

有賀貞、大下尚一「概説アメリカ史ーニューワールドの夢と現実ー」有斐閣、１９７９年

上杉忍「アメリカ黒人の歴史 ー奴隷貿易からオバマ大統領まで」中央公論新社、２０１３年

ウッドワード、Ｃ・Ｖ.「アメリカ人種差別の歴史」清水博、長田豊臣、有賀貞訳、福村出版、１９９８年

大辻智恵子「A・フィリップ・ランドルフー両大戦間期における活動ー（１９２５ー１９３７）」国際関係学研究、津田塾大学、１９８４年

ギディングス、ポーラ　「アメリカ黒人女性解放史」　河地和子訳、時事通信社、

１９８９年
金城智子「オクラホマ黒人州への試みと黒人自治体の建設－ブラックナショナリズムと自主的分離による自治－」インターカルチュラル、第１２号、２０１４年
金城智子「戦闘的黒人の誕生－『メッセンジャー』に集った“新しい黒人”－」、比較文化研究、日本比較文化学会、第１０６号、２０１３年
金城智子「タルサ人種暴動－オクラホマ州の黒人の戦闘性－」、久留米大学大学院比較文化研究論集、第３２号、２０１３年
金城智子「タルサ人種暴動の遺産と損害賠償請求を巡る住民の分裂－コミュニティの道義的責任と和解に向けて－」、大学院石川ゼミ文集－石川ゼミがあった時代－久留米から何を考えたのかー、２０１５年
ケリー、ロビン・Ｄ・Ｇ.「フリーダム・ドリームス」高廣凡子、篠原雅武訳、人文書院、２０１１年
「黒人論集」、山形正男、古賀邦子、砂田一郎、小山起功訳、研究社、１９７５年
猿谷要　「歴史物語　アフリカ系アメリカ人」朝日選書、２０００年
新恵理「アメリカ合衆国におけるヘイトクライム法とその問題点」地域研究論集、Vol.3, No.1, ２０００年
スティール、シェルビー「黒い憂鬱－９０年代アメリカの新しい人種関係－」李隆訳、五月書房、１９９４年
竹本友子「第１次世界大戦後の合衆国黒人運動におけるカリブ移民の役割－シリル・ブリッグスにおける人種と階級－」、早稲田大学大学院文学研究科紀要、第４分冊、２００３年
竹本友子「ブラックナショナリズム再考」早稲田大学大学院文学研究科紀要 第４分冊、１９９９年
デュボイス、Ｗ・Ｅ・Ｂ.「黒人のたましい」木島始、鮫島重俊、黄寅秀訳、岩波書店、１９９２年
デレイニィ、サラ、デレィニィ、Ａ・エリザベス＆ハース、Ａ・ヒル「アメリカ黒人姉妹の１世紀」樋口映美訳、彩流社、２０００年
ハッチンソン、アール・オファリ「ゆがんだ黒人イメージとアメリカ社会－ブラック・メイル・イメージの形成と展開」脇浜義明訳、明石書店、１９９８年
樋口映美　「アメリカ黒人と北部産業」　彩流社、１９９７年
フォスター、Ｗ・Ｚ.「黒人の歴史　－アメリカ史のなかのニグロ人民－」大月書店、１９７０年

フランクリン、ジョン・ホープ＆マイヤー、オーガスト「２０世紀のアメリカ黒人指導者」
大類久恵、落合明子訳、明石書店、２００５年
古川博巳「黒人文学入門」創元社、１９７３年
ベイカー・ジュニア、ヒューストン・Ａ.「モダニズムとハーレムルネッサンスー黒人文化
とアメリカー」小林憲二訳、未来社、２００６年
ホリンガー、デイヴィッド・Ａ.「ポストエスニックアメリカ　ー多文化主義を超えてー　」
藤田文子訳、明石書店、２００２年
本田創造「アメリカ黒人の歴史」岩波書店、１９９１年
リプセット，シーモア・M.「アメリカ例外論」明石書店、１９９９年
渡辺真治「フロンティアと黒人自治体の建設ー分離主義と地方自治を中心としてー」近藤出
版社、１９８９年
ンディアイ、パップ「アメリカ黒人の歴史ー自由と平和への長い道のりー」遠藤ゆかり訳、
創元社、２０１０年